
LEGEND OF THE SEVEN

トモカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LEGEND OF THE SEVEN

【Nコード】

N3148X

【作者名】

トモカ

【あらすじ】

7人が異世界からやってくる。辿りついたのは魔法世界、ハルゲギニア。

目の前にいるのは桃色の髪の魔法少女。

召喚されたのは才人君だけではない…？

他の世界から召喚された6人が魔法の世界の運命を揺り動かす。

その6人は世界を滅ぼす者なのか、それとも、世界を変える者なのか。

DEATH 2

三日月に照らされた夜の住宅街を大小二つの影が跳んでいく。

季節は冬。透き通り、突き刺すような空気がさらに三日月を研いでいる。

僅かばかりの月明かりに照らされた二人は、お互いに上下伴に黒い袴を履いている。

大きいほうの影は橙色の髪に茶色の瞳という日本ではあまり見ないような色をしている。月に照らされたその顔は凜々しさと力強さ、そして優しさを備えた男の顔をしている。

背中には柄も唾もない、持ち手を布で巻いただけの武骨な身の丈程の大刀を背負っている。

年の頃は、まだ何処と無く世間の垢に塗れていない頃。
名前は黒崎一護という。

「夏梨、付いてきてるか？」

跳んでいく速度を緩めることなく、顔だけを後ろに向けて付いてくる小さな影へと話しかける。

「大丈夫、一兄」

そう答える小さな影の方は、黒い髪に黒い瞳、何となくはねっかえりのような感じ、強い意地を見せる目をしている。何処と無くあとけなさを残した、まだ女の子と呼んで差し支えない歳の子が付いてきている。腰には小さな背丈にあった、刀を携えている。

一護を「兄」と呼ぶ、この少女。名前は黒崎夏梨。一護の実の妹である。

「早く帰らねーと遊子に怒られそうだ」
「夜食の用意してくれてるかな」

そんな軽口を叩きながら、家路を急ぐ二人は只の人間ではない。世界に蔓延る悪霊を切り捨て、彷徨える正しき魂をあの世界へと導く神、死神なのである。

神話の御世では創造神に次ぐ神格を持つ、死神。

多くは髑髏と大鎌がイメージだろうが、それは歌舞伎者が生み出した幻想に過ぎない。実際の死神はこんなにも人間臭くて、人の思いを理解できる者達なのだ。

そんな二人も生まれたときから死神だったわけではない。

最初はただ、自分たちの生きている世界にふらり、ふらりと漂う霊が見えるだけ、ということを除けば友達と遊んで、偶には真面目に勉強するという、何処にでもいる高校生と小学生だった。

だが因果の交差は一護を死神として迎え入れた。

今では数々の敵を打ち倒してきた立派な戦士として、仲間達からも一目置かれる存在へとなっている。今や次の死神たちを纏め上げる頭、護廷十三隊、への次期総隊長として候補が上がるほどの存在になっている。

兄の成長と想いを受けた妹は、その兄を守るべく修行に励んだ。

その結果は今の姿にも表れている。体格や経験の差からその背は遠いが、いずれ同様の力を手に入れるだろうというのが、彼女の師の見立て。

尤も二人ともまだ高校生と中学生だ。これから先の人生の方が圧倒的に長いし、まだ死ぬ気もない。まだ人生は謳歌したい。

二人の前に「クロサキ医院」という看板を掲げた家が見えている。一家の大黒柱が街の診療所を開設しているこの家こそ、彼らの生家であり、暮らしている家でもある。

「もうすぐだな」「腹、減った」

そんな夜食を待望する兄と妹の前に、上から夜間に似合わない、ハイテンションな声が掛かってくる。住宅街の屋根の上、その男は颯爽と降り立つ。

「スピリイイツツ、アー、オオオルウェイズ、ウイズ、ユウウウ
！！」

確実に騒音問題で訴えられそうな程の大声を上げて、降りてきた、いや、落ちてきたのは髭に丸サングラス、ドレットヘア、背にはマントと何とも可笑しな格好をした男だった。

「ボハハハハ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「久しぶりだな！マイー番弟子！家に行けば二人ともい無いということからな、探し回ったのだぞ！」

突如、現れたこの男の名はドン・観音寺。霊の見える、所謂霊能力者という存在だ。力としては、はつきり言って二人の足元にも及ばない。及ばないのだが、嘗ての出来事から一護のことを、一番弟子と呼んで憚らない。一護にとっては迷惑千万なのだが、観音寺自身は気がついていない。

「それにそのガールは、夏梨ではないか！キミもボーイと同じく死神になったのかね！」

「あ、まあ・・・」

ドン・観音寺の言葉に若干イライラしながら、夏梨は答える。決して嫌いではないのだが、クールぶってローテンションで生きている二人にはどうも反りが合わない。

「ならば本格的に参入しようではないか！キミは二番弟子だ！」

空気を読まないのが、ある意味、この男の素晴らしいところだ。
カチン。

「うるさい！」

観音寺の言葉に二人揃ってキレる。裏拳を彼の顔に叩き込んで、サングラスに罅を入れる。高位の死神の左右両方からの鉄拳制裁だ。普通の人間が喰らったら、サングラスどころか頭蓋骨が真っ二つである。少なからず霊力のある観音寺だからこそ、この程度で済んでいるのである。

「アウ！何をするんだね！ボーイ、アンド、ガール！」

「いや、何かムカついた」

「それだけかね！久しぶりの師匠との再会だぞ！もっと喜びたまえ！」

詰め寄る観音寺と冷静に切り返す一護。死神は普通の人間には見えないので何も知らない人間が見れば観音寺が一人ではしゃいでいるようにしか見えない。

そんなときだった。夏梨が今の異常に気が付いたのは。

「一兄」

「ん、何だ？夏梨」

一護の服の裾を引っ張って、状況を知らせる。一護もその異変に気がついた。

喚いている観音寺の後ろに、光る鏡のようなものが浮かんでいる

のだ。しかも、当の本人は気がついていない。若しかしたら、有害なものかもしれない。兎に角、二人はこれを見たことがない。得体の知れないものに対して、警戒を取るのは当然。すつと戦士の本能として刀の柄へと手を伸ばす。

「二人とも、酷いじゃないか！いくらなんでも、刀を振るうのは勘弁してくれ！」

「黙ってる」

真剣な顔になって、二人は光る鏡を見据える。

「何だと思う、一兄？」

「解らん、見たことないもんだ」

「むづ、どうしたというのだね？」

くるつと振り返ろうとした観音寺の体が、その光る鏡に触れかける。

「危ねえ、観音寺！」

「くー！」

咄嗟に駆け出す、二人。観音寺を遠ざけ自分たちがその鏡の前に立つ。立ったのだが、僅かばかりに触れた夏梨の服の袂が鏡の中へと消える。

「な！」「え！」

袂は鏡を突き抜けることなく消えさり、凄い力で夏梨を引き込む。その状況に驚き、懸命に引つ張り挙げる一護と夏梨の足の抵抗も虚しく、鏡はは既に夏梨の左半身を飲み込んでいた。

「何だ、コレ？ 抜けねえ！」

「ふぬぬぬ！」

真つ赤になつて抵抗する兄妹。それを見ていた観音寺が立ち上がる。

「なにやら弟子の一大事のようにだ！ このドン・観音寺、微力ながら力を貸そう！」

胸に手を当て、大仰な仕草で喋る。見る人が見れば間違いなく、頭の痛い人だ。

事実、霊など見えない人の方がよっぽど多い。もう一人、一護と夏梨の間には兄妹がいるが、その妹は全く霊を見ることも、感じることも出来ない。死神も同様。大抵の人は世界の裏で、このような事が起こっているなど露知らず、一生を終えていくのである。

「助かるぜ、観音寺！」

自分が弟子かどうかはこの緊急事態、心底どうでもいい。今の状況がどうにかなるなら、観音寺だろうが無力な中年親父でも力になる。誰でもいい。

だが、今すぐに手が貸せるのはこいつしかない。世話になるのは癪だが、恩人には違わないので終わったら、多少なりとも付き合つてや……

「ム！」

つるりと何も無い屋根の上で盛大にこける。

その観音寺の手が、一護の体を押し、一護までも鏡の中へと叩き

込んでしまっ。

「オイ、コラ！」

「ム、失敗してしまった！」

サングラスの向こうの目は見えない。もし、笑っているなら殴り飛ばす。そう兄妹は心に誓って観音寺の顔を見上げると、泣いていた。自分の力不足、失敗を嘆いているのだろう。そう思ったら、ちよっただけ頑張ってくれと思う。もう二人とも三分の二は吸い込まれている。段々と吸い込む力が鏡の方が強くなり、両の足が飲み込まれるところまで来ている。

「マイ弟子たちよ、頑張れ！」

（まさかの励まし！？）

観音寺から来たのは何の根拠もない精神論の励まし。手を貸してくれるとか、そんなことは一切ないようだ。愕然というか、開いた口が塞がらない。

「何だと、テメー！」

「一兄、もう無理！」

耐えていたが、ついに両の足が消えてしまった。これではもう踏ん張りが利かない。いよいよ切羽詰ってきた。普段から冷静で沸点の低く、落ち着いている二人の顔にも焦りと怒りが見えてくる。勿論、怒りの矛先は事態を悪化させた観音寺だ。

「せめてもの師匠からの手向けだ。これを持って行き給え」

（ダメだ、完全に酔ってやがる…）

そういつて観音寺が手渡したのは、ボロくさいライオンの縫いぐるみ。二頭身の良くある市販品だ。鏡の淵を掴んでいた一護の指を若干強引に引き剥がして、ぬいぐるみの体を握らせる。

「何してんだ、テメー！」

「そんな、怒らなくてもいいだろう！喋る縫いぐるみだぞ、チヨールアではないか！」

そんな観音寺のハイテンションな声がスイッチだったのか、ぼろい縫いぐるみに魂が入ったかのように動き始めた。

「何やってんだ、一護？」

理解できているのか、いないのか。ぬいぐるみは呑気な声で、一護に話しかける。右手で縫いぐるみ、左手で淵を掴んでいる危機一髪の状態でこんな呑気な声は腹立たしいだけだ。夏梨は幸い頭だけが出ている状態。一護にしがみ付いて何とか持っているのだ。

「つかコレ、コンじゃねーか！お前、また俺の部屋勝手に入ったな！」

この喋るぬいぐるみ、名前をコンという。何とも不思議な仕組みで動いているのだが、それを説明している時間も余裕も今は無い。

「ははーん、一護。お前、困ってんだな。何なら助けてやってもいいぜ」

随分と上から目線の物言いだ、今のコンは状況を理解していないようだ。全身を完全に一護の手に驚？みにされた状態。

待っているのは一護・夏梨と一緒に助かるか、一緒に吸い込まれ

るかの二択。

「そうか。じゃ、お前も運命共同体だ」

「え、何で？」

「頑張りたまえ、マイ弟子たちよ！これも修練だ。キミ達の成長を期待している！」

「覚えてろよ！観音寺！」

そう言つて一護と夏梨、そして喋るぬいぐるみ、コンは光る鏡と吸い込まれてしまった。

後には何の痕跡も残っていない。埃一つ、髪の毛一本、落ちていない。

「フ」

誰も居なくなった屋根の上で、観音寺は不敵に笑う。

「スピリイイツツ、アー、オールウェイズ、ウィズ、ユウウウウ
！」

「うるせー！今何時だと思つてんだ！」

大音声で自分の合言葉を叫んだ瞬間、家の住人に烈火のごとく怒られてしまった。

Running to horizon 「exist」

「ハア、ハア」

月明かりも届かないイギリスはロンドン郊外の深い森を一人の少年が何かに追われるかのように奔っている。既に組織を裏切った彼は、もう戻ることは出来ない。だからといって行く宛てが在る訳でもない。それでも、彼は走る。自らの運命に決着をつけるため。

灯すらない状態で森の中を奔るといのは、思いのほか辛い。

それは鍛え抜かれた軍人でも同じ。ましてや今だ成長段階である少年には更に負担が多い。

「疲れた…」

足を止めるのは危険だが、疲労した状態でこれ以上の行動は危険だと判断し、手頃な木の下に座り込む。ちょうど根がいい具合に地上に露出していて、腰掛けにはピッタリだ。

すらりとして余計な脂肪も筋肉もない体躯、顔もまだあどけない。だが、髪だけは老人のように白い。それだけでもおかしいのに、顔には五芳星を逆さにした刺青らしき模様がある。

「こんなとき、師匠ならどうするかな…」

年頃にしては細い体は、赤く縁を取られた黒衣を纏っている。シンプルなデザインだが、ボタンは純銀であったり、刺繍は銀系であったりと色々と高級な素材が使われている。

彼は行方知れずになってしまった、赤毛の師匠のことを思い出す。

(アレン、俺はな…)

顔半分を仮面で覆った師匠は優しく…

(とつとと行け！っていつてんだ！)

想像の中で少年の脳天に一片の迷いもなく、ハンマーを振り下ろす。そこまで想像して身震いがした。決して冬の森の寒さではない。師匠が怖くなったのだ。

少年、アレン・ウォーカーはヴァチカン教会の対AKUMA部隊、エクソシストであった。

あつたと過去形なのは、たった今、好きな人も、世話になった人も、皆を裏切つて遁走してきたからだ。裏切つたのには彼の運命が関係しているのだが、語るにはあまりにも重い。

「序でに師匠の武器とかパチつたけど、大丈夫だよね…？」

腰にはキラリと光る両手大の銃がある。本来なら彼の師匠、同じくエクソシストであるクロス・マリアンにしか使えないのだが、何故かしつくりと馴染むのだ。「使える」と直感で判断した彼は師匠が残したモノを色々と持ってきたのだ。

厚く膨れた財布には見たことのない金貨や銀貨が入っている。小さな保管箱には薬の原料となるだろう薬草の種を根限り詰め込んでおいた。そして、師匠が持っていた仮面のスぺア。

自らの意思で裏切っておきながら、心配する。決して非情から裏切った訳ではない彼には、教会の重役であった師匠の品々を盗難するということは、正直言って、あまり気が進まなかったが、これも自らの運命と言いかせ、奪取したのだ。

その他にも師匠の所以以外にも、色々とギツて来たものはあるが、多分役に立つだろう。

「タイムキャンピー！」

大声でなく、それでいてよく通る声で名前を呼ぶ。その声に答えるように空から小さな星が一つ降ってきた。鳥でもなく、蝙蝠でもなく、落ちてきたのは金色の羽根の生えたボールだった。

ボールは呼ばれた事が嬉しいのか、アレンの周りをクルクルと飛び回る。

「できるだけ遠くへ行こう…」

宛てのない少年の旅が始まる。

「箱舟」

短く噛み切るような言い方で起動コールを送る。目の前には白く輝く水晶の様な墓標が立ち上がった。それに感嘆することもなく、彼は水晶へと手を伸ばす。ずっと彼の体は水晶を付きぬけ、消えてしまった。

完全に消えてしまったことを確認すると、水晶は役目を終えたかのように瓦解し、粉雪のように落ち葉の上へと降り注いで、後には何も残らなかった。

だが、これが彼の意図していた門であったかどうかは誰も知らない。

彼だけが知っている、彼だけの行き先。

そうして彼は異世界へと足を踏み入れる。

思い人の声も届かない、世界へと。

ful l m e t a l t h e m a j e s t i c

大通りの昼下がりに。

人や車が行き交い、商店は軒先を並べて元気の良い声を人々に声を掛け捲る。男のだみ声もあれば、澄んだ女性の声もある。兎に角、商人は売らねば生きられないのだが、皆、必死になって声を掛ける。

そんな時。

ガシャーン

ガラスが盛大に割れる音。次に聞こえてきたのは悲鳴。

交通事故だ。どうも車がハンドル操作を誤って、店に突っ込んだらしい。昼下がりの街に嫌な空気が流れ始める。

「だ、だ、大丈夫かい？」

店の中でのんびりと新聞を読んで店番をしていたハゲ頭の店主は、幸いなことに壊れずにすんだガラス戸から飛び出してくる。店の中は商品が飛び交い、泥棒に荒らされたかのよう。気は動転しているが、兎に角、怪我しているなら店の修復よりも運転手の方だ。自分に怪我が無かったのは僥倖としか言いようが無い。

「だ、大丈夫です」

「そうか、なら良かったよ・・・」

方々の体でフロントが拉げた車から這い出てきた若者を見て、店主はほっと一息つく。身なりは良いらしく政治家が着るような服を着ているが、それもガラスの破片で切り裂かれている。頬に一筋の

紅い血が流れているが、死ぬような怪我は無いようだ。

「にしても…」

ハゲ頭の店主は自分の店の惨状を見て、愕然とする。紆余曲折あってようやくこの場所に店を構えて5年余り。小さな雑貨屋ではあるが、今日車が突っ込んだために、窓は割れ、壁には大穴が開いている。幾らぐらいかかるのか、頭を抱えた。

「あ、あ、申し訳ありません！」

落ち着きを取り戻したらしい若者が、必死に頭を下げる。頭を下げて車や店が元通りになるわけではないが、それでも下げねばならない。

「いや、いいよ。頭を上げてくれ」

「いや、しかし、これでは…」

そう商売にならない。いくらかの蓄えはあるだろうが、生活が苦しくなつては意味が無い。

しばらくの間、押し問答が続くが、幾ら続けても意味が無い。

「お困りのようですね！」

そこへまだ若く瑞々しい少年の声が届いた。

二人が揃って顔を声の方へ向けると、そこには金髪と赤いコートという随分と派手な感じの少年がカッコいいポーズを決めて立っていた。後ろには彼を盛り上げているのか、全身を鎧で覆った大男がポーズを決めていた。

(随分と、変な二人だな…)

最初に思ったのはコレだった。いきなり現れた変な二人組。その程度の認識だった。

つかつかと二人が近づいてきて、もう一度。

「お困りのようですね？」

「あ、あ、まあ、店が壊れちゃって…」

少年のテンションに押されて、しどろもどろになりながらも今の事情を説明する。

ふんふんと頷きながら聞いていたが、少年は立ち上がると、白い手袋に包まれた両手を勢い良く合わせる。パアンと心地よい音がして、両手を離し、今度は手のひらを店の方へと向ける。

「うわっ！」

目も眩む光が瞬間、走ったかと思うと。

「す、すげえ…」

店がなんと元通りになっていたのだ。流石に事故前と同じとまでは行かず、中の商品は散乱した状態であるが、それでも元々の大枠が戻ったというのは嬉しい限りだ。

「おや、こちらの車も壊れていますね？」

そういうと少年はもう一度、同じ動作を繰り返す。後にあったのは完璧にガラスが元通りになり、拉げたバンパーも新品同様になっ

ていた若者の車だった。若干、ディテールに趣味の悪さが出ているが。それを見ていた事故の野次馬達が、こぞって金髪の少年の下へとやってくる。

「直してもらえませんか？」と取っ手の取れたバツクを持った老婦人、

「こつちも直してくれ！」と欠けたかなづちを持ったガタイのいい大工、

「これはダメ？」と車軸の折れた電車の玩具をもった子供。

それら全てを前にして少年と鎧は一言。

「一列に並べ！全部、お安い御用だ！」

「はい、こつちに並んで」

次から次へとやってくる壊れた物を持つてくる町の人。

それを全く疲れた様子も見せず、一瞬で直していく少年と鎧。

「修理代など頂きません！全て元通りです！」

一回喋るごとにポーズを決める少年。何でも直してくれくれる彼は直ぐに街のヒーローとして祭り上げられた。

「せめてお名前だけでも、お伺いしたいわ？」

最初にバツクを直してもらった老婦人が優しく、少年に語り掛ける。

「なーに、名乗るほどの者じゃありません！」

もう一度、びしつと決めて、別のポーズを取る、

「貴方の街の国家錬金術師、エドワード。エドワード・エルリックでございます！」

「そして、僕は弟のアルフォンスです」

少年と鎧の名乗り、街の人は歓喜に沸く。

「あの噂の！」「エルリック兄弟かよ！」

「エルリック兄弟つていやあ、最年少の国家資格者だよな！」

「俺ら、軍つてだけで誤解してたぜ、いい奴も居るんだな！」

この世界には物質を理解、分解、再構成する科学技術、錬金術が存在する。

物質の形や中身が解れば、モノを元通りに戻すことも簡単だし、例えば土を金に変えたり、また金属の形状を変えたりすることも可能な技術だ。勿論、人間も物質の塊であるから、傷を治したりということも可能だ。その利便性と比例して習得するのは難しく、彼の生きるこの国でも、まだ完全に浸透してはいない。

しかし、科学技術は往々にして軍事転用されるのが常だ。

故にこの国、アメストリスでは国家資格が設けられ、莫大な研究資金と引き換えに軍属となる事がある。それがエドの持つ国家錬金術師という称号なのだ。故に「軍の狗」と罵られる。軍や戦争を嫌っていた師匠には、このことがばれた時にはこっぴどく叱られた。だからこそ「ありがとう」などと言われることは、まず無い。

「では、皆さん！壊れたものがありましたら、またいつでも！」

そう言うと颯爽と歩き去った。

ちよつと大通りから離れた路地裏。

そこには先ほど、大活躍だった兄弟が居た。

「いやー、結構疲れたな」

「そうだね、兄さん」

アルの鎧に緩く拳を入れると空の筒と同じ反響音がする。エドの右手からも金属が触れ合ったときと同じ、甲高い音が響いた。

アルの鎧の中には肉体が存在しない。全くの空虚な鎧なのだ。同じようにエドの右手、そして左足は生身の手足ではない。

人工義肢、機械鎧 オートメール。

個人の神経を繋ぐことで普通の義足などよりも、さらに人間に近づき動きが出来る鋼の腕。

この手足が彼の国家錬金術師としての二つ名「鋼」の由来でもある。

アルが鎧なものも、エドの手足が機械鎧なものも深い理由がある。だが、それは二人の口から喋るべきものであり、人が軽々しく聞いていいモノではない。理由を知っているのは幼馴染で、義肢工のウィンリイ・ロックベルと彼女の祖母のピナコ。彼を国家錬金術師にスカウトした直属の上司であるロイ・マスタング国軍大佐、そして、彼の副官であるリザ・ホークアイ中尉くらいである。

「にしても、これで随分と有名になったんじゃないか？」

「そうだね、これで傷の男が釣れるといいんだけど…」

彼らがやっていたのは、決して慈善のためだけではない。

自らを狙っている連続殺人犯、コードネーム「傷の男」を探すのだ。もう何人も国家錬金術師だけを狙って殺している「傷の男」は

当然のようにエドも狙っている。
更なる被害を抑えるためにも、自分を餌に一騎打ちを仕掛けよう
としているのだ。

ふと、そんな時。

「ねえ、兄さん。あれ何かな？」

アルが路地裏の行き止まりに浮かぶ、鏡のようなものを見つけた。
サイズは2M近いアルでも十分に通れそうなくらいの高さと幅。
突如として現れた謎の物体を警戒する。

「何かわかるか？」「いや、さっぱり……」

とりあえず近くに落ちていた小石を投げつける。路地の壁にぶつ
かることなく、すっと消えてしまった。これには色々と思議な生
物や事象を見てきた彼らも驚いた。

「ふーん」

顎に手をやり、何事か思案していたエドは近くの壁を錬成し手槍
を作る。アルも習って手槍を錬成。

「せー」「の！」

二人、息のあったタイミングで投げるが、それも消えてしまった。

「とりあえず大佐に連絡するか」「そうだね、他の国の侵略兵器か
もしれないし」

そう言って大通りへ向かおう踵を返し彼らの前にも、同じものがあつた。咄嗟の出来事に対応できず、エドもアルもすっと消えてしまふ。

「何だ、コレ！」

鋼と鏡、兄弟の言葉が短く路地裏に解けていった。

H e i s n o t m a s t e r o f m a g i c

東京、新東京国際空港。

関東一円では一番大きな滑走路を持ち、年間の離発着数は日本最高のこの空港の国際線ターミナルにある二人が来ていた。

「ほら、ネギ。里帰りなんだからしっかりね」
「分かってますよ、アスナさん」

一見すれば少しばかり歳の離れた姉と弟といった調子。
アスナと呼ばれた少女、神楽坂明日菜の方は、弟の服の乱れをてきぱきと直している。

現にアスナも、手の掛かる弟を見守る優しい姉のような空気がある。逆にネギという十歳くらいの少年の方も、世話を焼いてもらって嬉しい表情を浮かべている。実際の血縁関係から言えば、ネギの母の妹がアスナであるから厳密に言えば叔母と甥の関係である。

この少年、本名をネギ・スプリングフィールドという。
生まれはイギリスの北部、ウェールズ。見事な赤毛と鼻に掛かった眼鏡が印象的だ。

歳の頃は、あどけない外見どおり、まだ十歳。だが、これでも一つのクラスを受け持つ先生なのだ。だが外見に騙されてはいけない。知識や力のほうは確かに、先生を務めるだけの力がある。宋判断されたからこそ、こうやって生徒を持って教えているのである。

「大丈夫っすよ、オレッチが付いてますから！」

そういつてネギのフード付きコートの中からひょっこりと小さな白い生き物が現れた。

ネギのペット、白いオコジョのカモミール。アルベール。ネギか

らは「カモくん」と呼ばれ、結構強い信頼で結ばれている。

「アンタがいる方がよっぽど不安よ……」

「ああ、ヒドイっすよ!」

オコジヨとネギもアスナも普通に会話している。なぜ、オコジヨが喋るのか。それは、ネギの秘密に関係がある。

それは「魔法使い」であるということ。

一般社会には決して出ることなく、秘匿され続ける魔法社会。彼の父と母はその魔法使いたちの世界において、名の知れた人たちだった。そんな両親を見習って彼もまた、立派な魔法使いになるべく修行中の身だ。

そんな修行も冬休みに入り、ひと段落。一度、故郷のウエールズへと帰るべく、ここへやってきたのだ。傍らには大きなスーツケースが二つもある。そして、何よりも特徴的な先が大きく湾曲した木製の杖もある。

この杖はネギが父親から貰った、唯一に近いプレゼントだ。

「じゃ、帰りますね、アスナさん。冬休みも頑張ってくださいね。

一応、受験ですから」

「う……」

それだけ言っただけでネギは荷物を軽々と担ぎ、また両の手で引張る。いくら魔法使いといえども体格はまだ十歳のそれだ、いくつもの大きな荷物を抱えている様は、ほほえましいのを通り超えて、ちょっと可愛そうに見える。

「お姉さんに宜しくね〜!」

ぶんぶんと勢い良く手を振って、アスナは手間の掛かる弟を送り

出した。ゆつくりと小さくなる背が見えなくなるまで手を振っていた。

「じゃ、カモくん。とりあえずケースに入って」
「了解す」

一応、ここは空港。ペットの持ち込みは制限されている。もし海外へ行こうというなら喋るとは言え、一応オコジョのカモミールはケージの中に仕舞わねばならない。

「ん、なあ兄貴。アレ、何すか？」
「どうしたの、カモくん？」

そうやって振り向いた先にはふよふよ浮かぶと白色の鏡があった。しかも、どうやら自分たちにしか、見えていないようだ。毎日3万近い人が、ターミナルでは行き交っているのに、この白い鏡に気がついた人は誰もいない。無関心とか、厄介ごとを避けようというよりも
そもそも気がついていないようだ。

(兄貴、注意したほうがいいですけど)
(うん、分かってる)

ネギは自分の身の価値をしっかり分かっている。うぬぼれでも、大仰に言っているのでもなく、自分がどんな人材で、人物なのか客観的に判断している。だからこそ、接触してくる敵も味方も多い。

今、目の前にあるものが敵の手の者によるモノ、としてもオカシクナイのだ。

周囲の目に触れないように、慎重に動く。

「とりあえず、探知してみますぜ」

「お願い、カモくん」

カモは先だけが黒い尻尾を逆立てて、鏡の正体確かめる。
結果は、

「ダメっすね、兄貴。でも、敵性はどうもないみたいっすよ」
「そっか…」

ぼそりとネギが呟いた瞬間、まるでカバが口を開けるかのように、鏡が大きく広がった。

「え？」「うわ！」

ピカッと光ったと思うと、そこにネギとカモ、そして二人の荷物は消え去っていた。

はらりと一枚、ネギが乗るはずだった、ヒーロー行きの航空券だけを残して。

EXIST of FLAME

「悠二」

紅蓮に包まれた世界で、燃え盛る炎と同じ色の瞳と髪を持つ少女は思い人の名を呼ぶ。

力強く、それでいて切ない声で。彼女の傍には彼女の今の気持ちを表すかのように、小さく煌く火の粉が無数に舞い散る。手には鋭く磨かれた剥き身の太刀が握られている。

勇ましく立つ少女の姿はまさしく、勇者と呼ぶに相応しい。

「シャナ」

紅蓮の少女に呼ばれた少年はどこまでも優しい声で、少女に語りかける。その姿は人の様でいて、人の様でない。後頭部からは蛇のような尻尾が生え、手には到底、人身には余る柄の短い大剣が握られている。纏うのは黒い、輝かない炎と緋色の鎧。まるで御伽噺に出てくるような魔王の姿である。

「僕は君を守る。そのために強くなったんだ」

力強い意思に満ちた声で悠二がシャナに語りかける。

でも、その思いと目的は受け入れられない。恋した姿と違って、何も変わらない。彼の想いの最悪の形での結実。シャナがそれを望んだかどうかは、誰にも分からない。

でも、この実は摘まねばならない。

それが彼女が、己に課した使命と義務だから。

「私はそれを受け入れられない。だから、私は貴方と戦う」

「そう言ってくれると思った。だから、僕は君と戦う」

紅蓮と黒。二人が剣を構える。

静寂が二人の間を包む。

「はああ！」

紅蓮の炎と翼をその背に現し、シャナが飛ぶ。

必殺の突きの構え。

「…」

悠二はその突きに備えるべく、大剣を楯のように構える。

そんな時に紅蓮の世界を引き裂いて、白い水晶のような物体が表れる。

(自在法？それとも、新しい敵？)

ドコーン！

階下から爆音が響く。その爆音を合図にしたように、中から黒い物体が転がり出てきた。ゴロゴロと転がって、近くの壁の残りにぶつかる。

「いたた・・・」

突然の闖入者に二人も驚きを隠せない。原理的に誰の侵入も受け入れることのない、この世界に突然として現れたのだ。自分の仲間、若しくは敵である。

今の位置を動かさず、二人は物体、転がりてた人を確かめる。

老人のような白髪頭だが、顔はまだ少年のようである。まるで法

衣のようなフード付きの服を着ていて、腰には白色の銃。左手にだけ分厚い革の手袋をしている。

「お前、誰？」

「んー、箱舟の操作、間違っただかな？」

服に付いた埃を払いながら、何事か考え込む。「箱舟」という聞きなれない単語が聞こえてきたが、この少年の自在法か何かだろうか。シヤナなどいないかのような感じで考え込んでいる。

「お前、誰？」

今度は幾分、強い感じで。首筋に切先を当てる。

それでようやく気がついたらしい。気がついたのだが、シヤナの剣呑な雰囲気に対して、何とも呑気に周りを観察して、切先を突き立てる小さな少女をじっと見つめている。

「えっと、君は誰？」

「お前こそ誰？敵、味方、どっち？」

質問に質問で返され、さらに質問で返す。

「僕はアレン・ウォーカーって言います。君は？」

「そう、じゃアレン。邪魔だからどこかへ行つて」

シヤナに見れば精々の親切心で言った言葉である。目の前には最愛の思い人にして、最悪の敵がいる。言いたい事だけというと、アレンに背を向けた。

「若しかしなくても、僕、お邪魔だったかな？」

「…」

「ねえ、赤い君？」

「…」

「あっちの黒いの誰？」

「…」

少年のような無邪気さ、アレンの本性を知るものなら完全に演技の、で聞いてくる。段々とイライラしてきたシヤナはアレンの方を向いて、

「うるさい、うるさい、うるさ…」

「だから、僕の質問に答えてください」

くるりと振り向いて、質問を全部剣幕で封殺しようとしたシヤナは今度は自分の眉間に銃が突きつけられていることに気がついた。ともすれば女の子にも見えるかもしれないアレンの顔には静かな怒りが張り付いている。

「シヤナ！」

敵となっても思いは変わらない。思い人の危機に黒の魔王は駆け出す。

（まずい！）

幾度も危機を乗り越えたアレンの直感が脳内にブザーを響かせる。ぐいっとシヤナの襟首を強引に掴むと、

「箱舟！」

箱舟を再起動させる。彼が現れたときと同じ、白い水晶のような物体が白い髪の少年の前に現れる。紅蓮の世界を引き裂いて現れた水晶に、勢い良く飛び込む。紅蓮の髪と瞳を持つ、少女を荷物のように引つつかんだまま。

「シャナ！」

ずっとシャナの細い足が全部消えると同時に水晶は崩れ去った。紅蓮の世界に白い水晶が、欠片となって降り注ぎ、地に付いた欠片は雪のように消えていった。

W E L C O M T O N E W A N O T H E R W O R L D (前書き)

皆様、このような私の拙作をお読みいただき、真にありがとうございます。

本編より、いよいよ舞台をハルゲギニアへと移し、6人と+1人が活躍します。

テーマソングはL・Arc en Cielの「Link」、
そして6人のチームとして主題歌にKELUNの「Chu-Bur
a」です。

W E L C O M T O N E W A N O T H E R W O R L D

よく晴れた草原を風が弄る。

遠くに見える丘陵の木々が太陽の日差しを、その身に浴び、吹き抜けた風が木の葉を少し散らす。

ここはトリステイン王国。ハルゲギニアという大陸にある、長く続く伝統と、素晴らしい格式を持つ王国である。国土の殆どが平地であり、大海に注ぐ川も多い。周辺国からは「水の国」と呼ばれているほどだ。

この国を始めとして、この「世界」には「魔法」が存在する。

血の成せる人の力として、「魔法」を使える「存在」、いわゆる御伽噺の「魔法使い」たちが、この世界では支配層として王族・貴族階級を成して君臨し、そこから溢れた一般市民、平民を思うが俣に支配する世界である。

そんな貴族である魔法使い、メイジも生まれたときから魔法が使えるわけではない。成長とともに技術を習得していく。技術を教え、さらに次世代へと継承していく。拙い貴族の子女を一人前にするために置かれているのが学校、つまりは「教育」という方法である。ここトリステイン王国にもその魔法使い達の学校の一つである、「王立トリステイン魔法学校」が存在する。

現在、そのトリステイン魔法学校では、毎年の恒例行事にもなっている、2年次への進級試験を兼ねた「春の使い魔召喚の儀式」が行われていた。

午後から行われているこの儀式。本来であれば、一人あたり2分もあれば、全行程が終わってしまう結構簡単な儀式なのであるが、たった一人、たった一人の女生徒だけは30分近く掛かっているのに、今だ終わらずにいた。

「あーもう！どうしてよ！」

繰り返し、使い魔召喚の呪文、口語で唱えられる「サモン・サーヴァント」を唱えていたが、結果は全て爆発。

今回もドカーンと爆発。爆風が吹き荒れ、轟音が草原を駆け抜ける。駆け抜ける度に、先に成功させていたクラスメイトの使い魔たちがギャアギャアと騒ぐ。

「いいかげんにしろよ、ルイズ！」

「さっきから爆発ばかりじゃない！」

いい加減、彼女の失敗で起こる爆発に辟易、騒ぐ使い魔を達をなだめるのにも疲れてきたクラスメイトからは野次が飛んでくる。

「うるさいわね、見てなさいよ！」

ルイズと呼ばれた少女、爆発に巻き込まれて若干、顔や髪の毛、服も煤けているが、ピンクブロンドの若干ウェーブの掛かった髪にくりくりとした鳶色の目。中々に可愛らしい顔である。

しかし、その顔も煤けている上に、眉間に皺を寄せていては可愛らしさも半減である。

「兎に角、見てなさい」

再び、意気込んで唱える。しかし、結果は見えていた。ドカンとまた爆発。これで既に31回目だ。ルイズの顔にも怒り以外に、焦りの色が見えてきた。

今までルイズは碌に魔法が使えていない。座学の方は満点に近い点を取っているが、実技は全て爆発、失敗という結果になっていた。

今日こそは誰もが羨む使い魔を召喚して、見返してやろうと思っていたのだが、結果がこれでは見返すどころか、もったからかいのネタを同級生に提供するだけである。

31回目の失敗を見て、今年度の「召喚儀式」の担当教師である、ジャン・コルベールが、

「ミス・ヴァリエール。非常に残念ですが、続きは明日にしましよ
う…」

近づいてきて、ルイズに酷く残念そうな声で語りかける。

彼はルイズの人知れぬ努力を知っている人間だ。誰よりも努力しているのに、必死に勉強しているのに、報われない。少し悲しい学生であることを。

「お願いです。最後までやらせてください！」

振り向いたルイズの顔は、今にも泣きそうだった。煤けた顔もこんな感じだと、コルベールは困ってしまう。ふうつと息をついて、

「分かりました。これが最後ですよ」

「ありがとうございます！」

それだけ言っつて、下がった。最後まで見届ける。担当教師としては一人も落第者は出したくない。ましてや努力している生徒を落せるほど、彼は冷酷な人間ではなかった。

「早くしろよ」

「精々、頑張れ」

一片の温かみも無い応援や野次が飛んでくるが、一瞬にして集中

したルイズの耳には届かない。
そして、

「世界のどこかにいる、私の下僕よっ！！」

力強い声で「サモン・サーヴァント」を唱え始める。

「強く、美しく、そして生命力に満ち溢れた使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ。……………我が導きに応えなさい！」

そう言っつて、杖を振り下ろした。

ドコーン！

起きたのは今までよりも一際、大きな爆発。辺りにはその爆発に比例するだけの爆風が吹き荒れ、ルイズの周囲の草を何本も吹き飛ばす。爆音が結末を見届けようとしていた、生徒やコルベールの耳を使い物にならなくする。舞い上がった土埃が完全に視界を奪う。

やがて風も落ち着き、土埃も収まる。ルイズにも、他の生徒やコルベールにも爆心地の中心が見えてきた。全員揃って、爆心地に視線を集中させる。

「はい？」

全員が目点を点にする。

無理も無い。土埃が晴れたそこには、人間が倒れていたのだから。更にはその人間を囲むように、3枚の光の壁のような物体と、堅そうな鉄の壁が一枚、張られていた。

人間が現れたことにも驚きだが、周囲の壁も不思議だ。

「ゼロのルイズが召喚に成功したぞ！」
「でも、誰だアレ？そして、何だアレ？」

周囲の喧騒に答えるかのように、壁の向こうから、声が聞こえてくる。

「大丈夫、一兄？」

「助かったぜ、いきなり爆発するんだもんな」

「コラ、一護！説明しやがれ！」

「カモくん、いる？」

「オレっちは無事っすよ！荷物も欠けてないっす」

「ふう、助かりました…」

「何故、あのような事をしたのだ。そして、お主は何者だ？」

「いい加減、離しなさいよ、アレン・ウォーカー！」

「あれ、アル？何で俺の腕に？」

「何でかな、兄さん。でも、とりあえず魂だけは無事みたいだよ」

壁が喋っているわけではない。壁の向こうに何かが居るらしい。若しかしたら、人語を解して、おまけに喋ってくれる凄い魔獣なのかもしれない。

ルイズはワクワクしてきた。これで見返せる。この見慣れない服を平民はきつと近くを通りかかっただけの一般人に過ぎないのだから。この世界の貴族しか持っていない特有の思考回路でそう思った。

光の壁が消え、鉄の壁が崩れる。

その向こうにいたのは、

「へ、い、み、ん……？」

見慣れぬ服を着た6人の平民。

これを見たルイズは愕然とした。あれだけ大見得切っておいて、

結果は平民が7人。これでは結局、見返すどころか、さらにバカにされるだけだ。

案の定、

「ルイズが平民を召喚したぞ！」

なんて声が聞こえてくる。

ルイズは7人の平民をまじまじと見詰める。

とりあえず、倒れているのは表情にどこか抜けた感じがある以外は、取り立てて特徴のない少年。

一番右から、御揃いの黒い服を着た、オレンジ髪的青年と短い黒い髪の女の子。

次は赤い髪とローブを着込んだ、自分よりもいくつか小さいだろう子供。

鉄の壁の向こうから現れたのは、見事な金髪と良く目立つ赤いコートを着た少年。

最後は長い黒髪を蓄えた少女を右脇に抱える、白髪の黒い法衣をきた少年。

「つか、ココ何処？」

6人とも揃って、辺りを見回している。全員が見たことのない服を着ているが、見た感じでは貴族の一番分かりやすい象徴とも言えるマントを着ていない。ならば平民である。とかなり短絡な思考で決めていたのだ。

「一兄、あれ！」

「ん？」

一番、右端に居た黒髪の女の子が、ルイズが「抜けた感じ」と称

した少年に気がついたらしい。後ろに居た少年の手を引っ張り、駆け寄る。

「見た感じ、怪我ねーし、気絶してるだけだな。おーい、起きろ」

少女に「一兄」と呼ばれた青年は気絶している少年の頭をポカポカとノックでもするかのような気軽さで叩く。

「ちょっと退いてなさい！」

流石にそれを見かねたルイズが少年を優しく揺り動かす。段々と少年の意識がハッキリしてきたのか、ゆっくりとゆっくりと瞼が開く。

「あんた達、誰？」

ルイズの質問が青空に響いた。

ぼけつとした頭で、どこか抜けた少年、平賀才人は考える。

周りを見渡せば、マントに明らかに黒い髪色がない少年少女たち。今まで東京の大通りに居たのに、気が付いたら、広い草原に寝転がっていた。遠くには世界史の授業で少しだけ習った、中世ヨーロッパのようなデザインの大きな建物が見える。

目の前に居るのは、多少煤けているが、随分と可愛らしい、少なくとも才人が今までであった中では一番可愛い女の子が座っていた。この子もマントを身に着けて、右手には杖のような物を持っている。

何だか魔法使いみたいだ。

「流石、ゼロのルイズ！平民を7人も呼び出しやがった！」

「うるさいわね！ちよと間違っただけよ！」

ルイズが上品な声で怒鳴るたびに、周りの同じ格好をした人垣がどつと笑う。

「うーん、どうしたものでしょうか？」

才人に近づいてきた、頭の可哀相な大人、多分、会話から判断するとこの子達の先生らしい、男の格好をまじまじと観察する。

なんじゃ、この格好？

大きな木の杖を持ち、真っ黒なローブに身を包んでいる。

本当に魔法使いみたいだ。

大丈夫か、こいつら。

歳は多分、ルイズと呼ばれたこの子は自分とそんなに変わらない歳だろう。でも、先生の歳は同考えても自分の父親とそんなに変わ

らないと思う。そんな歳で魔法使いのコスプレをしていたら、只のイタい人だ。

本当に何なんだ、こいつら？

才人は何事か口論しているルイズと先生から目を離し、自分の後ろを見渡す。

そこにはまた、ルイズたちと違った格好をした人たちがいた。

黒い侍みたいな格好をしたオレンジ頭の青年と黒い髪の少女。

オレンジ頭はデカイ刀を背に背負い、女の子の方は腰に日本刀らしき鞘を差している。

目立つ赤いコートを着た金髪の少年と、赤毛のローブを着た子供。心配そうに声を掛ける子供を、少年が優しく制している。特別なところは全く無い。

顔は若いのに白髪頭の少年と、その少年に抱えられた長い髪の女の子。

少年は黒い法衣を着ているのに、女の子の方は緑色のセーラー服だ。誘拐かもしれない。

どう考えても、普段の生活で自分が目にするには無いだろう格好をしている。

才人は急に怖くなった。どう考えても今の状況は普通じゃない。

あの鏡みたいはモノは、このヘンテコな宗教団体へとやってくる罠だったのだろうか。

何せ、12の瞳が全部、自分の方を興味深げに見ているのだ。

調子に乗りやすく、大勢の視線を集めたがる才人でもこれだけ注視されては、流石に辛い。

「ミスタ・コルベール！もう一度、召喚をやり直させてください！」

「ミス・ヴァリエール。それはできない」
「何故ですか!？」

混乱している才人を他所に口論は続く。

「この『召喚の儀式』は神聖なものだ。やり直しはできない。古今東西、人を使い魔にした例はないが、規則にしたがって彼ら7人には君の使い魔になって貰わなくては……」

「でも!」

「ミス・ヴァリエール!」

コルベールが優しく、しかし、厳しい声でこれ以上の反論を辞めさせる。

「もう、30分以上も掛かっている上に、もう直ぐ時間も終わる。えり好みしている場合ではないでしょう?」

「うう……」

ようやく観念したらしいルイズが、才人へと顔を寄せてくる。

「あんだ達、名前は?」

「名前つて…、俺は平賀才人……」

まだ完全に覚醒していない頭で答える。殆ど脊髄反射のようなものだ。名前を聞かれたから、答えた。それ以上でもそれ以下でもない。

「あ、僕はアレン・ウォーカーです」 黒い法衣の少年がニコニコと答える。

「シヤナ」 長い髪の女の子が無然とした表情で答える。

「エドワード・エルリック。国家錬金術師だ」 金髪、赤コートの少年が嫌そうに答える。

「ネギ・スプリングフィールドです」 赤い髪の子供が礼儀正しく答える。

「……」 「……」 一番、右端に居た二人は答えない。

それを見たルイズが烈火の如く、怒り始める。

「貴族の私が、名前を聞いているのよ！答えなさい！」

「……何、お前、私達が見えるの？」

女の子の方が訳の分からないことを言う。見えるって、バリバリ侍みたいな格好をした二人が見えている。それは先に名乗った4人も同じだったらしい。

「あ、あの、どういうことが知りませんが、見えますよ。しっかりと……」

ネギがどこまでも礼儀正しく、オレンジ頭の方の袖を引っ張って返答を促す。そのことに驚いているのか、呆れているのか、どちらかは分からないが、

「おいおい、マジか。夏梨、どうもこいつら、俺らのこと見えてるみたいだ」

「だね、一兄」

ハアと重いたため息をつく。何だこの二人。見えることとため息がどんな繋がりがあるんだろうか。

「黒崎一護だ。んで、こっちが……」

「黒崎夏梨」

ようやく全員の名前が分かった。にしても日本人っぽい名前だったり、外国人っぽい名前だったり、国籍はバラエティに富んでいるな、などというどうでもいい事を才人は考えていた。

全員の名前を聞き終えたルイズは何度も復唱している。覚えるのに必死なようだ。

少し間があつて、

「よし、覚えたわ！じゃ、後ろの6人、屈んで。契約するから」

「『『『『『』』』』』』は、契約？』』』』』」

6人とも中身がつかめていないらしい。頭の上にはてなを浮かべ
る。

そんな7人を無視してルイズはこう続けた。

「か、感謝しなさいよ。普通、平民が貴族にこんな事されるなんて一生無いんだからね」

「へ？」

6人の言葉を無視して、ルイズは才人に近づいた。そして目を瞑る。

「はい？」

才人がマヌケな声を上げる。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブランド・ラ・ヴァリエール。5つの力を司るペンタゴン。この者らに祝福を与え、我が使い魔と成せ」

そういつとルイズの唇がゆっくりと才人の唇に近づいてきた。

「え、えっと？」

才人は訳が分からず、首を左右に振る。何となく防御反応のようなものだ。

「ああ、もう！じつとしなさい！」

「うわ！」

暴れる才人の顔を強引に両手で固定し、さらに唇を近づける。

その姿に何となく、危機感を覚えた一護はボソリと呟く。何が起るかは知らないが、幾度と無く戦闘を乗り越えてきた危機察知能力が、コレまでにないくらいの大音量でブザーを鳴り響かせる。

「何か、まずいな」

「そうですね」「だな」

一護の言葉に賛同を示したのはアレンとエド。他の三人は何が何だか、分かっていないらしい。

「逃げるぞ！」

結末を見るよりも命だ。三人は傍に居た夏梨、ネギ、シャナを抱えて三方向へ脱兎のごとく翔ける。アレンと一護は序でに散らかっていたネギの荷物を両手に持つ。

「ん…」

そんな6人の後ろで、ルイズと才人はキスをしていた。キスを終えて、唇を離すと突然、才人の体が熱くなり、左手が禿るのではと思うくらいに痛み、なにやら古そうな文字が刻まれている。

「何だ、コレ！お前、何しやがった！」

「使い魔のルーンが刻まれているだけよ、直ぐに終わるわ」
「刻むな、んなモン！」

痛みに耐えつつ、ルイズに必死に食い下がる才人。その後ろで逃げた6人も同じ症状に苦しんでいた。

「痛てえ！」「痛い！」「何ですか、コレ！」

「何だ、コレ！」「え、僕、痛くないですよ」「何で？」

痛い、痛いと転げ回る5人を他所に一人、白髪頭のアレンは涼しい顔をして皆の様子を見舞っていた。打つ手も無く、オロオロと困っている。

「先生、何ですか。まだ一人しか契約していいなのに、全員にルーンが……」

「ふむ……？」

怪訝そうにコルベールが才人の左手を取って、刻まれたルーンを確認する。その間に、どうにも逃げられない事を悟ったのか、6人が戻ってくる。

「そちらの皆さんも……」

全員が苦い顔で左手を差し出す。アレンだけは分厚い革の手袋に包まれていたが、取る素振は全く見せない。

「あ、ええつと手袋を取って貰えるかね、えつと、ミスタ…」

「アレン・ウォーカーです」

「申し訳ないが、ミスタ・ウォーカー。お願いできないか」

すつと革の手袋を取る。その左手は普通の肌色とは違う、青い色をしていた。手の甲には白い十字架が煌いている。その十字架の上に、力を足すかのように、他の6人と同じルーンが刻まれていた。

「ふむ…、見たことのないルーンだ」

さらさらとルーンをスケッチしているコルベールを見ながら、才人は考えていた。

突然、キスされて、まあ彼女いない歴16年で始めての経験だったから、それなりに嬉しかったが、いきなり変な文字は左手に浮かび上がってくるし、それは思いつきり痛いし、良かったのか、悪かったのか、今ひとつ分からない。

全く、本当にファンタジーみたいだ。

ぶつぶつと呟きながら考えていたら、先ほどのコルベールの号令で、周りにいた生徒達が皆、宙に浮いた。

「はい？」

才人は目が点になる。あんどりと口を開けて、その様子を見ていた。

「え、何、アレ？何で浮いてるの？」

周りは障害物など何も無い青々とした草原だ。当然、人を吊るすようなクレーンやワイヤーもない。幾らなんでもありえない。一人くらいなら説明も付きそうだが、全員である。50人近い人数が一斉に何も無い空中に浮かび上がったのだ。

目の前の光景に才人は自分の目を疑った。

そうして、浮いた生徒達は一斉に遠くに見えた石造りの建物へ向かっていく。どうやらアレは学校のようなようである。

「ルイズ、お前は歩いて来いよ！」

「アイツ、『フライ』どころか『レビテーション』すらまともに使えないんだぜ」

「その、平民達、あんたにお似合いよー」

飛び去っていく生徒達が口々に笑いあう。

残されたのはルイズと才人、そして一護に夏梨、アレンにエドとネギ、そしてシャナの8人だけになってしまった。

今の到底、才人の持っている常識では説明できない現象を目の当たりにして才人は口を開いた。

「あんた達は一体、何なんだ！俺の体に何をした！」

「まま、えーと、才人だったけ？落ち着けよ」

才人の怒りを込めた言葉を一護がなだめる。その質問の行き先だったルイズはため息をついた。

「そりゃ、飛ぶわよ。メイジだもの。というか、『フライ』も知らないなんて、一体どこの田舎から着たのよ？」

「田舎？田舎はここだろうが！東京はこんなド田舎じゃねえぞ！」

「トーキョー？なにそれ。どこの国？」

「日本だけど」

「なにそれ。そんな国、聞いたことない」

そこへアレンとシヤナ、更にはエドが入ってきた。

「俺はアメストリスのサウスシティから来たんだけど」

「アメストリス？どこよ、そこ？」

頭を掻きながら聞くエドとつっぱねるルイズ。

「僕はイギリスのロンドンという所ですが…」

「だーからー！どこのよ、そこ！」

頬を掻きながら考え込むかのような仕草で聞くアレンと突っぱねるルイズ。

「私は御崎市からよ」

「知らないっていつてるでしょ！」

腕を組んで無然と聞くシヤナと突っぱねるルイズ。

「もう、何度も説明させないでよ！ここはトリスティンよ！そしてココは由緒正しきトリスティン魔法学院よ！」

それで分かるでしょ？と言わんばかりの態度でルイズは言う。

だが、さっきまでの混乱が引き、頭の上っていた血が降りてくると段々と冷静に考える余裕が出てきた。ルイズの言葉に看過できない言葉が混じっていたことに気がつく。

「魔法学院？」

「そうだけど、それがどうかした？」

「じゃ、飛んでたのは魔法だったのか？」
「だから、当然でしょ。メイジだもの」

ルイズの言葉に啞然とする。
とりあえず、今までの情報を整理して疑問を呈する。

「じゃあ、あんたは魔法使いなの？」

「そうよ。私の使い魔じゃなきゃ本来は、あんた達なんか口がきける身分じゃないんだからね」

「じゃあ、あんたらはさつき俺達のことを平民と呼んでたけど、あんたは貴族なのか？」

「そうよ。私は由緒正しい旧い（ふるい）家柄を誇る貴族のヴァリエール家の三女儿ルイズよ。そんな私がなんであんたらなんかを使い魔にしなくちゃならないの？」

ハアとため息をつくルイズ。顔が可愛く、体格も華奢だから一回の行動が日々絵になる。

そのため息を見て、才人は気がついた。さつきから自分以外誰も喋っていないことに。

普通あんな光景を見せられたら、自分のように腰を抜かすはずだろう。でも、誰も喋っていない。あまりの出来事に思考が追いついていないのだろうか。ここは自分が促して、ルイズをとっちめるべきだろう。幸い女の子や子供がいるとは言え、同じくらいの歳の男が4人もいるのだ。こんな小さな女の子なら、直ぐに捕まえられる。

「黒崎さんたちも何とか言ってくださいよ」

そう言って振り返った才人の目には、フワフワと宙に浮かぶ一護と夏梨の姿が。

「アレ？」

ばさりと羽音がする方へ、顔を向けると炎のような紅蓮の双翼を背中から生やしたシャナの姿が。

「ハイ？」

「よし、んじゃ、とりあえず右も左も分かんねーし、あいつら追うぞ」

「はい！」「了解」「分かりました」

一護の号令にフワフワと浮かぶ杖に乗ったネギとエドとアレンの姿。エドとアレンはネギの傍にあった荷物を天秤のように抱えている。

全員が先に飛び立った生徒達を追って学院を目指す。

「……………」

ルイズも才人も目が点になる。

とりあえず、二人は先に飛んでいった6人を追って、学院への道を走り出した。

「へえ、魔法世界ね」

ずずっと水を飲みながら、エドが喋り始める。

時刻は変わって夜。見たことのない二つの月が窓の向こうの空に

輝いていた。

ここは魔法学院の寮、ルイズの部屋である。

「今ひとつ、信じられねーけど、そういう事なんだろ」

どこからから調達してきたらしい、ハムを噛みながら一護がエドの話に乗る。更にシャナとアレンも、その会話に参加する。

「信じられません」

「魔法なんてあつたんだ…」

「俺はお前らの話も信じられねーけどな。AKUMAに人食いの徒”なんて」

ぱいっとアレンの方へ、籠に盛っていた林檎を投げて寄越す。片手でキャッチするアレンと、両手で掴むシャナ。会話に参加していないネギは自分の荷物の整理、夏梨はそれを手伝っている。

「それはこちらと同じですよ、死神なんて神話の話ですよ」

「そうそう、錬金術だって眉唾ものだと思ってた」

しかしお互いの自己紹介も兼ねて先に見せている。

背負った武器や、自分達しか持ち得ない技術や能力を。

現実を見せられた後では、疑いようがない。

「その通りだ。しかし、お主らも豪胆というか、呑気というか…」

不意にシャナの胸元、正確にはそこにある金の輪を二本、引っ掛けたペンダントから重く遠雷の様な声が響いた。シャナに異能の力を与えている、紅世の王「天壤の劫火」アラストールのものである。ルイズと才人よりも早く学院に戻ってきた6人は、近くにいたル

イズのクラスメイトらしい女生徒を適当に探し出し、この部屋を聞き出したのだ。無論、鍵はしっかりと掛かっていたが、エドが錬金術で強引に開けたのだ。

「なんつーか、生きる事になっちっこいだけさ」

「そうだね、豪胆とか、そういう褒められたものじゃないです」

そこへ来て6人と3体、そして1匹で善後策を協議しているというわけだ。

「ただ離れていたのかは知らないが、まだこの部屋の主は帰ってきていない。」

「で、カモくんではないのかな？」

「おう、なんでい、アレンの兄貴？」

アレンのフードから金色の羽付きボール、ティムキャンピーとネギのペットである喋るオコジョ、カモミール・アルベールがひよっこりと顔を出した。白い髪に保護色のように溶け込んでいる。

「ネギ君もその、魔法使いなんだよね？」

今、この場におらず荷物の整理に勤しむネギ・スプリングフィールドもまた魔法使いらしい。だが、どうもこの世界の魔法使い「メイジとは違う存在らしい。全部、カモから5人と1体は聞いた。」

「ふう、ありがとございました、夏梨さん」

「何、気にすんな。それと一兄」

「ん？」

「コレ」

荷物整理が終わったらしいネギと夏梨が戻ってくる。適当に空き部屋を探して、そこに荷物を放りこでいたのだ。流石に男4人と女2人が一緒の部屋にいるのは拙いという、至極常識的な見解からだ。夏梨が一護に黄色い何かを放り投げる。握りつぶさんばかりの握力で、一護がそれをキャッチする。

「おい、一護！ヤメテ、綿が出るから！」

そのライオンらしいぬいぐるみが喋りだしたときには流石に焦った。

「ぬいぐるみが喋ってる…」「どんな仕組みで…」「不思議だ」

「お前らが言えるかよ、喋るペンダントと義手にオコジョって…」

「うん、無理だと思う」

じとつと喋る生物と無機物を見る、一護と夏梨。

エドと一緒にこの世界へ転送された、彼の弟であるアルフォンスは鎧から、彼の右手の機械鎧に魂を移し、エドのオートメイルは世にも珍しい喋る機械鎧になっているのだ。この事態は本人達も驚いたという。だが、その結果として錬金術の実力が上がったという。あまり喜んだ様子ではないが。

「ま、どうやら俺たちは全員、ちよつと違った世界から来てしまったと…」

ガリガリと頭を掻く一同。見ず知らずの土地に来てしまった、どうにも勝手が判らない。そうなるとする事は一つだけだった。

「まずは、帰る方法を探しましょう。若しかしたら、僕ら同様…」

「別世界の人間も居るかも知れない…、ってことですねネギ君」

そんな事を話していると、カツカツと石段を上がってくる足音が
二つ、聞こえてきた。

「お、この部屋の主のお帰りのようだけ」

Our master is ZERO

善後策を協議していた6人と3体と1匹が占拠した部屋へ、この部屋の本来の主が帰ってきた。随分と急いでいたのか、それとも草原に放置して消えてしまった自分達に怒っているのか。間違いなく後者だろうと全員が当たりをつけた。

案の定、扉を蹴破り入ってきた、桃色の髪の毛の女の子は、

「あんだ達、使い魔の癖に、ご主人様を放っていくなんて、どんな見よ！」

開口一番、ガミガミと喋り始める。

とりあえず、聴いたのはそこまで。後は皆揃ってシャットアウト。自分達の話し合いに戻る。

シヤナとネギとエドは現実問題として、これからの生活をどうするか。こんな月が二つあるような異世界に紛れ込んでしまったのだ。元の帰れる方法を探すためにも資金や活動は必要だ。尤も、金について言えばエドが錬金術で、金でも銀でも大抵のものが作れるから、そんなに心配していない。

一護とアレンと夏梨は、モグモグと食堂から失敬してきた果物にかじりついている。特にアレンの食べる量は同年代のエドに比べて、異常なまでに多い。

「ちょっとあんだ達、無視しないでよ！」

「あー、すまん。えーと、誰だっけ？」

片手に赤い林檎を持ったまま、一護がルイズに話しかける。

それで気がついたが、こちらの名前は名乗ったが、先程から怒鳴り散らしていた、この女の子の事は何も聞いていない。どうも6人、

いや、正確には彼女の傍にいるうらぶれた黒髪の少年と、鎧とペンダントとぬいぐるみに、オコジョを足した10人は、この女の子に呼ばれたらしい。とりあえずは一番、重要な手がかりだ。

一護の態度が気に入らないのか、40センチ近い身長差のある一護をキツと睨む。

「はあ？さつき、名乗ったでしょ？」

だが、所詮は女の子の一睨み。数々の戦いを潜り抜けてきた戦士である一護には殺気の籠っていない睨みなど、普段と同じように見られているだけに過ぎない。そして、それは後ろにいるシャナやアレン達も同じ。くわっと大きな欠伸をしながら、遣り取りを見るでもなく見ている。

妹である夏梨は知っているが、一護は人の顔と名前が覚えられない。今でさえ、4人の名前を覚えるのにたっぷり1時間を掛けていた。

もやもやと一護は自分の記憶を揺り動かす。この世界へ遣って来たら、ここに来るまでの時間。

「えっと、ドン・パニーニだったけ？」

「違うよ、一兄。ドルトーニ」

「だー、本当に2人とも覚えられてねーのな、ドン・パニーニだろ？」

「「おお、エド。すげーな」」

意図的なのか、それとも天然なのか。三人揃って名前を間違える。でも、その一方的に剣呑な遣り取りを見ていられないのは、ネギだった。

「わわ、ダメですよ！黒崎さん！」

「一護でいい、ネギ坊主」
「そうじゃなくてー！」

あぶぶと10歳らしい可愛い慌てぶりでネギが困り果てる。
とりあえず、三人の前に立ち、改めてルイズに向き直る。

「えっと、取り敢えず、名乗っていただけないでしょうか？」

本場英国仕込みの紳士然とした対応で、ネギが喋り始める。

「ふん、いい心がけね。なら言うわよ」

「偉そうだな、オイ」「だね」「ああ」

ボソリと呟いたのは内緒だ。ルイズにも聞こえないくらいの音量で喋っている。

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「名前、長え」

エドが兎に角、覚えるのが面倒だと言わんばかりの態度で悪態をつく。それに同感だという調子で他の4人が首を上下に振る。

「うるさいわね！平民の分際で、貴族に意見しないで！」

「はいはい、んで、そっちの黒い髪の奴は？」

エドと一護の心底、どうでもいいという調子にキーツとルイズが発狂する。その狂いつぶりや、まるで動物のようである。2人は無視、ネギとシヤナが両肩を持って、飛び掛るのを阻止している。

才人はそこで自分を見ている二人、そして奥にいる4人に目を留

めた。

(相変わらず、変な格好してるな…)

そう思いながらも自己紹介をする。

「えっと、平賀才人です」

そして再び、6人の自己紹介。

勿論、死神だ、フレイムヘイズだ、エクソシストだ、魔法使いだ、錬金術師だと言う事は伏せておいた。加えて異世界云々の話もルイズと才人にはしなかった。6人と魔神やオコジョはお互いを知っているが、二人は知らない。これは単純に余計な先入観を与えないという処置だ。なので、兎に角、アラストールにもカモミールにも、コンにも、アルにも口を開かないようにと念押ししておいた。

間違っても信じてもらえない。

この学院の寮を作りや材質を見ながら、明らかに科学技術が低いと指摘したエドの提言でもある。次元だ、異空間転送とか、そんな事を近代自然科学という概念のないだろう彼女達に説明しても面倒というのが理由だ。

このエドの直感は物の見事に的を得ていて、

「信じられないわ」

「俺だって信じられねえよ」

「別の世界って、どういうこと？」

「魔法使いがない。月は一つ」

と、ルイズと才人が口論している。心底、言わなくて良かったと思う。異世界から来た証明をしなければならぬが、生憎と凝り固まった価値観が簡単に変わるほど、人間は単純にできていない。

しかし、話を聞いているとこの平賀才人という少年も異世界からやってきたようだ。それも恐らくは、一護と夏梨、シャナ、ネギ、いずれか、若しくは本人たちの常識が違うだけで、4人の世界は同じなのかもしれない。いずれ、彼にも話さねば、成らない時が来るだろう。

だが、今はその時ではない。

「で、使い魔ってなにすんの？」

才人はルイズに尋ねた。

それについては6人も気になっていた。おそらく、昼間の出来事を考えると使い魔の召喚というのがあって、その使い魔に自分達はされたらしい。こちら辺はネギとカモが懇切丁寧に説明してくれた。才人は魔法使いが出てくる映画やアニメを知識を総動員して思い出す。髭と白髪 of 素敵な魔法使いの肩に乗っているワシとかフクロウが出てくるのは知っている。でもあいつらは大体肩に乗ってるだけで、具体的に何もしなかつた記憶もあるのだ。

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ。」
「どづいこと？」

遠くの月を見ながら、夏梨が尋ねる。今さらながらこの異世界に興味が出てきたようだ。冷静になって考えると不思議が多い。好奇心たつぷりの猫のようにワクワクしているのが伝わる。

「簡単にいえば、使い魔が見たものは、主人も見ることができの

よ。」

「へえ、凄いですね！」

ネギは素直に感嘆のため息を漏らす。ネギの使い魔、というかペットであるカモとは、そんな事が出来ない。自分の作戦立案を手伝ってくれたりはするが、少なくとも感覚を共有はできない。

「で、どうなんだ？」

かなり面倒な様子で一護が尋ねた。随分と夜は更けている。どうも早く寝たいらしい。

そんな自分のいう事を聞く気が一切ない、一護をまた一睨みすると、ルイズはガツカリした様子で言った。

「でも、あんた達じゃ無理みたいね。わたし、何にも見えないもん！」

「ふん」

才人は眠くなってきたのか、ぼけっとした様子で言った。

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね。」

「秘薬って何ですか？」

アレンも興味深げに聞いてくる。薬というものにあまりいい思い出がないアレンであるが、不思議な効果のある薬を売れば、金が入ってくるかもしれない。師匠がたっぷり残していった迷惑な置き土産を処分するためにも、聞いておきたい。

「特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか……でもあんた達、そんなの見つけてこれないでしょ。秘薬の存在すら知らないのに」

「うん。それ無理」

「無理無理」

「硫黄を秘薬とか言ってる時点で、度が知れるな」

最後のはエド。錬金術師は同時に物理学者であり、化学者であり、植物学者であり、動物学者でもある。科学の粋を集めている錬金術師にしてみれば硫黄という、至極市中に溢れている品物を、秘薬などと呼称する時点で、かなり下に見ていた。

勿論、現代日本から来ている一護や夏梨、シャナの考えは押しつけて測るべしだ。

そして、ルイズは溜め息をついた後、言葉を続けた。

「そして、これが一番なんだけど……使い魔は、主人を守る存在であるのよ」

「ほっ……」

ここでようやく、全員が興味を示した。

「その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！で、あんた達はどんなの？」

ルイズが尋ねる。

才人は、「無理。普通の人間だし」

一護と夏梨は、「断わる！」

アレンとシャナとエドは、「嫌」

ネギは、「ちょ、ちょっと、皆さん！」

「…何を言ってるの?」

5人の言い草にルイズが静かに怒り始める。
判ってやっているのか。それともただ神経を逆撫でただけなのか。

「言ったとおり」「ちよつと、一護さん!」

「黙ってる、ネギ坊主。生憎と俺は見ず知らずの奴を守ろうって言うほど、人間出来ちゃいねーんだ」

「ですね、僕も同じですよ。僕は自分の為に生きます」

「私も自分の使命がある」

「私は一兄の背中を守るためにいる」

「俺も同じだな。俺の目的の為に全部、利用したり捨てたりしたんだ」

5人の若しかしたら悲壮な、若しかしたら利己的なそんな思いは、全ての人を救おうと思う立派な魔法使いを目指すネギには納得できない事だった。

でも、理解はしている。そういう生き方を選んだ人を知っているから。

「本当に平民の癖にナマイキね…。まあ、いいわ。喋ったら眠くなつたし」

ルイズは眠たそうにあくびをした。

「その内、絶対に私の為に働いてもらおうから!」

「俺達はどこで寝ればいいんだよ」

ルイズの決意に才人が質問を挟む。その質問にルイズは無表情で床を指差した。

途端に額に汗を浮かべる才人。そしてルイズは勝ち誇った顔。行く宛も無し。動く為の金も無し。頼れるのは自分だけ。ならば、ここで大人しく使い魔をやるしか、このムカつく5人は方法がない。

(私が上だっつてことを分からせてやるんだから…)

ルイズはそんな風に考えていたが、6人は涼しい顔。逆にハラハラしているのは才人だ。

「犬や猫じゃないんだけど」

「しかたないでしょ。ベッドは一つしかないんだから」

そう言っつてルイズは毛布を一枚ずつタンスから出すと7人へ投げつけた。

才人はおもむろに受け取る。受け取ったのを確認するとルイズは、ブラウスに手をかけた。

「ちょッ！なにやってんだよ！」

大慌てで才人と止める。あわあわと動転しているネギと違って、

5人は興味ないと言った感じだ。

その様子にきょとんとした声で、ルイズが言った。

「寝るから着替えるのよ。なにかおかしいところも？」

そう言っつて再びブラウスに手をかけたルイズを見て才人は、

「ごめん、夏梨にシヤナ。任せた」

それだけ言い残して、急いで部屋を出て、ドアを閉めた。序でに欠伸をかましていた男3人と、慌てまくるネギの襟首を強引に掴む。部屋を出て、才人は襟首を掴んで引つ張り出してきた男4人に向き直る。

そして、重く深いため息をついた。

どうやらルイズは俺達が男とは思っていないらしい。

(にしても、何なんだ。この3人の悟りきつたような表情は…)

ネギが慌てるのはまだ10歳だからだろう。当然である。だが、自分と同じくらいこの3人は、ルイズが着替え始めても、「何かどうでもいいや」みたいな顔だった。

理由はあるのだが、まあ聞けば才人が羨むことは間違いない。

「本当に、どうなっちまうんだ…」

才人は心底、疲れた顔で呟いた。そして、独り言のような事を呟く。

「くそっ!!どうして俺はあんなモノをくぐつちまったんだよ!!」

「まあ、落ち着けて」

ドンドンと灯も何もない廊下の石壁を叩く。

叩いたところで何も変わらないが、それでも叩かずには入れなかった。あまりの勢いに腕の方が行かれる寸前で、エドが止めた。

「くぐらなければ、何事も無く家に帰れたのに!!」

しばらく経ち、夏梨の音が響く。

「終わったよ」

夏梨に言われたので部屋に入ると、ルイズはベッドにくるまっている。

床には毛布が7枚、ちょうど才人たちの人数分散らばっている。どうもコレで寝るといふ事らしい。

才人はどこまでも勝ち誇った、傲岸不遜の笑顔を浮かべたルイズを見ていた。だが、一護もアレンもエドもその毛布を見向きもしない。デザインが気に入らないとかではなく、純粹に興味がないかのようだった。

「いくぞ、夏梨。シャナ」

「はい」「うん」

一護が外へと促す。2人ともまるで合鴨のヒナのようにオレンジ髪青年についていく。

「ちよ、ちよつと、どこへ行くのよ!」

自分の宛てが外れたルイズは慌てる。それはそうだろう。ルイズは自分しか頼れ無いという状況を作り出し、主人と認めさせようとしていたのだが。完全に宛てが外れ、困り果てる。

「どこって、寝るんだよ」

「だから、ここにあるでしょ。早くしなさい」

「はいはい、ルイズちゃんは偉いですね」

かなり小ばかにした様子でエドが言う。これに更にルイズは青筋を深くする。

「んじゃ、アレン」
「はい、箱舟」

短く噛み切るような言い方でアレンが箱舟を起動させる。突き出したアレンの右手の先、そこにはまるで白い巨大な水晶のようなものが浮かんでいた。

「ちょ、何よ、コレ？」
「何って、箱舟です」
「コレ、あんたの？」
「そうですね、それが何か？」
「寄越しなさい」
「何ですか？」
「私があんたのご主人様だからよ！」

ルイズの根拠薄弱な主張にアレンは露骨に嫌そうな顔をする。

「ま、いいや。皆さん、先に入ってください。あ、ネギ君は荷物を忘れないでね」
「あ、はい。シヤナさん、夏梨さん、エドさん、手伝ってもらえますか」
「あいよ」「うん」

そういうと三人で荷物を取りに行く。アレンとルイズは箱舟を譲る、譲らないの口論、といっても一方的にルイズが喋っているだけだが。

「まったく、付き合いきれねえ。先に休ませてもらうぜ」
「はい、直ぐに僕も休みますから」

そう言い残すと一護は水晶の中へ消えてしまった。

「え？」 「はい？」

ルイズも才人もきよとんとする。きよとんとしている間に戻ってきた4人が次々と同じように消えていく。更に目が点になる。

「じゃ、僕も」

そう言ってアレンも消える。

「ちょっと、待ちなさい！」

あれが入れるものだとは判断したルイズは自分も入ろうと、特攻するが、ビタンとぶつかってしまった。先ほどまでは水のようになっていたのに、今は硬い壁だ。

見ればアレンが水晶体の上のほうで、嫌な笑顔を浮かべている。

「ふん！」

「はあ……」

ルイズは使い魔に馬鹿にされたのが、心底気に入らないらしく、ふてるようにベットに入った。

才人は用意された毛布全てを贅沢に使って、石の床に寝転ぶ。

固い感触が背中と後頭部を襲うが、意外にも、すんなりと眠気が襲い目を閉じた。

パチンとルイズが指を弾くと、ランプの灯りが消えて窓の外の二つの月の光がゆるっと入ってきた。

才人はあの二つの月を眺めた。

ここは日本ではない。地球ですら、ない。
魔法使いがいて、空を飛ぶ国があるなんて、俺の世界ではありえないことだ。

空に浮かんだあのでかい月はなんだ？

地球の夜空に浮かんだ月の、二倍は優にある。

でかいのはまだいい。

もしかしたらどこかの国では、そういう夜もあるかもしれないけど、二つあるのはおかしい。

才人が知らないうちに月は二つに増えたのだろうか。

ここは本当に地球ではないようだ。

否定したかったが、否定のしようも無かった。

才人は今日ほど、己の好奇心を恨めしく思ったことはない。

「ドッキリだと言ってくれよ。なんで誰もボード持って来ないんだよ」

夢だと信じたかったが、ルイズとキスした時の感触とそのあとの左手の痛みが夢ではないと物語っていた。

「母さん」

辞世の句でも詠まんばかりの勢いだ。

「どうやら才人は魔法使いがいる世界にやってきてしまいました」

まだ、死ぬ気はないが。

「しばらく学校にも行けません。勉強もできません。勘弁してください」

さい」

グスグスと恨み節を言うが、

「うるさい!!」

「じめんなさい」

と怒られてしまった。

ハアとため息をついて、目を閉じるとあっという間に、夢の世界へ誘われた。

Our master is ZERO (後書き)

本文中にあるエドの「硫黄が秘薬なんて時点です」というのは彼が錬金術師であることもありますが、やっぱり硫黄という基礎的な元素すら抽出できていないという、事実を重く受け止めているからです。今ひとつ、その裏にある「神学」の要素は測っていないですが、ルイズ達の世界観、つまり17世紀というのは自然科学の走り調節でした。ニュートンが万有引力を発見し、トスカネリが地球球体説を唱えた時代。しかし、それは現実の世界でもキリスト教に拠って潰されてきました。

単純に無自覚にルイズ達は深く神学に嵌っていますから、エド達の言葉が額面どおりにしか受け取れない。本来であれば、怒りよりも技術力の無さを嘆くべきだったのです。

もし原作の才人がこんな風に高校程度の自然科学を開陳できたら、間違いなく打ち首獄門です。それくらいにキリスト教に対する自然科学へのある意味、冒瀆ともいえる迫害はすさまじいものでした。ガリレオやケプラー、メンデルなども悉く宗教裁判に掛けられていますから。

Council In Cube (前書き)

このような拙作をお読みいただきありがとうございます。P V 一万件を突破いたしました。

Council In Cube

にゆつとアレンが白い水晶から首を出し、ルイズの部屋の明かりの消えた事を確認する。

そして再び、首を引っ込める。その姿はどこか白い色をしたカメラのようだった。

アレンの振り返った先には一護達にとって、中世ヨーロッパを彷彿とさせるような石造りの建物が際限なく奥へ奥へと続いていた。空は染み一つ無い白。太陽は無いが、まるで陽だまりのように明るい。

ここは箱舟。

アレンの行った事のある場所であるならば、その場所を物理的な距離を無視して自在に繋ぐ、アレンとそのゴーレムであるティムキヤンピーにしか扱うことの出来ない、秘室中の秘室である。

中の街並みは単純に興味の域であるが、アレンは気に入っていた。先ほど、ルイズが「寄越せ」と喚んでいたが、これを扱うことができるのは鞠に羽根の生えただけのティムキヤンピーを連れたアレンだけ。この不思議な空間に入れるも、はじき出すも全てはアレンの心意次第なのだ。ルイズは入れると間違いなく引っ掻き回すと思っただけの自衛の為に。才人の方は何となく。

「お待ちせしました」

石畳を数分ほど歩くと、城下町にあるような大きな噴水が見えてきた。

噴水の縁には先に入った一護達が待っていた。ペコリと丁寧にお詫びする。

「にしても、すげーな、これ。アレンの行った場所ならどこへでも

行けるんだろ？」

「まあ、ある程度の制約はありますが」

夏梨は一護の後ろで、袴をたくし上げ、水遊びに興じている。エドとネギは探索でもしているのだろう、噴水の傍には居なかった。目標となる場所はここが一番なので、しばらくすれば戻るだろう。

逆にこれに入ったのが3度目となるシャナは、かなり機嫌が悪い。

「どうした、シャナ」

「うるさいうるさいうるさい！」

実はルイズと才人が帰って来るまでの間に、この部屋、正確には空間に一度、全員をアレンは招待しているのだ。皆、一様に呆けた顔をしていたが、一護だけは「こんなバカでかい空間があつたなんてー！」と大声で叫んでいたが。

その場所で各々の正体を明かし、序でに簡単な手合わせをしたのだ。先に相手に一撃入れたほうが勝ちという、かなりシンプルな勝負。勿論、全員が無手だ。

結果は一護が4勝1分、アレンも4勝1分け、ネギが3勝2敗、エドが2勝3敗、シャナと夏梨は4敗1分という、本人曰く恥ずかしい結果になってしまった事が、相当来ているらしい。

さっきの間も良く、爆発しなかったなどアレンは心の底から感心していた。まるで娘を見守る父親のようである。

で、その父親代わりでもある、アラストールはというと

「確かに気になっていたのだが、随分と素晴らしい身体能力なのだ
な」

紅世の王と契約した人間は、”徒”を狩る異能の討ち手となる。

勿論、”徒”達は人間には到底、及ばない膂力や脚力を持っている。

だからこそ、それに呼応するように異能の討ち手、フレイムヘイズもまた、人外の膂力を持つのだが…、

「だって、アレンにはバックドロップを喰らって…」

白髪頭の少年に体を掴まれ、頭から石畳に落された。

「一護には空手チョップ…」

突進したらするりと避けられ、脳天に鋭い一撃。

「ネギには胸に一発…」

後でアワアワと右へ左への大騒動だった。

「エドには捕まえられ…」

思いつきりぶつかっていったら、その先は壁だった。

一応、武器は使っていないのでセーフらしい。

「ようやく、夏梨と引き分けじゃない！」

アレンと一護はボリボリと頭を掻いた。正直、やりすぎたかなと思っていたが、ここまで思いつきり臍を曲げられるとは思っていなかった。使命感が強くて、これから宿敵にして最愛の人との戦いを前にしていた、（ここらへんの話はアラストールから聞いている。尤も、5人とも興味は無かったが）フレイムヘイズの少女にとって、これは随分と重く押し掛かっているようだ。

「ま、いいじゃねえか」

「何がよ」

今まで見せたことのないはずの透明な液体が、今にもシャナの目からあふれ出そうだった。

「俺らだって、最初から強かった訳じゃねえ。必死になって戦って、必死になって鍛錬して、それで強くなったんだ。心配すんな。シャナの修行、俺達が手伝ってやる」

自分に親指を当てて、自信満々といった調子で一護が語る。
それに乗って、

「はい、私も一兄に稽古つけてもらおう！」

「僕も彼女に協力しましょう」

「ふ、心遣い感謝する」

短く、紅蓮の少女が笑った事に気が付いたのは、その契約者だけだった。

「あ、皆さん。準備できましたよ」

話が纏まったとき、入ってきた方向とは逆の方向からネギとエドが杖に乗ってやってきた。この杖はネギの持ち物で、ネギの魔法詠唱の精度と、魔法の威力を増加する、早い話がブースターなんだそう。魔法に関して、一切の知識の無い側の4人は適当に掻い摘んで理解していた。

杖の下には大きな布で包まれた物体がぶら下がっている。

噴水の傍にゆっくりとホバリングしながら降りてくる。先に荷物を降ろすと、エドが飛び降りる。包を開くと現れたのは大きな台の付いた丸水晶だった。

「…なんです、コレ？」
「あ、えっとですね…」

怪訝そうな顔をする4人にネギが説明を始める。

中を覗き込むと、綺麗な青いサンゴ礁と海、白い雲と砂浜が広がっている。そこから小高い丘を登っていくと、城らしき建物があつて、周りを南国植物が彩っている。

滅多にお目にかかれないだろう、かなり手の込んだミニチュアだ。

「こいつの名前はダライオマ魔法球！このミニチュアの中に入れて、1日を10日にすることができー！」

と思つたら、ネギの赤毛の陰から白い小動物が現れ、全部台詞を搔つ攫つた。

「どついうこと？」

「まあ、単純な話さ。浦島太郎って昔話があるだろ？アレの逆で、この中では経過時間が遅いんだ」

「あー、なるほどな」

一護が凡そ理解したらしく、その先の説明を引き継ぐ。

「こつちで1日24時間しか経ってなくてもでも、このダライ…魔法球の中に入れば10日の時間が流れているっていうことか」

「さすが、一護の兄貴！」

カモが話していることを理解してくれた人を見つけて喜ぶ。

このダライオマ魔法球の事を一回で覚えなかったのは、一護の持ち前のダメスキルの発露である。

「その通りでさ！しかも、今回は修行環境を自由に選べる、オプシヨンをつける！」

そうやってネギが魔法球を中心になるように、別の魔法球を接続していく。

こちらの魔法球の中をのぞくと、一面が白い銀世界、赤く燃え盛る火山地帯、木しかない密林、あちこち腐ったような沼、流れ飛ぶ砂しかない砂漠という、5つが繋がった。

「こつちの中も同じように時間が流れる。修行には打ってつけて訳さ」

どこからか取り出したタバコを銜えて微笑む。若干、黒いモノが見えた気がしたが、気にしないことにした。

「これは自由に使ってくれ。この位置に置いておく。いいっすよね、兄貴」

「うん、カモくん。皆さん、有効に活用してくださいね」

パンパンと話が完結したところで、エドが手を打つ。

「じゃ、一段落したところで、これからの動きだ」

「そうだね、兄さん。帰らないと皆、心配するし」

エドが頭を搔きながら、話し始める。

「とりあえず、何で俺達がこの世界へ呼ばれたのか。それを探るべきだろう。ならば、手がかりはあのピンク頭のクソガキにある」

実際のところ、エドとルイズは同じ年なのだが、平均身長よりも低いエドから見ても、ルイズはまだ頭一つ分、低い。年下と勘違いするのも無理からぬ話だった。

呼んだのが彼女なら、帰せるのも彼女。エドは状況証拠からそう結論付けた。

「若しかしたら、他の世界から紛れ込んだ品や人がいるかもしれませんが。それを探すためにも、箱舟の行動範囲は広げておきたいです」

アレンの行った場所なら何処へでも行ける。この箱舟の性能は有効に活用したい。

「じゃ、こうだな。アレンの兄貴を連れて、エドの兄貴と兄貴がこの世界の探索。あとの3人はあの子に付いて回ると…」

「序でに買い物をしてくれ。俺達の格好じゃ、目立つだろう」

そういう一護と夏梨の姿は上下黒の袴。シヤナはセーラー服だ。

どっちもこの世界の社会状況から考えると、着られていないだろう。目立つことは避けたかった。

「了解です。どんな服を所望で？」

「とりあえず、目立たなければ、エドみたいな感じで頼む。二人はどうすんだ？」

「私は…」

シヤナは詰まる。単純に服を機能性と必要性で選んできたため、今ひとつどんなものかいいの分からないのだ。それに気が付いたのか、

「じゃ、私達はこんな感じで」

パスツとアレンに紙を二枚渡す。そこには綺麗なデッサンで描かれた服のデザインがあった。生憎と男衆にはデザインの良さや来歴は全く分からなかったが、どちらも17世紀の西欧をイメージさせるものだった。

「それを二着ずつ。色の指定があるけど。ネギ、読める？」

「大丈夫です、夏梨さん」

今後の活動指針。

そして、指し当たったの当面の目標。

それらが決まった。

「じゃ、寝ましようか。異世界の一日目の夜ですよ。たっぷり休んでください」

そうネギが促すと、予め決めておいた家へと各々が散っていく。

ネギもまた、自分にあてがわれた家へと行く。既に荷解きも終わり、赴任先の学校である、麻帆良学園の寮と同じ感じになっていた。

白い空の下、動き回る影が二つ。

噴水の傍に近寄るのは、煤けたライオンの縫いぐるみである、コンとオコジョ妖精のカモミールだった。

「にしても、異世界か……。可愛い子いるのかね」

そんな愚痴をこぼすコン。間違いなく、主人が聞いたら中の綿を
残らず取り出されそうだ。

「まま、気にしても仕方ねえ。一杯やろうぜ、コンさんよ」

へへへと下品な笑いを浮かべる力モ。

「お、気が利くじゃねーか。じゃ、俺からも…」

「ととと、じゃ、乾杯と行きますか」

「異世界で生まれた」「俺達の友情に」

「乾杯」

Council In Cube (後書き)

まず、シャナファンの皆様、真に申し訳ありません。

どうしてもあの4人と対峙した時に彼女が勝つシーンというのが思
い浮かばなかったのです。

確かに技巧や体力面では圧倒的にシャナの方が圧倒的に上ですが、
それを補って余りあるだけの一護には速力が、アレンには手数が、
ネギには火力が、エドには発想力があると思います。

決して彼女は弱い訳ではないです。今回は無手なので、彼女は必殺
の大太刀と呼ばれた「贄殿遮那」を使っていますし、使えばまだ
強いかと。勿論、それは他の4人にも言えます。今回は無手という
単純に体格差が明確に出る勝負だったので負けたということですよ。

ただ、原作を読んでいるとやっぱり速度に難がある点は否めません。
高速移動術というのはフレームヘイズには無いのでしょうか。模し、
身に付けることが出来れば、彼女の戦いもワンステージ上へ上がる
と思います。

d-nakさんから質問を頂きました。

「作品の別キャラクターは出てきますか。特にグリードやリンは」
ということですよ。

エドの機械鎧が破壊されるような事になれば、当然の事ながらウイ
ンリイは必要になりますし、東方からの使者という事でリン主従の
登場も意図できると思います。

一番、簡単なのはネギまのヘルマン男爵でしょうか。

彼にはネギの成長を確かめる役割があると思いますので。

A W a k i n g r o m a n c e

朝、アレンは箱舟の中に拵えた自分の部屋の中でパチリと目を開けた。

いつ何時、AKUMAに襲われるか分からない生活を送っていた彼にとつて、この余計な存在を入れない空間は心地良いものだ。だが、太陽の日が在る訳でもなく、昼も夜もないので今ひとつ時間の経過が掴みにくい。どうもこの世界には時計というものが存在しないようなので、早々に6人とも計時は諦めていた。

「ん、ん」

軽く伸びをしてベットから飛び降りる。一番上の黒い法衣を外したシャツとスラックスという何ともラフな格好で部屋を出て、そのまま箱舟の出口に向かう。

にゅつと顔を出したのは、昨日勝手に使ったルイズの部屋。

ここの主人は随分と寝起きが悪いのか、まだ眠っている。額には昨日ぶつけた痕が赤く残っていた。才人はというと堅い石の床の上で毛布を7枚も使って眠っている。

2人とも随分と幸せそうな寝顔だ。この寝顔を邪魔するわけには行かないので、椅子を一脚コソツと失敬して部屋を出た。随分と広い学院なので、序でに箱舟のチェックポイントを増やしておくのも良いかもしれない。

「はっ！ふっ！」

「せい！やっ！」

適当に日が当たって、広い場所を探すとそこには既に先客がいた。その先客は椅子を持って、遣って来るアレンに目を留めると、

「おはようございます、アレンさん」

「おはよう、アレン」

シヤナとネギだった。2人とも昨日とは違う、汗をかいても心配しなくて良い運動着を着ている。ネギは拳法の型。シヤナはどこかで拾ってきたらしい棒きれを振り回していた。

「おはよう、2人とも。良く寝れた？」

居住区の提供者としてどこか危なっかしい子供を気遣う。こういつた心配りを忘れないのがアレンの基本的な流儀だ。

「大丈夫、問題ない」「うむ、真に不思議な空間であった」

「あ、ありがとうございます。所でなんですかそれ？」

ネギがアレンの持ってきた簡素な木の椅子に目を留める。

「これ？これはね、こう使うんだよ」

そう言うと、上半身はシャツ一枚になり、4本足の一本だけを接地させる。そして、その上に片手で逆立ちしてしまった。物凄いバランス感覚と腕の力である。オマケに一本の芯が通ったかのように、足まで真っ直ぐになっている。背筋力や足の力も相当なものだろう。これには二人にして3人も驚いた。

「すごいです、アレンさん！どんな鍛え方してるんですか！」

「何と言う体だ、シヤナが負けたのも頷ける」

「素直に驚いた」

腕の折り曲げ、片手逆立ちの状態で腕立て伏せを始めたアレンは、

「僕らは単純に剣術とか拳法とか学んでも生かせないんです。武器が武器ですから。ただ、武器を扱うために体力をつけているんです」

そう言いながらもカウントは欠かさない。僅かな時間だったが、既に30回も終わらせていた。普段彼が課しているノルマは300回なので、10分の1程度だが、この分だと直ぐに終わるだろう。

「えと、じゃあ手合わせしてくれませんか？」

「手合わせ？」

「私もお願いしたい」

物凄いスピードで回数を重ねるアレンを見て、小さな少年少女はお願いをしてきた。正直な話、アレンは子供に弱い。本人もまだ16に成り立てだが、それでも小さい子には優しいのだ。

「いいですよ」

ニコツと笑って2人のお願いを聞き入れた。

「ん、ん…」

箱舟の一室。一護は目を覚ました。特別にエドを拝み倒して作らせた、草を編んで作った畳が特徴だ。勿論、い草ではないので、あの特有の香りが無いのが少し残念だ。

もし、い草を見つけたら、もう一度錬成してもらおう。そう考え

て、もう一度朝の睡眠を享受すべく目を瞑る。ふと、何か胸元にササラと流れるような感触があった。

「ん？」

ペラツと捲ると妹がグースカ、鼾を掻いて寝ていた。母親が無くなって直ぐ位は自分のベットに潜り込んで来る事がよくあった。もう一人、ここには居ない一護にとつての妹、夏梨にとつての姉の遊子と二人で。最近というか、一護が高校に入ってからはその事もなく無くなっていたが、異世界に吹っ飛ばされて、不安にならない方がおかしい。豪放磊落、よく言えばクール、悪く言えばぶっきらぼうな性格の妹はあるが、いきなりトンデモナイ現象と人にあつたので、疲れたのだろう。

「遊子の奴、大丈夫か…」

もう少しだけ妹を寝させてやろうと、一護は静かに部屋を出た。

一護が目覚めた頃、箱舟の外でも才人が起きた。

溜め息をつき、ベッドの方を見る。

ルイズは、ベッドの中で寝息を立てている。

とても自分と同じ年位とは思えない程、あどけない寝顔をしていた。どうにも気位が高くて、とてつもない暴力少女だと言うことが分かったが、それでもグツと来てしまう。

「やっぱり夢じゃないか…」

平賀才人。16歳の日本の高校生。

身長も体重も平均値。髪は染めているわけでもないのに、日本人の原色ギラギラな黒。

特別な趣味も無い。特技も無い。石を投げれば取り敢えずぶつかる、そんな少年だった。

だからこそ、不思議なモノに興味を持ったのだ。

パソコンを修理してもらった帰り。彼は出会い系サイトに登録したばかりだった。勿論、それなりにネットの知識もあるので、全てが女性だとは思っていない。ただ単純に人と合って、あわよくば女の子と知り合いに為れたらいいなと何となく思っていた程度だ。

はつきり言って、他の6人とは違って危機感が足りていなかった。

「顔、洗おう…」

水場を探しに階下へ降りていく才人は気分も落ち込んでいた。

やっぱり一晩寝たら自分の部屋でした、なんて展開を期待していたが、なんてことはなかった。

少しせつなくなる。

しかし、眩い朝日は差込み、空気は澄んでいる。すがすがしい朝である。

自分が生きてきた日本、東京でこんなになすがすがしい朝はあったらどうか。

いや、無かったような気がする。

鳥のさえずり声が外から聞こえる。

まるで、何かの物語の中に自分がいるように感じた。

そうだ。何事もネガティブじゃなくてポジティブにしよう。

ポジティブポジティブ。

どこかの漫画でもポジティブ少女がいたではないか。

そう考えると、明るい気持ちになれた。そして、少し考える余裕

もできた。

そうだよ。考えてみれば、ちょっととした観光ではないか。

この世界はどんな世界なんだろう。ちょっととした知的好奇心も沸いてくる。

ふかふかのベットのうえで、のんびりとぐーすか寝ている生意気魔法少女の使い魔というのが少し気に入らないが、人生で使い魔になるなんて一生に一回もないはずだ。

どうせなら楽しんでやろう。

そんな風に決意したのだ。

やっぱり、彼には危機感が全く無かった。

「ん、よう」

ふわふわと浮かぶ、白い水晶から浮かぶようにオレンジ頭の青年が出てきた。自分よりも頭一つ分高い。オマケに目つきが鋭く、ただ立っているだけなのに、かなり怖い。

「おはようございます…、えっと…」

「一護だ。黒崎一護」

「あ、俺、平賀才人っていいいます。宜しく願います、黒崎さん」

「一護でいいぜ、才人」

二人で連れ立って階段を降りていく。何となく不良っぽい感じがするが、今の感じを見ると結構いい人なのかもしれない。自分を放置して、「箱舟」なるモノの中に消えてしまったことは、燻っていたが怒っても仕方が無い。

暗い石段を降りて、外へ出るとそこでは既に一戦を終えた3人の姿があった。

「っ、っよ…」

「速いです…」

「もう、へばったんですか…」

朝から体力を使い果たしてしまっただけらしいネギとシヤナ。二人とも顔中、体中、汗だくで、長い髪が肌へばりついている。対してアレンは涼しい顔。汗だくになるところか、一筋も垂れていない。

「付いていくのでいっぱいはいっぱいでした…」

アレンから渡されたタオルでネギとシヤナは汗を拭う。二人の子供を相手に息を上げていないアレンを見て、一護が何か触発されたらしい。

「おし、アレン。次は俺だ」

「分かりました」

ずっと二人とも自然に構える。そして、両者同時に一步踏み込む。その速度は才人の目で終えないくらいに速かった。右手の拳で三発、左の蹴りで二撃、普通にできるだろう体術であるが、その速度は段違いである。

「え…、何アレ…?」

「速いけど、目で追えなくは無理。でも、体が付いていかない」

シヤナが二人の拳と蹴りの応酬に意見する。それにも才人は驚いた。3分ほどすると、お互い動きを止める。流石に二人とも汗が流れ、肩で息をしていた。

「強えな、アレン」

「一護さんこそ」

お互いを褒め称え、一礼する。

「うし、じゃ顔洗いに行くか」

一護が促し、その後ろに続いていく。ポカンとしていた才人も、正気に戻ると軽い手合わせを終えた4人を追って水場へと急いだ。

「あー、眠い…」

エドが目を覚ます。取り敢えず顔を洗ったりしななければならないと思い、箱舟の外へと出て行った。

ちょうどエドが箱舟を出たとき、ルイズが目を覚ました。

「お、起きたのか」

「あ、あんた…、どこ行ってたのよ!」

何気ない朝の挨拶をするエドワードに対して、朝からルイズはヒートアップしている。昨日、散々虚仮にされたのだ。大貴族の三女である自分が、しかも、平民ごときに。これで怒らない方がどうかしていると思い、兎に角、ぎゃあぎゃああと騒ぐ。

貴族だの、使い魔だの、魔法世界だの、そんなことに全く興味が無いエドは取り敢えず、朝からうるさいと思い、思いっきり肘を叩き込む。機械の右手の方を。

案の定、ちょうどいい位置にあったルイズの可愛らしい顔にクリンヒットし、気を失ってしまった。

そんなトンデモナイことをしながらも、エドの頭では、

(あー、水道設備がないのか…。作ってやるか…)

と、この世界のインフラ整備について考え始めていた。

「ルイズー？」

「よ、才人」

ちょうどエドと入れ違いで才人が戻ってきた。中でルイズが気絶しているのを見て、何があったのか聴こうと思ったが、どこか機嫌が悪そうなので、辞めておいた。

「あ、おはようございます。エドワードさん」

背は自分より低い、滑らかな金髪と輝く金目が綺麗で、意志の強さを表している。

「俺は顔洗ってくる、その馬鹿起しとけ」

かなりの上から目線で、才人に命令する。その言い方にカチンと来たが、追々自分の方が年上なのだとこのことを教え込んでいけばいい。そんなことを考えていた。

エドワードが部屋から出て行くと、ルイズを起こしてと言われたので、とりあえず寝ている、というか気絶しているルイズの肩を揺り動かした。

「な、なによ！なにごとー！」

「朝だよ。お嬢様」

「へ？そ、そう……って誰よあんた！！？」

ルイズは寝ぼけた声で怒鳴った。

朝に弱いのだろうか。ふにゃふにゃの顔が痛々しい。

とてもではないが、絶対に年頃の女の子が見せない顔である。

大丈夫かこいつは。

「ルイズ。それはないだろ！！」

「ああ、そういえば昨日召喚した使い魔の内の一人ね」

「そう。忘れないでくれ」

なんて言うるとルイズは来ていたネグリジエを脱いで、着替え始めた。昨日の調子で分かったが、この子は才人、使い魔のことを男としてみていない。ちょっとだけ才人はシヨックだった。

「下着」

「自分で取れよ」

顔を真っ赤にして、伏せる。そんな才人にルイズはもう一度、

「下着」

二度も言われては仕方が無い。しぶしぶ、クローゼットを開けてルイズの下着を取り出す。まあかなりガキっぱいものばかりだった。

「どれだ？」

「んー、一番右のやつー」

裸になっているかもしれないので、振り向かずに投げて寄越す。

「服」

単語一語で命令されるといっても、分かりにくい。取り敢えず、
適当に釣り下がっていた服を一着、投げて寄越した。

「着せて」

「自分で着るよ」

ちよつと強い口調で才人が言い返すと、ルイズは振り返らないサ
イトの背に向かって、

「あのね、高貴な人は下僕がいる場合は自分で着替えないの。着せ
なさい、さもないとご飯抜き」

流石にご飯を抜かれては生きていけない。才人にも意地はあるが、
意地では腹は膨れない。しぶしぶ引き受けることにした。

「あら、いい心がけね。とりあえず、あなたには朝食を上げるわ。
他の6人には上げないけど」

勝ち誇った調子でルイズが喋る。才人は昨日の遣り取りの一部始
終を見ていたので、ルイズがこんな風になるのも分かる。確実に6
人はご飯が無いだろう。同情と伴に、箱舟に入れてくれなかったこ
とや、エドに下に見られたことへ意趣返しを考えていた。

「丁度いいタイミングでしたね」

着せ終わったところで、タイミングよく戸が開いて、白髪頭の少
年がひよっこり顔を出した。

「動いたら、お腹すきました。早く朝食にしましょう」

主導権を握られっぱなしのルイズと才人が部屋を出る。部屋の外には帰ってきた5人が全員いた。ちょうど出ようとしたタイミングで箱舟の中に残っていた夏梨も出てくる。

ルイズは恨み言の一言でも言っただろうかと思っただが、使い魔程度にそんな事をして、一々腹を立てていては話にならないと思いつつと堪えた。

未だにルイズは6人を下に見ている。

実際は6人が6人もこの世界を滅ぼしかねない程に危険な爆弾だということを知らずに。

踏み出そうとしたところで、ルイズの部屋から数えて三番目のドアが開き、中から燃えるような赤い髪と健康的な褐色の肌を持つ女の子が出てきた。

ルイズよりかなり背が高く、才人やエドと大して変わらない身長にムンムンと色気を放っている。

彫りが深い顔に、ルイズとは比べものにならない突き出たバストが艶かしい。まるでメロンが二つくっついていてるようだ才人は思った。

その彼女はルイズを見ると、にやっと笑った。

「おはよう。ルイズ」

ルイズは顔をしかめ、嫌そうに挨拶を返した。

「おはよう。キュルケ」

「あなたの使い魔ってそれ？」

才人を指差して、バカにした口調で言った。

すぐにルイズは顔をしかめる。才人もこのおっぱい星人に何か言
ってやるうと思っただが、黙っておいた。ちらりと後ろを見ると、女
の子二人は羨望と嫉妬の入り混じった射殺するような視線を向けてい
るが、男4人は興味なさそうに談笑していた。

（こんなきれいな子に興味がないのか…！仙人みたいじゃないか…
！）

才人が思っているのはまったく別の理由があるのだが、それを
慮るほど、才人は人の機微にさといわけではなかった。かなりの欠
点といえるだろう。

「そうよ」

「あつはつはつは！本当に人間なのね！しかも四人も！すごいじゃ
ない！」

才人は少しムツときた。夏梨とシヤナはムカつききた。
ルイズに至っては顔を真っ赤にしてふるぶると震えていた。

『「サモン・サーヴァント」で、平民喚んじやうなんて、あなたら
しいわ。さすがはゼロのルイズ」

「「「ゼロ??」「」「」

才人達はゼロという言葉に首をかしげた。

キュルケの言葉にルイズの白い頬が、薄く赤くなる。

「うるさいわね」

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って、一発
で成功よ」

「あっそ」

「どうせ使い魔にするなら、こついつのがいいわよねえ。フレイムー！」

キュルケは勝ち誇った声で使い魔を呼んだ。

すると、キュルケの部屋からゆっくりと、キュルケと同じ髪色で巨大なトカゲがのしのしと現れた。

むんとした熱気が、8人を襲う。しかし、何人かは涼しい顔のまま。

「うわあ！真つ赤な何か！」

才人は驚いた表情で慌てて後ずさるが、ネギはあまり驚かなかつた。これ以上の生物なら、色々と見飽きるほどに見ている。そしてそれはエドやシャナも同じだった。オマケにシャナの知っている生物は、人語を鶏も馬も虎も喋るのだ。今更、蜥蜴が喋りだしても驚きはしないだろう。

そして動物好きの夏梨が近寄る。

「何？これは？」

夏梨が目を輝かせながらキュルケに尋ねた。

「おっほっほ！もしかして、あなた、この火トカゲを見るのは初めて？」

「いろいろ動物見てきたけど、これは初めてかな？」

ワクワクと赤い鱗を撫でて回る夏梨に、キュルケは嬉しそうに微笑む。

「そばにいて、熱くないの？」

才人が尋ねる。まあ確かに、尻尾が燃えていて、口からもチロチロとほとばしる火炎が熱そうだ。

「あたしにとつては涼しいぐらいね」

「これって、サラマンダー？」

ルイズが悔しそうに尋ねる。それに大して、キュルケは大きい胸をプルンと揺らすとさらに張り上げてこう言った。

「そうよ。火トカゲよ。見てよ？この尻尾」

夏梨の触る手を優しく外して、尻尾の辺りを撫でる。

「ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ！！ブランドもので好事家に見せたら値段なんかつけられないわよ？」

今にも腰に手を当てて、高笑いしそうな勢いで喋っている。アレが借金だの、返済だのぶつぶつと唱えている事は、自分の精神衛生上悪そうなので、そちらへ突っ込むのはキュルケは辞めておいた。

「素敵でしょ。あたしの属性ぴったり」

「あんな『火』属性だもんね」

「ええ。微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱」

それでチラリと才人も含めた男性陣に熱っぽい視線を向ける。

一護は興味なさそうな顔をしていたが。

「でも、男の子はそれでイチコロなのですわ」

くすつと流し目を送る。送り先は後ろにいる金、黒、白、赤、橙の色とりどりの髪色をした男達だ。序でに、

「あなたと違ってね？」

キュルケはその自慢の胸を得意げに張り上げる。

それをみてルイズも負けじと胸を張り返すが、正直、胸のポリウムが違いすぎて見ていて痛々しかった。後ろの10歳、どれだけ歳が行っていても、精々12、13といった位の体格であり、成長の余地のある後ろの二人と全く同じというのが、更に才人視点から痛かった。

才人は知らなかったが、フレイムヘイズは不老である。つまり、シヤナには成長の余地はない。

夏梨も死神である以上、肉体的な成長は遅い。

元々、歳を数える習慣のない彼らに「成長」と言うものは無用の物なのだが、自身の体格を気にしていない訳ではなかった。静かに二人とも奥歯を噛む。

ルイズはそれでもぐつとキュルケを睨みつける。どうやら相当の負けず嫌いのようだ。

最初から勝負にすらなっていない闘いではあるが、それでも負けたくないらしい。

「あんたみたいにいちいちと色気振りまくほど、暇じゃないのよ」

「あら？あなたに色気なんてあったかしら？」

キュルケの言い様にルイズの堪忍袋の緒が切れた。随分と簡単に切れる堪忍袋である。

「うがー！ーッ！！」

ルイズが才人に怒りをぶつけているのを見つめたあと、キュルケは余裕の態度でニッコリと笑い、後ろにいる明らかに毛色の違うの7人を見つめる。

「あなた達、お名前は？」

「アレン・ウォーカーです」「シヤナ」「僕はネギ・スプリングフィールドです」

「エドワード・エルリックだ」「さか…、すまん。黒崎一護だ」「その妻、黒崎夏梨」

最後にさり気に一護と夏梨がボケをシリアスな空気に咬ます。

勿論、「誰って言おうとした？」「妹だろ」とお互いに叩かれていたが。

最後に、

「平賀才人」

「みんな、独創的な名前ね……じゃあ、お先に失礼」

そう言うと、颯爽とキュルケは自慢をするだけして去っていった。それに四足歩行のサラマンダーがその凶体に合わない機敏な動きであとを追う。

キュルケがいなくなると、ルイズは拳を握り締めた。

「くやしー！！」

キーツとハンカチの端でも噛んでいるかのような怒り方だ。

それにしても随分と沸点の低い女の子だなと、今さらながら7人は思った。

「なんなのよあの女！！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！！ああもう！！」

地団太を踏んで悔しがる。相当に悔しいようだ。

「いいじゃねえかよ。召喚なんかなんだって」

のんびりとした調子で一護が諭す。

「よくないわよ！メイジの実力をはかるには使い魔を見るって言われているぐらいなのよ！！なんであのバカ女がサラマンダーで、私があんたらなのよ！」

「え、どう考え立って、あんな爬虫類なんかより人間の方が上だろ？」

才人が訳が分からないといった調子で尋ねる。尤も、この中にもともな人間は才人只一人なのだが、ルイズも才人もそれを知らない。何せ6人ともそれを秘匿しているのだから。

「あのね、貴族と平民じゃ犬と才オカミほどに違うの」

ルイズが下を向いて愕然とした様子で言う。

「犬っコロを呼んでも嬉しくないわ」

（じゃ、俺は神様だな…）

（僕は天使でしょうか…？）

（俺は王様だな）

ルイズと才人の遣り取りの中、どうでもいい事を考えているのが

三人居た。

確かに貴族と平民で犬とオオカミなら、貴族、つまり魔法使いと死神の差は歴然としている。勿論、エクソシストや錬金術師も同じだ。技術の面で大きなアドバンテージがある。フレイムヘイズやネギが属する魔法体系とは、体力面・膂力面で抗いようの無い、埋めようの無い差がある。

「ほら行くわよ！」

そう言って8人は食堂へ向かった。

A W a k i n g r o m a n c e (後書き)

死神という概念は単純に死を体系化したから生まれた概念的存在な
のですが、どうも原作を読んでいる感じではそういった「死」に対
するものへの意識が貴族にしても、平民にしても稀薄な感じがしま
す。ある意味では創造神に次ぐ神格を持ち得るのは生命を司るもの
だからなのに、そういった「死」、それに対する「生」という概念
が確立していない。やっぱりハルゲギニアの住人は人の命を軽んじ
ている、そう思えてなりません。

サラマンダーというのは火蜥蜴と和訳されます。

元々は魔法薬などを注いだ炎、それに宿る魔法生命となっていていま
した。火というものはゾロアスター教などを始め、一定の聖性を持っ
ていることが多いです。日本でも神道や仏教に於ける護摩や送り火
なんていうのも、火に聖性があるからです。

そういった火というのを軽く扱えるキュルケもそれなりに、実力の
ある魔法使いへと育つのかもしれません。

アレン達の修行と言うか鍛錬のシーンは原作そのままです。アレン
は2巻冒頭のシーン、ネギやシャナは毎朝やっています。他の3人も
色々修行してますが、どうしても進化の帰結の一つである一護に
は修行の必要があるとは思えません。何せ完現術と死神、卍解、虚
化という能力を持っていますから。

r u n n i n g t o b r e a k f a s t

トリステイン魔法学院の食堂は、学院の敷地内で一番背の高い、真ん中の本塔にある。

食堂の中は、やたらと長いテーブルが三つ並んでいる。軽く百人は座れるだろう。

今年で二年生のルイズたちのテーブルは、真ん中だった。

食堂の正面に向かって左隣のテーブルに並んだ、ちよつと大人びた感じのメイジたちは、みんな紫色のマントをつけている。

そして反対の右隣のテーブルのメイジたちは、茶色のマントを身につけている。

どうやら学年ごとでマントの色が違うらしい。茶色が一年生、紫が三年生だろう。そんな風に才人はあたりを付けていた。

朝食、昼食、夕食と、学院の中のみんなが、先生や生徒も含めてここで食事を取るらしい。

食堂へ向かう傍ら、ルイズがそんな事を説明していた。

尤も、それを真面目に聞いていたのは才人、只一人だったが。

一階上にロフトの中階があり、虹のようにカラフルな色合いのマントをつけて、思い思いの服をその下に着込んだ、教師のメイジたちが、そこで歓談しているのが見えた。

食堂に所狭しと並んだテーブルの上には、いくつものロウソクが立てられ、花が飾られ、フルーツが盛られた籠がのっている。

すべてのテーブルにはそのような豪華な飾り付けがなされていた。それらをじっと眺めていると、得意げに指を立てたルイズがこう言った。

「トリステイン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ」「ふん」

食堂前に来た6人はルイズの説明を右から左へと流していた。アレンに到っては、ルイズの部屋から食堂への移動時間を短縮しようと、箱舟のポイントを置いていた。短いピアノの旋律が流れ、風に溶けていく。

「メイジはほぼ全員が貴族なの」

エドはほぼ、全員というところに引つ掛かる物言いを感じたが、全てがメイジ＝貴族という公式ではない。逆に貴族＝メイジという公式は成り立つのかと聴こうとしたが、このプライドだけ高い女の子に聞いてもムダだろうと思ったので、辞めておいた。

無駄な争いは少ない方がいい。それでなくても、彼らはこの国を崩壊させかねないのだから。余計な事をして軍に追われるような事にはなりたくない。

「『貴族は魔法をもってしてその精神となす』のモットーのもと、貴族たるべき教育を、存分に受けるのよ。だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬのよ」

「へ〜〜〜」

分かっているのか、分かっていないのか。
生返事で済ませる。

「わかった？ホントならあんた達みたいな平民はこの『アルヴィーズの食堂』には一生入れないのよ。感謝してよね」

「ああ、よくわかった。一般市民の働いた大切な金がここで消えて
ることが」

一護が嫌味つたらしく、ルイズに言う。やたらと「一般市民」と「消える」ということを強調した言い方だった。彼ら死神の世界に

も「貴族」と言う存在はいる。だが、こんな感じにプライドだけ高い者は居なかった。死神の世界は実力主義、そして現場主義だ。

貴族だからという、そんな矮小な理由で他人を下に見たりしない。尤も、これは死神同士の話で、死神とそうでない者との間の乖離は酷いのが現状だと知っている。

「アルヴィーズって何ですか？」

箱舟の設置を終えたアレンが訊いた。

「小人の名前よ。周りに像がたくさん並んでいるでしょう」

言葉通り、壁際に精巧にできた小人の像が並んでいる。

今にも踊りだしそうなくらいに精巧な出来栄である。だが、所々塗装が剥げていたり、サイズが一個一個違っていたり、大量生産ではなく、手工業に拠る物だという事をエドは一つ手にして確認する。

見入っているらしいエドから視線を外し、それから才人に顔を向ける。

「いいから、椅子を引いてちょうだい。気の利かない使い魔ね」

腕を組んでルイズがそう言った。

それを見て才人は「すみませんね。お嬢様」と業と仰々しく言つて椅子をひいてやった。

ルイズは礼も言わずに腰掛ける。

才人も自分の椅子を引き出して座り、それを見た一護達も座った。

「へえ、随分と豪華だな。俺の知ってる奴の家でもこんなのは見たことねえや」

冷静で伶俐な兄と、ちょっとお調子者でお茶目な義妹の貴族を脳裏に思い浮かべながら、一護がため息を漏らす。単純に彼らが質素な食事の方がいいという理由なのだが、その事情は知らない。

「足りるかな？」

食事の量に不安を漏らすのはアレン。この豪華な料理で足りないかもしれないとは普段、どれだけ食べているのだろうか。ネギとシヤナ、夏梨の三人はアレンの食事が気になった。

エドは何も言わない。適当に自分が食べられる量というのを判断しているようだ。

朝から無駄に豪華な料理であった。

それぞれが、それぞれの感想を漏らす。才人も早く食べたくてうずうずしていた。

それを見てルイズがじっとこちらを睨んでいるのに、一番近くに居た才人が気づいた。

「何だ？どうした？」

才人が怪訝そうに訊く。それを見て6人も頭の上に、ハテナを浮かべて首を傾げている。

そんな7人にルイズは無表情で床を指差した。

その指の先に沿って、14の瞳が豪華なテーブルから床に視線を動かす。

そこには、1枚の皿が置いてあった。

その皿の上には、何やら得体の知れない物が浮かんだスープと硬そうパンが二切れずつ置いてあった。質素というか、残飯の残飯のような感じの食事だ。

「……は？」

7人共目が点になる。
ルイズが頼杖をついて言った。

「あのね？ほんとは使い魔は、外。あんたは私の特別な計らいで、
床」

「……………」

才人は絶句した。

その呆けた顔を見て、今度はニタニタと勝ち誇った顔で6人に言う。

「あんた達は何もしなかったから、ご飯抜き」

無情ともいえる宣告だが、才人は内心「ざまーみる」と思っていた。

この台詞に一番、カチンと来たのはアレンだった。普段から良く食べるアレン。そんな彼が食事を抜かれて頭に来ないはずがない。だからと言って、自分の態度を改めようとは思わなかったが。

「一護さん、僕、カチンと来ました」「奇遇だな俺もだ」

そんな6人を無視して、ルイズは手を合わせる。

彼女の周り、食堂中の生徒が手を組む。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ」

全員で目を瞑り、唱和を始める。

「今朝もささやかな糧を我に与えたもうたことを感謝いたします」

祈りの声が、唱和される。

ルイズも目をつむってそれに加わっている。

「おいおい、何がささやか糧だよ」

才人は納得がいけないと言った様子で、祈りを捧げるルイズに食って掛かる。しかし、完全に無視されてしまった。

「随分と豪華なくせしやがって！」

「……………」

「ささやかな糧はこっちだろうが。これじゃあ、ペット以下じゃねーか！」

兎に角、マシンガンのように才人が文句を言うが、ルイズの硬い壁には傷ひとつ付かなかった。

「ああ、うまい。うまい。泣けそうだ」

と呟きながら硬いパンをかじる才人。それでも食事に在り付けただけいいことだと思い、食事を抜かれた6人を勝ち誇った顔で見る。

「ヤベーな、コレ。美味しい」

「千草と同じくらいに美味しい」「ですね、ジェリーさんと互角かも」

「やべ、俺こんな美味しいモン、食ったことねえぞ！」「こんな豪華な食事なんて初めてです！」

「ココに来て良かったかも」

「……………」

まだこの異世界に来て2日目、最初の朝なのにもう驚くのは何日目だろう。

食事を抜かれたはずの6人が、自分よりも良い食事を食べているのだ。よくよく見れば、何枚もの白い皿が宙に浮いていて、その皿を白い帯みたいなのが吊り下げている。その帯の元はアレンの左腕に繋がっている。

浮いた皿から6人は好き勝手に取って食べている。凄く嬉しそうな顔をしている。肉を頬張り、果物に齧りつき、野菜を口へと運ぶ。さっきまでテーブルに乗っていた料理の数々が今、アレンの手にあるのだという事が、才人は直感で分かった。

テーブルの方へ目を向けると、何も無い空間でルイズとその傍にいた生徒のフォークとナイフが行ったり来たりしている。何も口の中へ入っていないのだが、どうも気が付いていないらしい。

「え、えっと…」

「お、才人も食べるか？」

「あ、ありがとう…」

一護が優しく、林檎を差し出す。それに手を伸ばそうとすると一護の後ろで、仁王立ちしている悪鬼の姿があった。勿論、ピンクの髪の毛の悪鬼だ。怒りのオーラで体が何倍にも見える。

「あ、あんだ達…！」

「あ、やべ。バレた」

そう言っただけ料理と伴に6人は脱兎の如く、駆け出す。

ルイズも懸命に追うが、とてもじゃないが6人の速度には追いつけない。廊下に出たところで、6人は箱舟の中へと消え去り、ルイズは完全に見失ってしまった。

「キーン！！」

怒り狂ったルイズに才人は思いつきりぶたれた。

THE Approaching Magic

箱舟の中に戻った6人は準備を各々準備を整え、昨日の夜決めた手はずどおりに動く。

「よし、行くぜ！」

朝の手合わせの前にアレンは箱舟のポイントを中庭に置いておいた。そのお陰でルイズどころか誰にも気づかれること無く、この朝日が差し込む中庭にもう一度遣って来ていた。

ふわりと浮いた杖の上に、運転手であるネギ、財布役であるエドとその腕に宿ったアル、箱舟の持ち主であるアレンが乗った。ネギはまだ10歳だが例外だとしても、そこそこの体格のあるアレンとエドを乗せても沈むことのない、この魔法の杖というのに感嘆していた。

空も飛べて、高速で移動できるこのネギの杖は、彼の魔力制御の精度を高める役割もある。

それだけの力を持つても、ネギはこの力が万能であるとは思っていない。ネギの見た感じでは、この世界の魔法使い、メイジ達は自分達の使える魔法を万能、始祖の御心と言っていた。修練次第では誰にでも扱えるネギたちの魔法使いの体系とは、どうやら根本から違っている。

ネギ達の魔法使いは、移動や通信にも魔法を使っている。

だが、どれだけ異能の力でも所詮は人の身で扱う程度の力。

遠くへ行けば行くだけ、その力は弱まるし、精度も落ちてくる。通信なら携帯電話を使うし、火を付けたいならライターを使う。その方が遥かに効率的で安定しているからだ。決して科学を否定しないし、受け入れられないわけでもない。

「では、行きましょう！」

そんなこの世界と自分の世界との魔法の乖離を思いながら、出発の合図を掛ける。

乗り切れなかった一護達3人は留守番である。

「行ってらっしゃい。頼んだぜ」

「はい、任せてください。一護さん、夏梨さん、シヤナさん」

そういつて三人は朝日に向かって飛び立っていった。

見送りも終わり、くるりと振り返った先には、腕を組んでこちらを睨んでいる女の子が居た。傍には頬を真っ赤にした才人も立っている。

「よ、えーと、ルフランだったけ？」

まさにたった今、気が付いたといった感じで、最早業となのか、素なのか分からない感じで一護が話しかける。

「ルイズよ！ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！いい加減覚えなさい！」

「あー、悪い。で、何？」

この態度にルイズは完全に堪忍袋の緒が切れた。使い魔の癖に、主人を放置。使い魔の癖に、主人の食事を強奪。使い魔の癖に、主人の話を無視。僅かな期間であったが、これだけの事を高が平民にされたのだ。ルイズのプライドは痛く傷ついていた。

「本当にその態度、何？私は恐れ多くも公爵家の人間よ！」

「はいはい、公爵家の人間ってだけの奴だろ？お前、自身が公爵じ

「やねーんだろ？」

「うっ！」

ルイズは反論に困ってしまった。確かに、自分が公爵の位を持っているわけではない。持っているのは自分の父親だ。単純に自分は公爵の父の元に生まれただけ。一護の指摘は核心を突く。

尤もルイズ本人が公爵だった所で、一護の態度は変わらないだろう。それはシャナと夏梨も同じ。

「ふ、ふん！それを差し引いても、私は貴族よ！平民が口答えして良い存在じゃないんだからね！」

「はいはい、偉いですねー」

立ち直った気持ちも軽く流される。

正直、ルイズはココまで随分と本人は譲歩していたのだ。口で言うなど彼女にとって、序の序。物質的なモノで制裁を始めて漸く、序。だから、ここまで来てついに実力行使に出た。

「いい加減に言うこと聞きなさい！」

小さな拳を振り上げてやってきた女の子。一護は正直、扱いに困っていた。後ろでポケッとしている二人に任せてもいいのだが、こちら辺で彼我の実力差を見せておくのもいいかもしれない。

ずっと右へ小さい動きでルイズの突撃を回避すると、首に左手を引っ掛ける。そして、そのまま

「ぐえっ！」

と、カエルが潰れたようなうめきを上げて、ルイズが気絶する。自分の進行方向に首を狙い打つ角度と高さで障害物があった。殆ど

自滅である。ただ、本気の力で一護がやったら、ルイズの首が胴体と永遠に離れ離れになってしまう。辛うじて気絶ですんだのは、一護が何の力も入れていないからだ。

「うわ、容赦な！」

才人が思わず叫ぶが、一護も後ろの女の子二人も涼しい顔。それから女の子に有るまじき、白目を向いて不細工な顔になってしまった、ルイズの片足を引っつかんで、運び始めた。

「あ、あの大丈夫ですか…？」

一護の余りな扱いに思わず、才人が心配そうに声を掛ける。

「あー、大丈夫だろ。死んじやいないし。で、これからどうする？」
「え、えーと、確か教室へ行くつて。その前に使い魔たちを探すつて」

「そう、それなら教室へ行かないとね」「魔法の授業か…、興味あるな」

ワクワクといった感じの夏梨とあくまでも事務的なシャナ。似たような二人だか、性格は鏡に映したように正反対である。

「教室は何処？」

ぶっきらぼうに聞くのは一護。そういえば才人も教室の場所を知らない事に気が付いた。

「ま、いいや。探してれば見つかるだろ」

意外にも教室は直ぐに見つかった。

途中で今朝、ルイズの部屋を出た所で逢った赤い髪の女の子、キルケが案内してくれたからだ。彼女も一護にまるで荷物のように引き摺られるルイズを見てポカンとしていたが、才人が「教室へ行きたい」というと話を悟ったようで、快く案内してくれた。

魔法学院の教室は、才人から見て、大学の講義室みたいだった。一番前に黒板があつて、そこから階段状に椅子と机が並んでいる。それが石でできていると思えばいい。

一護達と引き摺られたルイズが扉を開き中に入ると、先に教室にやってきていた生徒たちが一斉に振り向いた。

そしてくすくすと笑い始める。

先ほどのキルケは仕事は済んだとばかりに、4人とルイズを放置して、教室の中ほどへ。

その一挙手一投足を見惚れていた男子が、あつという間に周りを取り囲んでいた。

(なるほどな、男の子がイチコロというのは間違つてないな)

何となく自分の周りの女性の顔を思い浮かべながら、一護は胸の大きさを比べてみる。もし、心の中が見れたら、確実に妹に叩かれるだろうが、真顔で考えているので誰も気が付かない。

周りを囲んだ男子どもに、まるで女王のように祭り上げられている。

それだけ胸が大きいと、うようよと篝火に寄ってくる蟲の様に男がなるのはしょうがない。

一護はキルケを見てそんなことを考えながら、次に他の生徒をみた。

(……全部、実験対象にされそうだ)

真つ黒な仮面を付けたマッドサイエンティストを思い浮かべながら、どんな風に改造されるのか、ちょっとだけ見たい気もした。こちらへんは彼も「男の子」なのである。

才人は他の生徒が召喚したらしい使い魔を見てワクワクしている。漸く復活したらしい、ルイズに尋ねた。勿論、片足は一護に拘束。髪や服には草や廊下の埃が付いていて、汚らしい。

「あの目の玉のお化けはなに？」

「…バグベアー」

「あの、タコ人魚はなに？」

「…スキュア」

ルイズは不機嫌な声で答え、自分の足を持っている一護をキツと睨みつけた。

「ああ、気が付いたのか」

パツと手を離す。思いつきり足が落ちた、その先は固い石畳。自分の体とは言え、重力には逆らえない。しこたま足を打ちつける。

「つつつ…」

思わず涙目になるが、ココで怒っても授業前なので他の生徒に迷惑になる。痛む足を摩りながら、席の一つに腰掛けた。

それを見て一護達も隣に座った。才人、シヤナ、夏梨、一番通路側が一護である。

ルイズが席に座った才人達をジツと睨みつける。

「ここは、メイジの席。使い魔は座っちゃダメ」

一護は聞いていなかったが、才人たちは慙然として、床に座る。だが、窮屈だったのでまた椅子に座り直した。

ルイズはちらっと才人を見たが、これ以上はムダだと悟ったのか、授業前だから他の生徒に配慮したのか何も言わなかった。

しばらくして扉が開き、教師らしき婦人のメイジが入ってきた。

中年の女の人で、紫色のローブを身に纏い、帽子を被っている。

ふくよかな頬が、優しい雰囲気を醸し出している。彼女は教室を見回すと、満足そうに微笑んでこう言った。

「皆さん。春の使い魔召喚は無事に大成功のようですね」

ニコニコと微笑みながら、教室内を見回す。

「このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

ルイズは俯いた。

そしてシュヴルーズの目がルイズたちを捉える。

「おや？変わった使い魔たちを召喚したものですね。ミス・ヴァリエール」

シュヴルーズが、才人たちを見てとぼけた声で言う。

すると、教室中がどっと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

ルイズは立ち上がった。長い、ブロンドの髪を揺らして、怒鳴る。

「違うわ！きちんと召喚したもの！コイツらでも使い魔よ！」

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろっ？」

ゲラゲラと教室中の生徒が笑う。

「ミセス・シユヴルーズ！侮辱されました！かぜっぴきのマリコン
又が私を侮辱したわ！」

握り締めた拳で、ルイズは机を思いっきり叩いた。木の机が少し
だけ音を立てる。

「かぜっぴきだと？俺は風上のマリコンだ！風邪なんか引いてな
いぞー！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪も引いてるみたいなのよ！」

マリコン又と呼ばれた男子生徒が立ち上がり、ルイズを睨みつけ
る。まさに一触即発といった感じだ。そこへ水を差したのは、つい、
ふんつと笑ってしまったシャナだった。

今までぶすつと、不機嫌そうな顔で居た彼女の笑い顔を見たのは、
一護も夏梨も初めてだったので、正直、驚いた。それと同時に同じ
だけの嬉しさも感じた。

すると、それに気づいて少年がこちらを睨んだ。

「おい、平民！！お前今笑っただろ！平民の分際でよくも僕を笑っ
たな！！！」

少年がシャナに向かって叫ぶ。その声は教室の空気を冷たく、硬

直させている。

「シャナはそれを無視して言う。」

「ルイズ。お前のセンスは最高よ。よく相手の特徴を捉えてる」

「おい！無視するな！！」

「何？私はお前なんかと話たくはない」

カタツと腰を動かして、窮屈だったすわり心地を直す。

凜としたその姿は、威風堂々といった感じだ。

「なんだと？お前、貴族をバカにしてるだろう。平民がそんな態度とっていいと思ってるのか？」

「私は貴族をバカにしてない。失望しただけ」

そこまで言って、

「相手の立場を貶め、あざ笑う。高が知れるわよ」

そうして、シャナは先ほど笑っていた生徒たちを、その黒い瞳で見据える。

彼女の発言に憤っている者、自分のした行動を恥じている者がいる。自分のした愚かな行動を恥じれるのならまだ救いようがある。これから正していけばいいのだから。

「中には貴族らしい人間もいるけど、この教室の大半が貴様と似たような人間」

勿論、これからの言葉は恥じてもいなければ、尚も憤り、省みる事すらしない愚か者への警告だ。

「よくもそれで『貴族は魔法をもってしてその精神となす』と言えるわね」

「き、貴様！そこまで言うのなら」

「おやめなさい！！」

マリコル又がなにか言おうとしたとき、シュヴルーズがそれを止める。マリコル又はまだなにかいいたそうにしていたが、黙って席に着いた。

「ミス・マリコル又。確かに今のあなたは貴族らしくありません。彼女が言ったことを反省なさい」

マリコル又は一度、憎しみを込めてこちらを睨んだがそのまま静かになった。

シュヴルーズは目を閉じ、やれやれといった様子で手に持った小ぶりな杖を振った。

そこでようやくルイズとマリコンヌの二人は席につく。

「ミス・ヴァリエール。ミス・マリコンヌ。みつともない口論はおやめなさい」

ふつつと肩を竦めて生徒の二人に、それから

「それにミス・ヴァリエールの使い魔もそういうことは言ってはいけません」

そうシュヴルーズが冷や汗を浮かべて、凜と腕を組んで佇むシャナにそう言った。

「シャナ、お前、案外喋るんだな。驚いたぞ」

「ホント、ホント。案外、毒舌なんだ」

「ふん、あいつが気に入らなかつただけよ」

「そっか」「にひー」

一護と夏梨が歯を見せて笑っていた。

ルイズはしょぼんとうなだれていたが、同時にシヤナ達がちやんと自分のことを思っていたことが、少しだけ嬉しくて、それを隠せなかつた。

勿論、シヤナ自身にそんな意図は全く無い。

「お友達をゼロだのかぜっぴきだの呼んではいけません。わかりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ。僕のかぜっぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

くすくすと笑いが漏れる。だが突然笑いがビクツと止まった。

シュヴルーズから飛んできた赤い粘土が、笑った生徒の口に張り付いたからだ。

「では、授業を始めますよ」

静かになった教室の中、シュヴルーズが杖を振るうと机の上に、石ころがいくつか現れた。

「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュヴルーズです」

授業の準備が整った所で、自己紹介を始める。

「『土』系統の魔法を、これから一年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですね？ミス・ヴァリエール」

先生から質問されたルイズが弾かれたように飛び上がって、答える。

「は、はい！『土』の系統の基本魔法は『錬金』です。金属を作り出したり建物を建てるのに必要な石を切り出したり、農作物を収穫したりするなどの生活に関係した魔法が『土』です」

「あとは、『火』『水』『風』です！」

最後までルイズが言い切らないうちに、後ろの方で薔薇をくわえた金髪の少年が手を挙げて答える。

「はい。今は失われた系統魔法の『虚無』を含めて、全部で五つの系統があることは、皆さんも知つてのとおりです」

カンカンと黒板に白い五角形を描きながら説明を続ける。そして、その頂点に何か文字を書き込んでいく。しかし、才人達にはそれは読めなかった。

（文字、知らないと）

（うむ、その通りだな。これでは読み書きができません。しかし、何故我々は言葉が通じるのだ？）

シャナとアラストールが二人にしか聞こえない方法で相談する。

今の文字が読めない状況では、経済的・法律的な問題が噴出する街へと三人が向かったが、問題はないのだろうか。てっきり会話が通じるものだから、失念していた。

シャナが考えている間にも授業は進む。

「その五つの中で『土』は最も重要なポジションを占めていると私

は思います。それは、私が『土』系統だからという身びいきだからではありません」

シュヴルーズは重々しく咳をした。

「『土』系統の魔法は、万物の組成を司る重要な魔法であるのです。この魔法がなければ、重要な金属を作り出すことはできないし、加工することもできません大きな石を切り出して建物も建てることもできなければ、農作物の収穫も、うまくできなかったでしょう。このように、『土』系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのです」

才人は、なるほど、と感心した。どうやらこの世界では才人の科学技術に魔法が相当するらしい。

だが一護は話をまったく聞いていない。シャナと夏梨はじつと黒板を見つめている。

「今から皆さんには『土』系統の魔法の基本である、『錬金』を覚えてもらいます。一年生のときにできるようになった人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度、おさらいをします」

そう言ってシュヴルーズは、石ころに向かって手に持った小ぶりの杖を振った。

すると石ころが光始める。

そして光がおさまると、ただの石ころがピカピカ光る金属に変わっていた。

それには、才人は驚いていた。しかし、隣の三人は冷静に事の成り行きを見ていて、動いたりしていない。何というか、この人たちは感動とかに無縁らしい。勝手に才人はそんな事を思ったが、実際は、

(エドの方がすげえよな…)

(何せ、黄金をトン単位で作り出したのだ。石ころを黄金に変えるなど造作も無かるう)

(つまらない)

(こつちも同じ事が出来るんだ…)

などと昨日エドが見せた錬金術と比較していた。

「ゴゴ、ゴールドですか？ミセス・シュヴルーズ！」

キュルケが身を乗り出して尋ねた。女性がキラキラと輝くものに弱いのは異世界でも同じらしい。そして、胸が揺れ、男子共がいやらしい目で見えるのも共通なのだろう。

「違います。ただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのは『スクウェア』クラスのメイジだけです」

そこで少し、憂いに沈んだ表情で続けた。

「私はただの『トライアングル』ですから…」

シュヴルーズの言葉にキュルケは、「なぐんだ」と呟くと興味をなくしたように席についた。

そんな中、才人はルイズに小声で話しかける。

「ルイズ」

「なに」

「スクウェアとか、トライアングルってなに？」

「系統を足せる数のことよ。それでメイジのレベルが決まるのよ」

「はい？」

この世界の魔法の事が、まだ分かっていない才人にルイズは小さい声で説明した。

「『土』系統の魔法はそれ単体でも使えるの」

そこで一端、言葉を区切り説明を続ける。

「『火』の系統を足せば、さらに強力な呪文になるの
「なるほど」

「『火』『土』のように、二系統を足せるのが、『ライン』『メイジ』

ルイズの説明を聞きながら、シヤナはとりあえず和訳した感じ
点をつけ、線を引く。

その隣で、才人が頷く。

「シユヴルーズ先生みたいに、『土』『土』『火』、三つ足せるの
が『トライアングル』『メイジ』

「同じの二つ足してどうするの？」

「その系統がより強力になるわ」

「ふ〜ん。じゃあルイズはいくつ足せるの？」

才人からの質問に、ルイズは黙ってしまった。

「ミス・ヴァリエール！」

「は、はい！」

授業中の私語はやはり学校では厳禁らしい。

「授業中の私語は慎みなさい」
「すみません……」

とうとう先生に注意されてしまった。

「おしゃべりをする暇があるのなら、あなたにやってもらいましょ
う」

「わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてもらいなさい」
シュヴルーズが促すが、ルイズはオロオロとして立ち上がる
気配がない。

「どした？ルイズ」

才人が聞いた。

「ミス・ヴァリエール？どしたのですか？」

シュヴルーズが怪訝そうに再び呼びかけると、キュルケが困った
声で言った。

「先生」

「なんです？」

ちらりと窓の外へ目を遣りながら、困ったような調子で、

「やめといた方がいいと思いますけど……」

「……………？どうしてですか？」

「危険です」

キュルケは、きっぱりと、はつきりと良く通る声で言った。
それに教室の生徒たちのほとんどが頷く。

「危険？どうしてですか？」

先生はどんな意味でキュルケがこんな発言をして、周りが頷いているのか分からなかった。

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています」

にっこりと笑って、更にルイズを促す。

「ミス・ヴァリエール。気にしないでやってご覧なさい。失敗を恐れては、何もできませんよ？」

「ルイズ。やめて」

キュルケが青ざめた顔で言う。

だがルイズは立ち上がると、「やります」と緊張した声で言い、つかつかと教卓に歩いていった。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

隣に立ったシュヴルーズがにっこりとルイズに微笑んだ。

こくりと可愛らしく頷いて、手に持った杖を振り上げ呪文を唱える。

その姿は、とても愛らしく、その暴力的な性格を知っていても、才人はぐっときてしまう。

しかし、そんな愛らしい姿を見ようとせせず、教室中の生徒たちがみんな椅子の下に隠れた。

何となく、周りが避難を始めている状況を見て、夏梨は防御の準備を始める。

「縛道の八十一、『断空』！」

ルイズは目をつむり、短くルーンを唱えて、杖を振り下ろす。すると、石ころが七色に光輝いた。みんなが「おお！」と呟いた次の瞬間、石ころは爆発した。

カランカランと、石の破片が降り注ぐ。

爆風と爆発の衝撃が密閉された教室内で行き場をなくし、最も脆い場所、窓ガラスから逃げていった。轟音が響き、使い魔たちが暴れ回る。

爆風が治まった後、真つ黒焦げになった爆心地には、木片と化した教卓と伴に、気を失ったシュヴールズと煤けたルイズが立っていた。

「けほ、ちよつと失敗したみたいね」

何事も無かったかのように言うルイズに、周りから野次が飛ぶ。

「ちよつとじゃないだろ！窓ガラスが全部、無いじゃないか！」

「ああ、僕のスクイードが、食われた！」

「もう、ルイズは退学にしてくれよ！」

ここに到って、才人たちは何故、ルイズが「ゼロ」と呼ばれているか悟った。

（なるほど。魔法が使えない「ゼロ」って訳か…）

爆発を防いだ光の壁の後ろで、3人は思った。隣にいてギリギリ幅に入らなかつた才人はすっかり真っ黒になっていたが。

教室でルイズの魔法が爆発していた頃。

分かれて、街のほうへ行っていった三人は、漸くといった調子で辿り付いていた。

朝はルイズから食事を奪い、逃走することしか頭に無かったので、街の方向を聞きそびれていたのだ。確かに、強奪から逃走は計画性も何もない咄嗟の犯行だったから、そんなモノがある訳ないのだが、ここまで無計画に進めるのは三人とも初めてだった。

ネギの杖のスピードは最大時速150キロ。トリステインの魔法学院からトリステインの首都であるトリスタニアまでは馬で約2時間。馬の最大時速は40キロぐらいだから、その三分の一の時間でたどり着けた。ここを選んだのは単純にランドマークとなる大きな建物があつたからだが、まだその高い尖塔がある建物が、王宮だとは知らない。

街の入り口から少し離れた場所に留め、アレンは飛び降りて、早速アレンは箱舟のポイントをセットする。単純な作業なので、そんなに時間は掛からない。

「よっと」

「もう兄さんたら」

杖からエドが降りる。そして、そのまま両手を合わせ錬成の体勢を取る。途中でアルの批難する様な声が上がったが、エドは無視する。石畳でも何もない剥き出しの土色の大地に手が触れると、触れた所から徐々に金色に変わっていく。金属の王である黄金の錬成である。

三人の目の前には、山のように積みあがった金の延べ棒が並んでいた。

概算で2トンくらいはあるだろう。

「こんなもんかな」

「わー！凄いです！」「便利な術だな、オレッチも覚えてーぜ」

「これだけあれば、師匠の借金も…」

何度も見ているが、元々あった元素を別の元素へと変貌させる。ネギもアレンもそんな事ははじめて見た。ネギは知的好奇心から、アレンはその身の都合で見ているが。

本来、エドとアルの世界、アメストリスでは金の錬成は違法である。

錬金術はハルゲギニアの魔法とは違い、修練次第では誰にでも体得できる。つまりは黄金を錬成できる人間はエドだけではない。そんな人間が好き勝手に金を錬成したらどうなるか。

一番、分かりやすい答えは経済の混乱である。金銀はそれだけで、経済的な取引の効果を持つ。金の市場に流通する量が増えれば、金の価値は下がる。金の価値が下がれば、物価が上がる。十分な経済の混乱を齎すのだ。これが禁止されている理由である。

「よし、じゃ運ぶぞ」

「でも、こんな量…」

「大丈夫、心配すんなって」

そうして、今度は台車を作る。大きな車輪がいくつも付いた台車が地面から金を押し上げる。ちょうど良い感じに運びやすくなった。この世界のメイジは人口の1%もない。そして、金を錬成できる「スクウェア」メイジの数は更に少ない。全体の人口比からすれば、多分、0.1%も居れば良い方だろう。その最上位に存在するメイジの力持つとしても、指先ほどの小石を金に変えれば気を失ってしまう。

だからこそ、この世界では金を錬成しても経済が混乱しない。小石程の金が産出量から増えても、誰も気にしないし、気にならない。エドの力は、この世界の社会体制や経済体制を根本から揺り動かさねない。

その事に一番気が付いているのは、他ならぬこの3人だった。

「やっぱりこれだけあると壮観で、重いですね」

「ほら、運ぼうぜ」

ガラガラと耳障りな音を立てながら、三人が運んでいく。

その姿ははつきり言って人目を引く。幅5メートル程もない通りだから、金2トンを運んでいる姿は、異様とも言えるものである。アルとカモは目立たないように口を噤む。

大抵は遠巻きにひそひそと話し合っているだけだが、中には気になって話しかけてくる人も居る。

「よお、兄ちゃん達」

勿論、その人達は金に目が眩んだ命知らず、身の程知らずである。

「そいつはあ、何だ？」

「あ、これは金ですよ」

ネギがニコニコと答える。どこまでも正直に答えるネギを見て、二人は頭に手を当てて、呆れた。

明かに相手は盗賊といったような容貌だ。外見で差別するような趣味はないが、周りにゾロゾロと集まってきた男達も、同じような薄汚れた服を着て、腰にナイフなどを指しているのだ。これが盗賊や強盗でなければ他に何に見えるというのだろうか。

「ネギ、行くぞ」

エドが促し、アレンが続く。その後ろでネギが困惑している。その姿を見て、男の頭だろうか、スキンヘッドに一本傷の入った一際大きな男がドスの聞いた声で呼び止める。

「待ちな！」

「何だ、おい」

今度はエドがイラ付いた調子で振り向きもせず尋ねるふりをする。盗賊や強盗と遣り合ってきた経験のあるエドは既に次の言葉に予想が付いていた。

「その金置いていきな」

（やっぱりな…）

じゅるりと良く研がれているナイフを舐める。

余りに予想通りの答えにエドは呆れる。その遣り取りを見ていたアレンは、また深いため息を付いて、ネギは訳が分からないといった調子で慌てふためいている。

周りからは「おい、早く渡しちまえ」とか、「命が惜しくないのか…」と言った声が聞こえてくる。勿論、エドの力を使えば金など幾らでも錬成できる。

だが、エドのプライドは譲ることを許さなかった。

「黙って働け、おっさん」

「んな！」

額に青筋を浮かべるエドと盗賊団の首領。エドのあからさまな挑発に街道に行く人達は戦々恐々と行った調子で遠巻きに眺めている。

娯楽の少ない中世の街ではこういつた喧嘩が、市井の人の楽しみと
なっていた事も多い。だが、明かに頭数が違う。オマケに片方はモ
ヤシのような細い体の子供が三人だ。下手をすれば、殺されてしま
う。娯楽だからこそ、流石に人死には見たくないのだ。

だが、一番小さな赤毛の男の子は杖を背負っている。しかし、金
という一番良く見える欲望に、目が眩んだ盗賊たちは、全くネギの
存在に気が付いていなかった。本当ならメイジに喧嘩を売ったりは
絶対にしない。

どれ程、鍛え上げた屈強な剣士や弓兵でも、魔法には敵わないか
らだ。だからこそ、それがこの世界でメイジが増長する原因にもな
っているのだが。

「おい、俺が優しい顔をしてる間に大人しく渡しな、モヤシにチビ
」！

カチン、ブチッ

アレンとエドが口を鎖す。相変わらずネギは右へ左へあたふたし
ている。色々と冒険してきたとはいえ、こんな状況にはどうにも慣
れていないようである。

「へへ、ビビッて声も出ねーってか」

「誰が…」「誰が…」

「あ？」「ん？」「あーあ」

アルは手が在ったら呆れたかった。

エドは自分の身長をかなり気にしている。同世代と比べると低い
その背に、かなりのコンプレックスがあるのだ。それを指摘され
ら、どうなるか。

アレンも自分の薄い胸板やひよろつとした体格に不満を持って
いた。体格の悩みは年頃の男女にとって最も触れては行けないポイン

トなのだ。

「誰がミジンコ豆粒ドチビじゃー！」

「誰がモヤシカー！」

堪忍袋の緒が切れた二人が、周りを囲んできた屈強な男達を次々と討ち果たしていく。武器は使っていない。錬成術も使っていない。拳と蹴りだけで囲んでいた10人余りの意識を刈り取っていく。

後に残ったのは、白目を向いて気絶する盗賊たちと、その中で仁王立ちする金色と銀色の髪を持つ対照的な格好の二人の少年。

「うっし、終わり」

「終わりました」

「……………」 「強ええな、兄貴達……」

口が塞がらないのはネギもカモ周りの通行人も同じ。鬼神の如き強さで撃退した二人は、何も無かったかのように再び歩き出した。その後をネギは少しだけ大股で付いていった。

途中で目を付けた商店主らしい男性に、エドが詰め寄る。鬼神の如く暴れた金色の髪の少年がチンピラの如く目を光らせてやってくる。大の大人が泣きそうな顔になる。

「なあ、おっさん。銀行と、服屋、えと、あと飯屋どこ？」

「え、ぎ、銀行ですか……。あれですけど」

指を指した先には、インゴットを模した鉄の看板が掛けられた店が。どうやら、あそこが銀行らしい。呉服店はその隣に生地を模した看板が、飯屋は分かりやすくナイフとフォークの看板が掛かっていた。この世界は分かりやすく記号で店を表しているらしい。

ハルゲギニアは貴族と平民の世界。7人の元居た世界と違って、

平民は文盲、文字の読み書きができないのが当たり前だ。このような看板は分かりやすいようにと平民に向けた処置でもある。

カランカランとインゴット型の看板が掛かっていた店の戸を開ける。

中にはマントを羽織った貴族らしき男性と、その連れらしき女性が居た。音に反応して、戸のほうをちらりと見たが、直ぐに窓口の店員との会話に戻ってしまった。

「いらっしゃいませ」

受付嬢らしい女性が3人の格好をまじまじと見つめる。こう言った好奇の視線に曝されるのは、朝食の時にも感じていたし、今まで同じような調子だったので今更という感じでもある。格好としては杖を持つネギはメイジで、持っていない二人は平民と言う扱いだ。

「どんな御用で？」

若干、慇懃な感じで女性は尋ねる。

「コレ」

ここまで持ってきた金塊を指差して、商談に入る。勿論、店の中に居た人は啞然とした顔をしている。少年三人が自分たちでも見たことのないような量の金塊を運んできたのだ。呆然としないほうがおかしい。

「これを金に換えてくれ」

エドはふんと胸を張って依頼した。この時までは経済体制も単純に自分達と同じ紙幣と硬貨が流通しているのだと勝手に想像してい

た。勿論、管理通貨制度になれていたアレンやネギも同じである。だが、

「え、えっとこれをお預かりしますので、金貨に換えましようか？」
「「「は？」」「「え？」」

マヌケな声を出したのは3人。分からないといった調子なのは受付嬢のお姉さん。

3人は全く知らなかったのだが、この世界には紙幣が存在していないのだ。管理通貨どころか兌換紙幣もないのである。未だに金貨や銀貨を持ち歩いて、取引しているのである。紙幣と言うのは、こういった硬貨の「重さ」から開放される為に作られたのだが、どうもまだ流通していないようだ。

これには流石に参ってしまった。エドが妥協する。頭を掻いて、やれやれという調子で、エドが妥協する。

「じゃ、それで、金貨1000枚くらいで。まあ、持ちきれない分は、ここに預けるよ」

「お願いします」「お願いします」

「わ、分かりました…」

戸惑いながら、店の奥からスタッフを呼び、金塊を引取り店の奥へと引込む。

半刻程して皮袋と1枚の羊皮紙を持って戻ってきた。

「では、これがお金になります。エキュー金貨1000枚です」「どうも」

そうやって今度はアレンが前に進み、金貨を一枚一枚丁寧に、真剣にカウントする。十枚ずつ重ね、十の束を作る。金に取り付かれ

たよつな感じになっているが、エドは気にした風でもない。
それよりも、

「……………」

シヤナが気が付いたことに直面していた。そう、文字が読めないのである。こちらの3人も言葉が通じるものだから、文字も読めるモノだと勝手に思っていた。

「ネギ……」

慌てて後ろでワクワクと好奇心をフルで活用していたネギを呼ぶ。その只ならぬ様子に、ネギは幾分緊張して近寄った。

「どうしたんですか？」

「いや、文字が読めなくて……」

聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。年下であるネギに聞くのは、ちよつと躊躇いがあったが、ここで無駄な意地を張ってもいい事はない。エドもプライドは高いが、張り方くらいは知っていた。

「えつと……」

羊皮紙を渡されたネギも混乱する。勿論、肩に乗ってそれを見ていたカモも頭を悩ませた。そこに並んだのは文法も文字も知らない記号の羅列。単語が一つも分からないのである。見たことすらない。

「…僕も読めません」

「マジで？」 「はい……」

「…しかたねえ。すみません、これ読み上げてもらえますか？あと何

も書いてない紙も一枚」

受付嬢は怪訝そうな顔をしたが、折角の上客だ。見逃す手はない
と思い、素直に要求に従った。お姉さんが読む文字をネギが書き取
つていく。さらりさらりと、ネイティブらしい綺麗なアルファベッ
トが綴られる。

「はい、大丈夫です。エドワードさん。その空欄に名前をお願い
します」

「ん、了解。あ、俺の名前はエドワード・エルリックです」

そう言つと自分の名前をハルゲギニア風に変えた文字が書き込ま
れた。これで自分の名前を意味するらしい。いつもとは違う見慣れ
たはずの名前が、異世界に来たことをまざまざと教えてくれた。

「じゃ、服だな。生地買つぞ」

「はい」「ええ」

それだけ言つと三人は銀行を後にした。最後の最後まで先に入っ
ていた貴族の夫婦と商談をしていた行員は開いた口が塞がらなかつ
た。

「結構、美味しいな」

生地を買い終えた三人は飯屋に入っていた。適当に選んだ店には
昼食時には少し早いのか、あんまり人が入っていない。カップでお
茶を楽しみながら、軽食を頂く人ばかりだ。

早速注文しようとしたが、ここでも文字が読めないことが邪魔をする。誰か適当な人を見つけて教授してもらわないと、生活が難しい。誰かの奴隷や召使で生きていくなら、文字の読み書きは不要だが、生憎とそんな都合は3人にも、学院に残った3人にも無かった。だが、注文は面倒だったので、アレンが、

「このページに乗ってる料理全部」

と注文してしまった。朝もかなり食べていたが、昼もやっぱり大量に食べるらしい。それなのに体は、しゅっとしていいる。どんな体をしているのか、単純にエドは興味が出てきた。

「どうしたの、兄さん？」

三人の座った机には騎士を模したデフォルメされた人形が二足歩行で立っていた。その騎士のぬいぐるみが立ったり喋ったりしているのだが、周りは気にしていない。

これは先に寄った服屋で買った生地を利用して作ったエド特製の人形である。この中にはコンを参考にしてアルの魂が入っている。喋る音声も癖もアルフォンス・エルリックのそれそのものである。総身を鎧で固めるのは目立つと思いい、自分の機械鎧に移したが、それも壊れたときのリスクが大きい。

エドの機械鎧が壊れたときに備えて分離させたのだ。勿論、目立たずに動くと言う理由のほうが大きなウエイトを占めているが。

「いや、アレンのあの細い体にどんな圧縮率で入っているのかと思つて…」

「そうだね。何で入るんだろう」

「びっくりです…」「ま、エドの兄貴も、アルの兄貴も気にせず食べようぜ」「

カチャカチャと食器の擦れ合う音と共に食事を再開する。モグモグと口を動かすアレンを後目にエドとネギ、カモとアルは先刻の遣り取りを纏めている。

そんな時、

「あ、ごめんなさい…。少し席外します」

「どうしたんです、ネギ君」

食事の最中に席を立とうとしたネギを、デザートらしいアイスをほづばっていたアレンが引きとめた。

「・・・トイレです」

「あ、ごめん。行ってらっしゃい」

そう言うと再び、アレンは食事に戻る。ネギは荷物を置いてトイレに行った。

「ごちそうさまでした」

「ふう、美味かった」「僕は食べられないけどね」

数分ほどして食べ終わる。いざ、会計しようと思ったが、ネギがまだ帰ってきていない。随分と長いと思う。

「まさか、迷子になったんじゃない？」

「いやいや、それはねーだろ。ほら、あそこの席で…」

カモがゆっくりと視線を動かした先へ、三人も視線を沿わせる。

その先にはパンツ一丁になっていたネギが泣きそうな顔で、カードゲームをしていた。

「……………」

「何やってんの…?」

僅か10歳のあられもない姿に同情と、呆れが緋交ぜになった視線を向ける。ネギの向かい側には瓶底眼鏡を掛け、タバコを銜えた男と、その取り巻きらしい二人の男がカードを握っていた。

その傍にはネギが着ていた服が綺麗に畳んで置いてある。どうも賭けをして、取られてしまったらしい。ネギみたいな真面目な性格の少年が進んでやるとは思えない。美味い具合に騙されたのだろう。

「いや、その少年とね、カードで遊んでただけど、この子弱くてさ」

ヘラヘラと笑っている眼鏡男にアレンはどこかデジャブを感じた。でも、明かに「彼」ではない。もし彼なら自分を見つけた瞬間に、話しかけてくるはずだ。

「ふう、仕方ないですね…」

ネギを押しつけ、アレンが椅子に座る。ずいっと持っていた皮袋を差し出し、ベットする。

皮袋は6枚用意してもらい、それを6等分した。その内の一つ、アレンの財布である。一護達の財布は服の生地を買ったために、少し他よりも軽い。

「これ、金貨が200枚入っています。これで彼の服を賭けてもらいますよ」

ニコリと天使の微笑みで勝負を申し込む。

これに男達は「カモが来た」と目で打ち合わせる。3対1の上にイカサマを仕掛けていけば、まず自分達が負けることは無い。この金貨200枚も取れると。

「ルールは？」

慎重にアレンが確認を取る。相手の土俵で勝負しないのは、賭け事の基本中の基本だ。

男達の説明を聞いてみると殆ど、ポーカーと変わらなかった。男達はニヤニヤしている。金貨200枚、平民がしばらく生活に困らないだけの金額だ。十分である。今日はこれを取って終わろう。そう思っていた。

だが、

「コール」

ニコニコとアレンが自分の手札を公開する。その手役に男達は啞然とする。吸い込むことを忘れたタバコの煙が自然に流れ、灰がポトリと落ちる。

「また、僕の勝ちですね」

「だああ、ちくしょー！」

男達の姿は既に下着だけ。最初に2勝したと思ったら、そこからこの白髪頭の少年に全敗。その結果が三人揃ってパンツ一丁と言う情けない姿だ。勝ち続けていることに服を取り返して貰ったネギは、興味深そうな顔で覗き込んでいる。

その様子を怪訝そうに見ていたカモが、こそこそと尋ねる。

「アレンの兄貴、やたら強くねーか。何でそんな…」

「だって、イカサマしてますもん」

カモの疑問に一片の悔いも、迷いも無く小さな声で答える。

「本気かよ！ばれたらどうなるか…」

「大丈夫ですよ。先に仕掛けてきたのはあっちですから」

「いや、だからって…」

カモの心配に、アレンは続ける。

「修行時代に師匠の借金を返すために、必死で業を磨きましたから…」

ちよつと暗く、それよりも黒い顔をして、

「ちよつとやそつとじゃバレませんよ」

ニタアと嫌な笑顔を浮かべる。その笑顔に気が付いているのは、後ろでアレンから発せられる嫌な空気を感じ取っていたエドとアルだけだった。

「博打なんて勝ってナンボ！さあ、搾り取ってやりますよ！フハハハハ！」

「兄貴…、黒いぜ・・・」

そうしている間に会計を終わらせる。

アレンの食べた量がかなり響いたが、十分すぎるくらいの余りが出来た。

店を出ようとした時に、優しくアレンは服を返した。正確には服と最低限のお金を返した。筆り取るが、結局、博打では冷酷になり

きれないのがアレンの長所であり、欠点でもあった。

「ま、服無いと外歩けないでしょう？それにココの会計も必要です」

「ふ、すまねえな…。兄ちゃん」

そういつて瓶底眼鏡の男は服を着なおし、新しいタバコを銜えた。ふうつと白い煙を吐いて、一息つく。

「せめて、名前をおしえてくれねえか？」

「僕ですか、アレンです」

「そうか、覚えておくぜ。俺はアーネストだ」

「はい。では、また」

さつきとは違い真っ白な笑顔を三人の男に向けて、アレンは店を後にした。

先に出て、店の先に待っていた二人と合流する。

帰りは杖で飛ぶ必要はない。道から少し外れた所にセットしておいた箱舟を使えば、あつと言う間に魔法学院まで帰ってこれる。ネギは飛べる機会が無くなって少し残念そうだったが。

Magic World days (後書き)

3人のハルゲギニアの街の探訪でした。

よくよく読み返してみると、金貨や銀貨は出てきても、紙幣というのがハルゲギニアには出てきていないんですよ。

本来は紙幣と言うのは金や銀を持つよりも、紙を持つほうが軽くて良いという理由なのですが、羊皮紙を使っていて、製紙技術のないハルゲギニアでは無理そうですね。こちらの世界では兌換紙幣というのも、製紙というのも中国で生まれたものです。製紙技術は後漢時代に、兌換紙幣は銀鉞山を大量に保有していたモンゴル帝国で、紙幣と言うのが生まれたのが12世紀ですから、貴金属硬貨で流通をやっているハルゲギニアの経済システムというのは、12世紀よりも下という事でしょうか。欧州諸国にはモンゴルの西征と伴に伝播していったから。若しかしたら、エルフがイスラーム諸国だとすると、その向こうの東方には中華・日系の人間が居るのかも知れません。

中世から近代に掛けて識字率が殆ど100%に近かった日本では発達しなかったのですが、40%程度しかなかったロンドンやパリでは、文字や絵で店や中身を伝えると言うことをしていました。これが鉄細工の発達を促しました。同時に文字が読めない、書けないという事がどれだけ怖ろしいのかそれが分かったと思います。会話だけで人間は繋がっていない。書面に書かれた事も伝える文章なのです。

今回はシエスタの登場とギーシュとの戦闘ですね。

才人は未だしも他の3人では相手にすら、なりそうにないのですが。

CRASH

「腹、減った…」

トリスタニアの飯屋でアレンがイカサマで金を巻き上げていた頃。
才人は腹を減らしていた。

「ちくしょー、ルイズの奴・・・、俺の飯、食わなくても良いだろ・・・」

朝と同じように飯を抜かれた一護達三人は再び、ルイズ達の昼食を強奪。そして、そのまま逃走。生きることには食えることである彼らにとつて、至極当然のように振る舞っている彼らを見て、ルイズはまた腹を立てた。純銀のプレートの上に乗った豪華な奪い返そうと三人に襲い掛かるが、軽業師のように必殺の蹴りは避けられていた。

オマケに食べるモノが無くなった彼女は、才人の粗末な食事を強奪。

そのときの台詞が「使い魔のものは、主人のものよ」だ。
たった一人で、ルイズの爆発させた教室の後片付けをやらされた彼に、食事抜きは辛い。それでなくても食べ盛りである彼にとつて、朝に食べた欠片程度の肉のスープと堅いパン二枚ではカロリーが足りなさ過ぎる。既に限界だった。

「腹、減った…」

とうとう才人は腹を抱えて、壁に手をついた。

「どうなさいました？」

鈴の鳴るような声に振り向くと、大きい銀のトレイを持ち、メイドの格好をした素朴な感じの少女が心配そうに才人を見つめている。カチューシャがとても似合っていて、纏めた黒髪とそばかすがマツチしていた。だが、今現在、絶賛空腹に困っている才人に、そんなことを考えている余裕などなかった。

「いや、食事抜かれて……………」

「大丈夫ですか？」

「いや、大丈夫じゃないかな。お腹と背中がくっ付きそうだ」

「まあ大変！わかりました。どうぞこちらにいらしてくださいな」

彼女は才人の手を取って連れて歩き出した。

才人が連れていかれたのは、食堂の裏にある厨房だった。

大きな鍋には火が入られ、オーブンがいくつも並んでいて、コックたちが汗を流しながら、忙しそうに料理を作っている。

「ちょっと待つててくださいね」

才人を厨房の片隅に置かれた椅子に座らせると、彼女は小走りですぐ厨房の奥に消えた。

そして、お皿を抱えて戻ってきた。皿の中には、温かいシチューが入っていた。

「貴族の方々にお出しする料理の余りモノで作ったシチューですよ。よかつたら食べてください」

「ほんとか！！！？」

シエスタの言葉に才人は目を輝かせた。

「ええ。賄い食ですけど………」
「助かった！ほんとにありがとう！」

そう言っただけでガツガツとシチューをおいしいおいしいと食い始めた。あの一度しか食べられなかったとは言え、犬のエサのスープとは天と地の差で断然こちらのシチューがおいしい。ハマるかも。

空腹に困っていた才人はあつと言う間に平らげてしまった。しかし、これだけではまだ足りない。

「おいしい！これ、おかわりあるかな？」

「ふふ、そんな急がなくても大丈夫ですよ。はい。まあ、お代わりもありますから。ごゆっくり」

才人が夢中になって周りの事を忘れてまでシチューをバクバクと食べた。

そばで見ていたメイドの少女も才人の食いつぶりに驚いていたが、ニコニコしながらそんな才人の様子を見つめていた。

そこで、彼女が口を開いた。

「あなた、お名前は？」

「才人。平賀才人」

「変わったお名前ですね……」

単純にこの世界では発音できない音だったので、不思議だと言う顔を。小さく頭を振って、もう一度、笑顔に戻って、

「じゃあ才人さん。私はシエスタっていいいます」

「ああ、よろしく！」

「あれ？才人さん、あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い

魔になったって……」

シエスタは左手に描かれたルーンに気づいたらしい。

「知ってるの？」

「ええ。なんでも、召喚の魔法で7人も平民を呼んでしまったって」

彼女は純粹に興味津津というような顔で聞いてくる。
どの世界でも女性は噂が好きらしい。

「噂になってますよ。あなたもそうなんでしょう？」

シエスタはニツコリと笑った。

この世界に来て初めてみた屈託のない笑顔で。

「シエスタも魔法が使えるの？」

「いえ、私は違います。あなたと同じ平民です」

首を左右に振る。

「貴族の方々をお世話するために、ここでご奉公させていただいて
るんです」

「ふん」

才人は再びシチューを頼張り始めた。

「ご飯、貰えなかったんですか？」

「ああ、他の使い魔にルイズが飯を取られてさ、それからお冠」

「やれやれといった調子で首を才人は竦める。」

「昨日の犬のエサしか食べてないんだ」

「その使い魔さんも凄いですね。貴族の食事を取ってしまうなんて」
「ホントだよ、そのせいで俺の飯がなくなっただから!」

才人は積み重なった空の皿の上に、もう一枚乱暴に皿を重ねた。

あのオレンジ頭の青年のニヤ付いた顔を思い出すと、イラっとしてきた。

「普段じゃ絶対に食えない料理だった!おいしかった!ありがとう!」

「よかった。お腹が空いたら、いつでも来てくださいね」

尚も屈託無くシエスタは笑う。

「私たちが食べているものでよかったら、お出しますから」

その言葉に才人は再び目を輝かせる。

このままでは確実にカロリー不足で死んでしまう。ちゃんとした食事が出てくる、食べられる場所があるというのは、この上なく大事なことだ。

「ほんと!?!」

「ええ。いいですよ」

「やった!!!」

ここは一護達には教えられない。教えてしまえば、ルイズに知られてしまう。あの犬のエサで使い魔の食事は十分と、才人からすれば、人でなしのような、だが、本人にとっては至極当然の考えで動いている彼女が知れば、何があるか分からない。尤も、そんな考え

で動いているから一護もアレンも反発しているのだが。

「お礼として、私に何か手伝わせてくれないか」

恩を受けたら、返すのが道理。ここで彼女の事を無視できるほどに、才人は人間は腐っていなかった。彼の申し出にシエスタも素直にお願いする。

「なら、デザートを運ぶのを手伝ってくださいな」

シエスタは微笑んで言った。

「任せてくれ」

才人は胸を張って言った。

大きな銀のトレイに、デザートのカッキーが並んでいる。

食堂の端でのんびりと食後の紅茶を飲む一護達があちよこちよこと走りながらケーキを配るメイド達を見るでもなく見ていた。ちなみに一護は珈琲派だ。だが、この世界にはコーヒー豆がなく、珈琲が淹れられない。淹れられたとしても、味覚が子供なシャナは飲めないのだが。

傍には体力を使い果たしてしまつたらしい、ルイズが倒れ付している。結局、食事は全て三人の胃袋へと消え去ってしまった。

「メイドね。俺、始めて見たわ」

「結構、可愛いよね」

それを横で聞いたシャナが割って入る。

「ヴィルヘルミナに比べたら、あの程度普通」

「メイドの事、普通ってお前、案外、いい所のお嬢ちゃんなの？」

ヴィルヘルミナ、詳しいことは知らないが彼女のメイドらしい。

あくまでも一般家庭にいた一護と夏梨にとつてメイドなどという存在は、精々童話か作り物の中にしかない。現物を見るのは初めてだ。それを普通などと言ってしまうのだから、一護の疑問は当然と言えた。

「いや、そういう訳ではない。ただ、この子の育ての親というだけだ」

重く遠雷のような声が解説を始める。昨日から身の上話などを聞いていたが、この魔神は随分と身内に甘い性格をしているらしい。シヤナの事もだが、知り合いの話をするときはやたらと饒舌になるのだ。

「この子を育てるときに最も適していた服が、あの服であったと言っただけの事。他意はない」

「いや、他意ありまくりだろ。何、そのヴィル…さんはそういう趣味？」

最後まで名前を覚えきれていない一護が最後の方を濁しながら聞く。

「ヴィルヘルミナ・カルメル。『万条の仕手』と呼ばれる戦記無双の使い手だ」

「うわ、逢ってみたい！」

メイドに反応したのか、アラストールの解説に反応したのか、夏

梨が目を輝かせる。

「にしても…」

そこで一護はメイドに混じって、ケーキを配っている青いパーカの良く目立つ少年に目を留めた。

そんなに息を吸わずに、思いつき呼び寄せる。

「おい、才人！」

「……………」

まあ、無視される。それも当然と考えていたので、自分でこつちまで連れて来た。

「え、え？」

テーブルの中ごろに居たのに、ちょっと瞬きをしたら、壁の側にやってきていた。突然の出来事に才人は頭が回っていない。トレイも落としていないし、ケーキの数も減っていない。

「何やってんだ、お前？」

「…いや、シエスタにご飯食わせてもらったんで…」

怪訝そうな顔で才人に尋ねるが、どうにも返事に要領を得ない。

「シエスタって誰？」

倒れ付していたルイズが顔だけ上げて尋ねる。

埃塗れて、汗でべとべとだが、どの道洗うのは才人の役目になるのだろう。

「シエスタはメイドさ。呼んで来るよ」

と言つて才人はシエスタを呼びに行つた。才人がいなくなり、一護達は何の気なく辺りを見回した。

夏梨は二年生のテールブルの中ごろに金色の巻き毛に、フリルのついたシャツを着た、いかにもキザなメイジがいた。薔薇をシャツのポケットに挿している。

(うわ、あんなん遊子の読む少女漫画だけかと思つた)

まさにファンタジー。あんな幻想の中にしかないような人間が本当にいるなんて思つていなかった。でも、乙女思考丸出しの姉でもあんな奴は好きにならないだろう。とういうか、好きになったら兄と自分がタコ殴りにしかねない。その自信があつた。

「なあ、ギーシュ！お前、今は誰とつきあっているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

取り巻きの二人がニヤニヤと笑つてそのメイジに尋ねる。

どうやらあの、キザなメイジはギーシュというらしい。

彼はすつと唇の前に指を立てた。

「つきあう？僕にそのような特定の女性はいないのだ」

そこで言葉を切つて、額に手を当てる。気障な仕草に、気障な台詞。シヤナはまるで天然記念物でも見たかのように目を爛々と輝かせているが、一護と夏梨は正直、イラつときていた。理由はない。

「薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

夏梨の持っていたカップの取っ手ががベキッ！と音を立て、物凄
い力で折れた。

カップ部分が落っこちて派手な音を立てて粉と化す。

「一兄。ちよつとあの人、殴つてきていい？」

口をひくつかせながら刀を握りしめた夏梨を一護は慌てて止める。

「止せ、夏梨」

すつと夏梨の刀の柄に手を当てて制する。

むすつとむくれたが、学校の中で人死には不味い。素直に手を離
し、従う。

そのとき、ギーシュとかいうメイジのポケットから何かが落ちた。
これでも3人とも目はいい。オマケにそれに才人が、目を留めた。
ちよつと才人と連れているメイドの女の子、彼女がシエスタだろ
うと、適当に当たりを付けて、成り行きを見ていた。

才人は最初、ガラスでできた小瓶を不思議そうに見ていた。中に
紫色の液体が揺れている。こんな場所にある位だから、毒ではない
だろう。

それを才人が拾い上げ、本人が出来る範囲で丁寧

「おい、落としたぞ」

と言ってテーブルの上に置いた。

金髪の気障な少年は、ちらりと才人の方を見たが、それだけだっ
た。

（む、丁寧さが足りなかったか？）

この2日間で随分と貴族と言うものに慣れてきた才人は、今度はもっと丁寧に、

「落とされましたよ、貴族様」

自分でも吐き気がするほど丁寧な口調で喋った才人。

しかし、ギーシュは苦々しげに、才人を見つめると、その小瓶を押しやった。

その行動に才人は首を傾げる。

「これは僕のじゃない。君は何を言っているんだね？」

「どうみても、貴方から落ちましたよ」

その小瓶の出所に気づいたギーシュの友人たちが、大声で騒ぎ始めた。

「おお？その小瓶は、もしや、モンモランシーの香水じゃないの？」

「そつだ！その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぞ！」

「そいつが、ギーシュ、お前のポケットから落ちてきたってことは・・・」

友人達が声を揃えて言う。

「つまりお前は今、モンモランシーとつきあっている。そつだな？」

友人三人の圧力に押されながらも、

「違う。いいかい？彼女の名誉のために言っておくが……………」

ギーシュが何か言いかけた。そのとき、後ろのテーブルに座っていた茶色のマントの少女が立ち上がり、ギーシュの席に向かって、コツコツ歩いてきた。少し、気分が沈んだような感じの歩き方だ。栗色の髪をした、なかなかの美少女だった。茶色のマントを付けているから、一年生だろうか。

「ギーシュさま……………」

そして、ボロボロと泣き始める。

「やはり、ミス・モンモランシーと……………」

「彼らは誤解しているんだ。ケティ。いいかい？僕の心の中に住んでいるのは、君だけ……………」

バチンッ！

ギーシュが言い終わるときに、ケティと呼ばれた少女は、思いつきりギーシュの頬をひっぱたいた。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！さようなら！」

そう言って走り去っていくケティ。その後ろ姿を見つめながらギーシュは、頬をさすった。

すると、遠くの席から一人の見事な巻き毛の女の子が立ち上がった。

かつかつと歩き方や表情に怒りが含まれているようである。そしてギーシュの席までやってきた。

「モンモランシー。誤解だ」

ギーシュがあたふたと手を振って弁明する。浮気がばれた時の男のみつともなさと言ったら半端ない。シャナは少し、自分が大好きな男の子と、その彼を取り合っている栗毛の女の子の顔を思い出していた。ギーシュとは全く性格も、外見も違うが、二人の女の子の間で揺れているという所に引っ掛かったらしい。

体中から怒りのオーラを出している。一番驚いたのは一護だ。

「彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただ……」

……

「やっぱり、あの一年生に、手を出していたのね？」

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー」

ギーシュが幾ら話そうとしても、金の巻き毛の少女、モンモランシーといったか、彼女は一言たりとも耳に入れていない。多分、浮気がバレた時の妻や彼女というのはああいうのが正しい反応だろう。

（なるほど、女ってのはやっぱり怖えな……）

「咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りで歪ませないでくれよ」

一護がぼんやりとそんな事を考えている間にも、必死の抵抗は続いている。しかし、それは最早圧倒的な戦力差で挑む戦争に等しい。勿論、劣勢なのはギーシュの方。

勝負は見えていた。

「僕まで悲しくなるじゃないか！」

（そのバラのような顔を歪ませたのは誰よ）

シヤナはムカムカと苛立っていた。

モンモランシーは、テーブルに置かれた高そうなワインの瓶を掴むと、中身をどぼどぼとギーシュの頭の上からかけた。ワインの良い芳醇な香りが辺りに漂う。

そして、モンモランシーはワインをかけ終わると、「うそつき！」と怒鳴って走り去っていった。

辺り一带にシーンとした空気が流れる。今の速すぎる状況の推移に誰も頭が付いていっていないのだ。ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭く。

そして、やれやれといった感じの芝居がかった仕草でこう言った。

「あのレディたちは薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

この台詞には一護も呆れてしまった。夏梨はとっくの昔に諦めている。シヤナの怒りのビートは既に臨界点を記録しそうな位に膨れ上がっていた。

「一護、あいつ、殴っていい？」

「…お前もかい。だから、ダメだったの」

騒動は済んだとばかりに判断した才人は一護のもとへ、シエスタと一緒に再び歩き出す。

「待ちたまえ」

そこでギーシュが才人を呼びとめた。

「なんだよ…？」

モンモランシーが掛けたワインの赤い液体をハンカチで拭きなが

らギーシュが。

「君が軽率に、香水の瓶なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「何言つてんだ。悪いのは、二股してるお前だろ」

才人の正論にギーシュの友人たちが、どつと笑った。

「そのとおりだギーシュ！お前が悪い！」

「バレる二股なんか、最初から無理だろ」

ギーシュの顔に、さつと赤みが差した。

そこで、一護と夏梨とシヤナがそれぞれの感情と伴に来た。

才人が気づいたような声をあげる。

「あ、一護さん」

「おい、何事だよ？」

一護は今の状況を見て才人に尋ねる。尤も一部始終を見ていたので、随分と白々しい言い方だが、面倒事に首を突っ込みたくないの
で、今まさに来ましたという空気を醸し出す。

「いいかい？メイド君。僕は君が香水の瓶をテーブルに置いたとき、
知らないフリをしたじゃないか」

二人の女の子から振られたショックから立ち直つたらしいギーシ
ユがやれやれと言つた調子で首を竦める。

「話を合わせるぐらいの機転があつてもいいだろっ？」

反論とばかりに才人がギーシュに言う。

「どつちにしろ、二股なんかそのうちバレるっつの」

「ふん……。ああ、君は………」

ギーシュは、才人たちを見ると、バカにしたように鼻を鳴らした。

「確か、君たちは、あのゼロのルイズが呼び出した平民だったな」

それなら納得と言った様子で、言葉を続ける。

「平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

その言葉に四人はカチンときた。シャナが出来るだけ無表情を保ちながら言った。胸に掛かっているアラストールと一番傍に居る一護は気が付いていたが、今にも噴火しそうな火山のような調子であるのは間違いない。それに余計な刺激を加えたらどんな事になるか、昨日のフレームヘイズの力を見ていた一護はどうやって止め様か考えていた。

「お前みたいなのが、貴族なんて度が知れるわね」

今度はギーシュがカチンと来た。見たことのない服だが、マントを付けていないし、杖も持っていない。ならば相手は平民である。多少、灸を据えてやるのも良いかもしれない。

「君はどうやら貴族に対する礼儀を知らないようだな。ならば決闘だ！」

ギーシュはそう言って立ち上がった。

そして杖を構える。

「上等だ！」

才人は言い放った。ギーシュは、くるりと体を翻して言う。

「ヴェストリの広場で待っている。用が終わったら、来たまえ」

ギーシュの友人たちが、わくわくした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追った。

シエスタが、ぶるぶる震えながら、才人達を見つめている。

「あ、あなたたち、殺されちゃう……………」

「ん？どうして？」

夏梨が尋ねた。

「貴族を本気で怒らせたら……………」

そう言っただけでシエスタは、だーと走って逃げてしまった。

「なんなんだよ」

と才人は呟いた。見た感じ、後ろに控えている一護と違って筋骨隆々といった感じではない。刀どころかフォークとナイフを持ったら、それで終わりという位に細い体だ。正直、アレンよりも細い体をしている。

(大丈夫だろ、あんな奴に負けるわけが無い)

そこで、後ろからルイズが駆け寄ってきた。

「あんたたち！何してんのよ！見てたわよ！」

「あ、居たんだ。えーと、ルブラン」

まだ一護は名前を間違えている。勿論、これは彼の精一杯の嫌味を込めた嫌がらせだ。

「一兄、いい加減名前覚えないと。ルイズ・ヴァリエールだよ」
「うん」

中の名前をすっぱり取った名前で呼ぶ夏梨と同意するシャナ。

「分かってるよ、嫌がらせに決まってるんだろ」

しれっと悪びれもせず言う一護。

その態度にやっぱルイズは怒りたかったが、今はそんな事に怒っている場合ではない。

「なに勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

「だって、あいつが、あんまりにもムカつくから……………」

才人はバツが悪そうに言った。

彼の言葉は本音である。いきなり見ず知らずの異世界に連れてこられて、使い魔になれと言われた。オマケに扱いは教科書で見たような奴隷以下の扱い。食事も碌なモノを出してもらっていないし、寝床は冷たく堅い石の上。これに納得できるほど、才人の度量は大きくなかった。凡そ、一般人と同じだけの感性を持つ、彼にとってそれは当然だった。

ルイズはため息をついて、やれやれと肩をすくめた。

「謝っちゃいなさいよ」

「は？なんで？」

「怪我したくなかったら、謝ってきなさい。今なら許してくれるかもしれないわ」

ルイズの言葉は才人には訳が分からなかった。

もう少し、彼が賢ければ、賢くなくても彼の世界の中世欧州の知識があれば、何故シエスタが逃げ去ったのか。そういった理由が分かったのだろうが、生憎とどちらも彼には欠けていた。

逆に、そういった知識が豊富な一護とシヤナは気が付いていた。

尤も気が付いたところで、彼らの力は貴族とは比べ物にならない。精一杯の悪意を持ってすれば、この世界を滅ぼすことなど造作もないだろう。そんな気は微塵も無いのでしないが。

「まず、誰からやる？」

ルイズの言葉を見捨て、才人が後ろにいた一護達に尋ねる。

「俺は断わる」

きつぱりと一護は断わった。

大きな刀を背負って、筋骨隆々としたまさに武人と言う格好だが、その明かに情けない姿に、才人は腑抜けだと思っただが、口には出さない。

「二人と一緒に頑張ってくれ。シヤナも夏梨も随分とアイツに怒っているみたいだからな」

「はい」「いいわよ」

「ちょっと聞いてんの？」

とりあえず、ルイズの言葉は無視。

「ヴェストリの広場ってどこだ？」

近くにいたメイドに聞き、才人は歩き出した。

突然、異世界に連れてこられて使い魔にされた。その憂さ晴らしも彼の頭にはあった。

そのあとにシヤナと夏梨が続く。

彼女達二人の頭には、二股を掛けたギーシュ♀女の敵という思考が回っていた。

「ああもう！ほんとに！使い魔のくせに勝手なことばかりするんだから！」

ルイズは、才人と夏梨、シヤナの後を追いかけた。

C R A S H (後書き)

中世というのは領主制で非常に貴族というのが権力を持っています。貴族と商人は貴族と商人の為にしか動かない。農民が飢えようが、死のうがどうでも良いという態度でした。貴族優勢で逆らえば、殺される。どんなに悪法を行っても、読み書きが出来なくては理解できない。平民の貴族に対する畏怖というのはそれだけ凄まじいものでした。シエスタの態度も至極当然と言えます。そんな貴族体制を革命と言う形で一番最初に打倒したのが、イギリスの清教徒革命でした。この革命軍の総司令官がイギリス国教司教だったオリヴァー・クロムウェルです。尤も彼も専制政治に近い事をして、結局王政の復活を許し、その王政もまた、名誉革命で打破されるのですが、革命者が革命によって終われるというのは何とも皮肉な話です。

シャナの男性に対する考えはやっぱり千草に由来するものだと思います。どこまでも一途に好きになった人を追いかける。これからもシャナが一護を始め、4人に心を動かされることは無いと思います。懐きはしますが、アラストールやシロ、ヴィルヘルミナに対する態度と同じような調子です。その為、正直ネギとの仮契約もしないでおこうかと思っています。

さて、ギーシュとの戦闘ですか。

彼、死んじゃうんじやないだろうか…

トリスティン魔法学院は魔法を教えるとはいえ、学校である。

つまりは資料室、どこの学校にでもある図書館と言つものが存在していた。場所は学院本塔の2階から5階までを貫いて造られた、吹き抜けのような構造をしている。

その光も届かない図書館の奥の奥、教員しか閲覧を許されていない、「フェニアのライブラリー」で今年度の2年生の「使い魔召喚儀式」の担当であった、ジャン・コルベールはあることを調べていた。

今年でトリスティン魔法学院に奉職して、実に30年近く。

「この本にも無い…」

色々と苦労があつたのか、頭と深く刻まれた顔の彫に、その苦労の跡が窺える。それなりに実力を持つメイジではあるが、確りした後ろ盾のない下級も下級の貴族である彼には、この国の最上級とも言える貴族の子弟が集まる事はストレスの原因にもなっていた。

本来であれば、教育と政治は切り離すべきなのであるが、そういったことが上手くいっていないというのが、この国の現状だった。

「この本にも無いか…」

ふよふよと「レベテーション」で宙に浮いて、目的の一節があるだろう本を探す。

手元を取った本には、また無かった。力なく閉じ、また新たな本を引っ張り出す。

そんな彼が目下、一番興味があるのは、ミス・ヴェリエールの使い魔の青年達、そして刻まれたルーンである。コルベールは彼らが

どうしても気になり書物を読み漁っているのだ。

「さて、この本はあるかな…」

使い魔に刻まれるルーンについては、一定の規則と云うか、法則が存在する。

魔法使いの属性による幻獣が生まれ、そして魔法使いの徳性によるルーンが刻まれる。つまり、メイジの属性が「火」なら「火」に属する幻獣が召喚される。「微熱」のキュルケがサラマンダーを召喚したのは、この法則に則っている。刻まれたルーンも、彼女の徳性である「愛（caritas）」であった。

だが、ルイズの召喚した使い魔達は4属性のどれにも当てはまらない。

そして、本来なら彼女の徳性が刻まれるはずのルーンも7つの徳性のどれでもないものだった。

イレギュラー中のイレギュラー。周りの生徒達は平民と笑っていたが、何事にも付きまとう例外というのは、得てして問題を引き起こす。そういつた事を理解している、彼はそういつた意味ではメイジとしては珍しい学者と言われる存在だったのであった。

そんな彼は漸く、目的の本を見つけ出した。

「これは…」

ある書物に目を通すとコルベールの顔色が変わった。

彼はそのまま本を抱えたまま図書館から出ていった。

その図書館の上、本塔の最上階である7階にある学院長室にはトリストイン魔法学院の学院長オールド・オスマンが書類仕事に勤んでいるふりをしていた。

振りと言つのは、

「オールド・オスマン」

「なんじゃね、ミス・ロングビル？」

サワサワと秘書であるミス・ロングビルの尻を触っているからである。わざわざ、自分の近くに呼び寄せておいて、質問があるからと言うから来てみれば、堂々のセクハラである。

「質問は何ですか？」

「ほほ」

すつとボケる。

この白髪に床まで届くような長い白髪の老人は、国内でも屈指のメイジでありながら、こういったお茶目な点も持っていた。尤もお茶目で済まされない事も多く、

「いい加減にしてください！」

ミス・ロングビルに一喝される。これならまだ序の口だ。

それに対するオスマンの対策もしっかり用意されていて、今度は耳の遠いふりだ。

「ん〜、最近、耳が遠くての」

「……」

ロングビルの方はイライラとしながら、自分の机に戻った。戻った瞬間に足元から、小さな白い鼠がテテツとオスマンの方へ、机の脚の林を駆け抜けていった。

「おう、よしよし。モートソグニルや。ナッツをやるうの」

鼠に話しかける姿は傍から見れば、完全にボケてしまった老人の姿である。縁側でお茶でも啜りながら、日向ぼっこでもしているのがお似合いの姿だ。

「じゃが、その前に戦果報告じゃ」

ぼそぼそと白いネズミに語りかける。

「そうか、ミス・ロングビルは白か。じゃが、ワシは黒の方が似合うとおもっんじゃがの…」

「オールド・オスマン」

静かに怒ったのはロングビルだ。つかつかと近寄って、ドカツと一発脛にかます。弁慶の泣き所、ここを攻撃されては流石に歴戦の魔法使いでも痛い。

「何を、するのかね…」

痛む脛をさすりながら、涙目でオスマンはさも意味が分からないといった調子で聞く。

「理由なら、腐るほど思い当たるはずですが？」

「い、いた、痛いから！ちょっと辞めてくれんかの？」

ゲシゲシと脛を蹴り続ける。脛なのはセクハラをかまして来る上司への彼女のせめてもの慈悲だ。仮にも学院長であるのだが、人前に出ることは多い。それをボコボコにしては、学院の評判が下がってしまう。本当なら、髪を切り取って青あざだらけにしたかったのだが、流石に理性が咎めた。

「オールド・オスマン！」

ノックも何もなく、扉を蹴破るように突然入ってきたのは先ほどのコルベールである。

いつの間にか2人とも何事も無いように机について、普段のように振舞っているのはさすがだ。

「ただ、大変です」

「大変なことなどあるものか、すべては小事だ。えっと、ミスタ…、誰だっけ？」

「コルベールです！お忘れですか！」

うっかり度忘れたオスマン。

「ミスタ・コルベール。君は何かに付けて大騒ぎするが、今まで大事であったことなぞないぞ」

ポリポリと頭を搔いて、机の引き出しから水キセルを取り出し、銜えた。

その姿にミス・ロングビルが咎めるような、鋭い視線を向けたが、オスマンは意に介さない。

「大騒ぎするくらいなら、授業料を徴収する方法を考えんかね。君らの給料も危ういのじゃぞ」

しれっと重大な事を言い始める。

だが、コルベールの持ってきた話は彼にとっては、生活の掛かった給料よりも重大な問題らしく、

「兎に角、これを見てください！」

バンと今までに無い位の勢いで、コルベールはオスマンに『始祖ブリミルの使い魔たち』と書かれた書物を先に見せる。それは古ぼけて、今にもページが外れそうな位に痛んでいた。殆ど死蔵に近い形で乱雑に置かれていた本の塊からコルベールが取り出してきたのだ。

「『始祖ブリミルの使い魔たち』か。随分と古い本を持ってきたのよ。で、これがどうしたのじゃ？」

まだオスマンは話が分からないといった調子だ。

次にコルベールは「使い魔召喚儀式」の時に現れた7人。ルイズの召喚した使い魔の手に現われたルーンのスケッチを見せた。

それを見たオスマンの眼光は鋭くなり、秘書のロングビルに退出を促す。

「ミス。ロングビル。すまんがちと、席を外してくれんかね？」

そう言われたロングビルは素直に従う。彼女もそれなりに社会を知っている。自分が絶対に聞いてはいけないこともあるし、トリスティン政府からの圧力を受ける学院の長にでもなれば、機密情報を扱うことも多い。カツカツと足音を鳴らして、扉から出て行く。最後に礼を忘れないのは秘書の礼儀だ。

その礼が終わり、扉がしっかり閉まったことを確認すると、オスマンはコルベールに向き直った。

「詳しく説明するんじゃ、ミスタ・コルベール」

ヴェストリ広場、そこは『火』と『風』の塔の間にある中庭である。普段、朝の短い時間にしか日も差さないことから人の行き来も少なく、教師の目も届いていないことが多い。つまりは悪巧み、凡そ校則違反になるような事をする時には、うってつけの場所なのである。

この学校においては、決闘には最適の場所である。
そんな場所で、一護は酷く後悔していた。

（まずった…。ここが決闘の場所になるとは…）

朝、軽くアレンと手合わせしたときには知らなかったが、鍛錬をしたこの場所がヴェストリ広場らしい。ここにはアレンの箱舟を設置している。

つまりは今この場にいない、3人がここから帰ってくる可能性がある。そうなれば、何も無い空間から人が現れたと大騒ぎになる。正直、自分たちの力をよっぼどのが無い限り秘匿しておきたい6人として、非常に不味い状況になってしまった。

最初は（ギーシュが）心配だなど思っただけで付いてきたし、才人の通したい意地の為に譲ったが、こうなってしまうては、自分が出てさつさと片付けてしまった方が良かったかもしれない。

（何で断わったんだー、おれー！）

どこから噂を聞きつけたのかすでに広場は野次馬でいっぱいになっている。

この野次馬を抜けて、箱舟にたどり着くのは流石の死神にも至難の業だ。街に行ってしまった3人に連絡を取る手段が無い以上、ここから出てこないことを祈るしかなかった。

「諸君！決闘だ」

ギーシュは気障つたらしくバラの造花を掲げている。

ワアアツと周りからは歓声が巻き起こる。

普段から娯楽の少ないトリスティン魔法学院の生徒にとって決闘はある意味最大のショーかもしれない。昔の貴族は、わざわざ決闘をさせて賭け事に興じていたらしいから、徹底している。

「ギーシュが決闘するぞ、相手はルイズの平民だ」

才人は自分が見世物にされてるようで、やれやれと頭を掻く。後ろにいる黒い髪の女の子二人は、さっきから一言も喋っていない。じつと目の前にいるギーシュを見据えて、静かに構えている。

「女の子二人か…。まあいい、ちょうどいいハンデだ」

ギーシュは気障つたらしく、シャナと夏梨を指して言う。3人を相手にすると言っているのだが、正直、才人は自分より背も小さい女の子に頼る気など毛頭なかった。この時点で二人とも、この女の子の実力を誤解していることを知らずに。

「とりあえず、逃げずに来たことは、ほめてやるうじやないか」

「逃げねーよ」

「逃げるか、金髪バカ」

「お前みたいなのに、逃げる方がおかしい」

ギーシュの芝居がかった台詞にいい加減、才人はうんざりとした声で答える。

後の二人は此れでもかと言う怒りを込めた声で。

「さてと、では始めるか」

「なあ、悪いけど、手を出さないでくれよ」

「え？」「へ？」

後ろの二人に声を掛け、とりあえず才人は先手必勝で行くことにした。

行動を制された二人はキョトンとしている。だが、しぶしぶと言った様子で従う。

相手がどんな魔法が使ってくるか分からない以上先に動いたほうが有利だし、事実、ギーシュのようなひよろつとした貴族なら、自分のパンチで一撃で熨せる。そう思っていた。

駆け出した才人を見て、ギーシュは余裕の笑みを浮かべ、バラを振る。

花びらの一枚が才人の前に舞ったかと思うと、それは甲冑を着た女戦士のゴーレムとなった。

「なっ、こいつが魔法ってやつか」

始めてみた「本物」の魔法に才人はぎょつとした。

「僕はメイジだ、だから魔法で戦う。文句をあるまいね」

「くそっ！」

才人は自分の慢心を恥じた。流石に青銅は殴れない。

「言い忘れたが僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ」

そう言って、一回一回ポーズを決める。

「従って、青銅のゴーレム、ワルキューレがお相手するよ」

まずは顔面を思いつきり右の拳で殴られた。そして次に腹に重いブローを入られた才人は地面に倒れる。青銅の重みと振りぬいた拳の重み、その両方が才人の体に襲い掛かる。

「なんだよ、もう終わりかい」

「へへ、終わるかよ。蚊が止まったのかと思つたぜ」

あきれるようなギーシュの言葉に才人は今だに軽口で答える。

再び、立ち上がって向かつていくが、それも軽く避けられ、また腹に一発、腰に一発、足と手に2発ずつ貰ってしまった。殴られるたびに、成り行きを見ていた女子生徒から短い悲鳴が上がる。殴られた才人は口から血が出ている。

「ギーシュ！」

ギーシュを叫ぶように呼んだのはルイズだった。

「おおルイズ、悪いな君の使い魔をちよつとお借りしているよ」

「いい加減にして、大体ねえ、決闘は禁止じゃない」

「禁止されてるのは貴族同士の決闘だ。平民と貴族の決闘は誰も、禁止なんかされていない」

ギーシュのルールを都合のいいように解釈した発言に、ルイズは言葉に詰まった。

「そ、それは、そんなこと今まで一度も無かつたから・・・」

「ルイズ、君はその平民が好きなのかい」

ギーシュの冷やかすような言葉にルイズは顔を真っ赤にする。

「誰がよ！やめてよね！自分の使い魔が怪我するのを黙ってみてられないだけよ！」

「ルイズ、心配してくれてるところに悪りいんだけどこいつは俺の決闘だ」

「だ！誰があんたの心配なんか・・・」

殴られても吐ける才人の軽口に、ルイズが更に顔を赤くする。その遣り取りを見ていた、夏梨とシャナは

「そうかい、お前意外に優しいなあとおもったんだけどよ」

「な！何いつてるの！！」

「なあ・・・」「ねえ・・・」

口を挟むが無視される。完全に二人だけの世界に入り込んでいる。ルイズはさらに顔を真っ赤にして怒る。シャナと夏梨は青筋を浮かべる。

「悪いけど、邪魔しないでくれ」

「サイト！」

「何だ、はじめて会った時以来だな、俺の名前を呼ぶの」

「なあ！」「ねえ！」

「ふ、やれやれだね。まだ、やる気かい？」

二発喰らっただけだが、才人は既にボロボロだ。生身を青銅の棍棒で殴られているのと同じような衝撃があるはずだ。下手をすれば、肋骨の一本でも折れているかもしれない。

それでも才人は諦めない。

「ねえ、分かったでしょ。平民じゃ、貴族に勝てないの！」

ルイズが才人に力説するが、それでも才人は折れない。立ち上がった才人にギーシュがやれやれと嘲笑うかのように挑発する。

そんなギーシュに才人は、ゆっくりと走り出す。だが、また再び重い拳が才人に突き刺さる。

「ごほ！」

血の塊にも見える赤い水を吐く、それでも才人は踏鞴を踏んで耐える。

再び向かおうとする才人を、ルイズがその後を追いかけて肩を掴む。

「寝てなさいよ！バカ！どうして立つのよ！」

才人は肩に乗せられた手を振り払った。

「ムカつくから」

「ムカつく？メイジに負けたって恥でもなんでもないのよ！勝てないんだから！」

才人はよろよろと歩きながら呟く。

「うるせえよ」

「え？」

何度も何度も殴られた。それでも、諦めない。

「うるせえ、うるせえ、うるせえ」

「な、なによ……」

「いい加減、ムカつくんだよね……………」

才人は自分の力を持って、力強く立つ。

「メイジだか貴族だかしんねえけどよ…」

そこで、口から垂れた血を拭う。鼻血に骨折、切り傷、打撲、既に満身創痍である。立っているのがやっとと言う状況なのに、それでも、張らねばならない。

「お前ら揃いも揃って威張りやがって。魔法がそんなに偉いのかよ。アホが」

ギーシュが薄く笑みを浮かべながら、そんな才人の様子を見つめている。

ボロボロの才人は、ルイズに血まみれの顔で優しく語り掛ける。

「なあ、ルイズ。しかたねえ、使い魔やってやるよ。洗濯もするし、着替えも手伝ってやる」

才人の戦いに一護はいつ手を出そうか、考えあぐねていた。

ただ、単純に自分がバカにされただけなら、さっさと自分が終わらせてしまえばいい。だが、事此処に到って、この「決闘」と言う名の、一方的な「私刑」は才人の誇りを賭けた戦いになってきた。それを邪魔できるほど、無粋ではなかった。

結局、手を出せないまま、さり気に移動した箱舟の出口の前で、じっと才人を見ているのだ。

傍には今朝方、会ったキュルケと青い髪の小さな女の子がいる。

二人もルイズと、才人の状況にハラハラと言った様子で見ている。

(何だ…、喧嘩してるから仲悪いのかと思ったけど、俺と石田みたいなもんか)

キュルケの見つめる視線に混じる感情を読み取りながら、一護はそんな事を思った。

「飯も寝床も我慢する。だけど・・・」

「だけど…?」

「下げたくない頭は下げられねえ!」

もう一度、立つ。立てば立っただけ、傷と怪我が増えると知りながら。

それでも自分の誇りの為に、彼は立つ。自分のちっぽけだが、大切な誇りを守るために。

「やるだけ無駄だと思いがね」

ギーシュの言葉に、才人は持ち前の負けん気を發揮して言った。

「全然きいてねえよ。お前の銅像、弱すぎ」

遂に、怒りが沸点に達したギーシュの顔から笑みが消えた。

ワルキューレの右手の拳を、頬にモロに食らい、才人は吹っ飛んだ。

次の左からの攻撃は鼻が折れ、鼻血が盛大に吹き出る。才人は痛む鼻を押さえながら、呆然と思う。

目の前には抜けるような青空が広がっている。もう見るのは何度目だろうか。

(参ったな……………)

これがメイジの力。

才人も多少のケンカはしたことがあるが、こんなパンチは食らったことがなかった。

それでも、よろよると立ち上がる。

ギーシュのワルキューレは、容赦なくそんな才人を殴り飛ばそうとした。襲い掛かってくるだろう衝撃に才人は思わず目をつむる。しかし、

「はああ！」「だりゃあ！」

やって来たのは後ろからの衝撃だった。

「げふ！」

盛大に才人は転がり、今のダブルの蹴りが止めになったのか、気を失ってしまった。

「全く…、手を出さないでくれって言うから、任せたのに…」

「そうね。頼りないにも程があるわ」

「『辛辣だー！』『』」

蹴りを入れた上に、気絶した才人へと鞭を打つような言葉を掛けるのは、さっきまで決闘に参加を止められていたシャナと夏梨だった。二人とも呆れたような顔をしている。

それを見ている兄は、もっと呆れた顔で二人を見ている。

「ふん、選手交代かい？あまり僕は女の子を傷つけたくはないのだが…」

「二人も泣かせて、よく言えるわね」

「そうね、私も同感」

ギーシュの言葉は本当の気持ちであるが、そろそろ堪忍袋の緒が切れた二人には無用の挑発だった。

「さつさと終わらせてあげるわ。最大戦力で掛かってきなさい！」

「

見事なハモリで挑発する。

流石に、「女性に甘い」と称されるギーシュにも、これは許せなかった。

最初にゴーレムを出したときと同じようにバラを振って、今度は6体を追加する。ギーシュの造り、操れる最大戦力、7体の青銅製のゴーレムが二人の女の子の前に現れた。

「いいだろう！お望みならば、そうさせてもらおう！」

キュルケの隣に居た青い髪の少女、タバサはこの決闘を見るでもなく見ていた。

今この場にいるのも隣にいるキュルケに半ば無理やり連れてこられたからだ。

結果は分かりきっている、貴族には平民は勝てない。案の定、そう思ってきてみれば黒髪の男の子がギーシュのゴーレムにボコボコにされてしまった。

だが、次に現れたのは自分とそれ程、背丈の変わらない女の子が二人。

（流石に、まずい！）

ゴーレムと男の子なら、喧嘩の範囲で済むかもしれない。だが、

女の子に手を上げてしまったては、本人は気が付いていないが、ギーシュの評価は地に落ちる。女の子の命も危ない。

その両方の理由から、咄嗟に自分の節くれだった大きな杖を持ち、決闘を止めようとするが、それをキュルケの隣に居たオレンジ髪の男に止められてしまった。

「二人とも死んでしまっ」

二人と一緒に居た黒衣とオレンジ髪が特徴の男に、何故止めるのか聞く。

だが、返って来た答えは、彼女の予想を上回るものだった。

「何、心配いらねーよ。あの二人はこの奴らの1000倍は強え」

その彼の言葉が現実とかけ離れたモノだと、タバサは勝手に考えていた。だが気が付く。自分の考えが甘いものであったと言っことを。同じく戦いを潜り抜けたシュバリエであるタバサだけが分かった。

二人の赤く煌く目と、蒼く輝く目。

その二人の双眸は幾多の戦場を駆け抜けた歴戦の戦士の目であることを。

学院長室でコルベールは唾を飛ばして、オスマンに説明していた。春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の使い魔を7人も呼び出してしまったこと。

ルイズがその中の少年と『契約』した時したこと。

契約をしていない6人にも証明としてルーン文字が浮かび上がったこと。

そして、そのルーン文字が気になったこと。

どれもコレもイレギュラーな出来事ばかりだ。普通の使い魔との契約ではありえない。

それから、そのルーンを調べていたら…、

「始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』に行き着いた、というわけじゃね？」

オスマンは、コルベールが描いた才人達の左手のルーン文字のスケッチをじっと見つめた。

今ひとつ、オスマンは信じられないといった調子である。

「そうです！」

バンと机を叩いて更に力説する。

「さらに使い魔を7人も召喚したということ！」

コルベールのボルテージは更に上がっていく。

あまりの剣幕に、オスマンは若干引いていた。

「普通はメイジー一人に付き、一体であるはずの使い魔が7人もいるのです。それが同じルーン！」

コルベールはさらに興奮して言う。

「で、君の結論は？」

「あの少年たちは、『ガンダールヴ』です！」

下手をすれば、口と口がくっ付きかねないほどに近くに寄ったコルベールを若干、嫌がりながらも説明を続けさせる。ここに到って彼の言葉の信憑性が増してきたのだ。

「それも全員がです！これが大事じゃなくて、なんなんですか！オールド・オスマン！」

コルベールは、禿げ上がった頭を、ハンカチで拭きながらまくし立てた。

「ふむ…。確かに、ルーンが同じじゃ」

七枚、七人に刻まれたルーンを見比べるオールド・オスマン。そのルーンは一字一句変わっていない。全く持って同じルーンが7人に刻まれているのだ。

「その平民だったその少年達は、『ガンダールヴ』になった、ということになるんじゃないだろうか」

「どうしましょう」

「しかし、それだけで決めつけるのは早計かもしれん」

そこでドアが控えめにノックされた。

「誰じゃ？」

扉の向こうから、退出を促したロングビルの声が聞こえてきた。

「私です。オールド・オスマン」

「なんじゃね？」

「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるようで、大騒ぎになっています」

疲れたような声でロングビルが言葉を続ける。決闘沙汰は貴族が集まるこの学園では決して珍しいことではない。だからこそ、「決闘禁止」などという校則があるのだ。

「止めに入った教師がいましたが、生徒たちに邪魔されて、止められないようです」

「まったく、暇をもてあました貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい」

ふうと学費も払ってくれない、生徒たちの親の顔を思い出しながら、肩を竦める。

「で、誰が暴れておるんだね？」

「一人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「…あの、グラモンとこのバカ息子が」

彼が原因の決闘は去年もそれなりに多かった。今更、何を言うでもない。

去年から彼を見ていたオスマンとコルベールは、顔に浮かぶ疲労の色を一層濃くする。

「オヤジも色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじゃ」

「おおかた女の子の取り合いでしょうな。相手は誰です」

「…それが、メイジではありません」

「メイジではない…？誰じゃ？」

それからロングビルは言いにくそうに、一瞬躊躇ってから、

「ミス・ヴァリエールの7人の使い魔の内の黒髪の少年と女の子二人のようです」

オスマンとコルベルは顔を見合わせた。

「教師たちは、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めております」

「アホか。たかが子供のケンカを止めるために、秘宝を使ってどうするんじゃ。放っておきなさい」

「わかりました」

ドアの前から、ロングビルは去っていった。

コルベルは、唾を飲み込んで、オスマンを促した。

「オールド・オスマン!!」

「うむ」

オスマンは、杖を振る。

壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリ広場の様子が映し出された。

大勢のギャラリーがいる前で、シャナはフレイムヘイズ『天壤の劫火』の契約者『炎髪灼眼の討ち手』としての能力、黒のコートにも見える外套『夜笠』を纏う。

そして、永久にも見える黒い虚空から一本の大太刀を取り出した。

これが彼女の名の由来にもなった、必殺の大太刀、紅世に伝わる比類なき宝剣「贄殿遮那」である。

ここまで僅か数秒、その数秒の間に、彼女の目と髪は燃え盛るような紅蓮になった。

その紅蓮は太刀も覆う。燃え盛る炎の剣だ。

「な、なんだ！髪の色が変わったぞ！」

「それにあの剣に黒いコート、どっから出したんだ？」

「剣が燃えているぞ！メイジだったのか！」

ギヤラリーに動揺の声が上がる。しかし、その動揺の声は更に大きくなる。

夏梨が腰に差していた刀を鞘から抜きさる。

正眼に構えた刀へ向かって、優しく、それでいて冷たく、声を掛ける。

「清めよ、『流月』！」

持っていた刀の周りに無数の水が流れ、夏梨の周りを満たす。これが夏梨の刀、水を纏いし静謐たる刃、『流月』である。紅に煌くシヤナに対するかのように青い瞳に輝く。

「おいおい、こっちの子もメイジなのか…！」

ギヤラリーは完全に引いていた。先ほど、ギーシュがボコボコにした黒髪の男はそんな素振も見せなかったが、後ろに控えていた二人は炎と水を纏い、操っている。

ギーシュの顔から余裕が消える。のんびりと逃げまわって、適当にやり過ぎそうとしていたら、いつの間にか追い詰められていた。彼も実力はそれなりにある。向かい合った二人との実力差、それを

痛いほどに肌に感じていた。

「はああ!」「だああ!」

二人が気合一閃。刀を振りぬく。飛沫が飛び、炎が舞う。後に残るのは燃え残った、砕ききれなかった青銅のワルキューレの欠片。7体の悉くが一瞬で消え去ってしまった。

「ひっ…!」

情けない声を上げて後ずさる。レベルが違いすぎる。

その様子を遠くから眺めていたのは、学院長室のオスマンとコルベールである。

「あの二人…、いくらなんでも…」

「まずいかもしれんの…、彼女らではなく、グラモンのバカ息子が」

二人の圧倒的な力を見ていた二人は、率直な感想を漏らした。

言っている間に、一步、また一步と二人はギーシュに近づいている。最大戦力をあつさり打ち破られたギーシュには、もう打つ手がない。

自分よりも小さな女の子に気圧されている。その事が何よりも情けなかった。

ピタリと首筋に冷たい感触が奔る。

「さあ、言い残すことはある?」

「まだ繋がっている間に、聞いてあげるわよ」

二人の刀が首筋に突きつけられた。少しでもこの刀が動けば、自分の首は永遠に胴体とは離れ離れた。「命を惜しむな、名を惜しめ」

とは軍人一家である彼の父の薫陶でもある。

だが、ギーシュはこの小さな二人の悪鬼に初めて、薫陶を破るところにした。何せ名も、誇りも、奪い去られ、自分に残っているのは命のみ。ここで見栄を張って、命は失いたくない。

「待つて、悪かった。侮辱は取り消そう…!」

「そう、で?」

「で?って何でだい!」

侮辱の言葉は取り消した。しかし、首の冷たい感触は消えない。

「分からないの?」

夏梨があきれ果てる。

「分からないなら、仕方ないわね」

「二股を掛けるような・・・」「女の敵は・・・」「ぶっ倒す!」

二人が、刀を振った。何時来るかもしれない死の時間に、ギーシュは強く目を瞑った。

だが、待てども待てども、痛くならない。いつの間にか消えた冷たい感触が戻ってきていない。恐る恐る目を開けると、二つの切先が自分の目の前で、完全に停止していた。

「動くなよ、どっちも」

後ろから男の声が掛かる。バツと勢い良く振り向くと、そこには呑気に見物していたオレンジ頭の少年がしっかりと刀を止めていた。それも一本の手で一人を止めていた。

使い魔の徳性というのは「魔法先生ネギま！」など多くの魔法作品に代表される人の7つの徳性、ヨーロッパ七元徳の事です。即ち、知恵、勇氣、愛情、節制、正義、信仰、希望の7つの事です。「美德」とか「道徳」の「徳」では無く、人の有益性を表したもので、最も優れている点と言い換えてもいいと思います。

夏梨の刀、説明しませんでした。が斬魄刀です。

イメージ的にシャナの対局に性格とか、態度とか、考え方が位置している。で属性的にも反対にしてやろうという、かなり安直な考えで「水」にしてみました。使い方に関してはこれから戦闘があれば、書きたいと思います。

シャナの説明が長い。「『天壤』」シャナ」まで文字数ありすぎです。

「護の「あいつらは」は多分、仲間のことを信じている彼なら恐らくこんな事を言うのだと思います。現にルキア救出の時にも言っていましたから。

NO REGRET RAIN

ヴェストリの広場に居たギャラリーは皆一様に呆けた顔をしていた。

何せ今まで同じようにギャラリーの中にいた、黒衣の平民がひゅつと飛び出したかと思うと、ギーシュに迫っていた二本の刃を片手で止めたのだ。刀はつい先ほど、紙の様に青銅製のゴーレムを切り裂いたばかりである。それを何も無く素手で止めているのだ。

この「ありえない」状況に頭が付いていけないのである。

「ふう、全くお前ら…」

「一護、離して…」

「一兄、手を退けて…」

尚もギーシュに向けて刀を動かそうとするが、がっちりと掴まれた切先は全く動かない。まるで万力で締められたような圧力だ。

「いい加減にしろ！」

「痛い！」「痛って！」

ゴチンと二人の脳天に重い拳が落ちる。頭の割れそうな衝撃に思わずうずくまる。

余りの痛さに涙目になる。

「ぐおお…」「うっ…」

「ったく、人死にはダメだっつてんだろ」

呆れたような調子で二人に言い聞かせる。尚も二人は睨んでいたが、一護の剣幕に圧されて黙ってしまふ。正直、女の敵であるギー

シユに天誅を加えたかったが、ここまで言われては仕方が無い。
そして、一護は未だに腰を抜かしていたギーシユに向けて、

「お前もな！」

「ぐふ！」

思いつきり、女の子に落としたのとは比べ物に成らないほどの重い一撃を脳天にぶち込む。ギーシユはその重さに一撃で気絶してしまった。

「まったく、気が付いたら謝りに行っとけよ……」

気絶したギーシユを後にして、血塗れになった才人を担ぎ上げる。切り傷、打撲と余りにも傷の数は多いが出血量は少ない。いきなり死ぬようなことは無いはずだ。

「夏梨、エドとネギを呼んで来い！ シャナは俺と一緒に医務室だ」

「はい！」 「分かった！」

二人仲良く返事をする。少しこわばった声になったのは、一護の袂に黒だから目立たない、しかし、確実にある赤いシミがじわっと広がったからだ。

夏梨はしゅつと目に留まらない速さで消えてしまった。

「おい、その赤毛！ 医務室へ案内しろ！」

「は、はい……」

今朝見た赤毛の女生徒を見つけた、一護は取り敢えず命令する。その大きな声にビクツと反応して、正気に戻る。普段なら、キュルケも断わるのだが、只ならぬ様子に思わず返事してしまった。

ギャラリーと一緒に呆けていたルイズは、この声で漸く正気に戻った。

「ちょっと、何なの！あれ！」

シヤナの纏った炎。夏梨の流した水。そのどちらもルイズには理解の範囲外である。聞きたい事が山ほどあった。ワクワクと言った様子で一護に詰め寄る。

「ねえ、何なの？もしかしてメイジ？」

「やかましい！」

「ハウツ！」

ワクワクと聞いてくるのに腹が立ち、説明するのも面倒になったので、取り敢えず後頭部に空手チョップを食らわす。その衝撃にルイズの意識は地の底へと沈んだ。

その意識を失ったルイズも抱えて運ぶ。

急ぎ足でたどり着いた医務室は上を下への大騒ぎになった。取り敢えず、慌てふためく先生方にはアレンが丁重に退出願った。

才人は何せギーシュのゴーレムにしこたま殴られているのだ。金属の中では軟い青銅とは言え、生身で喰らって傷を負わないほうがおかしい。

一護が来るのを待っていたように、医務室の中で準備を整えた工ドが治療を指示する。

「この程度なら、直ぐに終わる。一護、円の真ん中に才人を置いてくれ」

「分かった」

指示されたとおり、医務室の床にチョークで書かれたなにやら複

雑な記号の書かれた円、錬金術師の方式と法則の体現である錬成陣の丁度中心に才人を横たえる。

「さて、死ぬんじゃないぞ！」

目の前で両の手を合わせる。パンと乾いた音が医務室の小さい部屋に響く。その次は手を書かれた錬成陣の上に重ねあわせる。エネルギーが陣に満ち、パリパリと眩い光が幾筋も煌く。

その光、錬成光が治まったあと、陣の中にいたのは出血が塞がれ、骨折が直された才人の姿だった。服は血や泥に染まっているが、それもシャナが、

「アラストール、『清めの炎』を」

「うむ」

ぽつと手のひらに灯した紅蓮の炎を投げつけると、シミが逆再生のように消えてしまった。

「処置完了だ。あとは体力が戻れば目も冷めるだろ」

遠見の鏡で決闘から医務室での一部始終を見ていたオスマンとコルベールは顔を見合わせた。

この世界の魔法使いのランクとしては一番低い、『ドット』とはいえ、女の子二人の平民がメイジに圧勝したのである。しかも、平民だと侮っていたら、刀から長い黒髪の方は炎を、短い黒髪の方は水をそれぞれ出したのだ。

「オールド・オスマン…」
「…ううむ」

長い間、生きてきたつもりだったが、あのような技術や魔法は二人とも見た事がなかった。

しかも、二人はルーンを詠唱していない。

つまりはこの世界の魔法使いとは根本から違う存在。根拠は何も無いが、二人の直感がひしひしとそう告げていた。

更に追い討ちを掛けるかのように、オレンジ頭の黒衣の男は、その二人の刃を軽く止めてしまった。

「幾らなんでも強すぎるじゃろ…。まあ、黒髪の少年の方はそれ程でもなかったが…」

極めつけは医務室の出来事。

眩い光が『遠見の鏡』の視界を奪ったかと思うと、後に残ったのは傷が塞がれた少年の姿。本来なら高級な水の秘薬を使っても、全治1週間はありそうな大怪我を一瞬で直してしまったのだ。

床に書かれていたあの円に秘密があるのかもしれないが、その技術も見たことがなかった。

「オールド・オスマン。早速王室に報告して指示を仰がないことは…」

「それには及ばん」

オスマンはきっぱりと言った。

オスマンは、窓を開けて険しい表情で景色を眺めた。

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った『ガ

ンダールヴ』！」

再び暑苦しい勢いで、オスマンに詰め寄る。

「それもそれが七人！七人も『ガンダールヴ』なのですぞッ！！！」

研究熱心なコルベールはワクワクせずには居られなかった。伝説と呼ばれていた存在。自分の短い人生では到底お目にかかれないだろう、御伽噺の向こうに消えた存在。それが目の前に立っているのだ。

非人道的なことをする気はないが、話くらいは聞いておきたかった。

「ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではない」「そのとおりです。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』」

持ってきた『始祖ブリミルの使い魔たち』の一節を思い出しながら、コルベールは語る。

「その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった……。その強力な呪文ゆえにの」

この世で貴族として君臨するメイジにも、唯一にして決定的な弱点がある。

ぶかっつと水キセルの煙を吐きながら、情けなさそうに話す。

「知ってのとおり、詠唱時間中のメイジは無力じゃ」

そう。魔法詠唱中はルーンを唱えることに集中せねばならない。ルーンを唱える事を妨害されれば、魔法は発動しない。妨害の方法は何でもあるが、兎に角集中を乱されると、どうしてもメイジは弱いのだ。だからこそ、その詠唱時間を確保する戦い方が確立されたり、使い魔に時間を稼がせたりするのだ。

「そんな無力な間、己の体を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』じゃ」

オスマンは勝手にブリミルの姿と、その傍らに立つガンダールヴの姿を思い浮かべる。

スケベな大人らしく、両方とも体のメリハリの利いた女性の姿だったが。

「その強さは……………」

その後を、コルベールが興奮した様子で言った。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力！」

コルベールの興奮の度合いは天井知らずが上がっていく。

「あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかつたとか！」

「それが、七人もいるとなると……」

オスマンは唸った。コルベールは冷静になって考えてみた。

「危険以外の何物でもありません……」

「で、ミスタ・コルベール」

くるりとオスマンは、また髪が薄くなったコルベールへ向き直る。

「はい。なんでしょうか？」

「その少年たちは、本当にただの人間だったのかね？」

「それが……………」

コルベールは少し言いよどんでから、

「さっきの少年はどこからどう見ても、ただの平民の少年でした。しかし、後の6人は……………」

「後の6人は？」

オスマンがコルベールの態度に怪訝そうに尋ねる。

「念のために『ディテクト・マジック』で確かめたところ…、正直、契約を辞めさせるべきでした」

「何故じゃ？」

「6人共に相当鍛えこまれていて、相当の実力者、いえ」

そこで言葉を切り、数秒置いて意を決したように続ける。

「恐らくこの国の全軍を持って、傷の一つでも、付けられれば御の字かと…」

「…それ程かね？」

「はい…」

消え入りそうだが、しっかりとした様子でコルベールは答える。

オスマンは天井を仰ぎ見る。正直、もうあと少ししかない自分の任期中に、厄介の種を抱え込みたくは無かった。彼らを排除すれば一番手っ取り早くていいのだが、自分が教師の中では、全幅の信頼

を置いているコルベールの話である。付き合いも長い自分に、そんな大仰な嘘をつくとは思えなかった。

トリステイン軍全滅で、戦果は傷一つ。これでは排除のしようがない。

「そんな7人を、現代の『ガンダールヴ』にしたのは、誰なんじゃね？」

話は終わりとばかりにもう一つ、気になっていた疑問を口にした。

「ミス・ヴァリエールですが…」

「彼女は、優秀なメイジなのかね？」

コルベールは教師である。確かに鼻肩して評価したいと言う親心もあるが、

「いえ、というか、むしろ無能というか…」

できるだけ正直に言った。

「正直、あまり魔法の才は優れないようです」

「さて、その二つが謎じゃ」

オスマンは再びキセルをふかした。

そして、それを静かに見つめるコルベール。

「ですね」

「無能なメイジと契約した7人が、何故、『ガンダールヴ』になったのか。まったく謎じゃ」

「そうですね…」

コルベールは残り少ない、自分の頭の寿命を気にした。

こんな厄介ごとを抱え込んでしまったのだ。いつその事、カツコいいスキンヘッドにするのも手かもしれない。そんな事をぼんやり考えていた。

「とにかく、王室のボンクラどもに『ガンダールヴ』とその主人を渡すわけにはいくまい」

ポケボケと秘書にセクハラをする、スケベな大人の姿はそこには無かった。

そこにいたのは凜々しい学院長、魔法使いの戦争をいくつも潜り抜けてきた本物の魔法使いがいた。

「そんなオモチャを与えてしまつては、またぞろ戦でも引き起こすじやろう」

水の国と謳われるトリステインの王宮。

見た目は澄み切っているが、本等の姿は魑魅魍魎が跋扈する魔窟である。得てして政治の世界はそういうものであると分かっているが、今の状況では、いや、今の状況だからこそ尚更、彼らの存在は秘匿しておかねばなるまい。

「宮廷で暇を持て余している連中は、戦好きばかりじゃからな」

「はあ、学院長の考えには恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい！かしこまりました！」

コルベールは急いで部屋を出て行った。

オスマンは杖を振ると窓際へと向かった。

「さて、何者なのじゃろうな。願わくば、この世界に平穩を齎すものであってほしいの…」

オスマンの希望のような声は、強く吹いた風に乗って消えた。

白い白い空間。限りも無く広がる空間。

魔法が存在し、魔法を扱うメイジが貴族として君臨する世界。彼らは貴族にあらざるものを虐げ、時に笑い、時に喜ぶ。

それを見た彼は、

「どうにかならないのか」

自分が向かっていったのは、決して憂さを晴らすためだけではない。

零れ落ちた問いに、誰かが答えた。

「どうにもならねえよ」

それはぶっきらぼうな男の子の声だった。白い空間に反響するごとく、解けて消えた。

それに持ち前の負けん気を發揮して、答える。

「どうにかしたいんだ」

「無理よ、今の貴方では」

今度は透き通る鈴のような女の子の声だった。耳の両側から聞こえてくる。この声も反響することなく、消えていった。

「どうしてだ」

冷たく突き放すような声が聞こえる。今度は問うような声。耳に残って消えそうに無い。

そこで才人は目が覚めた。

真っ先に目に入ったのは、白一色で塗られた天井。ここはまだ夢の続きだと思った才人だが、体の節々が痛んでいないのに気が付く。

（俺、死んだのか…。じゃ、ここは天国か…）

ここが天国ならそれもいいかもしれない。今まで痛かったのが消えて、温かくすら感じている。敵わない戦いをギーシュに挑んだが、結局負けてしまった。その結果なら、まあいいかもしれない。

「あ、気が付きました？」

「目を覚ました…」

天国かと思っていたら、目の前には赤毛の男の子と青い髪の女の子が、仲良さそうに本を読んでいた。目を開けた自分に気が付いて、声を掛けてくる。

女の子の方は見たこと無いが、赤毛の男の子の方の名前は知っている。

「えっと、ネギ君だっけ…？」

「は、はい。そうですよ、才人さん」

キョトンとした様子でネギは才人の顔を見ている。
それから心配そうな声で聞いてくる。

「えっと、大丈夫ですか？二日も寝ていたんですよ」

「二日？えっと決闘騒ぎからか？」

「はい」

どうやら寝ている間に、太陽と月が二度も昇って沈んでしまっただけらしい。随分と寝すぎたのか、頭が痛い。自分の格好を確認するが、包帯でぐるぐる巻きで体はミイラ男のようだ。

だが、不思議と体は痛くない。正直数えるのもバカらしくなる位に殴られていたのだが、その傷が2日程度で塞がったりするものなのだろうか。

才人は首を傾げた。

「ネギ、私は皆を呼んでくる。戻ってきたら、さっきの続き」

「あ、お願いします。タバサさん」

そういうと青髪の女の子は傍に立てかけてあった、自分の身長ほどもある杖を持って出て行った。それを見送ってから、才人はネギに向き直る。

「俺、死んだんじゃないの？」

「死んでないですよ、ちゃんと生きてます」

さっきの白い空間はどうやら夢らしい。流石に才人も16歳。まだ恋もしてないし、彼女もいないし、キスもしていない。そんな状況で死ぬのは嫌だった。

「そっか……俺生きてるのか」

そう思うと不思議とため息が出てきた。

一つため息を付いた所で、さつき出て行ったタバサに一護、エド、アレンに夏梨とシャナが半ば引き摺るような形でルイズを連れてきた。

9人も入ると流石に白い医務室は手狭になった。

「よ、目覚めたみたいだな」

一護を始めとして皆揃って、自分が目を覚ましたことを喜んでくれる。

だが、ルイズだけは、

「ふん、勝手な事して。洗濯物たまつたじゃない！」

とあくまでも主人としての威厳を崩さずにいた。その態度に夏梨とシャナが持つていたルイズの腕を極める。ミシミシと離れていても聞こえてくる、骨の軋む音。

「いたい、いたい！」

「あれだけ、説教したのにまだ直らないのね……」

「貴族、貴族と振舞うのも、貴族たる実力と振る舞いがあったこそ。お前の貴族は人を虐げること？」

才人は知らなかったが、ルイズはこの2日間。6人にこっぴどく叱られていたのだ。

発端は「掃除をしろ」といきなり命令したことに夏梨とシャナが反攻したことだ。それから一護達が出てきて喧嘩を辞めさせたが、ルイズが一方的にボロボロになっていた。

そこでルイズが6人の態度に怒った。

「使い魔なら使い魔らしくしなさい」と。正直、マントも髪もぼさぼさの状態で言うのも情けなかったが、自分が上なのだというところをすっかり自覚させないと、そんな風に考えていた。

それに頭を掻きながら、代表して言ったのは一護だった。

「俺達は皆、命賭ける様な事やってきたんだよ」

一護はまた、この医務室で才人に同じ事を言う。

「その傍には仲間がいた。そいつらは俺の為に命張ってくれる頼もしい奴らだった。」

それぞれが伴に戦場を駆け抜けた仲間の顔を、また思い出す。

無口な巨人、黒い靴の姫、赤い炎の軍人、白い羽根の侍、白い弓引き、蓮の剣士……

皆それぞれが、心強い仲間だった。

今から問うのは、才人への覚悟。

「お前は俺たちの為に、命賭けてくれるか？」

確り見たことの無かった一護の茶色ブラウンの目に、まるで鏡のように自分が映っているのが見えた。

「少なくとも俺達は俺たちの為に命張れない奴の為に戦わない」

「…勿論です」

少しだけ言いよんだ。才人は一護の言う事を正直、上辺しか理解していなかった。

確かに彼らは武器を持っているし、強そうだ。だが、見た目は自分とそんなに変わらない。オマケにそのうちの3人は、小学生と言

つても差し支えないほどだ。

「おし。だが、まあ、弱い奴に戦えって言ってもそれは自殺の推奨だよな」

「うん。だって、こいつ弱いもん」

シヤナを皮切りに次々と降り注ぐ、辛辣な言葉。腐っても才人も男の子である。余り弱い弱いと呼ばれるのは心外だった。無謀にも一番近くにいたアレンに掴みかかるが、くるりと天地が半回転する。そして、そのまま床へ叩きつけられた。腰と背に異様な痛みが広がる。

「わー、傷口開いちゃいますよ！アレンさん！」

「心配すんな、そんな柔な塞ぎ方はしてねーよ」

「それに今のは、受身も取れていない才人が悪い」

慌てるネギと、短く欠伸をかみ殺しながら、微塵も心配していない口調のエド。

追い討ちを掛けるのは夏梨だった。

その様子を見て、一護は話を続ける。

「RPGのゲームじゃねえんだ。武器換えて強くなるわけがねえ」

今までの気楽で、のんびりとした空気を一瞬にして消す。

「強くなりたいか？」

「え？」

「言ってる、下げたくない頭は下げられないって」

「ええ…」

気絶する寸前、ルイズに向かって叫んだ言葉を思い出す。

「下げたくない頭は下げられない」と本人にとっては大声で誓ったのだ。

「えっと、僕の友達が言っていました」

白いローブで身を固めたネギが一護と才人の会話に口を挟む。

それは嘗て聞いた、天才から自分へと贈られた言葉。綺麗な言葉でも、含蓄のある言葉でもない。けれども、ネギの心の奥の奥を締め付け続ける言葉。

「『世界に幾百の正義があるとして、正義を通すのは力ある者のみ』
って」

「『力ある者のみ』か…」

「強くなりましょう、才人さん」

ネギが才人の手を取って促す。

正直、ギーシュのことも甘く見ていた。貴族と言うのがどれだけの實力を持っているのか。それを知らずに突っ込んで行った。その結果が今のこの様だ。見た目がモヤシのように細くても侮ってはいけない。それを才人は痛いほど痛感していた。

「何か、失礼なこと考えてませんか？」

アレンが何事か言ったが、一護が無視して話を進める。

「ま、そういうことだ。本当に自分のその思いを通したいなら強くなれ」

「私達も、最初からこんなに強いわけじゃない」と自らの幼い時を思い出すシヤナ。

「そうです。必死になって体を鍛えてきました」と師匠と養父と自分に立てた誓いを思い出すアレン。

「幾度も死に掛けてきたんだ」と自分を支えてくれる幼馴染や上司の篤さを思い出すエド。

「皆、誰かに頼って強くなった、それは恥じゃない」と傍の兄の顔を見ながら思い出す夏梨。

「誰にも負けない思いがあるなら大丈夫ですよ」と記憶の向こうの父を思い出すネギ。

それぞれの想いの丈。想いの向き方もバラバラだが、共通するのは「心」だ。それが「善」か、「悪」かなどと言う単純な二元論ではない、自分の揺ぎ無い思いかどうか。

「お前らはどうなんだ？」

一護は黙っては話を聞いていたルイズとタバサにも振る。勿論、彼女達も黙って聞いているわけではない。二人にも通したい意地と願いがあつた。

ぎゅつと結んだ二人の唇の形を見て、一護は首を縦に振る。

それは、3年前の事。まだ力の無い自分へ投げかけられた言葉。

今でも一護と夏梨、二人の力の源泉となり、行動理由となるその言葉。

「思う力は鉄より強い？半端な覚悟なら溝へ捨てよ」

そして背負った刀を抜き、切先を才人へと突きつける。

「10日間、俺たちと命の遣り取りできるか？」

大きな黒い切先が眼前にある。それでも、才人は引くことを良し

としなかった。

「強くなれるなら……、思いを通せるなら……」

口を結んで才人が言う。

「私も！『ゼロ』なんて言われたくない！」

ルイズが飛び跳ねるように言う。

「私にも通したい思いがある」

静かに自分の杖を強く握り締めてタバサが言う。

才人は、ルイズ、一護、アレン、エド、ネギ、夏梨、シャナの顔を見渡す。

8人の間が少しだけ縮まった気がした。

NO REGRET RAIN (後書き)

前話を書いてから、多く質問を頂きました。

基本的には「才人が嫌いなんですか」というものでした。

私は決して彼が嫌いな訳ではないです。彼の軽薄さ、咄嗟の時の一途さ、そして、豪胆さ。どれも愛すべきものだと思います。

ですが、文中の通りハルゲギニアはRPGの世界ではありません。武器を持って強くなって、敵を倒すなんていう展開はどのようなのだろうかと思ったのが一つ目。

当初の段階ではギーシュを倒すのも才人の役目でした。ですが、ここでガンダールヴの能力を発現させて、ギーシュを倒してしまつては、他の6人が血反吐吐いて修行して、死に掛けるような戦いをして、そうやって積み上げてきた経験や強さと言うものを否定してしまつような気になりました。それは決して彼らの経験の否定だけではなく、その経験に携わってきた例えば一護なら、修行の相手だった浦原や夜一、死闘を繰り広げた恋次や剣八、そしてグリムジョーやウルキオラたちの否定でもあるのではと思つたのが二つ目。

最後にここで勝たせてしまつと、彼は努力を怠るのではないかと思つたのです。

確かにガンダールヴの力は絶大です。しかし、それに頼つて努力を怠れば負けてしまう。現に二巻でもワールドに負けていますしね。

6人のルイズに対する扱いは正直、これで正解だつたと思います。石田もチャドも織姫も、アスナも刹那もこのかも、大佐も彼の部下

も、神田もリナリーもラビも、ヴィルヘルミナもマージョリーも悠二も、彼らを守ろうと戦って、また彼らも彼らを守るために戦っていました。

ルイズのように一方的に思いをぶつけて、要求を通すなんて事を認められるほど、彼らは器量が大きくありません。狭量ではという声もあるかもしれませんが、戦いの場を経験している彼らにとって、一方的な要求を通す存在と言うのは、切り捨てたいと思ってもおかしくないと思います。

これで一巻の半分が終了です。

才人の修行とフーケ討伐を中心に行きたいと思います。

第一章のEDはシュノーケルの「SOLAR WIND」でお願いします。

フリಾಗグネのなぜなに質問箱(前書き)

今回はお遊びです。

質問解答となると「RADIO・KON」とどっちにしようか迷ったのですが、彼に任せると間違いなく18禁になりそうだったので、フリಾಗグネさんお願いします。

フリアグネのなぜなに質問箱

背景は色紙をざっくりと切って張っただけの、平原と空。

そこへ線が細く、白い上下のスーツを着た美男子が。

ボタンと毛糸で作られた簡素な女の子の人形が現れる。

フリアグネ（以下、フ）「狩人”フリアグネ”の！」

マリアンヌ（以下、マ）「なぜなに質問箱！」

フ「いきなり登場して誰かって？私たちのことを知らないとは…」

マ「まあまあ、フリアグネ様。今回は私たちの自己紹介も兼ねていきますので…」

フ「何、そうなのかい？愛しいマリアンヌ」

マ「ハ、ハイ。そのようです」

フ「では、簡単な自己紹介を。私の名前は紅世の王”狩人”フリアグネだ。そしてこちらが…」

マ「フリアグネ様の隣子、マリアンヌです」

フ「機会があれば、我々も登場できるかもしれないね、マリア、ブツ！」

マ「フリアグネ様！」

コン（以下、コ）「オイ、コラ！何でお前らなんだよ！俺じゃねーのかよ！」

フ「君は本編に出ているだろう。これはせめてもの救済措置という奴さ」

コ「腹立つ！すかしゃがってよお！」

マ「ま、まあ、落ち着いてください。それでは早速質問に参りましたよー！」

Q1「作者は才人やルイズが嫌いなんですか？」

フ「…」

マ「あ、あのフリアグネ様？」

フ「これ、作者に対する質問じゃないか。僕らが答えることじゃないね…」

コ「おい、折角コーナー持たせてもらったからちゃんと処理しろよ」

フ「無粋なぬいぐるみだね。私の作ったマリアンヌ様とは大違いだ」

コ「だと、コラ！」

マ「フリアグネ様。そうおっしゃらずに…」

フ「まあ、いいだろう。前話のあとがきに書いたとおり、作者は決して嫌ってはいない」

コ「んじゃ、何でぼこぼこにしたんだよ？」

フ「取り敢えず、彼がどれだけ戦いというモノを誤解しているか」

マ「どういうことですか？」

フ「この世界は彼の生きていた現代日本とは違う。魔法と言う神秘がある」

コ「ま、一護は色々と遣ってきたからな…」

フ「いきなり異世界に飛ばされてその世界の戦い方に順応できるかい。私だって出来はしない。空手の選手がボクシングのルールでボクサーに試合を挑むようなものさ。勝てるわけが無い」

マ「ええつと、彼以外の皆さんが適合できたのは確かに強いからかもしれないが…」

フ「それに加え彼らは『学んでいた』というアドバンテージが大きい」

マ「あ、まさか！」

フ「そう。戦いの作法というか、技術は喧嘩もしたことの無い彼が身に着けているはずも無い。相手が魔法使いだと分かっているなら、尚更、武器を持っていくとか、そういう事に知恵を働かせないと」

本当ならあの時点で死んで物語が終わっていたかもしれない」

マ「怖い世界ですね…」

コ「大丈夫かよ、オレ……」

フ「どうも彼は歴史と体育が苦手のようなだね。そんな彼もちゃんと帰ったら励むようになるさ」

マ「彼へのアンチテーゼというよりもジュブナイルのような方が強いんでしょうか？」

フ「そうだね。この世界を知った彼がどんな風にガンダールヴとして生きるのか。帰りたくて仕方の無い6人と違って、彼はこの世界で目標を手に入れるから、成長が楽しみだね」

マ「なるほど。才人さん、頑張ってください！」

フ「桃髪のおちびちゃんも同じかな。『貴族』という特権で偉ぶっているような人間を、彼らは嫌っている。嫌っている理由は各々違うけどね。才人君は受け入れたようだけど、ほいほいと人間としての最低限のプライドまで売るほど、彼らは簡単にはできていない」

マ「だから、あそこまで反発、というか冷たくしてたんですね…」

コ「ま、当然だろ。あんな胸のねー女、つまんねーよ」

フ「……うるさい、ぬいぐるみだね。彼女には普通かもしれないけど、彼女はどうしたんだろうね。もし、彼らが名の有る有名人だったら。思い込みで判断しているのもいけないことだよ」

マ「才人さんとルイズさんの成長と恋愛、それを軸にまた他の6人の成長もあるといいですね」

Q2 ネギの強さはどれくらい？また、他の面々の強さも知りたいです

フ「これに関しては、ネギ君は闇の魔法マキア・エヘレアを習得している状態だ。一撃の火力だけなら、多分6人の中では最高だろうと私の推察を述べ

ておく。だが、専門家に任せられた方がいいだろう」

マ「という訳でお願いします」

ジャック・ラカン（以下、ラ）「という訳でこの俺！『赤の翼』^{アラルブラ}所
属、伝説の傭兵剣士！千の刃の男！そう、この俺！ジャック・ラカ
ンだ！」

フ「……ずいぶんと暑苦しいね……。では、早速、解説を」

ラ「取り敢えず、6人と他の面々をまとめてみた！ま、あくまで目
安だけだな。大体の物理的力量的差だと思ってくれていい。つう訳で
以下の表を見てくれ！基準は才人だ！」

| | D | |
|--|-----|----------------------|
| | 0 | |
| | 0.5 | ネコ一匹 |
| | 1 | 才人たち一般人 |
| | 2 | ネギ達の平均的魔法世界の魔法使い |
| | 2 | ギーシュ（ルイズ達のドットメイジ） |
| | 5 | 旧世界の人（気未使用） |
| | C | |
| | 6 | ルイズ達のラインメイジレベル |
| | 1 | 旧世界魔法学校卒業生（全過程修了） |
| | 2 | 戦車 |
| | 2 | タバサ・キュルケ（トライアングルメイジ） |
| | 3 | 麻帆良学園魔法先生・魔法生徒の平均値 |
| | 4 | 旧世界の人（気使用） |
| | B | |
| | 5 | ネギ（ラカンの修行前） |
| | 5 | 護廷十三隊一般隊員 |
| | 5 | エドワード |
| | 5 | ルイズ達のスクウェアメイジ |

650

シヤナ 夏梨

竜種 (魔法非使用系統)

700

ネギ (ラカンの修行後)

A

1100

ネギ (闇モード発動)

1500

イージス艦

2000

タカミチ (本気がどうか疑わしい)

2200

アレン (神の道化発動)
クラウン・クラウン

ネギ (マギア・エベレア術式兵装装填状態)

一護 (始解『斬月』)

AA

2800

鬼神兵 (大戦中に利用されたもの)

AKUMA (Lv. 3程度)

3000

フェイト・アーウェルクス

3500

AKUMA (Lv. 4程度)
クラウン・クラウン

アレン (神の道化臨界点突破状態)

SA

8000

リヨウメンスクナノカミ

エヴァンジェリン (吸血鬼の真祖として)
ハイ・デイルイトウオーカー

一護 (卍解『天鎖斬月』状態)

黒の教団 エクソシスト元帥

12000

ジャック・ラカン (『赤き翼』アラルブラ所属の面々も同

格)

15000

護廷十三隊長格

一護 (卍解『天鎖斬月』 + 虚化)
ホロウ
破面 (十刃ランク)
アランカル エスパルダ

17500 藍染惣右助（崩玉を取り込んだ状態）

？ 一護（最終奥義『無月』発動）

ラ「こんな所だな」

フ「随分と頭の悪そうな図だね。これがレベルの差かい？」

コ「つか、一護強すぎるだろ！」

ラ「あいつは単純に生物としてのランクが違うからな。地獄行つてみたりして大丈夫なのかよ」

マ「ええと、これが直ぐに勝敗に直結するのでしょうか…？」

ラ「いや、そういうわけじゃねえ。単純にエドがこんなラインなのは水中、空中での戦闘手段がないからだ。もしあればグツと評価は上がる」

マ「なるほど。つまりは力量差をひっくり返すだけの戦術や戦略、あとは技術があるかですね」

ラ「そういうこつたな、ぬいぐるみの嬢ちゃん。如何に自分の有利な場に持ち込めるか。エドなんかは空飛ばれたら、打つ手ないし。

一護も虚化ホロウつつ一技あるけど、あれ体力すげえ使っらしいじゃん」

フ「これはあくまでも普通の時の状態だ。参考程度でお願いしたい。なお、作中ではAの1100を常にキープしていると思ってくれ」

コ「こつやってみるとあいつ、本当に強くなれんのか？」

フ「…っと、この表を書いてもらっている間に、時間が来てしまったようだ」

マ「ラストは駆け足で質問に答えます！」

Q3 名誉革命で打破されたのはジェームズでは？

A3 作者が不勉強で申し訳ない！私からきつく西洋史を学びなおすよつ言っておく！

Q4 同じ声の人が多いですが？

A4 同じ声？何のことかね？

Q5 今後の展開は？

A5 できるだけ、原作どおりに進めて行こうと考えている。

頑張るので、是非ともこれからも読んで欲しいとの事だ。

フ「それではこの辺で！」

マ「では、また！」

ラ「待つてるぜ！」

コ「…俺の出番がまるでねえ！」

フ「所でぬいぐるみ君。君を調べていいかい？マリアンヌを完璧な物とするために参考に…」

コ「いや、ちょっと待って…。何で来んの？ぎいやあああ！！」

こんな感じでコンのトラウマが増えていく算段です。

才人が怪我で床に伏せている頃。

ネギとシャナは図書館前で立ち往生していた。

トリステイン魔法学院の図書館は、食堂もある本塔の中にあつた。

「そこを、何とか…」

頭を下げて頼むネギに、慥然とした態度で図書館司書を見つめる、というより睨みつけるシャナ。

当然の事ながら、二人は貴族ではない。この時代、活版印刷と言ふものが発明されていない時代に本と言うのは、何枚も何枚も人力で写して複製している。

オマケに紙も製紙技術が確立しておらず、羊皮紙に書いているハルゲギニアにとって紙は一枚、一枚が高級品である。つまりは紙の集合体である本も高級品なのである。

そんな中に得体の知れない「使い魔」を入れる訳にはいかない。司書の態度は当然だった。

「そこを何とか、お願いします。文字が読めないと困るんです！」

才人が動けない間を利用して、二人は文字を習う事にしたのだ。

だからと言ってルイズを頼るのも気が引けた。彼女は今、付きっ切りで才人の看病をしている。それに余計な負担を掛けたくなかった。

「もういい、ネギ。力づくで押し通る」

直裁直情のシャナが物騒なことを言い出した。確かに彼女の体力

と身体能力なら、それも可能だろう。だが、こんな所で揉め事を起こすのは避けたかった。後々、面倒な事になる事は間違いない。

「わー！ダメですってば！」

そんなシャナを羽交い絞めにして止める。

「おや、どうされました？ミスタ・スプリングフィールドに、ミス・シャナ」

そこへ何とも都合よくコルベルが通りかかった。

ネギはコレまでの経緯を凡そ掻い摘んで話す。

彼も図書館に調べ物をしに来たらしい。彼もまた、使い魔召喚の儀で呼び寄せられた彼ら6人に興味があった。打算的な考えだが、ここで恩を売っておくのも悪くは無い。

慥然と構える少女の方は、刀を何処からとも無く出現させ、炎で戦った。

彼女の傍にいる赤毛の少年の方もまた、素晴らしい実力の持ち主であることに気が付いていた。

「ははあ、なるほど。そういうことでしたか……」

そういつと司書と一言、三言、何事か話す。そうすると二枚の紙を持って戻ってきた。

「これをどうぞ」

何事か文字が書かれた二枚の紙片を二人に差し出した。

「私は学ぶ者には誰であれ教えたいと思います。これは君たちの図

書館への許可状です」

それから薄くなった頭を隠そうともせず、ニッコリと笑って、
「無くさないでくださいね」

序でにとばかりに、コルベールは二人を連れて図書館の案内を始めた。

コルベールに促されてそこに入った時、ネギもシャナも圧倒された。本棚が見上げるほど大きく、コルベールの説明によると30メートル程あるそうだ。

メイルはハルケギニアの長さの単位で、1メートルの長さを聞いたネギは、1メートル相当と理解した。となると、本棚は30メートルということか。シャナも、その胸で見ていたアラストールもここまで圧倒的な迫力を持つ図書館にお目に掛かった事は無かった。

そう思うと、それが壁に並んでいるのは壮観の一言で、麻帆良の図書館島にも負けないと感じた。

そしてある所に止まると、そこに理路整然と並ぶ分厚い大量の本を指差し、

「ここに並ぶのは辞書です。調べ物とかに役に立つでしょう」

序でとばかりに懐から取り出した本をネギに差し出した。それ程厚い本ではないが、しっかりと読み込まれた後があつて、捲りの部分には手垢が付いている。その本をネギの手にしっかりと握らせる。

「これは私が書いた本です。宜しければ読んでください」

そう言って自分の調べ物に行ってしまった。

コルベールが去っていったのを見送ると、二人は適当に本を一冊

手にとつて見た。

そこに並んでいるハルゲギニアの文字、全くというわけではなかったが、ハルケギニアの文字は筆記体で書かれる、崩れたアルファベットにどこか似ていた。だが、そのまま読んでも、意味が通じるかというところ流石の天才二人にも自信がなかった。

「難しい…」

「取り敢えず、文字から考えると判る」

「はあ……」

「ため息を付いている場合ではない。始めるぞ」

「訳す」という作業は想像以上に難しい。

辞書を片手に文法と、単語それらを意味の通るように並べなくてはいけない。うっかりした訳にすれば、その時点で意味のわからない分になってしまう。そういった前後の整合性も重要だ。

オマケにハルゲギニアには、ネギとシャナの使ってきた言葉に訳する辞書がない。

これは相当な障害だった。

「はあ……」

図書館を見渡すネギに苦笑しながら、シャナは更に一冊の辞典を棚から取り出した。それを使って簡単な固有名詞を幾つか並べると、ネギとシャナ、それぞれ知っている文字と合わせていった。

しばらくして、何とかアルファベット26文字に対応するハルケギニアの文字が分かった。羊皮紙に対応表を書き、簡単な文章を訳し始める。

「これは、木…。これが、水かな…？」

「こっちは鉄、これは黒」

後はネギとシャナの天才ぶりが発揮された。

ネギは母国語である英語とは全く異なる言語の日本語を3週間でマスターしている。アルファベットの対応さえ分かれば、後は述語などを含めた応用だけだ。

シャナは英語だけでなく、ドイツ、フランス、その他スペイン語などもマスターしている。彼同様に素晴らしい勢いで習得していく。

「ああ、そうでした！」

そんな時、凄まじい勢いでコルベールが戻ってきた。

ネギが頭を上げて聞く。シャナは本に没頭したままだ。

「どうしたんです、コルベールさん」

「いえいえ、説明し忘れたことがあったので、戻ってきたんですよ」

頭を掻きながら、コルベールが申し訳なさそうに話す。

アラストールは奇妙な闖入者に口を鎖した。

「実は、図書館はさっきの許可証で大丈夫なんです…」

そういうとネギたちが居る方とは、ちょうど塔の反対になる場所を指差して、

「向こうの『フェニアのライブラリー』は教師以外の閲覧は不可なので、入らないように」

と簡単に説明して戻っていった。

「判りました」

「わかった」

二人がしつかりとした返事をした事を確認すると、再び戻っていた。

その後、どれだけの時間が経ったか。兎に角、二人は訳す作業に集中した。

辞典、本、羊皮紙と次々に持つ紙を替え、睨めっこしていたネギとシヤナだが、さすがに疲れたのか、「ん〜」と身体を伸ばして凝りを解した。体の節がパキ、パキと小さな音を立てる。

上手に二人とも同じタイミングで重なる。

すると、集中が切れた為、すぐ横に人の気配を感じた。

「え……わあっ！」

そこには赤色の縁をした眼鏡をかけた蒼髪の少女がいて、じつとこちらを覗き込んでいた。

二人とも本に集中していて、いつから居たのか気が付かなかった。それ程までに、この少女の存在が希薄なのか、それとも自分達が没頭しすぎていたのか。

「あの……え、と？」

「……」

こういう時にはシヤナは黙って自分のすべき事に戻って仕舞うので、必然的に聞くのはネギの役目である。彼女は矢鱈と人見知りというか、他人を避ける傾向がある。一護やアレンに懐いているのは、アラストールからして見れば奇跡にも近かった。

「字を書いてる？」

「あ、うん」

首をほんの極僅かだけ動かして、青髪の少女はネギに問いかける。背格好から自分と同じ年くらいと思ったネギは、いつもの敬語ではなく砕けた口調で答えた。ちなみにシヤナと夏梨には敬語である。同世代と思っていたら、年上だったので、かなり怒られたからだ。少女は更に問う。

「なぜ？」

「あの、僕…、というか僕ら恥ずかしいんだけど、ここの字の読み書きができないんだ」

「そう…」

青い髪の少女は何事か思案するような顔つきになった。

「ええっと、何か知ってるの？」

突然、黙ってしまった青髪の女の子をじっと見つめる。

「私は使い魔召喚の儀の時、あそこにいた。それとオールド・オスマンが言っていた」

「じゃあ、ここの生徒なの？」

ネギの問いに、少女はコクリと頷いた。そして、

「ここ、違う」

パツと羊皮紙をもぎ取り、ネギが書いていた文章を、さらさらっと羽ペンで修正した。

「ここも、違う」

シヤナが書いていた文章にも、さらさらと修正を加える。

「あ、ありがとう……。なるほど、ここ書くんだった……」

「あ、ありがとう……」

丁寧なネギと、照れくさそうにそっぽを向くシヤナ。

お礼を言う二人。どこがどう違うのか、注釈が読めなくてはこれも全く意味が無いのだが、そこは指摘しない事にした。親切心に水を差すのは心苦しかった。

「一人では文字は大丈夫でも文章は難しい。私が教えてもいい」

「本当？」

ネギの顔がパアツと華やいだ。シヤナの方も心なしか嬉しそうである。

「コルベール先生は忙しそうだから、言い辛かったんだ。助かるよ」

「助けてくれるなら心強い」

凄くほっとした様子で、ネギが言う。

だが、世の中、受けてばかりではない。それなりの対価が必要となるのが世の常だ。ギブ&テイクという奴である。

「その代わり」

「？」

「私に戦い方を教えて欲しい」

少女からの申し出に、二人は答えに窮じた。

流石に、二人の戦い方はこちらの魔法使いにできるかどうかは解らないし、何よりも出来たとしても大きなリスクが付きまとう。特にシヤナ、一護の戦い方ははっきり言って、文字通り命を削る。

「でも……」

一護の言葉を思い出し、傍に居るシヤナの射抜くような視線を受けて、ネギは困った顔を浮かべた。その困惑の表情を浮かべたことで、事情を少女もそれと無く察したようだ。

「貴方達は強い。間違いなく、私たちの誰よりも」

察していても、自分の気持ちに嘘は言えなかった。

「だから、私の師になって欲しい。私が変なことをしないように一緒にいて監視してもいい」

ネギは、少女が単なる好奇心で自分達に近づきたいと言っているのではないと分かった。その真摯な態度と眼差しは、何か他人には言えない事情があるのだと理解させた。

ネギもシヤナも同じような事情を持っている。決して他言できない過去《事情》が。

「はあ……」

半ば諦めたようにネギがため息を付く。

その様子にシヤナも諦めが付いた。

「分かった。なら、僕らと一緒に修行しませんか？」

「修行？」

少女はまた小さく首を傾げた。

「えっと、僕らだけじゃなくて、また5人も居るんです。で、その内の二人…」

白の髪、黒の法衣のアレン・ウォーカー。

橙の髪、黒の袴の黒崎一護。

二人に稽古をつけてもらえれば、自分もまだ強くなれるかもしれない。

そんな確固たる確信にも似た、希望がネギにはあった。

「二人に頼めば、もっともっと強くなれると思うよ。僕も毎朝、稽古つけてもらってるんだ」

「私も、鍛錬に付き合ってもらってる」

こちらに来た次の日の朝から、ネギもシャナも夏梨も、二人に稽古を付けて貰っている。

だが、漸く一発を入れるので、限界だった。一発入れようとする間に、十発は貰っている。それくらいに実力差があったのだ。師としては優秀である。

しばらく、少女は逡巡する。

「解った。それをお願いしたい」

開いた少女の目には、いつか見た決意の色が光っていた。

それを見たネギとシャナは、嬉しそうな顔をする。きつと、他の面々も同じように言うだろう。

「じゃあ、これからよろしくね。えっと…」

「まだ、名前を聞いていない。教えて欲しい」

そこで気が付いた。

まだ、お互いに自己紹介していなかったと言う事に。

「タバサ」

「え？」「へ？」

少女は短く、それだけ答えた。

あまりの短さに、二人揃ってマヌケな声で聞き返す。

「私の名前」

それだけと思わず口に出かかった。

てつきりルイズが舌を噛みそうになるくらい長い名前だったので、同じように学院で学んでいる貴族である、彼女もそうだと思ったが、ネギもシャナも、そういった何かしらの事情を抱えているのだろうと考え、開きかけた口を少し強引に閉じた。

それに名前の短さを笑ったら、シャナも同じである。

好きな人に付けて貰った大切な、自分の名前。タバサの名前を笑う事は自分と、自分の好きな人をバカにする事だとシャナは気が付いた。

「えっと、僕はネギです。ネギ・スプリングフィールドです」

「ネギ・スプリングフィールド……」

タバサは口に出して、反芻する。心にその名前を刻み込むかのよう。

「私はシャナ」

本当なら、フレイムヘイズとしての名乗りを上げる所なのだが、覚えられないだろうし、フレイムヘイズというのを晒すのも不味いと考えて、短く名乗った。

今までに余りした事がない、挨拶の時の笑顔だった。

「シヤナ。よろしく」

タバサの方も優しく、シヤナに小さく微笑みかける。

「じゃあ改めて……よろしく、タバサちゃん」

ネギは右手を差し出し、握手を求めた。

しかし、タバサはそれに応えず、がしっ！ と、いきなりネギの頭を鷲掴みした。

「へうつ！？」

いきなり掴まれたネギは何故なのか解らず、困惑する。

「私の方が年上……」

「えあつ！？」

きゅぴーん、とタバサの目が光り、凄い握力で万力のようにネギの頭が締め付けられる。傍から見ればじゃれ付いているように見えなくも無い。だが、内実はネギがかなり痛い仕打ちだ。

「私、15歳。あなた、10歳……」

「いだだだだだっ」

呻くネギと無表情に締めるタバサ。そんな二人をシャナはやれやれと言った調子で肩を竦めた。胸に掛けられたアラストールは声も出さずに、笑っていた。

勿論、騒ぎすぎて追い出されたのは、言うまでも無い。

Crossing the Fire girl

ネギとシャナがタバサの指導の下、簡単な言葉の手ほどきを図書館で受けていた頃。

ルイズの部屋でも一悶着起きていた。

「だ・さ・い」

そう言うのは夏梨だ。彼女の手には、お世辞にもセンスが良いとはいえない服が強く握られている。

この部屋の主は此処の所、付きっ切りで才人の看病をしている。その献身さと言ったら、態々医務室に泊り込むほどだ。お陰で4人は広々とこの部屋を使えている。

「いやいや、センス抜群だろ？」

冷徹に言い放つ夏梨に反論するのは、この服を作ったエドだ。

決闘騒ぎがあつたので、皆失念していたが、シャナと一護、そして夏梨の服はこの世界では大きく目立つ。その為にエド達に服を依頼していたのだが、

「だ・さ・い」

再び、同じように冷徹に言い放つ。

持ってこられたのはあまりにもセンスが悪い代物だった。シャナと夏梨に用意されたのはフリフリのレースに色使いも滅茶苦茶なもので、一護の服に到っては、説明するのすら躊躇われるレベルだった。

この服を選んだのは服屋に入ったエドである。

流石に肩に乗っていた騎士人形になったアルも、余りの兄のセンスの酷さ、無さに呆れてしまった。

「流石にこれは無い」

「ないですね。センスが悪すぎます」

「兄さん、僕も同感だよ」

「うっ…」

こっとうファッションの話に成ると女性は強い。

オマケに回りは全て敵だった。エドは完全に根負けしてしまった。

「じゃ、じゃあ、どんなのならいいんだよ!」

半ば逆切れ気味に怒鳴る。

自分のセンスに絶対の自信を持っていたエドは、完全に自分を失ってしまった。

「だから、これの通りに造ってくれ」

そう言っで一護はデザイン画をエドに渡す。夏梨も自分で書いたイメージ画を渡した。シャナの画は夏梨が同じようにデザインしたため、細部と色合いに違いがある程度のものである。

「えー、髑髏とか無いじゃん」

そのデザインを見て、ぶー垂れるエド。

彼は兎に角、髑髏とかドリルがカッコいいと思っているのである。その為かデザインにそれを直ぐに反映させる。これには弟も呆れるほどである。

「だから、無くていいんだよ！」
「ほんと、いい加減にしてよ！」

服にまで髑髏をつける趣味は3人とも無い。逆切れしたエドに対して、かなりイライラした調子で言う。仕方が無いので、エドは三人のための服から髑髏を取り外す。

そうするとそれなりに見られる服になった。

それからエドの錬金術で、ドンドン理想に近い服にしていく。実用性とデザイン性、両方を兼ね備えた三人の理想の形だ。

「よし、これでいいだろ」

「これ、最高！」

喜ぶ二人の傍でエドは床に腰を付けて、肩で息をしていた。錬金術といえども体力は消耗するのだ。

「お疲れさま、兄さん」

「頑張ってくれました」

服をそのまま持っていた二人からは労いの言葉が掛けられる。序でにエドは自分の為に、「十字架に掛けられた蛇^{メリクリウス}」を黒く染めた真紅のマントを、アレンの為に銀系の薔薇十字^{ローズクロス}の刺繍を入れた黒のマントを用意した。せめてものお洒落である。

所で服の出来栄は二人の理想どおりだった。

「よし、サイズもピッタリ」

夏梨の服は薄青に黄色の縁取りをされたベストに、黒の短パン。序でに白のブラウスを黒のリボンタイで可愛くも、活動的に纏めている。シャナはベストの青い部分が深紅に、そして黒のスカートに

なっている。勿論、これは御揃いだ。夏梨にもスカートが、シヤナにも短パンが用意されている。

夏梨は、その上から黒のコートを纏う。別にシヤナと違って特別な効果はないが、何となく雰囲気で作ってもらった。

「しっかり動けるな」

腕を回したり、背伸びをしたりしながら、服の様子を確かめる。窮屈でもなく、緩みすぎているわけでもない。安心、安定のフィット感だった。

一護の格好は軍服を髣髴とさせる。足元は丈夫な革で出来た軍用靴。スポンも同じように軍用のデザインである。死神の正装である死覇装を元にしながらも、この世界に良くあつたデザインになった。

「序でにコレっと…」

一護は靴と同じ革で出来た手甲を仕込んだ指貫のグローブを嵌めた。これもちゃんとフィットする。関節の動きを制限する事も無い。拳闘を主軸に置く事も多い一護にとって手の保護は絶対だった。

その出来栄えに感心する。

「ありがとよ、エド」

「お疲れ様、エド」

二人の感謝の意に、エドは短く手を上げて応える。

「じゃ、ちよつと行ってくる」

そう言っで一護は夜の帳に包まれた廊下を勢い良く駆け出して行った。

多分、戦闘に支障が無いとかを確認するためだろう。こういった装備の確認は基本である。もしもの時の為に、備えていて損は無い。

「あ、行っちゃった…」

その後姿を追いかけることなく、3人は見つめていた。

「ま、そのうち戻ってくるでしょ」

気にした風でもない実の妹の言葉に、男二人は顔を見合わせて苦笑した。

「では、寝ましようか」

「…おう。悪いけど、負ぶってつてくれ…」

促すアレンと力を使い果たしたエド。その鋼を付けた体をアレンは軽く担いで箱舟の中へと消えていった。それを追う様に夏梨も消えていく。

「…つたく、少し暴れすぎたか…？」

深夜も近い廊下を一護は何事か考え込みながら歩く。

先ほど、服のフィット感や丈夫さを確かめるために、自らの剣である背中の大刀、斬月を振るっていた。それをやりすぎて学院の城壁に大きな傷をつけてしまった。

明かにやりすぎである。

だが、最近は盗賊が暴れまわっているらしいので、あった事も無いそいつに罪を擦り付けることにした。朝になったら、エドに頼ん

で直してもらえばいい。怒るかもしれないが、
そう思いながら、女子寮の石段を登る。

「きゆるきゆる」

「ん？」

不意に何物かの鳴き声が聞こえて、振り向く。

すると、召喚された次の日の朝に会ったサラマンダーのフレイム
がこちらを見上げて見つめていた。何とも円らかな瞳で、一護のブラ
ウンの目を見つめている。

「なんだ、どうした？」

一護はこのサラマンダーがキュルケの使い魔であることをすつか
り忘れていた。犬にでも接すような調子でサラマンダーの赤い鱗を
撫でる。

傍から見れば実に変な光景である。

「お、どうしたんだ？」

「きゆるきゆる」

一護の問いに再び鳴き声で返す。質問を理解できているのか、出
来ていないのか、オコジヨのカモミールが居れば、解ったのかもし
れないが、生憎とネギに付いていつているのか、コンと一緒にエロ
談義に花を咲かせているのか、姿が見えなかった。

サラマンダーはきゆるきゆる、と人懐っこい感じで、近づいてき
た。

「どうやら害意はないようだ。」

「何なんだ……？」

するとサラマンダーは一護の造りたての服の袖を銜え、ついでこいともいうように首を振った。

「熱っ！」

その袖から伝わってくる熱さに思わず、一護は顔をしかめる。そんな抗議は無視してサラマンダーはぐいぐいと強い力で、一護を引っ張るのであった。

一護は諦めて、サラマンダーにどこかも解らない場所に連れてってもらおう事にした。

「きゆるきゆる〜」

サラマンダーに連れられていくと、そこはだれかの部屋のようにだった。この部屋はどこか見覚えがある。ルイズの部屋も近い。

三つ並んだ戸のうち、真ん中の戸を開けてサラマンダーは入っていった。消える前に「入って来い」と言いたげな目で、一護を見る。

「はあ……」

ボリボリと面倒臭い様子で、頭を掻き毟る。

サラマンダーに促されるように、ガチャリと扉を開けて中に入ると、部屋は真っ暗だった。先に入ったサラマンダーの周りだけ、ぼんやりと明るく光っている。

暗がりから、女の声がした。どうやらこの声の主が、この部屋の住人らしい。

「扉を閉めて？」

一護は言われたとおりに閉める。

「ようこそ。こちらにいらっしやい」

「何も見えねーぞ」

さしもの死神も夜目は人間と同じである。暗闇を明るくする方法は無いのだが、あんまり上手くない一護は爆発させてしまう可能性があった。

一護の声を聞いた女の指を弾く音が聞こえた。

すると、部屋中のロウソクが、ぼっ、ぼっとリズム良く一つずつ灯っていく。

最後に女のそばのロウソクが灯り、ぼんやりと、淡い幻想的な光の中に、ベッドに腰掛けたキュルケの悩ましい姿があった。

「ふふふ」

キュルケは艶やかに笑う。

使い道は「男を誘惑するため」そうとしか言いよの無い下着を付けている。というよりも、それだけしか付けていない。一糸纏わぬ姿まで、あと一歩という感じである。

そして、メロンのような胸がレースの下着を持ち上げている。

「そんなところに突っ立ってないで、いらっしやいな」

キュルケは、色っぽい声で言った。

「…えっと、誰だっけ？」

頭に手を当てて、考え込む一護。必死になって記憶の底を浚う。だが、同然のことながら、サラマンダーのフレイムすら覚えてい

無いのだから、キュルケのことも一護は覚えている筈がない。というより覚える気が無かった。

「…え？」

異性に名前を忘れられたことなど今までになかった、初めての経験だったキュルケが驚く。

「キュルケよ！キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー」

再び、相も変わらず舌を噛みそうな名前を、すらすらと並べ立てる。

その流れるような自己紹介に、一護は口にも出さず感心した。

「覚えてない!？」

「あー」

記憶の底に溜まったモノまで浚い終えた一護が唸った後、キュルケは言った。

「座って？」

一護は一回一回逆らうのも面倒だったので言われたとおりに、キュルケの隣に腰掛けた。

決して口には出さないが、一護は「こんな夜に何のようだ」と言わんばかりの顔をしている。

「なんで下着姿なんだ？」

ここに入った時から疑問だった一護はさつきよりも強く頭を掻き
篦りながら、かなりやる気のない声で言った。そんな彼に燃えるよ
うな赤い髪を優雅にかきあげて、キュルケは一護を見つめた。

じっと見つめる灼熱にも似た目が、澄んだブラウンの瞳を映し出
す。

説明の少ないキュルケに、一護の目は更に釣りあがり、眉根に深
い皺が刻まれる。

それをキュルケが、緊張していると見て取り、大きなため息をつ
いた。そして、悩ましげに首を左右に振った。

「あなたは、あたしをはしたない女だと思つてしょうね」

「そうだな」

イライラした口調の一護。

「思われても、しかたがないの。わかる？あたしの二つ名は『微熱』

」

「『情熱』の間違いだろ」

どこまでも面倒な感じで応える。

正直、一護はキュルケと同じレベルの女性なら何度も見てきてい
るし、同じようなアプローチを受けてきた。今更こんな事をされて
も、顔は同レベルでも、スタイルが劣るなら興味が沸かないのだ。

「あたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの」

「松明じゃねーだろ。直ぐ燃え尽きるくせに」

更に皮肉を交える。

一護のじわじわと利くボディブローはどうやら効果が無いようだ。
ケロリとした顔で淀みなく続ける。確かにこの持続力は松明だった。

「だから、いきなりこんな風にお呼びだてしたりしてしまうの。わかってる。いけないことよ」

「じゃ、辞めるよ」

一護の言う事は尤もであるのだが、悉く無視される。

「でもね、あなたはきつとお許しくださると思うわ」

キュルケは潤んだ瞳で一護を見つめた。

どんな男でも、キュルケにこんな風に見つめられたら、コロリと
いってしまう。キュルケにはそれだけの自信と、それを叶えるだけ
の自身が在ったのだが、一護にはいまいち効いていない。

「さつきから何言ってるの?」

そろそろイライラもピークである。中学時代から喧嘩を売られる
事が多く、直ぐに手が出ていた頃から比べると、人の話を少しは聞
くようになっただけ十分な成長である。

だが、ここまで無視されると、流石に面白くない。

一護の質問を続けざまに無視して、キュルケは、すっとさつきま
で斬月を握っていた手を、優しく握ってきた。そして、こう言った。

「恋してるのよ。あたし。あなたに。恋はまったく、突然ね」

「そうか。それは良かった。じゃ」

一回一回呆れるほどに演技染みた、キュルケのやれやれと言った
調子の台詞。

それに励ますでもない事を言っただけ帰ろうとする一護。だが、その
一刻も早く帰りたい腕を掴む。

「待つて！」

キュルケの顔は真剣そのもので言う。

「私が今、恋してるのはあなたよ。黒服のお兄さん…」

確かに一護はキュルケよりも年上だろう。

だが、あんまり「お兄さん」と呼ばれるのはしっくりこなかった。というよりもムカついた。

「あの決闘の時に見せてくれた妹を見守るような視線」

大仰な台詞回しで先の決闘のシーンを思い出す。

そう言えば、青髪の女の子の傍に居たなと此処に到って漸く思い出した。序でに医務室に案内してくれた少女だという事も。

「信じられる？その視線に痺れたのよ！！情熱！！あああ、あなたの言つとおり情熱だわ！！」

「俺、そんな事、全く言つて無いけど？」

思い当たる節のない一護は腕を組んで、考え込んだ。

「二つ名の『微熱』はつまりあなたの言つとおり情熱なのよ…」

ぱあつと真昼の太陽のような顔で一護に迫ってくる。

「その日から、あたしはぼんやりとしてマドリガルを綴ったわ。マドリガル。恋歌よ？」

「知らねーよ」

一方的にそんな事を言われても困るだけだ。

大体、死神の世界に恋歌などという文化はない。

あくまでも冷静に、そして冷徹に応える。最初から面倒臭さはフルスロットルであるが、ここまでくるとフルスロットルを大きくオーバーしそうだ。

「あなたの所為なのよ。イチゴ」

何がどう自分のせいなのか。

説明する言葉が不足しすぎていて、何が言いたいのか一護は今ひとつ理解できないでいた。

「あなたが毎晩あたしの夢に出てくるものだから、フレイムを使って様子を探らせたり……」

「ストーリーかよ……」

一応は自分の隠しておきたい部分は見られていないはずだ。

もし、見られていたら確実に自分と距離を置こうとするだろう。

「ほんとに、あたしってば、みっともない女だわ。そう思うでしょうっ？」

「ああ、思う」

いつになったら終わるんだろう。

遠くに見える星を窓越しに見ながら、そう思った。

「でも、全部あなたの所為なのよ」

(井上とか、たつきとか、こんな調子の奴、居たっけ……?)

「恋と炎はフォン・ツェルプストーの宿命なのよ。身を焦がす宿命

よ

そんな事を言われても正直、困る。

「恋の業火で焼かれるなら、あたしの家系は本望なのよ」

ぼんやりと自分の妹も含めた自分の周りの女性の顔を思い出してみる。

一護がそんなことを思いながら沈黙してるのを見てキュルケは、イエスと受け取ったのか、ゆっくりと目をつむり、唇を近づけてきた。

「…まずくない？」

キュルケの態度にイライラから、恐怖というか、危機感を感じる。

(しかしな…)

ぼんやりと褐色の肌を見つめながら、一護は考える。

多分こちらの褐色の女の方が年上だろうが、キュルケとルイズは年はあまり変わらないだろう。

しかし、いかんせん発育が違いすぎる。

キュルケは大振りのメロンが二つ、体にくっついていていいのかのような胸で、ルイズは大平原、まな板みたいな胸で、2つも年下の夏梨にも、惨敗している。

神つてのは等しく平等に物を分け与えるはずなのに。

(ああ、それより俺の身が危ないな)

そう思い、一護は立ち上がる。

散々お膳立てしたのに梯子を外されてしまったキュルケはキョトンとしていた。

「俺、帰るわ。んじゃ」

それだけ言って、再びドアノブに手を掛ける。

だが、それに反して今度は後ろから抱きつかれた。背中にむにゅんと胸の感触が広がる。

「ダーリンの！そういうところが素敵！」

「うるせー！」

キュルケがそう言ったとき、窓の外が叩かれた。二人は窓の方へと顔を向ける。

そこには、恨めしげに部屋の中を覗く、一人のハンサムな男の姿があった。

「キュルケ……」

少年はそこに悲壮とも、嫉妬とも付かない表情を浮かべていた。

「待ち合わせの時間に君が来ないから来てみれば……」

どうやらキュルケは約束をすっぱかして、一護にアピールしていたらしい。

流石に気の毒すぎるだろうと、一護は思ったが、流しておいた。今は一分一秒でも早くこの部屋から出て行きたい。そうしないと自分の身が危ない。

「ベリッソン！ええと、二時間後に」

「話が違つー!」

ペリッソンと言われた少年の恨みがましい視線の行き先は一護だ。

ここは確か、三階である。

どうやらペリッソンと呼ばれたハンサムは魔法で浮いているらしい。

「ああ、もう!」

キュルケは煩そうに、胸の谷間に差した派手な意匠が施された魔法の杖を取り上げると、ハンサムがいる方を碌に見もしないで杖を振る。

するとロウソクの火から、炎が大蛇のように伸び始め、そのまま窓ごと男を吹っ飛ばした。

一瞬だけ悲鳴が上がって、直ぐに消えた。というか落ちていった。

「まったく、無粋なフクロウね」

「え、大丈夫、彼?」

一護は真顔でキュルケに訊くが、キュルケには耳がないようである。

全く聞いていない。

「でね?聞してる?」

「その台詞、そっくりお返しするぜ」

早くも一護の嫌な予感が当たってしまった。

「彼はただのお友達よ。とにかく今、あたしが一番恋してるのはあ

なたよ！！」

キュルケは色気たっぷりにそう言つと一護に再び唇を近づけた。だが再び、今度はコンコンと窓枠が叩かれた。

二人は再び窓の方へと顔を向ける。

風を遮るものがなくなつたそこには、ハンカチをくわえて悲しそうな顔で部屋の中を覗き込む、精悍な顔立ちの男がいた。さっきの奴よりは体格が良くてなかなかの良い男であつた。

「キュルケ！その男は誰だ！！今夜は僕と過ごすんじゃないのか！！」

「ステイツクス！ええと、四時間後に」

「そいつは誰だ！キュルケ！」

怒り狂いながら、ステイツクスと呼ばれた男は窓枠に足を乗つけて部屋に入ってこようとしたりした。

キュルケはさっきと同じように無表情で、再び杖を振った。

さっき起きたことがまるでコントの天井のように起きて、男は煌々と燃える炎にあぶられ、地面に落ちていった。

「……………」

一護は無言で呆れた後、ジト目でキュルケを見つめる。顔が引きつっているのが、自分でも良くわかつた。

「彼は、え〜と。友達というよりはただの知り合いね」

かなり苦しい言い訳である。

「とにかく時間をあまり無駄にしたくないの」

再び、真面目な顔に戻る。

喋っている事はまともだが、やっている事はかなり不貞な事である。

「夜が長いなんて誰が言ったのかしら！瞬きする間に、太陽はやってくるじゃないの！」

キュルケは、またまた一護に唇を近づけた。

「キー！！何でだ！？」

ついさっきまで窓だった壁の穴から、そういった感じの悲鳴が聞こえた。

一護は、

「またかよ……」

と呟きながら、やる気のない目をして振り向く。

窓枠で、三人の男が押し合い、へし合いしている。その状況はかなり滑稽だった。三股、正確には5股を掛けられていた事に気が付いていないのだから。

三人は同時に、同じセリフをはいた。

「……キュルケ！そいつは誰なんだ！恋人はいないって言ってたじゃないか！」「」「」

「マニカン！エイジャックス！ギムリ！」

来る男、来る男、全員が今までやってきた男と違う事に、柄にも無く一護は感心した調子でキュルケを見て思った。勿論、感心の中

には非難がましい目線も混じっている。

これを見ていると決闘にまで発展したギーシュの二股と比べると、彼など可愛いものだ。

「…ええと、六時間後に」

ちよつと壁に視線を移して逡巡した後、キュルケが面倒そうに言った。

「「朝だよ!」「」

三人は仲良く叫ぶ。

それに対し、キュルケはうんざりした声で、サラマンダーに命令した。

「フレイム!!」

きゆるきゆると部屋の隅で寝ていたサラマンダーが起き上がる。

そして、三人が押し合っている窓だった穴に向かって、勢い良く炎を吐いた。先の二人と同じように地面へと落下していく。

「彼らは?」

「知り合いでもなんでもないわ…」

ジト目と眉間の皺を更に深く刻みながら、一護が尋ねる。一応、帰ってくる言葉が予想が付いていたが、ここまで予想通りだと泣けてくる。

明かに嘘だ。目が泳いでいる。

「と・に・か・く!」

キュルケが仕切りなおすように叫ぶ。

「私が今、恋してるのはイチゴ！あなたなの！」
「うるせえんだよ！」

遂に一護が切れた。
だが、

「そうね…。相手を怒らせるなんてあたしはまだ子供ね」
「あれ？」

予想の斜め上の解釈が返って来た。

「だけど積極的なのはしかたがないじゃない」

オマケに反撃がきた。

「恋は突然だし、すぐにあたしの体を炎のように燃やしてしまうんだもの！……！」

「知らん。っーか帰らせてくれ」

キュルケの言葉を無視して、一護は立ち上がった。

そして、扉の前に立ちドアノブに手をかけるとまた再び、キュルケが抱きついてきた。

「そういう連れない所が本当に素敵！」
「知るかぁ！」

抱きついてきたキュルケの襟を掴み、ベットへと投げ返す。

どたんと凄まじい音がして、ベットがギシギシと軋んだ。

「じゃあ俺、寝るから」

あくびをしながら気絶しているかもしれないキュルケに一護は言った。

それだけ言い残すと、部屋を出て行った。フレイムは主人の看護か、一護を追うか逡巡していたが、ベットへ駆け寄った。

「きゆるきゆる？」

心配そうに鳴くが、キュルケは気絶もしておらず、真っ直ぐに天井を見つけていた。

むくりと起き上がる。

「大丈夫よ、フレイム……」

心配してくれる自分の使い魔に優しく微笑む。

「それよりも……」

さっきまでの流れを思い出して、考える。

「ますます、惚れたじゃないの……」

「ぶえつくし！」

「一兄、風邪？」

箱舟に戻ってきた一護は大きなくしゃみをした。

Crossing the Fire girl (後書き)

三人の服はかなり悩みました。

参考に解りやすく絵を描ければよかったです。生憎とそのような技術は無いので勘弁していただきたく思います。

気になる方は夏梨とシヤナは、イメージとして尚村透作「失樂園」を。

一護の方はアメストリス国軍服の黒カラー、若しくはウルキオラのデザインの黒カラーだと思ってください。

エドのセンスの無さは作中でも指摘されている通りです。何で彼はあそこまで独創的なセンスを持っているのでしょうか。流石に持つものなら未だしも、良く着る服にその趣味を反映させるのは如何なものかと思えます。

特に相手は女性ですから、碌に服を着替えない彼と違って、それなりに二人ともお洒落には気を張っていますから。

キュルケの男性遍歴というのも見てみたい気がします。絶対に腰を抜かすと思いますが。

所でBLEACHの女性陣の面々は中々にスタイルの良い方ばかりです。乱菊・織姫を筆頭にたゆんたゆんな方達ばかりです。例外もありませんが、キュルケやティファと誰が一番スタイルが良いのか。測ってみるのも面白いかもしれません。

是非、この人という意見をください。

少なくとも、夏梨と遊子には勝ち目はないでしょうけども。

LESSON START (前書き)

第二章の開始です。

OPテーマはBEST CRUSADERSの「TONIGHT
TONIGHT TONIGHT」でお願いします。

LESSON START

「はあ、はあ…」

既に何時から息は絶え絶えだったのか。それすらも判らないほどに奔り続けていた。目の前は鬱蒼と生い茂る熱帯の木や花、美味しそうな実もあるが、毒があるかもしれない。だが、今はそんなモノに目を奪われている暇はない。

足をいくつものシダ植物が絡めるが、それでも必死に動かす。

「くそ！何なんだアレ！」

後ろからは自分の身の丈程の巨大な剣を持った鎧が追って来るのだ。日本でいう武者鎧とは違って、板金の騎士の鎧だ。あれが自分に振り落とされたらと思うと、気が気でない。

何せ、こちらの武器はこのジャングルに入る前にエドから渡されたナイフが一本だけ。

これで、どうやって立ち向かえばいいのだろうか。

ガチャン、ガチャンと鳴り響く鎧の音が一層、恐怖を掻き立てる。

「にしても…」

才人は呟く。

「魔法世界に来てまでジャングルって…、ネギもアレンもすげえよ…」

鎧が奏でる死への独奏曲が小さくなっていく。どうやら見失ってしまったらしい。

ここへ来て既に3日。そろそろ、食事も碌なものを取っておらず、精神も肉体も限界に近かった。

何故、才人が一人でこんな熱帯のジャングルにいるのか。

話は3日前に遡る。

ギーシュとの決闘、という名の一方的な私刑制裁でボコボコにされてしまった才人は、しっかりと皆の前で宣言した。「強くなりたい」と。その意思を汲んでくれたのか、それとも自分たちの修行のついでなのかは知らないが、ここへルイズとタバサも加えた9人で修行が始まる運びになった。

その修行初日。

すっかり傷もエドの手によってふさがれ、体力も全快とまでは往かないが、それなりに動ける程度には回復した才人はアレンの案内で白い水晶のような物体の前に立たされていた。

場所はルイズの部屋。

才人とルイズ、そしてタバサと何処からそれを聞きつけたのか、キュルケまでがやって来ていた。

「ゼロのルイズ。何、あなた達こんなおもしろそうな事、やろうとしているの?」

ニタニタと精一杯のからかいを込めた笑顔でルイズを挑発する。勿論、ルイズとて遣られっぱなしではない。こちらも出来る限りの虚勢を張って答える。

「ふん、今に見てなさいよ。修行が終わったら、私を誰も『ゼロ』なんて呼ばなくなるわ」

何せ、キュルケの実家があるツエルプストーとルイズの実家があるラ・ヴァリエールはちょうど国境線を挟んでいる。つまりはトリステインとツエルプストー領がある隣国であるゲルマニアとは、開戦の口火が開かれる度に、真っ先に戦ってきた仇敵なのである。

尤もこのトリステインとゲルマニアの状態が比較的安定しているここ50年程は、お互いが殺しあうという事はないのだが、一度残された記憶と恨みは何よりも根深く、親から子へ受け継がれているのだ。

「ていうか、何でアンタがいるのよ!」

根本的な問題として、ルイズは疑問を呈した。

「私が誘った」

「はあ?」

ルイズの疑問に変わりに答えたのは、ぼんやりと本を読んでいた眼鏡の女の子だった。

「そうよ、ルイズ。私はタバサに呼ばれてきたの。あなたのことは関係ないわ」

「ぐぐぐ...」

何故、タバサが入ってきているのかは判らない。だが、基本的に独占欲の強いルイズは自分だけが受けられると思っていた修行が3人も増えたことが腹立たしいようだ。

「ま、まあ、そう言わずに...」

病み上がりの才人が窘めるが、ルイズとキュルケの睨み合いは終

わらない。

「はいはい、皆さん。そこまでにして下さい」

にゅつと白い水晶の中から出てきたのは、いつもの黒い法衣ではなく、漆黒のスーツに身を固めたアレンだった。その光景にキュルケとタバサは、目を点にしていたが、何度か見ていた才人とルイズは指して驚かなかった。

「皆さんを修行の場へと案内します。既に皆さん、始められていますので宜しくお願いします」

そういうと踵を返して、再び中空に浮かぶ白水晶の中へと滴が水面に落ちるように消えていった。その様子にあっけに取られていたが、タバサが意を決して触れてみると、自分もすつとアレンと同じように消えていった。タバサを追う様に3人も続く。

才人とルイズは得体のしれないモノに入る恐怖があったので、少しでも目を強く瞑る。体がふわつと一瞬だけ軽くなると、また再び足元に固い感触が現れた。

ゆっくりと目を開けるとそこには、

「何だよ…、この空間…」

「凄い、なんてもんじゃないわ…」

広く広大な石造りの家が立ち並ぶ、大通りだった。しっかりと組み合わされた石は、同じ石製の建築物が多いトリストインよりも圧倒的に技術のレベルが違う。いや、レベルと言うよりも根本から違うような気がした。

「あ、皆さん。来られましたね。こっちですよ」

この一週間ほどで見慣れた白髪頭の少年が先に立って案内する。通りの幅が7メートル程度の道はトリスティンにはない。首都トリスタリアの宮殿へと通じる大通りであるブルドンネ街でも5メートルも無いのだ。

ルイズはちよつとだけ悔しくなった。

少し歩くと、ちょうど街路の交差点なのか、噴水が設置された公園にたどり着いた。

そこでは何か大きな袋を担いだエドと、白いローブに身を固めたネギが何事か話し合っていた。

「ですから、僕の世界にはこういった理論で飛ばす物がありました
…」

「待て待て、それだとおかしくないか？」

「いえ、実はその理論は否定されているんです」

「え、マジで？」

4人には全く理解できない小難しい単語が飛び交っている。議論に白熱しているので4人が到着した事に気が付いていないようだ。アレンが二人の肩を叩いて漸く、才人達のほうへ向いた。

「よ、元気になったみたいだな」

エドが軽い感じで才人に話しかける。良く目立つ赤いコートが実に彼らしいと思う。

「ええ、おかげさまで」

才人が頭を下げる。後で自分の怪我を治したのがエドだと聞いていた才人は退院したら、お礼を言おうと心に決めていた。礼を言わ

れたエドは頭を掻きながら、簡単に言う。

「何、ちょっとした気まぐれだ」

「それよりも…、ネギ君」

アレンに促されて、ネギが喋り始める。4人には話していないがこの10歳の少年、元の世界では中学の英語教師をしていた位に頭がいい。それも他人に解説したり、説明したりできる本当の頭の良さを持っている少年なのだ。

「えっと、皆さん。皆さんにはコレを使ってもらいます」

そういつて一歩右へ動き、後ろに隠していたものを見せる。

才人はそれを見て、精巧なミニチュアだと思った。勿論、科学技術に深くないルイズ達はポカンとしていた。高い尖塔を持った城のミニチュアが入った球が中心にあり、そこから6つの管が伸び、また球があるのだ。ここまで精巧で、それでいて互換性の有る代物はハルゲギニアでは作られていない。

「これは？」

タバサが尋ねる。

「これはですね…」

「これはドライオマ魔法球！1日が24日になるっていう代物だ！」

「あ、あのエドさん…」

ネギの説明をエドが強引に奪う。

ルイズたちは説明が適当すぎて付いていけない。

もう一度、ネギが一から説明を始める。錬金術師であるエドは、

基本的に自分の研究を秘匿するために暗号で研究書を執筆する。そのためか、他人に説明することが苦手なのだ。尤も、彼の説明というか自然科学分野に関する知識はレベルが違いすぎて、理解できる人は早々いないのであるが。

「これはこちらでの1日を24日として生活できるものなんです。ですから、この中で修行すれば、こちらでの短い時間で多くの経験を積むことが出来るんです」

「あ、なるほど」

才人だけは得心が行ったようである。時間の概念が今ひとつないルイズ達と違って、才人は現代日本の男子高校生である。常に一定の時間に追われている生活をしている。そんな彼だからこそ、一番に理解できたのだ。

「でも、どうやって入るんだ」

「簡単ですよ。これに手を当てて下さい」

そう言って4人を促す。

「どうということよ？」

ルイズは訳がわからないと言った様子で尋ねるが、その目の前でシュツ、シュツと6人が次々と消えていった。

「あ、あれ？何処行ったのよ」

アレンも、ネギも、エドも。

さっきまで言い合っていた才人も、キュルケも、タバサも。いきなり影も形も消えてしまった。

才人たちがダライオマ魔法球の中へと消えていた頃。

学院長室では、秘書のミス・ロングビルが書き物をしていた。

ある程度の仕事を終えて、彼女は手を止めると、学院長であるオスマンの方を見つめた。

そのオスマン氏はセコイア製の立派な造りの机に伏せて居眠りをしている。

ミス・ロングビルは薄く笑った。学院長だけではない、少なくともこの学院の誰にも見せたことのない黒い笑みであった。

「良い夢を、学院長…」

しっかりとオスマンが眠っていることを確認すると、ゆっくりと立ち上がり、呟くように消音のための『サイレント』の呪文を唱える。

オスマンを起こさないように自分の足音を消して、学院長室を出た。

ミス・ロングビルが向かった先は、学院長室の一階下にある宝物庫である。この中で管理されている物の管理や、盗賊などからの防衛というのも、学院長の仕事の一つである。

階段を下りて、鉄の巨大な扉を見上げる。扉には、梁に使われるようなぶっとい鉄製の門がかかっている。門はこれまた巨大な錠前で守られている。

「やっ、うっね…」

ここには、魔法学院成立以来の秘宝が収められているのだ。

ロングビルは、慎重に辺りを見回すと、杖を取り出した。鉛筆くらいの長さだが、彼女が軽く振るとするすると伸びて、オーケストラの指揮者が振るような指揮棒くらいの長さになった。

ロングビルは低く呪文を唱えた。

詠唱を終えると、杖を錠前に向けて振った。

しかし…、錠前からは何の音もしない。

「まあ、ここの錠前に『アン・ロック』が通用するとは思ってないけどね」

くすりと妖艶に笑うと、ロングビルは自分の得意な呪文を唱え始めた。

それは『錬金』の呪文であった。誰にも聞こえないように、しかし、朗々と呪文を唱え、分厚い鉄のドアに向かって杖を振る。魔法は扉に届いたはずだが、しばらく待っても変わった所は見られない。

「スクウェアクラスのメイジが『固定化』の呪文をかけているみたいね」

ロングビルは呟いた。『固定化』の呪文は、物質の酸化や腐敗を防ぐ呪文である。

これをかけられた物質は、あらゆる化学反応から保護され、そのままの姿を永遠に保ち続ける。

だが、酸素や窒素といった元素、元素化合物といった化学のないハルゲギニアのメイジにとっては、物体が変わっているという程度の認識であるが、それでもその変化を防止できる『固定化』の呪文は思いの外、ポピュラーな呪文なのである。

『固定化』をかけられた物質にはロングビルの掛けた、物質の素材そのものを変化させる『錬金』の呪文も効力を失う。呪文をかけ

たメイジが、『固定化』をかけたメイジの実力を上回れば、その限りではないが。

「さって、どうしましょうか？」

しかし、この鉄の扉に『固定化』の呪文をかけたメイジは、相当強力なメイジらしい。学院長つきの秘書とは言え、『土』系統のエキスパートであるロングビルの『鍊金』を受けつけないのだから。ロングビルは、ずれたメガネを直し、何事か思案して扉を見つめていた。

そのとき、階段を上ってくる足音に気づく。

その足音を警戒した彼女は杖を縮めてポケットにしまった。

現れたのは、コルベールだった。

「おや、ミス・ロングビル。ここでなにを？」

コルベールは間の抜けた声で尋ねた。ロングビルは愛想のいい笑みを浮かべた。

「ミスタ・コルベール。宝物庫の目録を作っているのですが……」

「はあ…、それは大変だ。一つ一つ見て回るだけで、一日がかりですよ」

ロングビルの任された仕事に、やれやれと言った様子でコルベールは肩を竦める。彼も学院に奉職して長い。オスマンに付き合い、この部屋の掃除を手伝ったこともある。

「何せここにはお宝ガラクタひっくるめて、所狭しと並んでいますからな」

「でしよっね」

くすりとほほえましく笑うロングビルに、優しくコルベールは言った。

「オールド・オスマンに鍵を借りればいいじゃないですか」

ミス・ロングビルは微笑んだ。

「それが……、ご就寝中なのです」

上の階でぐっすりと寝ている学院長の顔を思い出しながら、答える。

「まあ、目録作成は急ぎの仕事ではないし……」

「なるほど、ご就寝中ですか」

がっくりとさつきよりも大きく肩を落す。

「あのエロジジイ、じゃなかった、オールド・オスマンは寝るとなかなか起きませんからな」

学院長に用があつてここまで来たのに、寝ているのでは無駄足になつてしまう。コルベールは起きているタイミングでもう一度来ることにした。

「では、僕も後で伺うことにしましょう」

コルベールは歩き出した。それから、ふと立ち止まり、振り向いた。

「その……、ミス・ロングビル」
「なんででしょう?」

照れくさそうに、コルベールは口を開いた。

「もし、よろしかったら、なんですが……。昼食をご一緒にいかがですか?」

ロングビルは、少し考えた後、にっこりと微笑んで、申し出を受けた。

「ええ、喜んで」

コルベールは内心、飛び上がって喜んだ。だが、それを一片たりとも顔には出さない。一応は彼も常識ある教師なのである。2人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・コルベール」

ちよつとくだけた言葉遣いになって、ミス・ロングビルが話しかけた。

「は、はい?なんででしょう」

自分の誘いがあっさりを受け入れられたことに気をよくしたコルベールは、跳ねるような調子で答えた。

「宝物庫の中に、入ったことはありません?」

「ありますとも」

「では、『破壊の杖』をご存知?」

「ああ、あれは、奇妙な形をしておりましたなあ」

顎に手を当てながら、その杖の形を思い出す。コルベールの見た感じでは到底、杖とは言えない様な独特の形をしていた事を思い出す。

その答えにロングビルの目が光った。

「と、申されますと？」

「説明のしようがありません。奇妙としか。はい」

これは本当だった。

それよりもコルベールはしたいことがあった。

「それより、なにをお召し上がりになりますか？本日のメニューは、ヒラメの香草包みですが……。なに、僕はコック長のマルトー殿に顔が利きますから、僕が一言言えば、世界の珍味、美味を……」

コルベールと言えども男であり、美人の気を引きたいと言う欲望はあるのだ。

「ミスタ」

ミス・ロングビルはコルベールのおしゃべりを遮った。

「は、はい？」

「しかし、宝物庫は立派なつくりですわね」

梁のような門、手のひらには治まりきららないほどに巨大な錠前。どれも盗まれないための工夫だ。

「あれでは、どんなメイジを連れて来ても、開けるのは不可能でしょうね」

「そうですね。メイジには、開けるのは不可能かと思えます」

この学院の創立からこの宝物庫はあつたらしい。

大事な品をいくつも締まっているのだ。それを誰にも奪われないための工夫がなされている。

「なんでも、スクウェアクラスが何人も集まって、万事に對抗できるように設計したそうですね」

「ほんとに感心しますわ。ミスタ・コルベールは物知りでいらっしやる」

ロングビルは、コルベールを頼もしげに見つめた。

「え？いや……。はは、暇にあかせて書物に目を通すことが多いもので……」

さっきの発言も『トリステイン魔法学院沿革史』という本を読んだ時に見つけた記述だ。真偽の程は流石のコルベールにも確かめようが無い。

「研究一筋と申しましょうか。はは、おかげでこの年になっても独身でして……、はい」

自嘲気味に言うコルベールに、

「ミスタ・コルベールのおそばにいられる女性は幸せでしょうね」

ロングビルは優しく囁く。

「だって、誰も知らないようなことを、たくさん教えてくださるんですから……」

更にうつとりとした目でコルベールを見つめた。

「いや！もう！からかってはいけませんよ！はい！」

コルベールはかちこちに緊張しながら、禿げ上がった額の汗を拭いた。それから、真剣な顔で、ロングビルの顔を覗き込んだ。

「ミス・ロングビル。次のユルの曜日に開かれる『フリッグの舞踏会』はご存知ですか？」

「なんですか？それは」

舞踏会と言うからには、舞踏をする会なのであるが、それが唐突に出てくる意味がロングビルにはわからなかった。

「ははあ、貴方はここに来てまだ二ヶ月ほどでしたな」

それなら仕方ないと言う風にコルベールは笑う。

「その、なんてことはない、ただのパーティーです」

やたらと「ただ」のを強調して言うコルベール。

「ただ、ここで一緒に踊ったカップルは、結ばれるとかなんとか！そんな伝説がありましたよ！」

「それで？」

コルベールの慌てながら喋る調子にロングビルはにっこりと笑って促した。

「その……、もしよろしければ、僕と踊りませんかと、そういうことで。はい」

「喜んで。ですが……」

そこで少しだけ憂いに沈んだ表情を作る。美人がするとそれはもう破壊力抜群である。

「舞踏会も素敵ですが、それより、もっと宝物庫について知りたいわ。私、魔法の品々にとっても興味がありますの」

コルベールはミス・ロングビルの気を引きたい一心で、頭の中を探った。宝物庫、宝物庫と……。

やっと、ロングビルの興味を引けそうな話を見つけたコルベールは、もったいぶって話し始めた。

「では、ちょっとご披露いたしましょう。たいした話ではないのですが……」

「ぜひとも伺いたいわ」

興味津々といった様子でロングビルが、コルベールに迫る。

「宝物庫は確かに魔法に関しては無敵ですが、一つだけ弱点があると思うのですよ」

人差し指を立てて、まるで言い聞かせるような調子で喋りはじめた。

「はあ……………、興味深いお話ですわ」

「それは……………、物理的な力です」

「……………物理的な力？」

問題解決の糸口を見つけたロングビルは、更にコルベールに近づ

く。
「どんどん近づいていくのだが、美人と一緒に居られることよりも、美人に自説が語れる喜びのあるコルベールはその事に気が付いていない。」

「そうですね！例えば、まあ、そんなことはありませんのですが、巨大なゴーレムが……………」

「巨大なゴーレムが……………？」

コルベールは得意げに、ミス・ロングビルに自説を語った。聞き終わった後、ミス・ロングビルは満足げに微笑んだ。

「そうですね……………」

コルベールの話聞いたロングビルは、妖艶な笑みを再び浮かべた。それは学院の秘書と言うには似つかわしくない笑みであったが、一緒に食事が出る事にすっかり舞い上がっているコルベールは気が付かなかった。

舞台は戻り、今度はネギの魔法球の中。

「…みんなっ！」

シユタツとルイズが降り立つ。傍に居たのは憎き仇敵のキュルケだけだった。

「やっと来たわね、ルイズ」

「ちよつと、アンタだけ？他の皆は？」

自分を待っていたのがキュルケだけだとは随分な扱いである。

心の中ではまだ、7人を下に見ているルイズはこの扱いに怒っていた。

「…私に怒るよりも、周りを見て御覧なさいな」

キュルケに言われて気が付く。

「な、何よ！コレ！」

周りは断崖絶壁。ただ、それも切り立った自然物というよりは見事に整地されたつかみ所の無い塔の頂上だった。手すりも無く、自分の顔と桃色の髪を吹き抜ける風が弄る。

奥には見たことの無い植物が鬱蒼と生い茂る森、そしてその緑に囲まれるように、白く高い尖塔が聳え立つ城があった。

「全く、何よコレ！私なんかよりもずっと立派じゃない」

この魔法球の持ち主、ネギ・スプリングフィールドの立派さに、ルイズは自分の身の小ささを嘆いていた。だが、そんな落ち込みをチャラにする以上の面白いネタが目の前に転がっていた。

「所でキュルケ、あんた足が震えてるわよ」

「…ふ、ふん！『ゼロ』のアンタに心配されたくないわよ。これは武者震い！」

精一杯強がっているが、明かに足が震えている。勿論、それはルイズも同じだったのだが。

「にしても、ルイズ。あなた随分と遅かったわね」

やれやれと言った様子で、肩を竦める。

「あたし、待ちくたびれたわよ。他は先に行っちゃうし」

その様子にルイズは怪訝そうな顔をする。

「え、そんなに待ったの？私、そんなに居たような気がしないんだけど・・・」

「ようこそ、いらっしやいました」

言い争う二人の下へ何処からとも無く、メイド服を着た長身の少女が現れた。

「えっと、貴方は？」

唐突に現れたメイドにキュルケは名前を尋ねる。

名前を聞かれたメイドは恭しく一礼し、

「私はこのレーベンスシユルト城の管理人、チャチャでございます。本来この城は、我が主のモノなのですが、今回は期限付きでネギ様に貸し出されておりますので、よろしくお願いいたします」

「これはご丁寧に」

ペコリとキュルケが頭を下げる。こちらもしっかりと筋の通った綺麗な一礼だった。

「あたしはキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルト・ツエルプストー」

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

良く教育が行き届いて、礼儀の出来たチャチャの対応に、ルイズもキュルケも思わず、礼を返してしまった。本来なら貴族である彼女達はこんな事をしないのだが。

「では、こちらの魔法陣にお乗りください。何せ城までは歩くと500メートルありますので」

そう無表情にチャチャは言った。

ルイズ達が転移魔法陣に乗って行った先では、既に戦闘が始まっていた。

「どうした、お前ら！遅いぞ！」

一護の怒号が響く。背には刀は無く、素手だけで戦っているのに、刀を振り回しているシャナと夏梨を圧倒しているのだ。その光景にタバサは息を飲む。二人で戦ったとは言え、ギーシュを完膚なきまでに叩きのめした二人、その二人をまた、オレンジの少年は完封している。

それに唇を噛んで睨み返すのはシャナと夏梨だ。

「くそ！やっぱり速い！」

「うぬ、全く持って捕らえ切れておらん」

「いつも稽古つけて貰ってたから、気が付かなかったけど、やっぱ一兄は強いや」

投げ飛ばされ、空中で体勢を立て直す。本来ならここで追撃が来て、倒れ付しているだろう。それをしないのは単純に修行であって、戦闘ではないからだ。

「ならば、息を合わせて行くぞ」

遠雷のようなアラストールの声二人は顔を見合わせる。一撃も与えていないが、一撃も与えられていない。完全に無力化されている。それだけの實力差があるということだった。

(私が『流月』で攪乱するから、そのうちに)

(OK。その間に私が決める！)

「はああ！」「だりやあ！」

二人で飛び出す。夏梨は水を、シヤナは炎を纏って。

夏梨の打ち出す水の塊が砲弾のように一護を襲う。だが、その無数の塊を全て拳だけで打ち落とす。

だが、ここまでは二人とも予想通り。弾けた水の塊が生んだ飛沫に隠れて、一護の視界は無くなった。

この攪乱作戦で距離を詰めたシヤナは刀を思いつき振りかぶる。

(一撃で決める！)

力を注ぎ込む感覚、構成することで感じられる距離、威力と『殺し』の範囲、

その全てが一致する。

（強いからこそ、全力で行く！）

大太刀を飛沫の向こう、大上段に構える。

（一撃で、決めろ！）

足を重く地に打ち、背中に隠した形になった右腕に、思いつきり練り上げた力の源”存在の力”を込める。これを利用して鍛錬して、更に強く得た感覚と感触が、実践の中で繋がる。強く握った『贄殿遮那』に自身の中に入ったアラストールのイメージを重ねて、強く放つ。

「っだあー！」

大太刀の剣尖から恐るべき密度と確たる存在を持った紅蓮の炎が迸る。

その光景に危機感を感じたアレンは、傍で見ていたタバサの襟首を引っつかんで庇う。

必殺の一撃にも見えるが、これはまだ序の口。

（本命は…）

（これに紛れた…）

「追撃だろうな」

紅蓮の炎の向こう、オレンジ頭の少年が意に介した風も無く立っていた。追撃のために、肉薄していたシャナと夏梨は届く寸前だった刀の柄を、自分たちの手の上から、更に大きな手に握られていた。じたばたしても握りこまれた手は解けない。打つ手無しだ。

「…むう、降参」

「…降参」

少女二人が白旗を上げる。それを確認した一護は手を離さずに、先に二人を地面に立たせてから、手を優しく離した。

「しかし、強いな。一護」

シヤナにとって父親であり、兄であり、友であり、師でもある、この炎の魔神は普段は簡単に人を褒めたりしない。そんな彼が素直に一護の実力を認めたのだ。シヤナも嫌々ではあるが、認めていた。「強いつていうか速いんだ。お前も速く動けるようになったら、変わると思っぜ」

にっとなつて、シヤナの頭を乱暴に撫でる。

少し痛くて、手を離された後の頭をシヤナは自分でも撫でた。

「一兄、私は？」

「あー、夏梨はもつと『瞬歩^{しゅんぽ}』頑張れ。鬼道は全くわかんねえから、自分で頑張れ」

乱暴な言い方だが、これは事実なのである。一護は死神としての基本戦術の内、鬼道による戦闘がまるで出来ていない。最早、才能と言い換えてもいい位に才能がない。だからこそ、剣術と拳闘、そして歩法で戦っているのだ。逆に夏梨は鬼道の出来がいい。その分、他の要素はまだ発展途上なのである。

発展しきつた所で、一護を超えられるかといえ、無理な話であるが。

「お、来たか。お前ら」

「遅い！」

「どう、ここ？すごいでしょ」

3人にとっては久しぶりに見る4人の顔。その顔を見た対応はまた違っていた。

全員を揃ったことを確認して、ネギが整列させる。

「皆さん、並んで下さい」

その若干泣きそうな声に、圧されたのか9人は整列する。キュルケとルイズがどっちが、一番の方へ並ぶかと喧嘩し始めたので、ネギの涙の度合いが酷くなり、エドが二人を殴って辞めさせた。

「先に説明したとおり、ここでは1時間が1日になります。それを利用して皆さんにはしっかりと修行してもらいます。勿論、僕もですが」

「はい！」

ネギの言葉に強い返事が返ってくる。

返事を返さないのは修行のしようがない一護とアレンだ。彼らには別メニューが用意されている。意思のしっかり入った全員の返事にネギは、一護とアレン、エドの4人でこの魔法球の中、2日寝ずに考えたメニューを発表する。

「まず、才人さん」

「おう！」

「才人さんには、まず基礎体力を付けてもらいます」

「きそ、たいりよく…？」

才人の疑問に、エドが答える。

「いきなり、剣振り回したり、体術学んで生かせると思ってんのか？」

エドの小ばかにしたような言い方にカチンとくるがぐっと堪えた。

「詳しいことは、エドさんが付きますので、聞いてください。次にシヤナさんと夏梨さん」

「はい！」「おう！」

正直、彼女達も自分より年下のネギに仕切られるのは面白くなかったが、実力差を考えると致し方ない。そういった意味では理性より合理性を取るの彼女らだった。

「お二人は、先ほど同様、一護さんに稽古をつけて貰って下さい。

一護さん、お願いします」

「任せとけ」

面倒に頭を搔く一護の傍、二人は嬉しそうに歯を見せて笑った。

「僕は3人の魔法を見ます。その代わりといっては何ですか…」

そこで一瞬だけ言葉を切る。それから、

「タバサさんには、引き続き文字を教えて欲しいんです」

「文字…？」

ルイズが怪訝そうな顔で隣に立つタバサと、目の前のネギの顔を

見比べる。

睨み付けるルイズをネギは「まあまあ」と抑えるが、タバサは彼女を一瞥しただけだった。

「あなたには関係ない」

「なあっ!？」

一言で会話は断ち切られ、ルイズは二の句が繋げなかった。そして続け様、さらに愕然とさせられた。

「ネギ」

「は、はい」

「よ、呼び捨てえ!？」

あんぐりと口を開けたルイズを余所に、二人の話は続く。

「大丈夫、それくらいならお安い御用」

二人の様子を見て才人はなるほどと思った。

自分が目覚めた時の二人。仲良さげに本を読んでいたが、そういうことだったらしい。

「そうですね。ありがとうございます」

「ん……」

「ちよっと! 字の練習って何よ!!!」

礼を言うネギに、さらに返すタバサ。

そのあまりに親密な二人に、ルイズは間に割って入った。

「いや、あの、ルイズさん。僕、こっちの文字がまだ上手く読み書

きできないんです」

随分とバツの悪そうな顔でネギが話し始める。

「それでタバサさんに教えてもらっているんです」

「そういうことは早く言いなさいよ！もう、何でご主人様の私に黙って」

バシン！とシャナとキュルケの手が飛んでくる。

「痛いわね、何をするのよ！」

「お前は学習しないの？」

冷たいシャナの言葉。

「空気読みなさいよ、ラ・ヴァリエール」

呆れた調子のキュルケ。

二人の言葉にルイズはぐっと押し黙る。

「あ、あのー、皆さん宜しいですか？」

一頻り騒動が終わったのを、ネギがおずおずと確認する。

「では、皆さん。お願いします」

そう言って一同は解散する。

一護はシャナと夏梨を連れ立って、別の場所へと向かう。

一通りの修行が終わる10時間後までアレンは城を出る。その間、アレンは別の事を行う。

ネギが奥の城へと女の子三人と伴に向かう。
才人は一人、残されてしまった。

「あ、えっと…」

目の前には慄然とした感じの金髪と赤コートの少年。肩にはどうやって止めているのか、小さな騎士のような人形が乗っかっている。

「エドワード・エルリックだ。んで、こっちが…」

「弟のアルフォンス・エルリックです」

エドが指さした所から声が聞こえる。だが、そこには誰も居ない。

「どっから、声が…」

「目の前に決まってるんだろ！」

イライラという調子でエドが喋る。ルイズもだが、この少年も随分と血の気が多い。直ぐにカツと頭に血が上る性質たぐなのだ。ぐいっと才人の襟首を引き寄せ、人形の前に持つてくる。

「僕がアルフォンスです」

兄とは違ったおどけた調子で人形が喋っている。その光景には流石の才人も驚いた。

「人形が…、人形が、喋ってる！」

「あ、それくらいで驚くんじゃねーよ。あいつらなんかオコジヨが達者にべらべら喋ってたぞ」

その上、喋るオコジヨまで居るらしい。

本当の意味で、この人達はレベルが違う。腕っ節もだが、何よりも心が違う。

(何せ、人間以外が喋ることに驚いてないんだから…)

才人の考え方は凡その外れであるが、エドもアルもこれ以上の問答は無駄だと思い、早速始めることにした。

「んじゃ、早速始めるぞ。ちょっとこっちに来て」

そう言つて魔法陣へと案内する。

再び、レーベンスシユルト城から移動する。

移動先は木々が鬱蒼と生い茂るジャングルだった。才人の目には見たことも無いような草や木が写っている。毒があるかもしれない、派手派手しい実や花も、遠くに見えていた。

「うわ…、なんだよ、コレ…」

「これが才人君の修行場だよ」

人形なので表情が読みにくいが、きつと喜んでいるのだろう。嬉しそうな声でアルが喋る。

「ここで修行…？」

困惑する才人にエドは鞘に入ったナイフを投げて寄越した。

若干、乱暴な投げ方だったので才人は取り損なつて、地面に落とすってしまった。

「これは…？」

更に才人は困惑の表情を強くする。

「取り敢えず、10日間。ここで生きるだけの基礎体力が、修行の最低条件だ」

エドが厳しい調子で言う。

「ここは取り敢えず、凍死の心配はない。食べられる動植物もあるし、海も近いから魚も取れる」

「凄く過ごしやすい所だよ」

「ナイフはせめてもの饞別だ。上手く使ってくれ」

「切れ味の良いのを用意しました」

エドとアルが交互に説明をする。

つまりは自給自足で生活しろと言うことだ。最も気候はそれなりに整えられ、暑いが我慢できないほどではない。一応は屋内なので雨は降らない。

「んじゃ、頑張れ」

そういうとエドが自分を困うように檻を錬成した。一見するとエドが閉じ込められたように見えるが、実際は逆だ。エドの足元には主城へ赴くための魔法陣がある。この密林へ来るための唯一の手段。それを防がれたということは、才人は戻る事が出来なくなってしまう。

それに気が付いた才人が嘔み付く。

「ちょっと、何してんだよ！」

「強くなりたいんだろ？」

鉄格子を挟んで真剣な顔が向かい合う。

「……」

「どうしても無理だって言うなら、コレを鳴らせ」

鉄格子に一箇所だけ用意された大きく湾曲した場所。そこから掌大のハンドベルを差し出した。

「これは…？」

「これを鳴らせば、助け出してやる。但し、その時点で修行は無しだ」

エドの真剣そのものの口調に才人は押し黙った。

自分より背も低く、歳も若いくせに、その金色の双眸には深く重いものがあつた。真っ直ぐに才人の黒瞳を見つめている。

「お前の世界に戻る手段も考えてやるから、大人しくルイズお嬢様の召使でもやってみろ」

嫌に『お嬢様』の部分強調して言う。

基本的にまだエドもアルも、ルイズを信用した訳ではない。6人の資本力の源であるエドはルイズに頼らなくても生きていける筆頭格である。彼は召使になる気は毛頭ない。

「何なら今鳴らせ。ま、お前の負けん気なら鳴らす気はないだろうけどな」

ふつとエドは鼻を鳴らす。その様子にくすくすと肩の騎士人形が笑った。

それだけ言うと、エドは再び魔法陣で消えていった。だが、消え

る寸前に、

「ああ、ちなみに俺ら兄弟は二人だったけど、同じ状況で1ヶ月生きてきたぞ」

輪郭も判別できなくなった所で、更に追い討ちを掛ける一言を告げる。

「ちなみに、10歳のときだけだな」

「な…！」

こうして才人は密林に取り残された。

「…見てろよ。絶対に生き残^{ぜってー}つてやるからな！」

最後に腹の立つ一言を言い残したエドに対抗心をむき出しにする才人。

こうして才人達の修行が始まった。

だが、才人の腹は容赦なく食べ物要求する。

「その前に食べ物だな…。南の島だし、食い物くらいあるだろう」

LESSON START (後書き)

修行開始です。

正直、8巻でしていたアニエスとの修行が見戯に見える位にビシバシ行くつもりです。この修行方法は皆、通る道なんでしょうか。流石にいきなり雪山に放り込むのは躊躇われましたので、まずは南の島でサバイバルです。

l e s s o n f o r d e f e n d i n g a b e i n g

このドライブオマ魔法球の中で、既に3日。

最初ネギに誰が文字を教えるかで揉めに揉め、沫や取っ組み合いの喧嘩にまで成りかけたが、結局タバサが教える事になり、3人の魔法の修行をネギが見ることとなった。

キュルケは一護とアレンに教えようとしていたが、二人にはにべも無く断わられた。

「まず、この世界の魔法に関する本を読んで気が付いた事があります」

難しい顔で、黒板に何事が書き連ねていくのは、魔法先生のネギである。

才人の決闘から、事態が事此処に到ったことで、一応はこの世界の身元引受人であるルイズとその一番近い学友である二人には6人も存在を明かしたのだ。

勿論、誰にもバラさないという条件付で。

二人がトリステインとは違う外国、キュルケは軍事大国ゲルマニアから、そして、タバサはハルゲギニア最大の国家であるガリア王国からの留学生であると言うのも大きかった。

嫌らしい言い方ではあるが、彼女らとパイプを作っておけば後々、有利に働くことは間違いない。ここらへんは「軍」と言う円滑に情報伝達を運ぶ組織で動いてきたエドとアルの発言が正しかったし、他の面々もそれに同意した。

「信じられないわね…」

「そんな存在が居るなんて…」

「でも、この目で見た」

三人の感想はこんな感じである。
自分たちの存在の証拠として武器や技術を見せるよりも、実演してみせた。

それを見れば、既に見ているシャナと夏梨の二人は於いておいても、他の三人の力、メイジではないがメイジと互角、いや、それ以上の力を持つ圧倒的な存在である事は容易に予想が付いた。

「…」

ルイズとキュルケが感嘆のため息を漏らす中、タバサだけは全く別の事を考えていたが。

その中に置いて最年少であるネギ・スプリングフィールド。
彼は魔法使いである。つまりはメイジ。三人を教えるのには打つてつけの存在だった。

修行の当初は、魔法理論、実践ではなく使い方とか、魔法が起きる現象や理屈について説明していた。理論を教えてもらうという事で、三人ともかなり不満そうだったが、理論を侮ってはいけなさと云うネギの言葉に圧されて、グツと我慢した。

「それは魔法使いが限定的であるということですよ」
「どうということ？」

そんな彼が唐突に話した。

覚えてたての文字を黒板に書きながら、説明していくネギ。

タバサが教えたのは簡単な文法と文字だけである。しかし、そこは天才と謳われてきた少年である。簡単な取っ掛かりだけ掴むと、あつと言う間にハルゲギニアの公用語であるガリア語をマスターしてしまったのだ。修行開始から3日たった今では、殆どルイズ達と筆談で会話できるようになっていた。

「つまりこういう事です」

図と図解を入れながら、ネギは自分の魔法体系と、ハルゲギニアの魔法体系の違いについて大雑把に説明した。

相次いで聞こえてくる剣尖がぶつかり、擦れ合う音のほかには何も聞こえてこない。

一護達のほうも上々の仕上がりのものである。

「つまりは使えるのが血、つまりは遺伝子によって左右されると言う事です」

「?」「?」「?」

三つのハテナが並ぶ。遺伝学など兎に角、自然科学については遅れに遅れている世界だ。

一から説明し出すと、それだけで日が暮れてしまう。現に今既に日が暮れている。

「腹、減ったな」

「飯にしようぜ」

そんな事を言いながら散っていた一護が戻ってくる。

肩にはぐつたりと疲れきったシャナと夏梨の姿。これもこの数日で見慣れた光景になった。

それから直ぐに食事、和気藹々と言った風でもなく、坦々と食べて、坦々と夫々が皿を洗う。

その後は、各員伴に個室が与えられているので、そこに備え付けられたベットに横になる。

エドだけは、毎夜のように図書館へと消えていくのだが、それを誰も追う気にはならなかった。

これが3日間の8人の生活リズムであった。

その夜のこと。

「うわあああああ！！！」

ネギはベッドから跳ね起きた。

びっしょりと全身は冷たい汗に濡れ、息は運動の後以上に荒かった。

「はあはあ……あ、あつ……？」

「うわあ、何だ何だ、兄貴！」

余りの大声だったのか、カモまでもが彼専用に使えられた、小さなベットから跳ね起きる。

キヨロキヨロと見回すと、そこはレーベンスシュルト城に備えられた自分の部屋。家具や調度も、自分好みの安くて丈夫なアンティークを揃えた苦心の部屋である。

ネギは今の自分の状況を思い出し、安堵の溜息を吐いた。

魔法球の中で修行したのはこれが始めてではない。

頻繁に出入りを繰り返して、休息をとることも多かったネギには専用の部屋が与えられている。他にも彼と一緒に修行した面々の部屋もあるのだが、これには管理人であるチャチャが鍵を掛けていた。

自分の部屋だという事が、ネギの安心感を更に大きくする。

「夢、か……よかった」

「兄貴どうしたんだ……？」

傍で寝ていたカモが薄目を開けて、心配する。

「うっん、大丈夫」

その不安げなオコジョの顔に、汗だくの顔で笑顔を作る。腕を見る。何ともなっていない。

身体を見る。五体満足の体がそこにはあった。

窓から漏れる月明かり。怖い師匠との修行中に何度も見てきた空と月だ。

「はあ……」

ネギは部屋の扉近くにあるポールスタンド型のハンガーまで寄ると、掛けてある自分のローブの内ポケットから何枚かのカードを取り出した。

綺麗な文字や模様が印字されているタロット程の大きさのカードには、それぞれ別の女の子が居る。

これはネギのパートナー、世のため人のために動く事の出来る、立派な魔法使い《マギステル・マギ》を目指す上で余りにも未熟である彼を、心から支えてくれる頼もしい仲間であった。

その内の一枚を額に当てた。

空港で別れたきりの自分の姉貴分であり、叔母であるアスナがカードの中にはいた。

「テレパティア念話、アスナさん……」

応答は無い。

このカードには対象者と念話を結ぶ機能がある。だが、その念話機能は簡単に妨害ができる程度の性能しかなく、同様に召喚機能も5〜10Km圏内という制限がある。

異世界であるハルケギニアにいるのだから、仲間のへの連絡手段が一切なかった。

「兄貴……」

そんな彼の様子を、使い魔であるカモミールは見ていられなかった。

しかし、もしかしたらということもある。

ネギは万に一つもないはずの僅かな可能性を期待し、時折こうしてカードを使っていた。魔法球の中でも、それを起点にした半径内なら通じる。

実時間で一時間おきに、こういして念話を送っているのだが、芳しい成果は上がっていない。

この結果にはネギだけでなく、カモも愕然とした。

外に出て飛び回って探知しようかとも思ったが、一日酷使した頭と体は睡眠を欲している。

「心配してるだろうな……」

「そうっすよね……、特に姉さん達は……」

カードを仕舞い、ベッドに戻ったネギは呟く。

「はあ……」

「はあ……」

半ば諦めにも似た溜息をつき、ベッドに横になるネギとカモ。ネギにはある不安感があった。

自分の中の別の自分が揺り動かされるような、そんな漠然とした感覚が体の中を駆け巡っているのだ。ここ最近は安定していたのだが、この世界に来てから異常なまでに大きく膨れ上がっている。

「おやすみ、カモくん」

「おやすみだぜ、兄貴」

気にしていても仕方が無い。

明日も早い。この空間だけで通じる目覚まし時計をもう一度セツトし直すと横になって目を瞑る。

ベッドから見上げる光景もいつもと一緒なのに違和感が拭えず、安心して眠れるようになるにはいつまで掛かるか、それはネギには分からない事だった。

「腹、減った…」

同じ頃、才人はジャングルの地面に大の字で倒れていた。

澄んだ夜空に浮かぶ月が、優しく才人を照らしている。だが、その優しい光も才人を全く癒してはくれない。寧ろ、余計に傷ついたような気がする。

ジャングルに来てから早3日。才人はこの鬱蒼と熱帯植物が生い茂るジャングルに放り出されてから碌な食事を取っていない。水だけは小川を見つけたので、困っていない。

「くそ、あの鎧…」

森に入って、木の実を取ろうとすれば鎧に追いかけられ。

海に入って、魚を取ろうとすれば魚には逃げられ。

漸く取れた魚も、火が熾せなくては食べる事ができない。生で食べる事もしてみたが、とても食べられるような味では無かった。不味いだの、味が無いだのを通り超えている。

再び、水以外何もない腹が音を立てて、自己主張する。

傍には木の枝と、葉っぱで拵えた寝床がある。最初に浜にたどり着いた時、造ったのがコレだった。

とても簡素な作りではあるが、月光くらいなら遮断できる。

「寝よ…」

起きていても体力を使うだけである。空腹の状態で何時までも起きているのは得策ではなかった。素直に目を瞑ると、今日も鎧に追いかけられ、木の実が取れなかったことが悔やまれた。

翌日、才人が目覚めてみると、体が動かなかった。

食事を取らず、水だけで生活してきた彼の精神と体力は限界だった。

「…なんで俺、こんな事してるんだろ…」

才人の疑問は当然と言えた。

何故、自分はこんなバカみたいな事をしているんだろう。

正直な話、エドは逃げ道を用意してくれていた。それがどんな道になるかは才人は知らないが、これを選んだのは自分である。誰かを恨んだりはしていない。恨むとすれば、安易にこちらの道を選んではまった自分を恨んでいた。

「はあ…」

動かない指先をアリが這うのを虚ろな瞳で見ている。泥だらけ、砂だらけの指は痛みがあるが、誰も才人の脳の声には応えてくれない。

そんな時、ガチャン、ガチャンと鉄の擦れ合う音がしてきた。

この3日で何度も聞いてきた断末魔の音。

燦燦と降り注ぐ、太陽を見つめる虚ろな視線を棘を生やした鎧が遮った。手には相変わらず、大きな剣が握られている。

「…殺せよ」

才人はどうでも良くなった。

どの道、元の世界に変える手段など無い。かといって彼らと轡を並べて戦える訳が無い。彼の言葉は選択肢を防がれた末に出た、消極的な自殺だった。

短く言うと、再び目を瞑る。何時来るかも判らない剣が自分に目掛けて振り下ろされる時を待って。

だが、幾ら待てども痛みもしなければ、風を切る音すらしない。

「……？」

代わりに香ってきたのは、たんぱく質が良く焼けた香ばしい匂い。幾度もかいた焼き魚のおいだ。

動かない体の中で、首の筋肉に鞭を打って、匂いのする方を向く。そこでは大きな鎧が、火を熾して魚を焼いていた。大男の鎧が、細やかな作業をしているのは見ていてコミカルだった。思わずくすくすと笑ってしまう。

その音に反応したのか、鎧がガチャンと音を立てて振り返り、才人と目が合う。その目には虚ろな差人の目にも心配が浮かんでいる事が、しっかりと判った。

「これは…？」

振り返る序でに、鎧は焼けた魚を才人に差し出す。香ばしい香りが才人の鼻腔をくすぐる。

「食べていいのか？」

鎧はまたガチャンと音を立てて頷いた。

頷き終わらない内に、才人は魚に被りついた。塩もしていなければ、醤油も無い。無い無いづくしの魚ではあったが、3日ぶりの食事は才人の腹を刺激した。

「う、うう…」

思わず泣いてしまう。その才人の顔を鎧は嬉しそうに眺めていたが、やがて森の中へ消えた。

「あいつ、何なんだ…？」

自分を追つてみたり、食事を振舞つてみたり。そんな鎧の行動を才人は怪訝そうな顔で、消えていった森の闇を見つめていた。食事が取れたことでいくらか精神が安定した。

「そっか、そっだよな…」

もう一度、寝転がる。確りとした視線の先には、またしつかりとした太陽があった。

そして己の行動を恥じる。

木の実が取れない？

魚が取れない？

その程度の事は諦める理由にはならず、寧ろ、自分は取るうともしていなかったのだという事を。

思わず口をついて出た言葉だったが、鎧に向かっていった言葉を撤回したかった。

鎧の残した魚を付いていた串は尖っていた。勿論、最初から先端

が尖っている木など存在しない。傍に散らばった削りカス。ナイフで研いだのだという事は容易に予想が付いた。

渡されたナイフは魚を捌いたり、あの鎧と戦う為のものなのだろう。というか、10日も生きなくてはいけないのに、果物が取れない訳がない。

魚を手づかみで取る理由はない。木を削いで槍を作ってもいいし、そうすれば火だつて熾せるかも知れない。何の工夫もせずに、何の行動も起こさずに、死のうとしていたのが恥ずかしかった。

「よし、あの鎧をどければいいんだな…」

そうすれば取り敢えず、果物が取れるかもしれない。

鎧なら自分の腕力でも突き抜く事はない。だが、体勢を崩して動けなくする事くらいならできるだろう。出来なくても、出し抜ければ十分、木の実は取れる。

ナイフの柄を強く握った才人の左手の甲が、淡く煌いた。

その頃、外も夜であった。

ルイズ達の授業が終わり、夕食の時間が終わってから始めたのだから、仕方ないと言えば仕方が無い。アレン達の食事は勿論、食堂からルイズたちが代わりに頂いてきた。

「ん、いい月ですね」

アレンが外に居るのは、単純に修行の相手がいないという事と、

彼の食事量が半端ないことが原因だ。ダライオマ魔法球の中でも、時間が流れれば腹は減るし、眠たくもなる。彼を置いたままにしておけば、一日が24日になるあの中では、72食も食べる事になってしまふ。アレンの一回一回の食事の量を考えると仕方ない事だった。

「仲間はずれには去れましたけど、鍛えておきましょうか」

そういつと諸肌を晒し、ルイズの部屋の中、一本足立ちの椅子の上で逆立ちで腕立て伏せを始めた。しかし、直ぐに飽きてしまい、外に出る事にした。面倒なので、窓を大きく開け放つて、飛び降りた。小さな月のように煌く金色のティムキャンピーが、アレンの後を追って飛び出した。

巨大な二つの月が、魔法学院の本塔の外壁を照らしている。

「そういえば、景色を楽しんだことなんて何時以来だろ……」

夜の学院はまた変わっていて、幻想的だとアレンは思った。

黒の教団に入ってから、碌に景色を楽しむ事もしていなかった彼にとって、こうやって落ち着ける場所と言うのは何物にも替え難い価値がある。これで好きな女の子の一人でも居れば、盛り上がるのかもしれない。

そんな幻想的な二つの月の光が、壁に当たり、人影をくつきりと浮かび上がらせていた。

最近、ちまたの貴族たちを騒がしている『土くれ』のフーケであった。

「ちい！」

フーケは足から伝わってくる、壁の手触りに舌打ちをした。

「さすがは魔法学院本塔の壁ね……」

彼女が立っているのは魔法学校本塔の5階。

学院長室の直ぐ下で、図書館の上。昼間、コルベールとロングビルが話し合っていた学院の宝物庫がある、ちょうど外壁だった。そこに彼女は魔法で地面と平行に立っているのである。

「物理衝撃が弱点？こんなに厚かったら、そこらの魔法じゃどうしようもないじゃないの！」

足の裏で、壁の厚さを測ることは『土』系統のエキスパートであるフーケにとって、造作もないことである。だが、感じて測った石壁の厚さはかなりのモノがある。

「確かに、『固定化』の魔法以外はかかってないみたいだけど……」

更に少し歩いて適切な位置を探す。

フーケは苦い表情を含ませ、それでもなお薄い部分はないか調べる。少なくとも薄い方が宝物庫を破る労力と時間が短縮できる。誰にも見られない事がポリシーであるフーケにとっては大事な問題だった。

「これじゃ私のゴーレムの力でも、壊せそうにないね……くそっ！！」

やはりというべきか魔法学院の宝物庫の壁はどこもブ厚かった。付け入る隙が全く持って見つからない。

「やっとここまで来たつてのに……ちっ！！あのハゲ、役に立たないわね」

フーケは歯噛みをした。

目的のお宝は手の届く所まで来ている。ここで諦めては盗賊の名折れだった。

「かといって、『破壊の杖』を諦めるわけにやあ、いかないね……」

フーケの目がきらりと光り、そして腕組みをしたまま、じっと考え始めた。何事か良い手は無いかと思案するが、全く持って見つからない。

「仕方ないね、ここはもう少し情報を集めるかね」

今後の活動方針を決めたフーケは魔法を解除し、地面に降り立つ。そこでフーケは、ふいに誰かが近づく気配を感じた。

「ん？誰か来たみたいね。ったく良い子はお寝んねの時間だったのに」

フーケはそう呟くと、身軽な動きですぐに中庭の植え込みに消えた。

end of lesson

夜から体を酷使し、学院の周りを走り回っている内に空が白み始めた。

流石に月が綺麗だという理由で外に出てみたが、外は肌寒く到底諸肌では耐えられなかった。

「998…、999…、1000！」

アレンが日課と成っている筋トレをちょうど1000回終わらせた時、窓から朝日の軟い光が差し込んできて、アレンの目を刺した。眩しさに思わず、バランスを崩して使っていた椅子から転げ落ちた。机に引っ掛けていた自分の制服も纏めて、床に落ちる。

「いたた…」

流石に鍛えている人間と言えど、石の床に頭をぶつければ痛い。ペラリと服から1枚の写真が零れ落ちてきた。何時の間に入っていたのか、それとも入れていたのを忘れていたのか。随分と懐かしい写真が出てきた。

「そういえば、僕の写っている写真ってこれくらいですよね…」

大きな旅を終えて、再び教団に戻った時に、所属するエクソシスト全員で取った写真。

ムカつく顔も、頼れる顔も皆が揃っている。

「心配してるだろうな…」

箱舟を抜けた先はまさかの異世界。

特に教団を抜ける時に、抱きしめた少女は泣きそうな顔はいくら頑張っても忘れられない悲しみを浮かべていた。「いつか戻る」と言ったその言葉も彼女の心を苦しめているかもしれない。

そう思うと気が気でなかった。早い内に元の世界へ帰りたい。それが本心だった。

「そつえば、そろそろ時間ですね…」

時間制限の10時間。ダイヤオマ魔法球での10日間は皆にどんな成果を齎すのか。

まるで子の成長を見守るかのような親の顔で、アレンは再び戸を開け入っていった。

「っへへ、やったぜ…」

鎖されていたジャングルで才人の歓声が上がった。

此処に来てから付けていた木の傷が10個に増えていた。日が昇るたびに付けていたこの傷はこの間、才人が生きていたという証拠である。

「10日間生き残ったぞー！」

着ていた青のパーカーはドロドロでボロボロ。何度も何度も食料を採る為に鎧と格闘した結果だ。ナイフなど扱うのは初めてだったが、何故か体が覚えているかのように動けたのだ。

尤も相手も去るものであり、素手で才人は何度も殴られた。結構重い拳で何度も気を失いかけたが、持ち前の負けん気と生きたいという希望と執念で踏ん張り続けた。

「魚も美味かつたしな…」

4日目の朝。鎧が食わせてくれた後の残骸を見て、ナイフで木を削ぎ、槍を作ってみたりした。こうすると狙いが付けやすくて、一撃で仕留めて逃がす事も無い。

火の起こし方もその残骸で気が付いた。焼いて食べる事ができると、海水を蒸留して真水を作ったり、生のままで食べていた木の実や魚も美味しく頂けた。

この10日で才人はそれなりのサバイバル術と、それを行うだけの体力を身に付けたのだ。

多少なら全力疾走しても息が切れる事は無い。

高校の体育の授業は、興味のあるスポーツしか参加していないサボり魔だったため、体力にかなり不安があったが、木の生い茂る密林を走り回り、素早い魚を捕らえ、鎧とナイフを使って格闘している内に、その他の身体能力もそれなりに向上した。

「生き残ったか！」

「おう！」

朝飯の魚を焼いていた所へ、10日ぶりに聞いたエドの鋭い声が響く。

その言葉に力強い声で答える。その目にはしっかりとした光が宿っている。

「随分と力をつけたみたいだな。10日って言うのも密度を濃くすれば十分な成果がある」

エドの言う事は尤もだった。そもそもこの魔法球は修行や修練の為に作られた魔法具である。だからこそ、様々な気候や立地を考えられたオプシヨンパーツが付いているのだ。

「これで取り敢えずは、スタートラインに立つただけだ」
「はい」

エドはあまり人を褒めない。

だから、この言葉は彼なりの精一杯の激励の言葉なのである。それに10日やそこそこで年単位で鍛錬してきた彼らに敵う術もない。才人もそれは自覚していた。一朝一夕の付け焼刃で、無いよりはマシというその程度の扱いだが。

「これから武器の扱い方とか学ぶことは多いぞ」

目の前に居る小柄な少年は素晴らしい圧力を発している。このサバイバルを通して、才人もそれなりに人を感じられるようになってきた。

「ハイ」

「おーし、じゃ戻るぞ！」

そういうと10日前に遣ってきた転移魔法陣の前にやってくる。

そんな時、またガチャンガチャンと音が遣ってきた。直ぐ近くに視認できる程までに近づいて来た時、才人がこの10日で何度も見ている棘だらけの鎧が大きく跳躍した。

ドシンと重い音を立てて、才人とエドの間に着地する。その振動に才人は思わず腰を抜かしてしまった。手には昨日まで見ていた大きな剣は無いが、それでも後半は色々と組み手に近い事をしてきた。

何度か死にそうになった事もある。
そうそう受け入れられようはずもない。

「ちょ、ちょ、なんでこの鎧が此処にいんだよ！」

狼狽する才人に、エドはしれつと言ってしまう。

「お疲れ様だったな、アル」

「もう、十日間も喋れないって大変だったよー」

鎧の庇を開けると、そこにはエドの肩に乗っていた騎士人形が頭の中に貼り付けてあった。しかも、その鎧は流暢に人形と同じ声で喋り始めた。

「ど、ど、どうなって…？」

「いや、一応修行だし、死んだら不味いつて思って監視」

鎧の中から人形を取り出しながら解説するエド。その顔にはいたずらが成功した時の子供のような笑みがあった。

「じゃ、じゃあ、何で死ぬような事したんだよ！」

「バカか？10日しかないんだよ、体術とか、ナイフの使い方とかも盛り込まなくてどうする？」

再び鎧から人形になったアルは大きく跳躍して、才人の肩に飛び乗った。

それから耳元で才人の反省点を列挙していく。あまりのダメ出しの数に、来た時と同じようになきそうになった。

「よし、戻るぞ」

魔法陣を覆っていた鉄の檻がエドに触れた瞬間、ガラソランと耳障りな音を立てて崩壊してしまった。分解されたわけでもなく、ただ単純に組み立て終えた完成品が外れるような感じだった。

才人は此処に来てから驚きの連続。人が空を飛んでみたり、自分が召使のように扱われたり、何かに付けて驚いてきたので、この程度では動じなくなっていた。

10日間過ごしたジャングルに名残を惜しみながら、才人は久しぶりのレーベンスシュルト城へ戻った。

「こんな感じで大丈夫なのかな……」

「うむ、一護に言われた通りのことが確実に出来ておる。これで問題ないだろう」

シャナはこの10日間、兎に角何も考えずにぶっ続けで一護と戦っていた。

彼に高速歩法である「瞬歩しゅんぽ」の基礎理論を習い、後は自分の力になるように戦闘外でも鍛錬してきた。シャナを始めとするフレイルムヘイズの最たる弱点は、肉体的な素質が向上しない事である。つまりはいくらアレンのように筋トレを行おうとも、筋肉が付くわけでもなく、腕力があがることは無い。

だからこそ、技術を磨く。

その意味では死神の持つ戦闘技術というのは、新鮮なものだった。

「へえ、中々だな」

死神の力の源である霊力を、そのままフレイムヘイズの力の源泉である「存在の力」に置き換えるとシャナにも使える。その発想の転換には皆が管を巻いた。

その修行相手だった一護が出来の良さに、思わずため息を漏らした。

実を言うと、彼は即興の感覚だけで戦ってきた事が多い。剣を振る鍛錬をした事が無ければ、鍛えた事も、フレイムヘイズに成るために鍛えてきたシャナに比べれば圧倒的に時間は短い。

「一護は教え方が下手だった」

「おい、そういうことを言うんじゃないよ」

だからこそ、かなり教えるのが下手だった。これは妹も認めるところでもある。

原因のもとを辿ると彼を教えた師匠たちに問題があるのだが、こちら辺は黙っておいた。何せ死神の業界では屈指の実力者達だ。まだペーペーの二人に比べると影響力は大きい。

世話になった事も大きいので、下手に侮辱するような事は言いたくなかったのだ。

「一兄、私も鬼道頑張ったよ」

傍でガッツポーズをする夏梨。体格的に不利な彼女は術法である鬼道をがんばってきた。普通は詠唱しないと発動しないのだが、それを詠唱なしでも発動できるように修練を重ねた。

その結果、80近い術を即席で発動できるようになった。元々、才に溢れるのだが、この成長は異常ともいえるほどに早かった。

「うっし、終わり。戻るぞ」

ハルゲギニアの魔法というのは神学の要素が強い。

この修行に入る前に読書好きであるタバサに頼んで、図書館の本を何冊か借りて読んでいたネギは、根本から違うこの魔法体系に大いに驚いていた。

そこでネギは魔法を使って戦う、つまりは魔法を効率的に使う方法を3人には教えたのだ。

ここら辺は基礎魔法を誰よりも得意とした天才少年の力が生きた。

その甲斐あつてか、キュルケとタバサは実に力をつけていた。

それぞれが得意とする火の魔法と風の魔法、その使える回数が今までに比べて大きく増えていたのだ。基礎呪文になると、一日の休息と行動内で限界まで使っても簡単に倒れる事は無かった。

だが、

「あーもう！何で成功しないのよ！」

一つだけ例外があつた。

ルイズである。

同じようにネギの授業を受けていたのだが、結局、起こる事といえば爆発ばかり。

どんな呪文を唱えても結果は同じ。

ドカン、ドカンと爆発しかない。

この結果についてはネギも大いに首を捻っていた。

「変ですね…、何で爆発するんでしょう？」

「私達は確実にレベルアップした」

一緒になってタバサは考える。自分もレベルアップしているのにルイズだけが効果が表れ無いというのは一体どうということなのだろうか。

「『ゼロ』のルイズ、あなた、こんな優秀な先生に付いたのに何の成果も上げられないなんて…」

ヨヨヨ、とまるで姉が妹を心配するように崩れ落ちるキュルケ。一回一回演技つばいが、本心である。キュルケの言う事は最早憐れみすら混じっている。

ライバル、といつても一方的にルイズが思っているだけであるが、そのライバルにここまで言われたのが相当悔しかったらしく、シュンと沈んでしまう。

「…私って、やっぱり才能がないのかしら…」

「そんなことはありませんよ」

ネギが優しく反論する。その力強い声にルイズは今にも泣きそうな顔でネギを見た。

そんな慰めの言葉は何度も聴いて来た。けども、実際は適当に言っているだけ、自分も言われているだけだと気が付いた。だからこそ、そんな事をいう実力者であるネギが少し許せなかった。

でも、違った。

その子は凜々しく、朝日を受けて煌いていた。

その言葉は嘘偽り無い、心からの言葉だった。

「『努力したからって言っても、それが叶う事はない。けども、叶える為には努力するしかない』」

誰かの言葉を伝えるように、空を見上げながら言う。

「ここで諦めたら、それで終わりです。僕ももつと頑張りますから」

そう言っつてルイズの手を握る。10歳とは言え凜々しいその顔。ルイズは自分を真つ直ぐに見つめるその顔に思わず顔を赤くしてしまつた。

「ネギ先生は本当に良いことをおっしやいますわ〜」

そう言っつてネギの手をルイズから剥がし、逆にネギを真つ直ぐ見つめるのはキュルケだつた。

「どうですか、これから私に付きっ切りでコーチなど…」

オマケに10歳の少年に対して危うい事まで言っつてくる。

「如何でしょうか?」

「あ、あ、あの…」

(本当に兄貴は女関係全然だな…)

艶っぽい瞳に自分が左右対称に写っている。思わぬ展開にネギは頭が付いていかず、目を回しだした。そんなネギをカモは口に出さず心配する。

「ツエルプストー! アンタ、何朝から盛つてんのよ!」

「あゝら、アンタの色気じゃ盛るのもできないでしょ?」

つんと澄ますキュルケの胸のポリウムは、ルイズと比べて一目

瞭然だった。そして、それを見た男がどちらになびくかという事も。

「…ふ、ふん。本当に好色で慎みが無いわね、ゲルマニアの女は…」
「あゝら、慎みばかりで恋人を取られ続けているのは、どこのお方かしら？」

この二人の両家の因縁は戦争だけではない。

ラ・ヴァリエール公爵家の主人は、何かにかけてツエルプストー家に恋人を寝取られているのである。この原因は、決してツエルプストーばかりではなく、ラ・ヴァリエールの方にも問題があったりするのだが、その辺りの状況はルイズには関係ない。

「ムツキー！」

怒り狂うルイズと、簡単にあしらうキュルケ。

二人の力量差は圧倒的にキュルケのほうが上だった。

「何、やってんだ。ホント…」

「大方、予想は付く。人を恐れないのは素晴らしいが、限度があるぞ。ツエルプストー」

そんな二人を見て、肩を竦めるのは年長者の二人。

「あら、焼いてるの？一護にアラストール？」

「焼いてねえよ」「うむ」

ずっとシャナのペンダントを手に持ち、一護の首に逆の手を回す。キュルケの媚のある言葉に、棘棘しく冷たくあしらう二人。それを聞いている妹二人はとてはないが気が気でない。また再び、恨みがましい視線でキュルケの、主に胸を、睨みつける。

「胸が大きいのを威張らないで欲しい」

「絶対に、譲らない！」

「…」

その視線にもう一人入っている。

そんな言い争いをしている間に、エドとアル、そして才人が戻ってきた。

才人の体も服もボロボロだ。その姿を見てルイズが叫ぶ。

「全く！どんな事してきたのよ！」

「いや、まあ、サバイバルを…」

若干ヒステリックなルイズの叫びにバツが悪そうに才人が答える。

「ホント、そんなんじゃ外も歩けないじゃない！」

「だから、ごめんって…」

「そういえば、此処って外より時間の経過が早いよね…？」

謝る才人を横目にルイズが弾かれたように気が付いた。

ネギに顔だけ向けて確認を取る。

「は、はい。そうですよ。外はまだ夜が明けたくらいだと思います」

「そう…」

何事か考え込むルイズ。そして唐突に言い放った。

「じゃ、今日は虚無の曜日ね。街に買い物に行くわよ！」

end of lesson (後書き)

修行完了です。

修行のシーンなどは各作品を参考にさせてもらいました。特に才人の修行は「鋼の錬金術師」の6巻の最中、イズミと伴にした無人島でのサバイバル修行を元にしています。シャナは7巻から8巻の守護の修行。エドとアレンは特別していませんが、エドはネギの所蔵図書から武器の本を読んでいます。アレンはずっと筋トレです。

勿論、これで才人が強くなっただけではありません。単純に負けん気と生活能力が育っただけです。武器の扱い方とかはまだ素人で、これから鍛えられていきます。そういった修行というのをちゃんとクリアしてこそ、才人も戦える力が備わっていきます。

取り敢えず、ガンダールブの力を使った戦いとして、まずはギーシユとのリターンマッチを考えています。

ネギは相変わらず、天然のジゴロです。

好きな人、大切な人が居るシャナと夏梨にはいまいちですが、今後とも女性が出てくるたびに、キュンと来る様な事を言ってくれと思います。

t h e s w o r d a n d l e g e n d y

「もう、ホント、何もかもが理解の外よ…」

そんな事をばやくのは、キュルケである。

場所はトリステイン王国最大の街、王都トリスタニアである。
ルイズが「才人に服を買う」と言ってから、ものの3分ほど。その王都近くの門に着いていた。本来なら馬で2時間は掛かる様な距離を一瞬にして移動してしまった。

「あの装置、私達には理解できない」

修行場であつたドライオマ魔法球から出た一同は、アレンの案内で箱舟のトリスタニア付近に設置された扉から出た。最初は怪訝な顔をしていたルイズ達だったが、目の前に現れた石造りの街並み、遠目に見える尖塔は紛れも無く王城のモノであつた。他人の言う事は理解できなくても、自分の目で見た事は確かに信じられた。

「なによ、なによ…。私なんかよりよっぽど魔法使いじゃない…」

はしゃいで、呆れているキュルケとタバサの後ろ。ルイズは、自分の、一応は使い魔である7人に大きく自分が水を開けられている事を実感していた。

「まずは、銀行だな。才人、ついて来い」

「あ、はい」

「僕も行きます」

エドに促されて銀行へ向かう、才人とネギ。

まずはお金が無くては何も始まらない。という訳で銀行に預けてある莫大な資金の一部を取りに4人で行ってしまった。

文字が一番読めるネギの存在は非常にありがたいものだった。

何せ、まだネギとシヤナ以外の面々はマスターしたとは言い難い状況なのだ。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

それを追いかけるのはルイズ。

一応、貴族ではない彼ら、平民が銀行にお金を預けられるほどの資産があるわけ無い。そう考えていたルイズは自分も、公爵家である本邸から毎月送られて来るお小遣いを引き出す為に、着いていった。

その一方で、お金を全く使う機会に恵まれなかった3人はというと、

「この世界じゃ、CDもDVDも無いだろうし……」

確かに、この中世欧州のような石造りの街並みに、電子機器をふんだんに使った、現代技術の粋が存在しようはずはない。音楽が大好きな彼女にとって、これはある意味、拷問にも等しかった。

ネギや兄と一緒に歌ったりはしているが、やっぱり生の歌が聞きたいのだ。

「ま、何かあるでしょ。いこ、シヤナ」

「あ、ちよっ、ちよっとな夏梨」

無いものを強請っても、仕方が無い。

夏梨がシヤナの手を取って、走り出す。

一番の大通りといっていた、この王宮に通じるブルドンネ街も道

幅は5メートルも無い通りだ。唐代の長安や、奈良期の平城京、ローマ帝国のコンスタンティノープルと比べると、かなり狭い。狭い狭いと嘆かれる東京の大通りでも、歩道だけでこれくらいはあるだろう。

案の定、ワクワクと好奇心でいっぱいだった夏梨は、直ぐに人にぶつかりそうになる。

「迷子になるなよ」

手をメガホンにして、小さくなっていく二つの背中に、心配する一言を一護は送った。

「ったく…。ま、大丈夫だろ。さて、こっちはどうするかね」

残ったのは特に目的も無い一護とアレンとキュルケとタバサの4人である。

何となく着いてきた4人。目的も無いので、「する」事に迷ってしまった。うーんと考え込み、4人の間を何とも言えない空気が支配する。

その支配に対するかのように「ぐー」っとお腹の音がなった。

「おいおい、アレン。どんだけ食べるんだよ」

発信源を隣に居た銀髪の少年だと思った一護は、茶化すような視線を向けた。その視線に対して、冷静にアレンは返す。

「え、やだな。僕じゃないですよ。一護さんじゃないですか？」

「いやいや、俺じゃねーって」

そんな軽口を叩きあい、ワハハと笑う黒服の二人。そんな中に意

を決したように、タバサが手を挙げた。3人、6つの目の視線が赤い縁の眼鏡の奥、青い目と交差する。

「…今の私」

かなり恥ずかしそうに言った。普段から無表情で、感情を表す事が少ない彼女の赤みの差した顔は何とも可愛らしいものだった。これには付き合いの長いキュルケも驚いたようであつて笑っていた。

「あなたのそんな顔、見るの初めてよ」

「そういえば、まだ朝ご飯食べてませんでしたね」

普段なら、アルウィーズの食堂で食べるのだが、修行を終えて出てきてから直通でやってきたので、食事を取っていないのだ。準備不足にやれやれと言った様子で4人とも頭を掻く。

「解った。まずはメシだな」

一護の言葉に誰からとも無く歩き出した。目的地はまず飯屋である。

そうは言うものの、まだ時間は早い。日は昇りきっているが、まだ昼には及ばない。どこの店もまだ準備中なのか、戸を堅く鎖していた。おまけに市には遅すぎる。何とももどかしい状況だった。

「やっぱ、時間が早いか…」

「…ごほん」

ふらふらと空腹で倒れそうなタバサ。さつきからあっちへフラフラ、こっちへふらふらしている。今にも人と正面衝突しそうで危ない。ぶつかった人が気の良い人なら未だしも、荒くれ者に当たった

ら、また一騒動だ。それを避けたかったアレンは彼女を負ぶってやる。

彼は細身の体であるが、実際はしっかり鍛えこまれているので、見た目よりもがっしりしている。タバサ程度の体重なら十分に支えられた。

「優しいんだな、アレン」

「いや、養父がこうやってくれましたから」

アレンは顔を薄く染める。自分と養父であるマナ・ウォーカーの思い出を浚いながら、昔語りの一つでもしたくなった。だが、折角これから食事だというのに、重たい身の上話は相応しくないと思っ
て、それ以上は言わなかった。

「そっか、優しい親父さんなんだな」

「ふふ、素晴らしい方だったのね」

一護とキュルケ。二人も自分の父親の肖像を思い出してみる。
それは彼の背で話を聞いていたタバサも同じだった。

「あーダメだ。俺の親父のいいところが一つも見つからねえ！」

必死になつて探していたが、どうにも父、黒崎一心のいい所が見
つからなかった。街医者としての腕前は確かにあるし、妻に対する
愛も深い。そこは息子である一護も夏梨も、認めている。

だが、こと父親という評価に限れば、どうにも良い点が見当たら
なかった。

「まあ、いいじゃないですか」

呻きだした一護を制するように、アレンが話を打ち切った。打ち切った所に丁度良く見つけたのは、ナイフらしき刃物と、先が三股に分かれたフォークの看板。それを店先に掲げた、食事処だった。

見ればそれなりに人が入っていて、何人かの目の前には色とりどりに飾り付けられた料理があった。

「じゃ、ここでいいか」

一護が何気なしにそんな事を言ったので。

顔には一ミリも出していなかったが、既に空腹の限界だったアレンがタバサを担いだまま、翔ける様にして店に飛び込む。それを追うような調子で、路地に残された二人が入ってきた。

「店員さん、メニュー持ってきて」

いきなり現れたマントを付けた少女、貴族を負った銀髪の少年に店員らしい若い女性は、恐る恐るといった様子でメニューを差し出した。またこの席に座ったのはオレンジの髪に黒衣の青年と、炎のような赤い髪を持った貴族だった。更に恐怖心を煽る。

「えっと、こちらに…、なります…」

ぱっとひったくるようにして、アレンがメニューを奪いとる。そして、ざっと一瞥。

長ったらしい名前が並んでいて、何とも読み上げるのが面倒だ。そう思ったアレンは、読んでいたページを店員に向けると、

「この見開きに書いてあるのを全て。とりあえず全部、4人前で」

そう宣言したのだった。

銀行でお金を下ろし、懐がそれなりに重くなった4人にして5人は服屋へと着ていた。

エドとネギの一回に引き出した金額に、ルイズと才人が驚いたのは言うまでも無い。何せ自分の一ヶ月分のお小遣いが、悲しくなるほどに多額だったのだ。

眩く光る金の光沢に、才人は目を回しそうだった。

4人が入ったこの服屋は先日、アレンも一緒にやってきた服屋である。店長である、立派な口ひげを蓄えた中年の男は、入ってきた四人を見るなり、

「やや、エドワード様に、ネギ様ではありませんか！」

などと言い出したので、才人もルイズも慌ててしまった。後ろには立派なマントを付けた貴族が控えているのである。それを無視して使い魔に話しかけるなど、ルイズにとっては言語道断だった。

散々、シャナに叱られても、まだそういった根性が抜け切れていないのであった。

「おう、服屋のおっちゃん！」

「こんにちは」

後ろで静かに燃え上がるルイズの怒りなど、意に介している風も無く、二人は店主と喋り始めた。

「それで、今回はどういったご用件で？また、服を仕立てまじょうか？」

矢鱈と低姿勢な店主。その態度に、嫌そうな顔でエドが言う。

「おっちゃんよ、『様』付けも、そんな低姿勢も辞めてくれって言うたろ？」

「そうですよ。恥ずかしいです」

「とんでもございません。お三方のお陰で私は救われたのですから」

今にも感涙にむせび泣きそうな勢いだ。

実は、前回三人が来たとき、この服屋は倒産寸前だったのだ。この時代、布の原料になるのは綿や絹であるが、大規模農業も工場制手工業も成立していない。だからこそ、平民は服を何度も使いまわし、貴族は服で着飾る。ある意味では宝石以上に服があるというのは、一種のステータスだったのだ。

そんな訳で貴族がまず来る事の無い首都の服屋は倒産寸前だったのだ。生地を扱っただけなら、未だしも被服加工しては、労力も掛かってしまい値段に釣り合わない。

「本当にありがとうございます」

思いっきり頭を下げる店主。それにはエドもネギも、肩に乗っていたアルも戸惑うばかりだった。

倒産寸前だった、この店にぶらりと入った3人。まだ物価も分かっていたいなかったで、全員の服を買う時にかなり過払いになってしまったのだ。おまけに「お釣りはいらない」などと言うのだから、かなり潤ってしまった。そうして危機を脱し、今に至るといふ訳である。

「ま、いいや。とりあえず、今回も服を仕立てて欲しいんだ」
「どちら様のでしょうか」

エドが商談の話を始めると、途端に仕事人、商人の顔になった。

「後ろの黒髪の奴だ。名前はサイト」

そこで漸くルイズと才人の存在に気がついた。ルイズがマントを付けた貴族だという事にも。

「やや、これはこれは貴族様。初めまして」

自然になるようにとの演技ではなく、あからさまに素で今気が付いたという店主の態度は、かなり腹立たしかったが、

「ふ、ふん。この使い魔の服を仕立てて頂戴。一心、貴族の従者というのに相応しい格好にね」

若干、怒りでしどろもどろに成りかけたが、最初から頭の中では決めていた事を言った。

「ルイズ、いいのかよ」

「何が？」

才人の疑問にルイズは慥然と返す。

「服、貰っちゃっても」

「良いに決まってるでしょ！主人の気持ちぐらい受け取りなさい！」

無論、ルイズの「主人の気持ち」というのは、才人が使い魔としての自覚が出てきたという事を褒めているにすぎない。だが、額面どおりに受け取ってしまった才人は、ちよつと感動してしまった。

「へへ、ありがとうよ」

「では、こちらへ」

そう言つて台の上へと上がらせる。直ぐに巻尺を取り出し寸法を測つていく。なれた手付きの店主は測つたサイズをすらすらとメモしていく。その様子を憚然とした様子で見るのはルイズ。

興味の無かつた二人は、別の事を考えていた。何事か話していたが、ルイズの耳には入らなかつた。

「終わりましたよ」

店主の言葉に、才人は台からゆっくり降りる。

「仕上がりは一週間となっております。出来ましたら、学院宛てに送りますので」

「そう。ありがとう」

ルイズは店主の言い値どおりの値段を払つた。

「ありがとうございます。エドワードさん、ネギさん。またご贖員
をお願いします」

「おう、また頼むぜ」

店を後にする4人にして5人。

結局、最後までルイズは店主にほつたらかされていた。

店を出た4人は次に向かう場所を決めようとしていた。服屋の軒

先でうんうんと唸っている。そこで口を開いたのがアルだ。

「サイトさんの武器を買ったらどうか？」

これから生きていく、生活していく上で武術というのは幾ら習得しておいても、損はしない。

そう言った意味もあつたし、何よりも3人には、一護達には話していない、胸のひっかかりを感じていた。誰も反論しない。

「いいですね」

「決まりだな」

ゆっくりと全員が立ち上がる。

「で、ルイズ。武器屋はどこだ？」

「こつちよ。剣だけ売ってるわけじゃないけど」

そういうとルイズは、案内を始めた。

彼女は歩く度に、ドンドン狭く路地裏に入っていく。その路地は何ともいえない悪臭が鼻につき、ゴミや汚物が、道端に転がっていた。

「何だ、コレ…」

「いやですね…」

光を受けて輝くブルドンネ街と違って、こちらは日も差さない影の部分である。

中世から産業革命時でも同じであるが、こういったスラムには誰も目を向けない。過ごす人の事を考えない。過去、こういった場所からヨーロッパ全土を滅ぼした黒死病ペストやコレラは始まったのだが、

まだこの世界には公衆衛生という概念が無いようだ。
そんな事を周囲を見ていたネギとエドとアルは思っていた。

「きたねえ……」

「だからあんまり来たくないのよ」

後ろを歩く3人を見ながら、ルイズが心底嫌そうな顔で言った。

途中で、柄の悪い奴らが群がってきて、金をよこせと言ってきたが、エドがボコボコにした。理由は勿論、盗賊に「チビ」と言われたからだ。その強さたるや鬼神の如しである。

あつと言う間に制圧して、逆に金を筆り取ってしまった。

「…この人の方がよっぽど盗賊だろ」

ぼんやりと才人はそんな事を思っていた。

そのまましばらく歩いていると、ルイズは、立ち止まり、辺りをきよろきよろと見回した。

狭い路地同士が交差して、一つの広場を形成している。

「ピエモンの秘薬屋の近くだったから、この辺りなんだけど……
……」

ルイズが指で指すのは、何を売っているのか看板からは判別しにくい店。

それなりに立派な店構えで、儲かっているのが何となく想像がついた。

「あれじゃないですか？」

ネギが指を指す。

ルイズが指した方へ見ると、剣の形をした看板が下がっていた。いかにも武器屋です、といった感じであるが、向かいにある秘薬屋と違って、看板が所々錆付いている。手入れされていないのか、それとも手入れするほど利益がないのか。

「そうよ、それだわ」

ルイズが嬉しそうに呟いた。どうやら、そこが武器屋であるらしい。

ルイズと才人たちは、石段を上り、扉をあけて、店の中に入った。

酒場にあるような、蝶番で止められた木製の戸を開けて4人は中へと入る。

店の中は昏間だというのに薄暗く、ランプの灯りがともっていた。壁や棚に、所狭しと剣や槍が乱雑に並べられ、立派な甲冑が飾ってあった。戸の近くには、質が悪いのか乱雑に入れられた剣が何本も樽に無造作に突っ込まれていた。

「いらつしゃい」

店の奥で、パイプをくわえた五十程の男が、先頭きつて入ってきたルイズを胡散臭げに見つめた。背中に羽織ったマント、そしてそれを留める五望星のピン。ルイズが貴族だとわかると、パイプを口から離し、ドスの利いた声を出した。

「旦那。貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさら」

ぶかあっと白い煙を吐きながらいう。

「お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや」

再び、パイプを銜える。

あまりにも怪しい態度。そんな自ら疑ってくれと言わんばかり態度だった。

「客よ」

ルイズは腕を組んで言った。

「こりやおったまげた。貴族が剣を！おったまげた！」

ちよつとした劇場なら、直ぐにでも脇役が出来そうなほど、仰々しい動きで店主は語り始める。

「どうして？」

「いえ、若奥さま。坊主は聖具をふる」

そう言いながら聖具を振るジェスチャーを交える、

「兵隊は剣をふる」

自慢のものらしい、剣を一本引き抜いて軽く振る、

「貴族は杖をふる」

剣から傍に落ちていた棒を拾うと、呪文を唱える、

「そして陛下はバルコニーからお手をおふりになる、と相場は決ま

っておりますんで」

謁見に参った民衆を見下ろすような調子で、店主はルイズ達に向かつて毛むくじやらの手を振った。勿論だが、この国の陛下はこんな毛深くはない。

「使うのはわたしじゃないわ。使い魔よ」

そう言つて才人を指指す。

「忘れておりました。昨今は貴族の使い魔も剣をふるようで」

主人は、商売つ氣たつぷりにお愛想を言つた。それから、才人をじろじろと眺める。目つきがちよつと怖い。その上にパイプを銜えているので、どこか甘い煙が才人の鼻を刺激した。

「剣をお使いになるのは、この方ですか？」

パイプを銜えたまま店主は尋ねる。ルイズは頷いた。用は済んだと思つた才人は直ぐに、店に並んだ武器に夢中だった。目を輝かせている。

エドは一本一本、剣を品定めするように見つめている。ネギはというと、名刀かもしれない並んだ剣を歳相応の笑顔で見っていた。

「わたしは剣のことなんかわからないから。適当に選んでちょうだい」

ちよつときつめにルイズは言い放つ。

主人はいそいそと奥の倉庫に消えた。そして彼はルイズたちに聞こえないように、小声で呟く。

「…こりゃ、鴨がネギしょってやってきたわい。せいぜい、高く売りつけるでしょう」

奥へ消えた彼は一メートルほどの長さの、細身の剣を持って現れた。

「そついや、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たすのがはやっておりましてね」

まるで世間話でも始めるかのような調子で話し始める。

こういった所に商売の上手さが現れるのだ。

「その際にお選びになるのが、このようなレイピアでさあ」

持ってきたレイピアには、きらびやかな模様が柄や唾に施されていて、実に貴族にお似合いの綺麗な剣だった。

「貴族の間で、下僕に剣を持たすのがはやってる？」

目の前の剣よりも気になった事があつたルイズは尋ねた。そのルイズの言葉に主人は「待ってました」と言わんばかりに、もっともらしく頷いた。

「へえ、なんでも、最近このトリスティンの城下町を、盗賊が荒らしてしております…」

「盗賊………？」

ちらりと才人はエドの方を見るが、本人は気がついていない。

「そついでね」

勿体つけたように目の前で剣を選んでいるルイズと才人に語る。さも自分が聞いてきましたという様な体裁で。

「なんでも『土くれ』とかいう、メイジの盗賊が、貴族のお宝を散々盗みまくってるって噂で」

それがこのレイピアを店主が進める理由なのだ。

「貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末で。へえ」

「貴族は気高いんじゃないのかなかったのか？」

ルイズや才人が振り向く。エドだ。

彼は剣を見ながらも、ちゃんと話は聞いていた。そして、この見事にルイズの神経を逆撫でするタイミングで口を挟んだのだ。

「盗賊ぐらいでビビリやがって」

「しょうがないでしょ。『土くれ』のフーケは狙った獲物は必ず盗み出すっていうし」

ルイズの何とも情けない言葉をスルーしたエドは店内を見回すと面倒臭そうな調子で、

「おい、こんな細い剣はダメだ。こんなナマクラ剣が使えるか」

店主を睨みつけながら言った。

エドの本職は錬金術師である。刀剣に関する知識や技術は無くとも、使っている材質や加工方法が解らないようなレベルではない。

確かに本職の鍛冶屋のように剣を鍛えたり、形を整形したりを錬金術でやってしまうので、鍛造や鑄造といった事はしないが、剣を、

正確には使われている鋼を見切る目位は持っているのだ。
彼の下した評価は、「しっかり铸造も鍛造もされていない」、不合格印だった。

「こんな錆びた刃物が売れるかよ」

悪態を付き捲るエド。

エドとアルの見たところ、飾ってある剣は大半が錆び付いて、どれも扱えるようなものでなかった。刃物は「モノ」を切る事が求められる。錆び付いて切れなくなった剣に役割はないのだ。確かに何本か錆付かずについて、使用に耐えられるというモノはありはしたが、結構値が張り、到底手が出るものではなかった。

その悪態に店主は負けじと、

「お言葉ですが、剣と人には相性ってもんがございます。男と女のように」

と余りにエドの指摘とは的外れな答えを返してきた。

「見たところ、その使い魔とやらには、この程度が無難なようで」

「そうか、そうか」

「あー！」

つかつかとゆっくりカウンターに迫る。アルはエドの上で呆れていた。

「主人、この剣は丈夫か？」

エドがレイピアを右手で思いつきり掴んで尋ねた。

レイピアが突きを重視して作られた剣とはいえ、刃を握れば血く

らいは出る。

だが、剣を握ったエドは血を流すどころか、痛がりもしていない。

「あたりまえでさア。うちの剣はどれも丈夫でさあ、へえ」

「じゃあ…」

ギリギリと握る力が強くなる。そして、最後にはボキッと派手な音を立てて折れてしまった。

カランカランと二つになった剣が石の床へと自由落下して、劈くような音を立てた。

「え、えっと…」

主人は片手で折られた残骸を見つめながら、困惑していた。

それにエドは追い討ちを掛ける。

「丈夫なのを持ってこい」

「…はい」

エドがそう言うと、主人はすっかり半泣き状態でぶつぶつ何かを呟きながら店の奥へ消えていった。アルだけはエドが何をしたのかを知っている。小声で批難を始めた。

「また、兄さん…。勝手に物質を変えて…」

そうなのである。

エドはカウンターに近づく間に、錬成を用意。それをレイピアにかけ、鉄からもっと折れやすい、つまりは脆い物質に変えたただけなのだ。決して、エドの握力で折ったわけでは無い。

「ほんと、あくどいな…」

「ま、いいじゃねーか。これでマシな剣が買えっただろ」

そして、今度は立派な剣を油布で拭きながら、主人は現れた。

「こ、これなんかいかがでしょうか？」

先ほどのことがトラウマになっているのか、エドを視界に入れた瞬間、引きつった笑顔を浮かべた。

持ってきたのは見事な一・五メイルはあろうかという大剣だった。柄は両手で扱えるように長く、立派なこしらえである。

ところどころに宝石が散りばめられ、鏡のように両刃の刀身が光っている。

見るからに切れそうな、頑丈そうな大剣であった。

「すごいですよ、これ！」

「すげえ…、ホントすげえ」

ネギもワクワクと言った調子で歩み寄る。

だが、それに反してエドの眉にしわが寄る。

「店一番の業物でさ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいは腰から下げて欲しいものですな」

この店で最上の商品を紹介できる事を店主は心から喜んでいられるしく、厚い胸板を更に力強く張って紹介を始める。

「といつても、こいつを腰から下げるのは、よほどの大男でないと無理でさあ」

確かに此処まで大きな剣を腰から下げるのは、才人の体格では無理だろう。

才人は早くもこの剣を背中に背負って戦っている自分の姿を妄想していた。

「やつこさんなら、背中にしよわんといかんですな」

才人は更に近寄って、その剣を見つめた。

「すげえ。この剣すげえ」

「わああ・・・」

一瞬で、欲しくなってしまうた。なんとも、見事な剣である。

才人が気に入ったのを見て、ルイズはこれでいいだろうと思った。

「店一番」と親父が太鼓判を押ししたのも気に入った。

ルイズだけではなく貴族という生き物は兎に角、見栄っ張りなのだ。だからこそ、貴族はなんでもかんでも、持つもの全てが一番でない気が済まないのである。

「おいくら？」

「何せこいつを鍛えたのは、かの高名なゲルマニアの錬金魔術師シユペー卿で」

眉間に刻む皺を更に深くしたエドは、そのシユペー卿とやらに会ってみたくなくなった。

勿論、理由は決まっている。アルは兄の喧嘩っ早い腰に、やれやれと頭を振った。

「魔法がかかっているから鉄だっって一刀両断でさ」

その言葉を聞いたネギが、おやっと言う顔をする。彼も魔法使いの端くれである。魔力を感じる器官というのも持っているのだが、この剣からは魔法の痕跡が一切感じられなかった。

「あ、あの、ルイ……」

「ごらんなさい、ここにその名が刻まれているでしょう？ おやすかあ、ありませんぜ」

ネギの言葉は遮られる。

主人はもつたいぶつて柄に刻まれた文字を指差した。そして、愛しく撫で付ける。

「わたしは貴族よ！！！」

ルイズも、胸をそらせて言った。払えるという自信の表れである。そんな薄い胸を張ったルイズに主人は淡々と値段を告げる。

「エキュー金貨で二千。新金貨なら三千でさあ」

「立派な家と、森つきの庭が買えるじゃない！」

ルイズは呆れて言った。

「名剣は城に匹敵しますぜ。屋敷で済んだらやすいもんでさ」

「新金貨で、百しか持ってきてないわ」

ルイズは貴族なのだ。

モノが食べたいと思えば、どこからか出てくる。服も、剣も、何もかもが。それを手に入れるに当たって、金を使うという機会に接してきていないのだ。

当然の結果の帰結として、買い物に関する駆け引き、所謂「値切

り」という概念すらなく、勿論、モノの値段というのも漠然としか解らない。この世界にいながらにして、エドやネギ同様、物価を理解していなかったのだ。

勿論、あったとしても彼女の山よりも高いプライドからすればまじしないだろうと、エドは当たりを付けていたが、ここまで自分の予想通りだと泣きたくなかった。

「はあ…」「はあ…」

兄弟揃って深いため息をつく。

何も考えずに財布の中身をばらしてしまう。

主人は話にならない、というように手を振った。何せ20分の1しか持つてきていないのだ。

「うっ…」

その主人の表情にルイズは顔を赤くした。剣がそんなに高いとは知らなかったのだ。

しかし、何事が閃いたように、エドとネギの方を、その薄い胸を張って、

「あんなたちのお金、私に寄越しなさい」

「は？」

「え？」

エドは呆れている。アルは嘆いている。ネギは戸惑っている。

エドとアルは此処まで予想がついていた。お金が無いのなら、在る所から引つ張ってくればいい。そして自分の後ろにいる少年達はお金を持っていると。

勿論、それは折込済みだったので、その対応も何パターンか用意

している。

今回は言って聞かせるのが面倒だったので、

「ふん！」

右手で文字通りの鉄拳制裁を喰らわせた。ゴチンと何かが割れたような鈍い音がした。その後には頭を抱えて蹲るルイズの姿が。

「わー、何してるんですけ、エドさん！」

主人が冷や汗をかいた。今度は何をしでかすんだ。といった感じである。

そんな主人をよそにまるつきりルイズに興味を無くしたエドは続ける。

「これは何製だ？」

「へ？」

質問の意味が解らなかつた店主はマヌケな声を上げる。

「へ？え、いや、そ、そうですね」

「銀製だな？」

「へえ、はい。銀製です」

「そうか。なら、ダメだな」

「ええ？」

主人は驚いた。

「は？」

コレには才人も驚いた。

才人の価値観では、銀メダル、つまりは二番というものだ。それをダメだとは一体どういうことだろうか。

「こ、この剣は名剣ですぜ。頑丈さといったら一級品でさあ。おまけに高級ですぜ」

必死に取り繕うが、エドには意味が無い。

エドは店主の反論を無視して、そのダメな理由を一から十まで説明した。

「そもそも銀ってというのはな…」

銀は貴金属であり、古来から金属を加工する事で食器や装飾に用いられてきた。

だが、銀製の武器というものは存在していない。なぜかという単純に剣や槍など、武器としての使用耐久に無理があるからである。銀は水に弱く、錆びやすい。おまけに柔らかいのだ。武器として使っても直ぐに折れてしまう。ましてやそれが戦場なら尚更だ。

一部の隙も無い科学者としての意見。それにはネギは感心して、賞賛の拍手を送っていた。

才人も自分の高校の先生が言っていたこと以上の、知識を聞いてなるほどと思っていた。

「ま、まっしてくれ！すまんかった！あつしが悪かった！」

理路整然として反論の使用がないエドの言葉にとつとつ、主人が負けた。エドがニタアと何とも嫌らしい笑顔を浮かべる。その悪魔のような笑顔を見て、また弟は顔色を濃くした。

「そうか、そうか。解ったか」

エドがニヤニヤしながら言う。

「すみません！すみません！」

主人がひたすら謝る。

その主人の無様な様子を見ていたのか、

「ぶひゃひゃひゃひゃ！」

突然、何とも下品な笑い声が上がった。

「おもしれエ。おもしれエ。親父をそこまで追い詰める奴なんぞ、

お前らが初めてだ」

「誰だ？」

頭を抱えていたルイズも含め、皆一様にその姿無き声の主を探す。店内には5人以外の人影はない。ただ、乱雑に剣が積んであるだけである。主人はその声を聞いて、さらに頭を抱えた。

「おい、そこの坊主！こつちだ！」

「誰ですか？」

ネギは丁寧に聞き返しながら音源を探る。声の反響や大きさから、声のする方に近づいた。

「おめえの目は節穴か！」

「え？」

陳列棚に近づいていたネギは漸く音源を見つけた。
なんと、声の主は一本の剣であった。

「へえ、剣が喋ってるのか」

と鎧が喋る錬金術師の感想。

「すごいですね」

とオコジヨが喋る魔法使いの感想。

「剣がしゃべってる」

才人は驚いた。ネギとエドは、その剣をまじまじと見つめた。
さっきの大剣と長さは変わらないが、刀身が細かった。薄手の長
剣である。

ただ、若干の表面に錆が気になった。だが、中までは錆付いてい
ない。表面を磨けば何とか使用に耐えられるようになるだろう。

「何ですか？この剣は？」

「うるせえよ」

剣は何ともつんけんな感じで返す。

「やい！デル公！お客様に失礼なことを言っただけじゃねえ！」
「デル公？」

才人が、二人から受け取った喋る剣を手に持つ。

「それって、インテリジェンスソード？」

ルイズが、当惑した声をあげた。
すっかり元気をなくした主人が説明する。

「それでさ、若奥さま。意思を持つ魔剣、インテリジェンスソード
でさ」

店主は喋る剣の扱いについて、かなり頭が痛いらしい。

「いったい、どこの魔術師が始めたんでしょうかねえ、剣をしゃべ
らせるなんて……」

なるほど、来歴は解らないという。

ますます、魔剣という響きに箔が付くと思った才人は、さっきの
剣よりも早く気に入ってしまった。

「とにかく、こいつはやたらと口は悪いわ、客にケンカは売るわで
閉口してまして……」

深いため息を付いて、

「やいデル公！！これ以上失礼があったら、貴族に頼んでてめえを
溶かしちまうからな！」

「おもしれ！やってみる！」

売り言葉に買い言葉。店主と剣の口喧嘩は客を置き去りにヒート
アップする。

「どうせこの世にゃアもう、飽き飽きしてたところさ！溶かしてく
れるんなら、上等だ！」

「やってやらア！！！」

主人が処分する為に近づいてきた。しかし、才人はそれを遮る。

「もったいないよ。しゃべる剣なんて面白いじゃないか！」

言葉の端々に喜びと好奇心が混じっている。

才人は、まじまじとその剣を見つめた。

「お前、デル公っていつのか？」

「ちがう！デルフリンガーさまだ！覚えておけ！」

「名前だけは、一人前でさ」

呆れた様子で主人が言う。

「俺は平賀才人だ。よろしくな」

剣は黙った。じっと、才人を観察するかのように黙りこくった。

「あの、デルフリンガー？」

唐突に黙ってしまった剣に、才人は語りかける。

それからしばらくして、剣は小さな声でしゃべり始めた。

「おでれーた。てめ、【使い手】か」

「【使い手】？」

「ふん、自分の実力も知らんのか。まあいい。てめ、俺を買え」
「買つよ」

才人は嬉しげに言った。すると剣は、黙りこくった。

「ルイズ。これにする」

ルイズがいやそうな声をあげた。

「え。そんなのにするの？もつと綺麗でしゃべらないのにしなさいよ」

ちらりとカウンターに乗った店主の持ってきた、大剣へ視線を送る。どうもエドの御高説は聞いていなかったらしい。そもそも銀だの、金だの、合金だのと喋っているのだが、言葉の一つの理解できていなかったのだから、当然といえば当然である。

ルイズには散々な言われようではあるが、才人は意地でも買うつもりのようなのだ。

「いいじゃんかよ。しゃべる剣なんて面白い」

「それだけじゃないの」

ルイズはぶつくさ文句を垂れているが、他に買えそうな剣もないので、主人に尋ねた。自分の手持ち金以上の物を買おうとして、またエドの鉄拳を貰いたくはない。

「あれ、おいくら？」

「あれなら、百で結構でさ」

「安いじゃない」

「こつちにしてみや、厄介払いみたいなもんでさ」

主人は手をひらひらと振りながら言った。

ルイズが金貨を主人に渡し、主人は慎重に枚数を確かめると、頷いた。

「毎度」

剣を受け取り、おまけとばかりに鞘に収めると才人に手渡した。

「どうしても煩いと思ったら、こつやっつて鞘に収めてくれればおとなしくなりますよ」

才人は頷いて、デルフリンガーという名前の剣を受け取った。

t h e s w o r d a n d l e g e n d y (後書き)

ルイズが物価を知らないというのは貴族なら当然かと思いましたが、入れました。T A L E of A b y e sでも序盤にルークが林檎を丸齧りして、ティアに怒られていましたが、今回はそれだと思ってください。

モノの値段を知るといのは、為政者にとっては重要な事かもしれませんが。

今の殿様企業や、政治家を見ていると庶民派といのは、かなり稀有な存在でしょう。

公衆衛生の話題が出てきました。

そういえばシャナも原作5巻で、公衆衛生についての本を読んできましたが。

公衆衛生というのは伝染病を防ぐ上で、最も重要なポジションを占めています。欧州全土が死に絶えたのは、大戦を除けばペストとコレラくらいです。これもスラムが乱立し、それを放置していったツケが回ってきたからです。

逆に公衆衛生のしっかりしていた江戸は伝染病によるパンデミックは記録されていません。今現在、先進国では伝染病が流行せず、途上国で猛威を振るうのは、こうった状況もあります。

銀の性質について。

銀というのは、非常に錆びやすい性質を持っています。それが銀食器などに使われるのは純銀では無いからです。銀色の物質、例えばクロムやチタンなどを混ぜた合金して錆びないように加工されています。

そして、何よりも武器として使われない理由は、重いという事、高いという事に限ります。重いということはそれだけ、機動力の減退

となりますので、行軍に影響が出ます。貴金属で作れば、それだけ価値が上がってしまい兵站到持たせれば、軍の維持費も高騰する。そんな理由があります。

だからこそ、狼男を倒し、魔よけともされる、必殺の弾丸である純銀シルバーブレットの銃弾というのがありますが。

tapestry [legendy returning]

トリステン魔法学院の朝。

ネギの魔法球で鍛錬を繰り返せば、実時間では短時間で出来るの
だろうが、現在修復中との事で締め出されてしまったので、因縁の
多いこの場所へとやってきた。

日の光が当たるが、まだ静謐な空気が満ち、学校らしい喧騒は聞
こえない。

その静まった空気を裂いて一陣の風が吹く。

「はああ！」

一護へと空気を断つ音すら後に残さずに、神速の斬撃が奔る。

それに合わせて、着ている赤のベストが風に乗る。

傍から見ている才人の肌には、草の生えた地を摺り上がって、必
殺の一撃を込めた太刀風。だが、その必殺の風に対する黒の気の張
りようは凄まじい。

黒の革ブーツが少しだけ後ろへ引く。

「おっと！」

反射的に首だけを後ろへ引き、斬撃を軽く避ける。届く距離まで
は実に10センチ少々。明かに振る速度よりも早く動いている。だ
が、その引いた頭へ振り下ろす方向へと振る方向を変える。

脳天へと落ちる重力によって加速する一撃は、しかし、手首をガ
ツシリと掴まれ、

「ほい！」

一護の背へとぶん投げられ、そのまま背中からまともに落ちた。ドサツという鈍い音が空気を伝う。

しかし、それでもシヤナは気を失わず、その身を最大限に捻って立とうとするが、その前に一護に額を押さえられてしまった。流石のフレイムヘイズもこんな事をされては、動くことができない。

名実伴に負けだった。しかも、相手は武器を振るっていない。かなり悔しかった。

「むう…」

「しかし、凄まじいな…。ここまでの力量差があるとは…」

じとつと睨みつける契約者に、炎の魔神は素直に結果を見つめなおすように促した。

一護は二人の模擬戦をじつと見ていた、才人の方へと向き直る。

「今のような感じだ。剣を振るう感覚ってのは」

「いや、あの…」

デルフリンガーを手に入れて帰ってきてから、また再びダライオマ魔法球へと身を投じた才人は、エドの指導の下、基礎体力を更に強化すべくサバイバルに挑んでいた。時間は約20時間、魔法球の中では20日の時間だ。

何せ、身長が188センチと恵まれた体格である一護に比べて、才人の背は172センチしかない。こんな体で薄刃とは言え、大剣を振るうのだ。基礎体力は絶対に必要だった。

そして今朝。それなりに体力を付け焼刃であるが、手に入れる事のできた才人を連れ、一護とシヤナは決闘騒ぎのあったヴェストリの広場にやってきた。ここで毎朝、剣の訓練をするという。ただ、乗り気だったのはシヤナだけで、一護は面倒臭がったが、結局根負けしてしまった。

「解ったか？」

それで二人は見せてくれたのだが、如何せん速過ぎた。

文字通り神速で振るうシャナの握った棒切れを、一護は同じように神速で避ける。特に最後の手首だけを握ってやった投げは、最早目で終えなかった。

むくりと起き上がったシャナも、才人へと向き直る。

「今みたいに、戦いの場では技術も型も必要ない。ただひとつ『殺し』を感じる事なの」

何ともシャナらしい率直で、殺伐とした言い方だった。

「なんにするにつけ、これができないと話に成らない」

きっぱりと言い切る。

「今も私の動きから『殺し』を感じ取って動いていた。それが出来れば避けられるし、攻められる。」

「……」

「解りにくい！」

シャナの直截な言い方に、戸惑う才人を現実へ引き戻したのは、彼女の脳天へと落ちてきた、一護の拳だった。何とも可愛らしい声を上げて蹲る。

「ま、ごちゃごちゃ考えなくても、まずは『ビビらない』ってこつた」

腕を組んで解説を始める一護。今度は何とも解りやすい解説だった。

「相手の動きから目を瞑らない。逸らさない。そうやって相手の動きを目で追う」

「ふむふむ」

「型や技術がいらないうてのは本当だが、相手にビビッちまったら、勝てるモンも勝てねーぞ」

一護の言わんとしている事は、素人の才人にも良く解った。

目を逸らせば、相手の攻撃を見切ることできない。避ける事もできはしない。ましてや反撃など叶わない。その動き、シヤナの言う所の『殺し』を感じる事に繋がるのだろう。そう理解した。

これは一護とシヤナがお互いが経験して、得てきた成果だった。

「よし、じゃやるぞー！」

「はいー！」

そういつと背中に背負ったデルFRINGERを抜く。

「よう、相棒。あの二人のうち、どっちとやるんだ？」

デルFRINGERがいつもの調子で喋りだす。これを見たとき、驚くかと思っただが、何せぬいぐるみとペンダントが喋るのだ。面白そうとシゲシゲと眺められたが、特別驚いている風も無かった。

「今回は模擬戦だよ。でも、本気で行くぞ」

ぐっと柄を握る力を強くする。そうすると何故か左手に刻まれたルーンが淡く光るのだ。

一番最初に気が付いたのは、エドとのサバイバル中にナイフを握った時だ。これが光ると明かに自分の実力以上の力が発揮できるのだ。早く動けるし、手の動きも早くなる。

ルイズに聞いてみると、「使い魔の能力」かも知れないとの事。このルーンは才人だけではなく、一護やアレン達にも刻まれている。彼らもまた、武器を握ると早く動けるのかもしれない。

現に繰り返してきた模擬戦の中、武器を握ったシャナと夏梨の左の手の甲は淡く煌いていた。

「あいよ、頑張れ！」

「おう！」

そうして、ルイズ達が目覚めるまでの間、ひたすら模擬戦を続けるのだ。

だが、長い間戦い続けた経験のある二人と違って、才人は昨日剣を握ったばかりの素人。動きが多少早くても、見切られて、避けられ、また反撃に会ってしまった。

「いたた……」

大空を見上げるのは、通算32回も地に叩き伏せられた才人である。

確かに才人には熱意がある。だが、それは決して結果には直結しないのである。特に武術というのはそれが顕著に現れる。あつと言う間に達人の域にまで達する事の出来る天才が居れば、一生掛かって努力しても凡人のまままで終わってしまう人、その両方が確かに存在している。

「ま、一朝一夕で俺らに勝とうってのが無理な話だな」

一護の評価は適切だった。その傍で、休憩を取っていたシャナは、食堂からかつぱらってきたパンを食べている。本人いわく、「メロンパンが食べたい」との事だったが、生憎とこの世界にメロンパンは存在しない。そして7人の誰もメロンパンの作り方を知らなかった。

「だけど、筋はいいんじゃないか？」

「あむ、多分、このルーンでのドーピングが、はむ、利いてるんだと思う。実力じゃない」

一護に負けた悔しさを噛み締めるように、シャナはパンを噛み干切る。

「厳しいんだな…」

「当然よ」

直裁で直接的な言い方に、才人は愕然とする。解ってはいるので反論のしようも無かった。

「追々、身に付けていけばいいさ」

「はい」

一護の励ますような言葉。

その言葉に才人は元気付けられる。根拠は無いが、力強い言葉だった。

「ま、それはお前も同じだけどな」

「うっ」

グシグシとしっかりと梳かれたシャナの髪を強く撫でる。手を離

した後は、折角の髪がボサボサになってしまっていた。それをシャナは拗ねるような顔で見っていた。

「じゃ、そろそろメシだな。メシ食ったら、少し休んでまたやるぞ」
「はい」「…はい」

荒らした後を足を使って隠して、3人は食堂へと向かっていった。勿論、実力が上といっても3人は貴族では無い。その為に学院の食堂に入る事は叶わなかった。今では、厨房から食材を適当にかっぱらって来たり、街に出て買いに行ったりしながら、箱舟の中に設えられた台所でやっている。

こうしないとアレンの食事が間に合わないのだ。自分で量を測って作ってをしているので、必要な量だけが消えていく。料理の担当はアレンと夏梨だ。一度、シャナが「やりたい」と言い出したが、全てが黒焦げの何かになってしまったので、任せるのは全会一致で辞めさせた。

本人はかなり不満そうだったが。

「ういつす、おはようさん。今朝は何だ？」

広場から箱舟の中へと入る。実に簡単に行き来が出来て非常に便利な代物だ。

そのまま食堂として使っている家へとたどり着く。戸の向こうには相変わらず、大盛りを超えるような量を盛られた皿がいくつも並んでいる。これの殆どが、アレンの腹の中へと消える。

「おはようございます。今日は卵を使ってみました。どうぞ」

アレンの言葉に促されて、5人が席に付く。ここでの生活を始めて、既に1週間。

色々と7人の中で、固定化されたスケジュールが生まれ、それに沿って生活をするようになってきた。毎食の料理当番はアレンが基本に、一護とエドがサポートする。かといって、食事以外は仕事も無いので、ルイズの授業に着いて行ってみたり、修行したりとそこはローテーションが組まれている。

「ネギとエドはどうしたの？」

挨拶もそこそこに料理に手を伸ばしたシャナが尋ねる。

「あの二人なら、もう図書館へ行ったよ。食事も終わってる」
「そう」

短く了解の言葉を切ると、フォークを口へと運ぶ。シャナのマナーは一般家庭で過ごしてきた一同にとっては実に立派なものだった。何でも「昔、知人に教わった」らしい。

「凄く、上品ね。私も教えて貰いたいな」
「これくらいなら、直ぐにでも覚えられるし、多分、簡単」

シャナの言う「簡単」と言うのは決して額面どおり「簡単」ではないという事を、才人はこの一週間の扱きでよく解っていた。シャナとネギはタバサに文字と言葉を教えてもらってから、今度はこのメンバーにも教えている。だが、やっぱり先生であるネギの方が教え方は良かった。

「ごちそうさまでした」

先に食べ終えたアレンが立ち上がる。

「んじゃ、僕は厨房の手伝いでもしてきます。皆さん、後片付け、よろしくお願いしますね」

そう肩を回しながら、部屋を後にした。

7人はルイズの世話以外にも、厨房の手伝いをしてみたり、図書館での調べ物をしている。

「じゃ、俺が片付けとくわ。三人でルイズの処へ行ってくれ」

「はい」「解った」「大丈夫です」

食事を終えた面々は各々の場所へと向かっていく。

一護はシンクに向かい、水を流し始める。才人とシャナと夏梨は、帯刀してルイズの元へと行く事にした。さて、一足先に箱舟を出たアレンだったが、

「えっと、ここどこ？」

迷っていた。実を言うと厨房の手伝いは彼は初めてだった。

出かける前に、誰かについて来て貰えれば良かったと少し後悔する。

この学院は結構広大な敷地面積で、尚且つのべ床面積も相当にある。一番食堂に近い箱舟から出てみたが、厨房へとたどり着けず、迷ってしまっていた。おまけに、

「お腹すいたな」

さつき食べたばかりだが、また腹が減ってきた。

正直、他の面々も食べるので、自分は控えめにしていたのだ。だが、そうなる则ち自分の食事が足りなくなってしまう。思えば、ここに来てから学院内では満腹になった記憶がなかった。常人とは

思えない胃の圧縮率を誇るアレンには、「机に乗る量」というのは、到底足りるはずがない。

「はぁ、腹が減った」

人の居る学校なのに、アレンは遭難したような気分になってきた。こんな時、自分の方向感覚の無さが恨めしい。余りに恨めしくて、壁に手をついた。

「どうなさいました？」

その鈴の鳴るような声に振り向くと、大きい銀のトレイを持ち、メイドの格好をした素朴な感じの少女が心配そうにアレンを見つめている。彼は初見だったが、この少女がルイズに食事を抜かれて困っていた才人を助けた、シエスタであった。

「あ、どうも。ごめんなさい。お腹すいちゃって……」

「大丈夫ですか？」

銀髪の少年におろおろしながらも、彼女はデジャブを感じていた。

「いや、お腹空いただけなんで、何かごはんを貰えたら……」

「まあ大変！わかりました。どうぞこちらにいらしてくださいな」

シエスタはアレンを連れて歩き出した。

彼が連れていかれたのは、ちょうど彼が行こうとしていた食堂の裏にある厨房だった。

此处では相変わらず、大きな鍋や、オーブンがいくつも並んでいて、コックたちが忙しそうに料理を作っている。

「ちょっと待っててくださいね」

アレンを厨房の片隅に置かれた椅子に座らせると、彼女は小走りで厨房の奥に消えた。

そして、お皿を抱えて戻ってきた。皿の中には、才人の時と同じように、温かい湯気の立つシチューが入っていた。

「貴族の方々にお出しする料理の余りモノで作ったシチューです。よかったら食べてください」

「ありがとうございます！」

シエスタの言葉にアレンは思いつきり頭を下げた。

「ええ。賄い食ですけど……」

「助かりました！」

そう言ってガツガツとシチューをおいしいおいしいと食い始めた。

「おいしいです！おかわりください！」

「ふふ、ゆっくりなさってください」

アレンは夢中になって、すっかり最初の目的を忘れてまでシチューをバクバクと食べた。

黒髪の少女はアレンの異常な食いつぶりに驚いていたが、ニコニコしながらそんな彼の様子を見つめていた。だが、消えるように腹へと消えていくシチューを見ていくと、段々顔が引きつってきた。そこで、彼女が口を開いた。

「あなた、お名前は？」

「アレンです。アレン・ウォーカーです。ありがとうございます」

えつと…」

そこまで言っつて、まだお互いに自己紹介を済ませていないということに気がついた。

「あ、ごめんなさい。私はシエスタつていいいます」

「本当にありがとうございます。シェフにもお礼を言いたいのですが…」

「あ、待っていてくださいね」

そういつと再び、厨房の奥へと消えていく。

そうして直ぐに高い帽子を被った男を連れてきた。太い腕に、清潔に保たれた指。

「お前さんか？学院の中で、遭難しかかった奴つてのは」

シエスタが連れてきたシェフはアレンの肩を叩きながら、豪快に笑つ。

どこか懐かしい感じがして、アレンはうつすらと右目に涙を浮かべた。

「はは、恥ずかしながら。アレン・ウォーカーです。美味しかったです、シェフ」

そう言っつて恭しく一礼する。このような礼儀作法は師匠との修行時代に散々、叩き込まれたので付け焼刃ではない優雅さが隅々に漂つている。その挙動に感心する。

「何ともできた兄ちゃんだな。俺はこのシェフ長のマルトーだ」

「ところであなたつて、ミス・ヴァリエールの使い魔になつたつて

いう…」

シエスタはアレンの特徴的な白にも見える、老人のような銀髪を見て思い出した。

「ええ。その通りです」

「かなりの噂になってますよ。その中の女の子二人が、貴族様を倒したって」

シエスタはニツコリと笑った。

アレンが元の世界で最後に見た笑顔と似た笑顔だった。

「ああ、なるほど。どうもお騒がせして申し訳ありませんでした」

ペコペコと頭を再び下げる。

初めて街へ行った帰りの後の事。才人が大怪我をしていた理由は、大まかにしか聞いていなかったが、随分と広まってしまっているらしい。

「いや、あんな風にガツンと貴族をやっちまうなんて初めてだったモンだからよ。胸がすいたぜ」

ニツと白い歯を見せて笑うシエフ長。

やはり、この世界の貴族と平民の確執は根深いもののようにだと、改めてアレンは思った。だが、そんな意識を押し流すように、残っていたシチューを頬張り始めた。その傍には、何枚にも積み重なった空の皿がある。その上へ、さらにお皿を重ねた。

「ごちそうさまでした」

スプーンを置いて、シエスタとマルトーへと頭を下げる。

「おいしかったです。ありがとうございます。お礼に何かさせていただけませんか？」

「なら、昼食の準備と配膳を手伝ってくださいな」

シエスタは微笑んで言った。

「解りました」

アレンは胸を張って言った。

アレンの料理の腕前は実に素晴らしい。師匠に教えられたのは、上流階級の拳措だけではない。こういった料理を始めとする家事全般も教えてもらったというか、身に付けていた。何せ、身に着けないと、容赦なく鉄拳が落ちてくるのだ。

「ほう、兄ちゃん。中々、腕があるじゃねえか」

マルトーがアレンの料理の腕前に感心する。実にテキパキとして無駄の無い動きをしている。昼食用のジャガイモを剥き、肉を切っていく。朝食が終われば、片付けの後は直ぐに昼食だ。存外、学校の食堂というのは忙しいものだ。アレンは改めて自分の食事を文句も言わずに出してくれた、教団の料理長であるジェリーに心の中で感謝した。

「いや、まあ、色々あったもので」

自分の腕前に関してはお茶を濁す。あまり突っ込んで欲しくない事もある。

「んじゃ、そろそろ昼食の時間だ。頼むぜ、アレンよ」
「はい」

ポンポンと肩を叩く料理長に、ニツと微笑んで返す。
昼食の時間になるとエドとネギが、夫々アルとカモを連れてやってきた。結構忙しいらしく、アレンに言われるまま、二人も手伝う事になった。勿論、杖を持ったネギに厨房の面々は戦々恐々としていたが、ニコニコとこの世の人の良さを全部集めたような彼の笑顔に、皆腑抜けになっていた。

唯一、シエスタだけは「この子は年下、この子は年下…」と何か呟いていたが。

「料理するつても大変だよな」

「そうですね」

「はい、軽口を言っていないで、これを運んでください」

ドン、ドンと二人の両手に大きな皿を渡される。一同は此処での仕事を手伝う代わりに、食事や食料の世話をして貰っているのだ。確かに料理はアレンの担当ではあるが、普段から研究に没頭しやすい彼らは別枠で食事を、この厨房で貰う事が多かった。

コレくらいの手伝いは造作も無い。

「じゃ、行つて来るぜ」

「行つてきます」

二人が厨房を出て行く。

すると、二人の視界に金色の巻き毛に、フリルのついたシャツを着た、いかにもキザなメイジがいた。彼が才人と決闘騒ぎを起こした、ギーシュだと気がつくのに、それ程時間は掛からなかった。

相変わらず、薔薇をシャツのポケットに挿している。

(おいおい、何だありゃ…)

エドは自分の趣味の悪さを棚に上げて笑いたくなくなった。

「なあ、ギーシュ！お前、今は誰とつきあっているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

取り巻きの二人がニヤニヤと笑ってそのメイジに尋ねる。

彼はすつと唇の前に指を立てた。

「つきあう？僕にそのような特定の女性はいないのだ」

才人との決闘の経緯は、シエスタヤルイズから聞いて二人も知っている

どうも彼はシャナと夏梨に、完全に敗北したのを反省していないようである。あるいは、二人に負けた事を無かった事にしようとしているのか、真意は知らないが、エドは取り敢えず、イラツと来た。本当に彼は頭に血が上りやすい。

「薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

エドの配り終えた後のトレイが、物凄い力で折れ曲がった。

「ネギ、アル。ちょっとあの気障ったらしいの、しばき倒してきていいか？」

口をひくつかせながら、今にも飛び掛りそうなをエドをネギは慌てて止める。

「ダメですつてば！本当に死んじやいますよ！」

ギヤーギヤーと喚く二人の所へ丁度、やってきたルイズとシャナ達もやってきた。

ネギに才人も加わり、エドの暴走を阻止する。確かにエドが全力で襲い掛かったら、1個大隊くらいなら簡単に殲滅できてしまう。あの気障ったらしいギーシュだけに被害が済めば御の字である。

「俺もムカついているから！」

「あいつ、何も反省して無いじゃん！」

むすーっとした表情で夏梨が憤慨する。当事者だった二人は、エド以上にいらだっていた。

「皆さん、どうされたんですか？」

「早く、運んでくださいよ」

そこへアレンとシエスタがやって来た。

戻ってくるのが遅い二人を気にしていたらしい。くの字に折れ曲がったトレイを拾いながら、やれやれといった様子で、全員の見つめる先を見る。

そのとき、ギーシュとかいうメイジのポケットから何かが落ちた。コロコロと転がって、シャナの目の前にまるで意思が在るかのようになっている。

「はあ、本当にコイツは進歩して無いのね」

横に居る才人をチラリと横目で見ながら、呆れた声で呟いた。それを兄に似た面倒臭そうな様子で夏梨が拾い上げ、

「おい、落としたよ」

と言ってテーブルの上に置いた。

ギーシュは苦々しげに、夏梨を見つめると、その小瓶を押しやった。その行動に一同、「ああ、やっぱりか」と言っ調子で頭を抱える。

「これは僕のじゃない。君は何を言っているんだね？」

「どうみても、お前から落ちたよ…。つか、何も反省して無いんだな…」

年上だが、ここまで反省の色が見えないと、もう一度ぶん殴ってやりたくなった。孔子の言葉だが、「過ちて改めざる、これ即ち過ちという」という言葉を耳にタコが出来る位に言っやりたくなった。

その小瓶の出所に気づいたギーシュの友人たちが、大声で騒ぎ始めた。

「おお？その小瓶は、もしか、モンモランシーの香水じゃないのか？」

「そうだ！その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぞ！」

「そいつが、お前のポケットから落ちてきたってことは…」

三人は同じ結論に到ったらしい。勿論、その余りに無様な様を才人は呆れた様子で眺めていた。

「つまりお前は今、モンモランシーと復縁したんだ。そうだな？」

この間振られたばかりの女子生徒と復縁したらしい。
復縁できるギーシュもだが、簡単に浮気を許してしまう、相手の
女の子も相当なモノだ。

「違う。いいかい？彼女の名誉のために言っておくが……………」

ギーシュが何か言いかけたとき、後ろのテーブルに座っていた茶
色のマントの少女が立ち上がり、ギーシュの席に向かって、コソコ
ソ歩いてきた。

亜麻色の長い髪をした、なかなかの美少女だった。この間のケテ
イとは違って、ツリ目で何処と無く気の強そうな感じだった。マン
トの色からすると、一年生だろうか。

「ギーシュさま？」

そして、顔には明かに怒りの表情が浮かんでいる。文字通り、修
羅のような顔だった。

「やはり、ミス・モンモランシーと…」

「彼らは誤解しているんだ。バーバティ。いいかい？僕の心の中に
住んでいるのは、君だけ……………」

バチンッ！バチンッ！

二発、乾いた音が響いた。

ギーシュが言い終わる前に、バーバティと呼ばれた少女は、思い
つきりギーシュの頬を二発もひっぱいた。シャナと夏梨はこの様
を呆れた目で見ていたが、アレンに辞めさせられた。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠で
しょう！さようなら！」

そう言つてつかつかと歩いていく、バーバティ。

余りにも、前回と同じシナリオを辿つてゐる展開に、才人は段々面白くなつてきた。

その後ろ姿を見つめながらギーシュは、頬をさすつた。

すると、遠くの席から一人の見事な巻き毛の女の子が立ち上がった。件のモンモランシーである。

かつかつと歩き方や表情に怒りが含まれているようである。おまけに1ヶ月程で2回目だ。その怒りの大きさは、最早知るべくも無い。そしてギーシュの席までやつてきた。

「モンモランシー。誤解だ。彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただけ………」

「やつぱり、あの一年生に、手を出していたのね？」

静かな怒り。

こういつた修羅場というのは傍で見ているのが一番面白いと、悪い顔でエドは見ていた。

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー」

あたふたと慌てるギーシュ。

「薔薇のような顔を、そのような怒りで歪ませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

本当に懲りない男である。一言一句違わず、自分が悪くないというような言葉に本当に一同揃つて呆れてしまった。モンモランシーは、テーブルに置かれた高そうなワインの瓶を掴むと、中身をどぼどぼとギーシュの頭の上からかけた。赤いシミがシャツへと広がる。

ワインの良い芳醇な香りが辺りに漂う。

そして、モンモランシーはワインをかけ終わると、「うそつき！」と怒鳴って走り去っていった。

辺り一帯にシーンとした空気が流れる。余りの出来事に思考が着いていかないのだ。

ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭く。

そして、やれやれといった感じの芝居がかった仕草でこう言った。

「あのレディたちは薔薇の存在の意味を理解していないようだ」
「ダハハハハ！」

遂にエドが耐え切れなくなった。大きな声を上げて兎に角、笑う。腹を抱えて笑う、思いつきりバカにした様子にアルは額に手を当てたくなった。勿論、彼も人形でなければ、パンチの一発ぐらいはかましていたかもしれない。アラストールは、それを自らの娘に置き換えて、イライラしていた。

一通り、笑い終えたエドを抱えて、厨房へ残った仕事を片付けるべく、シエスタと一緒に再び歩き出す。

「待ちたまえ」

そこでギーシュが一同を呼びとめた。

「なんだ？浮気野郎。ぷぷぷ……」

代表して、エドが答える。状況の面白さに笑いが止まらない。

同じ浮気がちな男でも、自分の上役とは天と地の差だ。全ての女性に平等の愛を注ぎ、女性同士を喧嘩させない。自分も浮気者と言われない最高の状況を作り出す。

その結果が常に副官に銃口を突きつけられるという、情け無い状

況ではあるが。

「笑うんじゃない！」

ギーシュが激昂する。

「その黒髪の君」

香水の瓶を拾い上げた、夏梨を指して言う。

「軽率な君の行動のせいで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「何言ってるの？ 悪いのは、二股してるお前だろ」

夏梨の的の中心をずばりと射抜く正論に、ギーシュの友人たちが、どっと笑った。

「そのとおりだギーシュ！お前が悪い！」

「しかも、二度目だぞ。いい加減、学んだらどうだ？」

ギーシュの顔に、さっと赤みが差した。

「いいかい？僕は君が香水の瓶をテーブルに置いたとき、知らないフリをしたじゃないか」

どこまで、この男はバカなんだろうか。自分の兄には絶対にこんな風になって欲しくなかった。

「話を合わせるぐらいの機転があってもいいだろう？」

そこで才人がギーシュに言う。

「どっちにしろ、二股なんかそのうちバレるっつもの。つか、前もバシてたる」

がつくりと肩を落とす才人。

その顔にギーシュは見覚えがあった。よくよく見ると前に居る二人の女の子にも見覚えがあった。

だが、貴族というのは調子のいいもので、絶対に自分の都合の悪い事は認めない。二人にギタギタに負けた事はすっぱり忘れていた。

「ふん…。ああ、君は…」

ギーシュは、才人たちを見ると、バカにしたように鼻を鳴らした。

「確か、君たちは、あのゼロのルイズが呼び出した平民だったな」

どうも自分が才人を熨した事は、自分が熨された事とセットになっているので、完全に忘れていたようだった。都合のいい頭をしている事にシヤナは今すぐに剣を突き立てたくなり、『夜笠』から『贅殿遮那』を抜こうとしたが、隣に居た夏梨に止められた。

「平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

その言葉に3人はカチンときた。だが、アレンは平然としているし、シエスタはおろおろとしている。ネギはあたふたしている。エドが笑いながら言った。

「何の成長もしていないバカに言われても、腹が立たんよ」

「な…!!」

今度はギーシュが絶句した。

「君はどうやら貴族に対する礼儀を知らないようだな。ならば決闘だ！」

ギーシュはそう言って立ち上がった。
そして杖を構える。

「上等！」

同時に言い放った才人達にギーシュは、くるりと体を翻して言う。

「ヴェストリの広場で待っている。用が終わったら、来たまえ」

ギーシュの友人たちが、わくわくした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追った。

シエスタが、何となく悲しそうな顔で一同を見ている。

「あ、あなたたち、大丈夫ですか…？」

「ん？どうして？」

アレンが尋ねた。

「前は偶然にも勝てたかもしれませんが、今度は…」

どうも前にシャナと夏梨が勝った事は偶然の産物だと捉えられているらしい。

ギーシュが全力を出さなかったから、偶然にも勝てたのだと。マルトーは面白がっていたが、実際偶然でも無い限り勝つことは難し

いのだ。

だが、二人が勝ったのは偶然でも、ギーシュの慢心の結果でもない。純然たる「格」の差である。

そこで、食事を終えた後ろからルイズが駆け寄ってきた。

「あんたたち！また、何してんのよ？」

「よお」「やあ」

騒ぎの中心にいて止めるべき立場に居たエドとアレンが軽い調子で返事する。

「なに勝手に決闘なんか約束してんのよ……。二度目じゃない……」

「いやー、済まん。済まん」

がつくりと肩を落すルイズに、エドは全く反省した様子も無く言った。

ルイズはため息をついて、やれやれと肩をすくめた。

「謝っちゃいなさいよ」

「は？なんで？」

「怪我したくなかったら、謝ってきなさい。今なら許してくれるかもしれないわ」

確かに才人は強くなった。

だけでも所詮は平民に毛の生えた程度。それで一番低いランクであるドットメイジであるギーシュも難しいと考えていたのだ。

勿論、まだ全力を出した処を見ていないし、その存在をまだ平民だと信じて疑っていない他の面々も同じだ。少し学院のメイジよりは強いといった程度の認識だ。

「まず、誰からやる？」

ルイズの言葉を見殺して夏梨が後ろに居た面々に尋ねる。

「俺がいく！」

手を挙げたのは才人であった。

「じゃあ、頑張れよ。俺らは見てやるから」

「ちよつと聞いてんの？」

才人は歩き出した。そのあとに夏梨とシヤナ、更にその後ろエドとアレンが続く。

「ああもう！ほんとに！使い魔のくせに勝手なことばかりするんだから！」

ルイズは、才人達の後を追いかけた。

「どついつつもりですか？」

暗い廊下を歩きながらアレンはエドに尋ねた。

「…どついつとは？」

エドはすつ呆ける。言葉の真意は解っているが、素直に答えるのもバカらしい。勿論、アレンも意図は解っている。これはある意味、確認作業だった。

「何で態々、挑発するような事を言ったのかって事でしょ？」

3人の間で既に解っている事を改めてアルが言う。

「んー。アイツの成長を見てみたいってのが一つ」

サバイバル訓練に、今朝からは剣の振る特訓も始まった。基礎体力が付いた事で剣が何処まで振れるのか、それを確認する意味が大きい。言ってしまうば、ギーシュは実験台だった。

「それともう一つ」

此処で人差し指を立てる。このもう一つの意図まではアレンは理解していなかった。

「このルーンとやらの効果を測りたくなってるな」

左手が生身ではないアレンはすっかり忘れていたが、7人の左手に刻まれたこのルーン。これの効果を実際に体験する意味もあった。何せ二人とも無手で戦う事が多い。武器を持って効果が現れるのか、折角デルフリンガーを手に入れて、勢いづいている才人を使うのは当然だった。

「君は悪い人ですね、エドくん」

「お前には言われたくねえよ、アレン」

二人はニツと笑った。

才人の成長を解り易くするためにもう一度、ギーシュとの決闘を企画しました。

これが実にいい感じにギーシュへの対応に動くと思います。

彼は序盤は凄く悪いというか、バカみたいなる枚目キャラなので、こつこつ風にならざるに都合の悪い事を忘れていきます。

反省する事が出来れば、きっと彼も強くなれると思います。

孔子では在りませんが「過ちて改めざる、これ即ち過ち」といいます。

シヤナやアレンのマナーというのは、アレンはクロス師匠から、シヤナはヴィルヘルミナやゾフィーから習ったものです。ヴィルヘルミナはもう少し、包丁を握れたら彼女も少しは料理が出来たかもしれませんが。千草の教育の元、ちょっとだけ出来るようにはなりませんが。

エドやネギが図書館へ出かけるのは、偏に研究のためです。文字が読めるようになった彼らは本当に研究します。ただ、エドの行動は下手をすれば、この世界では禁忌に触れる事になると思います。神学の影響を受けているこの世界で、エドの起こす風は新しい種を運ぶと思います。

アレンとエドが、ネギやシヤナ達と違うのは、この世の裏というか人の心の裏を知っているという事です。素直に全部を信じるのではなく、疑って掛かる。自らの目で耳で五感を使って確かめる、それが彼らだからです。

JUNCTION・S(前書き)

気が付いたら7万5000を突破していました。
このような拙作をご愛顧頂き、皆様真にありがとうございます。

才人たちのこの騒ぎを食堂2階のロフトから見ていた女性がいた。

「やれやれ、あの色ボケ。全く反省してないんだね…」

昼食に来ていた学院長秘書のロングビルであった。頭に手を当てて呆れたい気持ちになったが、ぐっと堪えて、皿に残っていたポテトを一つ、口に放り込む。

「けどまあ…」

ロングビルには気になる事があった。

それは勿論、才人達を始めとする7人のことである。

ルイズが召喚した時に、コルベールも指摘したが、普通は使い魔はメイジ一人に付き一体が基本である。ましてや古今東西、人間が使い魔になった例は記録されている限り、ない。

つまり「一人」のメイジに「複数」の「人間」の使い魔という異例の事態になっているのだ。

学院の生徒達は「平民を喚んだ」という事だけを重要視して、その主人を貶しているようだが、彼女はそんな事はどうだっていい。

今、重視されるべきはこの世界から外れてしまっている彼女とその使い魔なのだ。

「前は見逃してしまっただし、見させてもらおうかね」

普段では考えられないくらいに斜っぱな口調で、決闘会場へと向かった。

ある意味では恒例になってしまったヴェストリの広場。

相変わらず、西側にある広場なので、日中でも日があまり差さないし、人の往来も少ない。だからこそ、アレン達はここを毎朝の鍛錬の場所としていたのだ。

ちなみに鍛錬と言うのは、シャナが言い出した。随分と古風な言い方だと才人は思ったが、口に出したら引っ叩かれそうだったので、辞めておいた。

「追々、またかよ…！」

噂を聞きつけた生徒たちで、広場は溢れかえっていた。

「諸君！決闘だ！」

ギーシュが薔薇の造花を掲げた。
すると、うおーッ！と歓声が巻き起こる。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの使い魔の平民だ！」

ギーシュは腕を振って、歓声にこたえているが、その歓声の主が男達ばかりであることに、ちよっぴり傷ついた。何せ、今回の事でギーシュの女子生徒からの評価は地に落ちているのだ。

「また、八つ当たりよ」

「あんな男と良く付き合えるわね…」

と、こんな感じである。
そこへ、

「お、来たぞ」

才人達が並んでやってきた。

ギーシュも存在に気づき、才人の方を向く。

「とりあえず、逃げずに来たことは、誉めてやるうじゃないか」

ギーシュは、薔薇の花を弄りながら、歌うように言った。

才人だけを残して、全員はギャラリの中へと溶けた。去り際にシヤナが、才人の耳を思いつきり引っ張ってアドバイスを送った。正直、リミッターの掛かっている引っ張り方は痛かった。

「誰が逃げるか」

才人はそう冷静な調子でぼやく。

「さてと、では始めるか」

ギーシュが薔薇の造花を掲げて言った。

才人からギーシュまで、およそ十歩ほどの距離を取って対峙する。ギーシュは、そんな才人を余裕綽々といった感じで見つめ、薔薇の花を振った。

前回と同じく、花びらが一枚、宙に舞い上がり、その花びらが甲冑を着た女戦士の形をした、人形になった。青み掛かった甲冑がきらめき、そいつが才人の前に立ちふさがった。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」

「ねえよ！」

ギーシュを睨みつける才人。

「言い忘れたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ」

再び謳うような、演技でもしているかのような所作で一礼をする。

「従って、青銅のゴーレム『ワルクューレ』がお相手するよ」

ワルクューレが才人に向かって突進してきた。

その突進の力を全て載せた右の拳が、才人の腹にめり込む。

「げふっ！」

才人は呻いて、地面に転がった。

「なんだよ。もう終わりかい？」

ギーシュが呆れた声でやれやれと頭を振った。勿論、バカにしてくれたのは才人だけではないので、序でに纏めて仕置きしてやろうと考えていた。

「次は誰だい？」

ルイズはハラハラした様子で、シエスタはもう気が気でない様子で。だが、アレンとエドは涼しい顔で才人を見ていた。

「おーい、その金髪。まだ終わってねーぞ」

そんな心底嬉しそうな声で、エドがギーシュに言った。

その頃、タバサは私用を終えてトリステイン魔法学院上空まで戻ってきていた。勿論、彼女にもこの世界のメイジの例に漏れず、使い魔を従えている。

「きゅい、きゅい！」

彼女が召喚したのは、今年唯一の竜種。風よりも速く空を飛ぶ、風竜である。凶暴極まる他の竜と違い、どこか人懐っこく、簡単に懐いてくれる。勿論、これはこの青い鱗の竜が幼生だと言う事もあ。この青の竜に彼女は風の妖精という意味で「シルフィード」と名付けた。

「何？」

その声に反応したタバサが下を覗き込む。

赤い縁から見える眼下には、学院の影が大きく広がった広場が見える。

金髪と黒髪の男子二人。さらには彼らの周囲を取り囲むように大勢の生徒たちが、この抜けるような青空まで響く、囃し立てるような歓声を上げている。

この場所は普段から誰も来ないので、アレンやネギが鍛錬の場所に使っている。最近是她女も少しだけ早起きして参加するようになっていた。

しかし、時間は既に昼過ぎ。オマケに雰囲気は穏やかとは言い難

い。

「あなたは戻って」

タバサはシルフィードに指示を出した。しかし、彼女はイヤイヤと首を振る。

「きゅいー！」

その上、抗議の声を上げだした。

風竜は人語を解する程に賢い。どうしても、骨格的に喋る事はできないが、意思の疎通は可能だ。

「戻って」

「……きゅいー」

有無を言わせないタバサの迫力に負けたシルフィード。ぽん、とレビテーションで下へ飛び降りた主人を涙目で見詰め、残念そうに寂しくその場を離れた。

タバサの方もシルフィードが離れたのを確認して広場に降り立つ。皆の視線は広場の中央に向いているので誰も気付くことはなかった。

（これはいったいどういう状況…？）

さすがのタバサも見ただけでは理解が難しい。

説明を求めて軽く辺りを見回すと、ちょうど近くにキュルケがいた。

「この騒ぎは何？」

「あら？ タバサ？」

振り向いたキュルケは少し驚いたようだったが、すぐに笑顔を見せた。

「いつ戻ったの？」

「今さっき」

「そう。おかえりなさい」

「ただいま」

短い言葉で挨拶を交す。

行動的で情緒的なキュルケ。

理論派で論理的なタバサ。

正反対な性格をしているが、二人は親友同士だった。余計な言葉は必要なかった。

「で、これは何？」

タバサが改めて問うと、キュルケは顎に人差し指を当て、少し困った顔をして答えた。

「ん〜。ま、ギーシュがまたバカやらかしたってとこかしら？」

「そう…」

事態の中心に居る人物に対して、無表情だが呆れて嘆息したタバサ。

その直後、うおおっ！ と観衆がどよめいた。

キュルケとタバサが視線を広場の中央へに移すと、才人が立ち上がった所だった。

むくりと起き上がった才人はそのまま、デルフリンガーを抜き去り、遥か高く天空へ向けて振り上げた。キーンと金属同士がぶつかり合う音がして、何かが高く舞った。

ドサリと落ちた、それはギーシュの出したワルキューレの腕だった。

「何だ、中身空っぽだったのか。どうりで切りやすい訳だ」

デルフリンガーを力強く握った才人が、今度は上から振り下ろす。脳天から胴体を真っ二つにされた戦乙女が、土へと帰っていった。

「へへ、案外簡単だったな」

切り伏せた戦乙女の向こう。才人が身の丈程の大剣を持ち、不敵に笑っている。

「こ、こんな事があるわけ無いだろう…」

それでもギーシュは目の前で起きた現実を受け入れられないでいた。アレンはこの瞬間、才人の勝ちを確信する。どれ程の実力を持っているようと、どれだけ誇りがあるとも、目の前で起きている現実を見据えられない者に勝利はない。

才人の頭には、修行前に一護から言われた言葉が何度も繰り返されていた。

「これは剣だ。俺の武器だ」

（引けば老いるぞ）

「そうだぜ、相棒！」

剣が喋り始めたことに、どよどよと更にギャラリーのどよめきが大きくなる。

何せ世に何振りと無い伝説の魔剣、インテリジェンスソード。その現物が今まさに目の前に存在しているのだ。薄刃ではあるが身の丈程の大剣を正眼に構える。

「君。その剣で一体何ができる」

あくまでもギーシュは認めない。何かの間違いであると思っ
た。

平民に貴族は負けない。そういった社会概念の狭さが、彼の慢心を生んでいた。

「平民どもが、せめてメイジに一矢報いようと磨いた牙なんかで、このワルキューレは切れないよ」

ギーシュは心底バカにしたような様子で才人を睨む。

「うるせえよ」

（臆せば死ぬぞ）

「大丈夫だ、自分を信じる！」

そして、刀を見つめながら呟く。その呟きに答えるように、剣が
応える。

才人は驚いていた。自分の体の中に、今までに感じたことの無い力の奔流が見える。サバイバル中にも何度か感じてはいたが、ここまでハッキリした感覚になったのは初めてだった。

「ふうー…」

吸った息を思いつきり吐く。

剣を握った瞬間、腹部を覆っていた鈍痛が消えた。ちらりと横目で見ると、自分の左手のルーンが煌々と光っていることに気づいた。体が羽のように軽い。少し足に力を込めれば、空も飛べそうなほどに昂揚している。

その上、左手に握った剣が自分の体の延長のようにしっくりと馴染んでいる。

（不思議だ）

自慢では無いが、今まで才人は剣など握った経験も無い。

剣を握った才人を見て、ギーシュが冷たく微笑んだ。

「まずは、誉めようじゃないか。ここまでメイジに楯突く平民がいることに、素直に感激しよう」

そして、手に持った薔薇を振った。

今度現れたワルキューレは槍を持っている。どうも才人の剣に対抗するつもりらしい。

あの造花の薔薇は、どうやら魔法の杖らしい。どこまでもキザなヤツだ。

そんなこと前回負けた時は思いもしなかったことを、考える余裕があることに驚く。

ギーシュの槍を立てて、ワルキューレが襲ってくる。軟い金属とは言え、槍のように尖らせれば、殺傷能力は十分にある。

（あれ？）

才人が見える戦乙女の動きが遅い。
顔を目掛けて突っ込んでくる槍の穂先も、まるでスローモーションのように見える。この瞬間、才人は確かに、シヤナのいう『殺し』の感覚と言うモノを漠然と掴んでいた。

(相手の動きを良く見て…)

正面切って、首だけを捻って避ける。頬が少し切れたが、その程度だ。

シヤナが送ったアドバイスはたった一つだけ。「相手の動きを良く見る」という事だけ。相手の動きが見えるなら、体は十分に付いていけている。

そして付いていけているなら、

(攻撃する事も容易い！)

避けた勢いを殺すことなく、今度は逆袈裟に切り裂かれ、ワルキユーレは胴体を真っ二つにされた。

ギーシュは最初、意味がわからなかった。

なにせ、先ほどまでその平民を圧倒していたはずの自分のワルキユーレが、ズバツと、まるで絹でも裂くかのような調子で、その平民に軽く切り裂かれたのだから。

「う、こんな事って…」

一番最初に真っ二つに斬られたことにも驚いたが、ただのまぐれ当たりだと思っていた。

しかし、現実だ。

ぐしゃっと音を立て、胴体が真っ二つになったワルキユーレが地面に落ちる。

そのまま、才人はギーシュめがけて旋風のように突っ込んだ。

「う、うわぁ！！！！」

敗北への恐怖、死の恐怖、ありとあらゆる恐怖が、ギーシュは薔薇を慌てて振らせた。

花びらが舞い、新たなワルキューレが五体現れる。既に二体斬られた。合計で7体。今のギーシュの魔力で出せる限界だった。

残りのワルキューレ五体が、才人めがけて、一斉に躍り掛かる。文字通りの決死の攻撃だった。

いずれもが槍や楯を構えている。

「っだらぁ！！」

だが、才人は止まらない。

ワルキューレを一体、また一体と真つ二つに楯ごと切り裂いていく。次から次へと迫る必殺の一撃を避け、最後の一体も紙でも破るかのように脳天から切り裂いた。

既にギーシュは限界になっている。彼を守る楯はもう存在しない。

「ひっ！！」

才人はギーシュに近づいて剣を構えて言った。

「続けるか？」

才人は呟くように言う。

思わず尻餅をついたギーシュは完全に戦意を喪失していた。震えながらギーシュは言った。

「ま、参った」

ギーシュの降参の言葉に野次馬達は一齐にわー！と歓声をあげた。

「すげー！なんだ！あの平民！？」

「あの平民、やるじゃないか！」

「ギーシュが負けたぞ！！？」

などと歓声が響いた。

その歓声を後にしながら、才人は一同の所へ戻ってきた。

「お疲れ様です」

アレンがのんびりした様子で、労いの言葉を掛けてくる。エド達もバンバンと痛い位に背を叩きながら才人を褒め倒した。さしたる怪我も無い事に安心した、ルイズが駆け寄ってくる。

「サイト！」

「勝ったぞ。ルイズ」

才人が気の抜けた声でそう言った。

「ちょっと、大丈夫なの？」

「ああ、平気平気、あんくらいどうってことないから」

そう言っただけで才人はデルフリンガーを鞘に収める。

すると才人は急に疲れを感じて、意識が遠のき、倒れた。

「ありゃ？」

意識を失った事に驚いたのは、皆同じだった。
いきなり倒れた才人に、ルイズは支えようとしたが、力が足りず
に下敷きになってしまった。

「ちよつと、サイト！」

ルイズは才人の様子に心配になって体を揺らした。
だが、

「ぐー……………」

幸せそうないびきが聞こえてくる。どうやら寝ているようだった。

「寝てるし……………」

ルイズはほつとした表情で、ため息をつき才人を見つめる。

「やれやれ……………」

肩を竦めて夏梨が呆れた。

「ま、一件落着って処でしょうか？」

「そう」

そんな様子を、ネギ達はほつと呟いた。

「全く、一体どんな魔法を使ったんだい…」

ほんの一週間ほど前には、剣も扱えずにワルキューレにボコボコにされていた才人。

それを今回はあつと言う間に熨てしまった。流石に二度目と成ると、これは疑いようがない。一度目は偶然、二度目は必然と成る。

「全く、あいつだけじゃなくて、その周りの奴らも大した面々なのかもしれないね…」

その日の夜。ルイズの部屋。

「いたた…」

才人はその後、軽い治療を受けた。

ケガといっても口の中と頬を軽く切った程度である。序でに殴られた腹にシツプを張る程度で終わった。

「本当に大丈夫ですか…?」

「ああ、たいしたことはないよ」

手当てを担当してくれたシエスタが心配そうな顔で、才人を見ている。

「ふん！勝手に決闘なんかするからよ、自業自得よ、そもそも私に

無断で…」

シエスタが心配そうに見ている横でルイズはブツブツ言っている。

「まあ、良いじゃないですか、勝ちましたし」

ネギはルイズをたしなめるように言った。

そのニコニコした笑顔を見ると、どうにも怒りが止められてしまっ。

「でもよかった、ごめんなさい…。あの時勝手に逃げて…」

自分がしたことを思い出してシエスタは涙ぐみ始める。

この世界の社会を考えれば、彼女のした事は責められるものではないし、彼らも責める気は毛頭なかった。だが、彼女の心の中ではどこかに引っ掛かっていたのだろう。

生まれて16年余り。女性に泣かれるなど初めての経験だった才人は大きく慌てた。

「別にシエスタのせいじゃないって」

「へえ、その平民のメイドには優しいのね」

窘める才人に、ルイズは何故か怒り心頭だった。可愛らしい顔は笑っているが、頭には青筋が出ている。それを見たエドがさかさ茶々を入れてくる。

「何だ、妬いてんのか。くくく…」

「兄さん…」

エドは壁にもたれながら、ニヤリとルイズを見る。

「な、ち、違うわよ!」

「慌てる所がますます怪し〜」

こういう所は何故か子供だった。自分も女性関係を指摘されると弱いのだが、生憎と此処で知っているのは、アル一人だ。弟が黙っていたら誰も知らないで済む。

「はあ…、君達はある人になつてはいけませんよ」

そんな様子を、アレンは先生のように年少の三人を見つめる。正直、人の世事と言うモノに、アラストールもシャナもとんと不案内だった。ネギと夏梨の二人は若いからであるが。

こういつた「大人」の気配りができる、一護とアレンの事をアラストールは素直に頼っていた。

そんな部屋の空気を打ち消すように、扉がバンと勢い良く開かれた。

「うーす、お疲れ。またやったらしいな」

入ってきたのは一護だった。朝、分かれてから見ていなかったの
で、何をしていたのでろうか。

「一護さんは何をしてたんですか?」

ひよこひよこことネギが寄って来る。

「いや、何。あのコッパゲを探して、この学校で一番偉い人に会って来た」

「へえ。何してきたの？」

その成果が気になるシャナが率直に聞いてくる。

「おお、その前にな…」

ちらりと後ろを見る。そこには昼間決闘騒ぎを起こしたギーシュが、何とも申し訳なさそうな顔で立っていた。正直、まだ才人の彼への印象は良くない。思わず、手当てを受けていたベットのうえで身構える。

「何しに来たの？」

シャナの剣呑な言葉を無視して、部屋を歩く。そして、才人のそばで立ち止まった。

「君」

「ん？」

才人はじろりとギーシュを睨む。傍に居たシエスタはもう気が気でない。

「なんだよ」

「そ、そんな怖い顔をしないでくれたまえ…。その何だ…」

一瞬だけ考え込むような顔になる。まだどんな事を言うべきかどうか悩んでいるような様子だった。やがて意を決したように、

「僕は君に謝りに来たんだ」

ギーシュの言葉に、才人もだが、一同揃って目を丸くした。

「今回のことは全部、僕の八つ当たりだ」

思いつきり頭を下げる。

「許してくれなどと贅沢な事は言わないが、せめて謝罪の言葉だけは言っておきたいんだ」

ギーシュは一度顔を上げ、また再び頭を下げた。

この事に才人は大きく慌てた。

「お、おい…、いいよいいよ！もう終わったことだろ、頭を上げてくれ…！」

ギーシュはゆっくりと頭を上げた。

「それと……」

ギーシュは少しはにかみながら、手を差し出した。

「君に、ぜひ友達になってほしいんだ」

「……………」

流石に此処までは予想していなかった。予想の斜め上に行く状況に一同はまた驚いたが、直ぐに嬉しそうな顔になる。特に先生であるネギの顔は殊更嬉しそうだつた。

才人はその手を見つめる。

「…俺は、サイトだ。これからよろしく頼む」

一瞬だけ言いよんどんでから、差し出された手を握った。力強く絆を感じるような強さで。

「ありがとう、サイト」

ギーシュはそれを強く握り返した。

「さって、話は纏まったか…」

「そうだった。一護さん、何を話してきたんですか？」

「あ、そうだな。まあ、簡単に言っちゃえば…」

そこへドカーンと会話に割り込むような感じで爆音が響く。

「何だ、何だ？」

「何があったんだー？」

寮のあちこちから悲鳴にも似た声上がる。

「いくぞ、テメーら！」

「はい！」「解った！」「OK！」「あいよ！」「了解です！」

爆音にいち早く反応した一護が全員を声だけで叩き、窓から外へ飛び出した。

「は？」

その光景に部屋の中に残された3人は驚く。何せ五階分を飛び降りたのだ。

ルイズの制止のほうが遅かった。

「ちよつと！」

窓から下を見下ろしたルイズは6人が真下の地面に、ぴつたりと着地していたのを見た。本人達は何気なくやっていることだが、改めて才人もルイズも実力の差に愕然とした。

「追いかけるなきゃ！」

そういつと自分も6人に習って、窓から飛び降り…れなかった。そう、うっかりしていたがルイズは魔法が使えない。そう思うとももどかしかった。

「ああ、もう！ギーシュ、才人、行くわよ！」

「わ、解った！」

ギーシュに浮遊呪文である『レビテーション』を掛けさせて自分達も窓から降りる。何せ5階分を律儀に降りていては、時間が掛かって仕方が無い。

「何よー。どうしたのー？」

その三人を見ていたキュルケが窓から同時に飛び降りてきた。一緒の部屋に居たのか、タバサも一緒だった。

音の主は、巨大な土ゴーレムの肩の上で、薄い笑みを浮かべてい

た。

その正体は最近、トリステンの軍や王政府が血眼になって捜査を続けていた「土くれ」であった。頭からすっぱり黒いローブに身を包んでいる為、男か女かも判断付きにくい。

その下の自分の顔さえ見られなければ、問題はない。

「さて、美味しい具合にいったわね」

先に手に入れた情報で、この学院の壁が物理的な力に弱いと言う事は知っていた。だが、それだけでは突破するのに不安があった。「土くれ」は、大胆にも爆薬を使う作戦に出た。

爆破して、ゴーレムに乗って侵入するという、最早、盗賊や怪盗というよりも、強盗と言った方が良いような手口だった。

発破して与えられたダメージは、ひび程度だったが、これだけあれば十分だ。

どれだけ頑丈なダムも、一点を空けてしまえば、そこから瓦解する。

「あとは、これで！」

ヒビが入った壁に向かって、土ゴーレムの拳が打ち下ろされた。

『土くれ』はその瞬間、ゴーレムの拳を鉄に変えた。文字通りの鉄拳が壁にめり込む。バカツと鈍い音と共に、魔法が掛けられた壁が崩れる。黒いローブの下で、『土くれ』は微笑んだ。

「成功……」

フーケはゴーレムの腕を伝い、壁にあいた穴から宝物庫の中へ入り込んだ。

中には様々な宝物があった。普段は綺麗に整頓されているだろう、

宝物も今は爆破とゴーレムの攻撃で土や石の破片を被っていた。しかし、フーケの狙いはただ一つ、『破壊の杖』である。これが無事なら他はどうでもいい。

「さて、お目当ての品は…？」

宝物庫の中には、様々な杖が壁にかかった一画があった。その中に、どう見ても魔法の杖には見えない品があった。

全長は一メートルほどの長さで、見たことのない金属でできていた。フーケはその下にかけられた鉄製のプレートを見つめた。

立派な鉄細工のモノで、精巧に『破壊の杖 持ち出し不可』とあった。これを見つけた『土くれ』の笑みがますます深くなった。迷うことなく『破壊の杖』を取った。

その軽さに驚く。

(いったい、何でできているのかしらね？)

興味は尽きないが、今は考えている場合ではない。急いでゴーレムの肩に乗った。

去り際に杖を振ると、壁に文字が刻まれた。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

再び黒ローブのメイジを乗せ、ゴーレムは歩き出した。魔法学院の城壁をひとまたぎで乗り越え、ずしんずしんと地響きを立てて草原を歩いていく。

才人達は去っていく巨大なゴーレムを見つめながら、ルイズに尋ねた。

流石に力量差というか、体格差がありすぎる。4人は見送るしか方法が無かった。

「あいつ、何したんだ？」

「さあ？」

「おい、お前ら！」

エドの鋭い声が響く。その言葉に促されるように、4人は付いていった。

あるところで止まると、エドは無表情に壁に開いた大穴を指差す。

「あの大穴、どこに開いてるんだ？」

「あの位置は……」

ルイズ達在必死に学院内の見取り図を思い出す。

真っ先に思い出したタバサが言う。

「宝物庫」

「宝物庫お？」

エドが素っ頓狂な声を上げる。

宝物庫に大穴を開けて、何をしたのか。

整理整頓とか、目録の作成とか、そんな事務的な仕事ではないだろう。それくらいは一同にも簡単に推理する事が出来た。

「肩に乗ってた人、何か持ってたみたいですね……。チッ」

宝物を奪われた別ベクトルの怒りをアレンはぶちまける。

「泥棒か。しかし、ずいぶん派手に盗んだもんだな……」

一護は手際の良さと大胆さに、思わず感心していた。

ネギ達は初めて遭遇した、事件に嘆息していた。

その頃、草原の真ん中を歩いていた巨大なゴーレムは突然ぐしゃつと崩れ、大きな土の山になった。

そして、肩に乗っていた黒ローブのメイジの姿は、闇に溶けて消え失せていた。

JANCTION・S (後書き)

今回のタイトル「JANCTION・S」には交差すると言う意味を込めてみました。ギッシュとの仲直りと言うか、友達。フーケの討伐への流れです。

さて、次回はフーケ戦ですね。

間違いなく勝ち目無いと思うんですけども。

翌朝。

トリスティン魔法学院では、昨夜の出来事を受けて大きな騒ぎが続いていた。

何せ、学院の秘宝の『破壊の杖』が盗まれたのである。それも、巨大なゴーレムが、壁を破壊するといった大胆な方法で。その大ニュースによって、早速朝から宝物庫ではオスマンの指令を受けた、コルベールが資料の片付けと後確認も兼ねて、宝物庫に入っていた。

「やれやれ」

また彼の髪の毛が少し薄くなったような気がする。確認できただけでも、破損した物は幸いな事に宝物でもなんでもない、乱雑に放り込まれていたガラクタだけで済んだ。尤も彼にとってはどんなガラクタでもお宝には違いないのだが。

壁に掛かれた文字を読んで更にため息を付く。

『破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

壁には、生意気にもフーケの犯行声明がそう刻まれている。

「何とも大胆不敵な…」

薄くなった頭を搔く。

だが、その大胆不敵な盗みに気が付かなかったのも事実だ。

「やはり、なまっているのかもしれないね…」

コルベールの自嘲に染まった呟きは、大穴から吹き込んだ風に紛れた。

その宝物庫の上階。

学院長室では、早速善後策が話し合われていた。

「土くれのフーケめ！とうとう魔法学院にまで手を出しおって！」

「衛兵はいつたい何をしていたんだね？」

「衛兵などあてにならないらん！所詮は平民ではないか！いてもいなくてもそう変わらないだろうが！！」

「そんなことより当直の貴族は誰だったんだね！」

だが、集まった教師陣は感情的に怒るばかりで、効果的な策が出せないでいた。

最後に叫びながら一人の教師がそう言ったところで、シュヴルーズは震え上がった。

「昨夜の当直は、シュヴルーズであったのである。」

「…」

彼女は追及を恐れて、黙りこくっている。

まさか、魔法学院を襲う盗賊などいるとは夢にも思わず、自分は当直をサボり、態々、消音魔法まで掛けて自室でぐうぐうと寝ていたのである。

そのお陰で、ルイズ達が気が付いた爆音にも全く耳に入っていなかったのだ。

「ミセス・シュヴルーズ！当直はあなたなのではありませんか！？」

教師の一人が、さっそくシュヴルーズを追及し始める。

遂に責任の矛先が向き、おろおろとし始めたシュヴルーズは顔を真っ青にして、終いには泣き出してしまった。

「も、申し訳ありません……………」

「泣いたって、秘宝は戻ってこないのですぞ！」

追求する教師の語気がますます強くなる。

「それともあなたは『破壊の杖』を弁償できるのですかな！！」

「わ、わたくし、家を建てたばかりで……………」

「これこれ。女性を苛めるものではない」

その窘める様な声と共に学院長のオスマンが現れた。その隣には喪失物の確認を終えたコルベールもいる。

「しかし！！オールド・オスマン！！」

窘める様な事を言うオスマンに、その教師は食って掛かる。

「ミセス・シュヴルーズは当直なのに、自室で寝ていたのですぞ！責任は彼女にあります！！」

シュヴルーズを追及していた教師が、オスマンに訴えた。

オスマンはそこで、じっとその教師を見つめる。

「ミスタ……………」

「な、なんでしょうか…？」

射すくめるような視線に、黙ってしまった。

「なんだっけ？」

「ギターです！お忘れですか！」

すっかりなのか、そもそも覚えていないのか。

いい加減、この学園にきて長いというのに、覚えていないとは学院長に有るまじき態度だ。

「そうそう。そうじゃった。ギター君。そんな名前じゃったな。君は怒りっぽくていかん」

そんな風に自らの小さな失態を隠すように、きつい一言を言う。

「さて、この中で、まともに当直をしたことがある教師は何人おるのじゃ？」

オスマンが白くなった髭を弄りながらそう言うと、辺りを見回す。教師たち全員が、名乗り出なかった。みんながみんなお互いの顔を見合すだけである。

確かに当然と言えば、当然の話である。

ここは言ってしまうえば、メイジしかいない。そんな危険な場所に飛び込むような人間が居ようはずがない。そういった慢心が今回の事件だ。

「さて、これが現実じゃ」

この哀しい現実をオスマンはただただ事実として受け止めた。

「責任があるなら、我々全員じゃ。この中の誰もがそうじゃ。私も含めてじゃ」

責任の所在は全員にあると言つ言葉。

自分を庇っているようで、庇っていないその言葉にシュヴルーズは俯いて聞いていた。

「この魔法学院が賊に襲われるなど、誰もが夢にも思つはずがなかった」

オスマンは、見事に崩され、階下の部屋にぽっかりと空いた壁の穴を思い出しながら、やれやれと首を振った。

「その油断を突き、賊は大胆にも忍び込み『破壊の杖』を奪っていきおつた」

そこでもう一度、深いため息を付く。

「…我々は油断していたのじゃよ。責任があるとするのなら、我々全員にあるということじゃ」

オスマンがそう言うと、教師の皆は黙ってしまった。確かにその通りであるのだ。

だが、何時までこんな責任追及をしている場合でもない。善後策の話し合いを始めないと、フーケは捕まらないし、『破壊の杖』も返って気はしない。

「で、犯行の現場を見ていたのは誰じゃね？」

オスマンがキョロキョロと見回しながら尋ねた。

「この4人です」

コルベールが前にでて、後ろに控えていた4人を指差した。ルイズにキュルケにタバサ、そしてギーシュの4人である。その後ろでは、ネギと才人がオロオロとしながら付いてきていた。逆に一緒になつて付いてきたエドは心底、気に入らないという表情を浮かべていた。

「この子達がですか？」

シュヴルーズが尋ねた。

「はい」

コルベールが、短く答える。

他の面々はコルベールの頼みで宝物庫のリストを確認している。一護はあからさまに嫌そうな顔をしていたが、アレンは悪魔のような顔を浮かべていた。

「ふむ…、君たちか」

オスマンは、興味深そうにネギと才人も含めた6人を見つめる。その目にネギは困ってしまった。どこか心の奥底まで見透かされているような感じがしたのだ。エドは思いつきり学院長に対して、にらみを利かせている。

「詳しく説明したまえ」

ルイズが前に出て、見たままのこと、聞いたままのことを説明する。

「あの、大きなゴーレムが現れて、宝物庫の壁を壊したんです」

昨日の事を思い出すような調子で喋る。大方というか、ルイズ達が見たのはフーケが逃げていく瞬間だけだったので、犯行の現場はネギ達が見た事をそのまま聞いていた。

「肩に乗ってた黒いローブを身に纏ったメイジがこの宝物庫の中から何かを……」

「たぶんそれが『破壊の杖』」

ルイズの言葉をタバサが補った。

「盗み出したあと、またゴーレムの肩に乗りました」

「その後、ゴーレムは城壁を超えて歩き出して、最後には崩れ落ちて土になってしまいましたわ」

キュルケが何とも儀的な態度で言葉を紡ぐ。

「それで？」

オスマンは説明を続けさせる。

「一応、追いかけたゴーレムの最後は。」

「肩に乗っていた黒いローブのメイジは、いなくなっていました」「ふむ……」

オスマンはひげを撫でた後、溜め息混じりに言った。

「後を追おうにも、手がかりナシというわけか……」

これでは捜査の仕様もない。元々、フーケは犯行の証拠を残して

いない。残しても手がかりになるような物は全くない。だからこそ、ここまでフーケは捕まらずに済んでいるのだ。
その時オスマンが、

「あれ？」

と、頭に疑問符を浮かべた。

「どうしました」

その疑問符に答えるようコルベールが尋ねた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたのかね？」

「それがその…」

コルベールが言いにくそうに一瞬だけ淀んで、

「朝から姿が見えませんでした」

「この非常時に、どこに行ったのじゃ」

「さあ？どこなんでしょう？」

そんな風に二人が噂をしていると、戸を行き良いよく開けてロングビルが走って入ってきた。

少しだが、疲れているようである。

「ミス・ロングビル！どこに行っていたんですか！大変ですぞ！事件ですぞ！」

興奮した調子で、コルベールがまくし立てる。

その空回りに怒鳴っているのをよそに、ロングビルは落ち着きを

払った態度で、オスマンに告げた。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」「調査?」

オスマンとコルベール、そして教師達が片眉を吊り上げる。

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はあのとおり」

何とも仕事が速い。

「これが国中を騒がせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査をいたしました」

「仕事が早い。ミス・ロングビル」

オスマンが自らの秘書の手際を褒めた。

コルベールが慌てた様子で尋ねる。

「で、結果は?」

「はい。フーケの居所がわかりました」

短く噛み切るような言い方に、教師たちの間にどよめきと緊張が走る。

「な、なんですと!」

「誰に聞いたんじゃない? ミス・ロングビル」

「はい」

短く返事をし、説明を始める。

「近所の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃屋に入った黒いローブを着た男を見たそうです」

彼女のすらすらと流れるような説明に、学院長室に集まった一同は感心する。流石は学院長の秘書を務めているだけのことはある。

「おそらくは、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

それを聞いてルイズがあわてた様子で叫ぶ。

ネギはアレっという様子で首を傾げていた。エドは指摘しようかと思ったが、辞めておいた。彼の頭の中ではグルグルとこれからの事、一護の持ってきた交渉事が巡っていた。

「黒いローブ？それはフーケです！間違いありません！」

「そこは近いのかね？」

オスマンは、目を鋭くして、ロングビルに尋ねる。

「はい。徒歩で半日。馬では四時間といったところです」

「すぐに王室に報告しましょう！王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては！」

コルベールが叫ぶと、オスマンは首を振って、学院全体に響き渡るような声で怒鳴った。

「ばかもん！！王室なんぞに知らせている間にはフーケは逃げたしまっわー！」

その怒鳴り声に教師たちも、ルイズ達もすくみ上がる。

「その上、身にかかる火の粉は己で払うものじゃ！魔法学院の宝が盗まれたのなら、これは魔法学院の問題じゃ！それが貴族というものじゃ！」

その言葉にロングビルは薄ら笑いをした。自分の思い描いた通りに事が運んでいる。その笑顔をこれまた、ニヤリと笑顔を浮かべて見ている人がいるとも知れずに。

そんなことも知りもせずにオスマンは咳払いすると、杖を掲げて言った。

「では、搜索隊を編成する。我と思う者は、杖を掲げよ！」

だが、誰も杖を掲げず、教師たちは困ったように、顔を見合わせている。

当然の話だ。敵は国中を騒がしている盗賊。その盗賊に返り討ちにあつては、自分の面子が立たない。そのプライドが邪魔をして誰も名乗り出ないのだ。

「おらんのか？」

再び、オスマンが一同を見回す。

「かー、嘆かわしい！フーケを倒して名を上げようとするものは居らんのか！」

「じゃ、アンタが行けよ」

ボソツとエドが呟いたが、幸いな事にネギ以外には聞こえてなかったようだ。だが、聞こえていたとしても流石に老体に鞭を打って動けるほど、オスマンも若くはない。

「何で皆さん、名乗り出ないんでしょうか…?」

ネギが解らないといった様子でエドに尋ねるが、鼻を鳴らして答える。

「当然だろ。リスクの方が高いんだから」

幼い弟を諭すような調子で説明を始める。

「相手の力量もわからない。援軍が居るかもしれない。そんな分の悪い賭け、誰が乗る?」

「そう…、ですよね」

ネギは納得がいつていないような顔だったが、一応は理解した。お互いの肩に乗っていたカモヤアルは、うんうんと頷く。

「ま、その賭けに乗ろうともしない、二の足を踏む腰抜けばかりとは予想外だったけどな」

このエドの言い草にカチンと来たのか、ルイズは俯いていたが、それからすつと杖を掲げた。

「わたし、行きます!」

ルイズの言葉に教師たちが一斉に驚き、喚きだした。

「ミス・ヴァリエール?」

硬直の解けたギトーが不思議な顔をする。

「何を言っているのです！あなたは生徒ではありませんか！ここは教師に任せて……………」

「誰も掲げないじゃないですか！！！」

ルイズは唇を軽くへの字に曲げてそう言った。その言葉にうつと教師陣は黙る。

才人は口をぽかんとあけて、そんなルイズを見つめていた。対照的にエドは余計な事を言ってしまった事に頭を抱えて、いかにも嫌そうな顔をしている。

「やっちまったな、エドの兄貴」

カモの慰めるような言葉が何とも恨めしい。

「あたしも行きますわ」

ルイズが杖を掲げているのを見て、キュルケも勢い良く杖を掲げた。

これにはコルベールも驚いた。

「ツエルプストー！君も生徒じゃないか！」

「ヴァリエールには負けられませんの」

彼女の言葉は完全に対抗心からだ。そしてタバサもゆっくりと杖を掲げた。

「タバサ。あんたはいいのよ。関係ないんだから」

キュルケがそう諭すように言うと、タバサが答える。

「心配」

キュルケは感動した様子でタバサを見つめた。

その視線を気にした風もなく、タバサはずっとネギを見つめている。ネギが首を傾げて、その視線に目を合わせるとタバサは、すつと目を逸らした。

「？」

これに、ネギは首を傾げる角度をきつくする。そんな彼の戸惑いを余所に、ルイズはタバサにお礼を言った。

「ありがとう……。タバサ」

「いい」

タバサは相も変わらず、無表情である。流石に女の子3人が名乗り出たのに、男が行かないのは不味いと思い、ギーシュも杖を掲げた。

「僕もいきますー!」

「そうか。では、頼むとしようか」

オスマンはそのやりとりを微笑ましく見つめたあと、そう言った。流石に生徒だけを行かせることには、教師たちから反対の声がある。だが、その反対の言葉を一つ一つ潰すような言葉でオスマンが言う。

「彼女たちは、敵を見ている」

これは大きな利点であった。敵を見ていると言つのは実に戦闘において、非常に有利に働く。

「その上、ミス・タバサは若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが？」

オスマンがそう言うと、教師たちはみんながみんな驚いて、タバサを見つめた。

「本当なの？タバサ」

そのこの世界の貴族なら誰もが驚く情報にキュルケやルイズも驚いた。

「「しゅぱりえ?」」

オ人たちはイマイチよくわかっていない。

そんな彼らにルイズが説明を始める。

「『シュヴァリエ』は、いろんな業績に対して与えられる実力の称号よ」

確かに貴族位の中では一番地位の低い。

それは貴族だからと、血族として継続される称号とは違い、一代限りの称号。決して金では替えぬ、手に入れられぬ純粋な実力に与えられる称号なのである。

それを同世代の女の子が持っていると言つ事に素直にルイズも、ギーシュも驚いていた。

オスマンはそれからキュルケを見つめた。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く排出した家系の出で、彼女の炎の魔法も、かなり強力と聞いているが？」
キュルケは得意げに、燃え盛るような赤い髪をかきあげる。
次はギーシュである。

「ミスタ・グラモンは知る人ぞ知る、グラモン元帥の息子と聞いている。中々の指揮官ぶりを見せてくれるじゃろうて」

オスマンはそれから、ルイズを見つめた。

うむむ、と呻いてオスマンは必死に誉めるところを捜す。だが、正直な話、彼女に大しては褒める所が見当たらなかった。

「その……、なんだ、うむ……」

やおら何か思いついたのか、こほん、と咳をするオスマン。それから、オスマンはルイズから目を若干逸らしながら言った。

「ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、将来有望なメイジと聞いているが？しかもその使い魔は！」

その言葉にルイズは苦虫を百匹くらい噛みつぶした表情になる。

オスマンはそれから才人を熱っぽい目で見つめた。

「平民ながらあのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂だが」

この言葉に、ギーシュは呻いたが誰も気にしない。

オスマンは思った。彼らが、本当に、コルベールの言う通り伝説

の『ガンダールヴ』なら……。
…頼りになるであろう。

「そうですぞ！なにせ、彼らはガンダー……………」

オスマンは慌ててうつかり滑らせたコルベールの口を押さえた。
聞かれては、どこから王室に漏れるか解ったものではない。

「むぐ！い、いえ、なんでもありません！はい！」

「この三人に勝てるという者がいるならば、前に一步出たまえ」

オスマンは学院長らしい威厳のある声で言った。だが、誰もが俯
いて何も言わなくなる。

誰も一步前には出ず、オスマンは、後ろに控えていた才人達を含
む7人に向き直った。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する！！！」

ルイズとキュルケとタバサ、そしてギーシュは直立した。そして4
人同時に唱和する。

『杖にかけて！！！！』

そう言うと、ルイズ達はロングビルの案内で部屋を後にする。

エド達はどうと、

「いつてらっしや〜い」

戸を開けて出て行くルイズ達を見送っていた。その態度にまたル
イズは簡単に低い沸点に達する。

「あんだ達も行くのよ！ここに居ない4人も呼んできて！」
「えー？」

顔をゆがめて、心底嫌そうな表情を浮かべるエド。
その顔と言葉に、更にルイズはイライラした様子になる。

「そんな学院の事情とか、そんな事はどうでもいい」

ぺいつと学院の事情は他所へと持っていく。この学院の秘宝が盗まれようが、売られようが、どうなるうが、エドにもネギにも才人にもどうでもいいのだ。勿論、それは他の4人も同じ。

「てめーで受けた話だろーが。自分でケツ拭け」

「なによ、あんだ達は私の使い魔でしょうが！」

この言葉にエドは怒りを通り越して、呆れてしまった。この期に及んで未だにそんな事を言っているこのピンクブロンドの貴族様に、心底呆れてしまった。

首を振って呆れるエドに思わず、拳を振り上げたが、ギーシュに止められてしまった。

「どうして止めるのよー！」

「ルイズ、一部の隙もなく彼の言う通りだ。僕らは自分たちの意思で決めたんだ」

「そうね。それに他人を巻き込むのは、どうかと思うわ」

ギーシュの言葉を、更にキュルケが強くする。

「彼らは人間。あなたの都合のいいように動く人形じゃない」

一番、タバサの言う事が的を射ていた。

確かに、ネギは彼らに魔法を教え始めた。才人もエドやシャナ達と一緒に鍛錬に励んでいる。だが、そこには決定的に違いがある。あくまでも才人が、6人の役に微力ながらも成りたいと言う物なのに対して、ルイズはそれが当然であるという調子なのだ。

最初の一護の決意はどこへ行ったのか。ルイズはすっぱり忘れていたのだ。

「じゃ、じゃあどうすればいいのよ!」

ちよっと泣き出しそうな声になりながらも、ルイズが拳を下ろす。

「それなりの報酬。ま、ちよっとそこには色々兼ね合いがあるから、お前じゃなくて…」

くるりとエドが振り返る。先にいるのは学院長とコルベール。

彼らの基本は、ギブ&テイク。錬金術師であるエドに言わせれば、全てのモノは何かの犠牲無しには得られない「等価交換」という言葉だろう。

この盗賊退治に対する対価を受け取ろうとしようとしているのだ。

「昨日の交渉事、しっかり聞いてもらっせ」

「…まあ、仕方あるまい」

若干、オスマンが言いよんだが、素直に肯定した。

「うっし、じゃ、契約だ。ネギ」

「は、はい」

エドに促されて、ネギが学院長の机まで進み出る。そして懐から一枚の紙を取り出す。

「これは制約紙ギアスペーパーです。これに書かれた事は必ず果たしてもらいます」「どこまで疑り深いんじゃない？」

そんな事をばやきながらも、オスマンはサインをした。

「よし。じゃ、行くか！」

h e r o i s a l w a y s w i t h

学院の門までやってきたフーケ討伐の一向の一部は、大きな声で他の面々を呼んだ。

「おい、一護、夏梨、アレーン、シャナー」

エドの怒鳴るような声に呼応するように、4人が本塔の5階から飛び降りてきた。シユタツと魔法も何も使わずに草原に着地した4人の姿に、ロングビルは驚いた。

「どうしたんです、エドさん？」

白髪頭を少し傾けてアレンが聞いてくる。

「盗賊退治」

「盗賊？」

「そ、盗賊だ」

それで解るだろと言わんばかりの顔。にやりと歯を見せて笑うエドの真意を理解した4人は二つ返事で賛同した。この態度は傍で見ているルイズが一番、面白くなかった。

ルイズとキュルケ、タバサ、そしてギーシユも遅れて馬車に乗る。馬車といっても人数は11人も居るのだから、どちらかというところ荷台のような感じだ。ロングビルが御者席に飛び乗り、出発した。

目的は『土くれ』のフーケの打倒と『破壊の杖』を取り戻すことである。

「ところでミス・ロングビル」

進み出した馬車の中では会話らしい会話が行われない。アレンは銃を磨いているし、ネギとエドは本を読んでいる。一護、夏梨とシヤナの三人は精神を高めるかのように、目を閉じていた。

そんな風に誰にも話しかけづらい空気なので、才人は勿論、ギーシュですら口を鎖していた。

しばらくして誰も口を開かなかった重苦しい空気を打ち破るように、キュルケが口を開いた。

「なんででしょうか？」

秘書らしい丁寧な言葉遣いで応える。

「御者なんて秘書のする事ではないかと思ひまして。何故、秘書などされているのです」

人の過去に土足で入り込むようなキュルケの言葉に一瞬、空気が冷え込んだ。この遠慮の無さは彼女の美德であると同時に欠点でもあると言っている。

本来なら嫌がるだろう答えにもロングビルは詰まることなく応える。

「私は爵位を剥奪されましたから。それにオスマン氏はそういった身分には拘らない人ですし」

「差し支えなければ、その詳しいはな……」

「やめましよう」

すつと話を打ち切ったのはアレンだった。

「あまり人の過去を穿るのはオススメしませんよ」

普段ののんびりと大食いには勤しんでいる彼からは想像もできないほどに冷たい声だった。その寒さに才人はビクツと身を竦ませた。

「過去を知るのと同じ経験を共有する事ですよ。相当覚悟がいりま
すけど」

「いいのですよ、ミスタ・ウォーカー」

馬を手では操りながら、顔だけは此方へ向ける。

「確かにあまり話したくないことですが、いずれ話すこともあるか
もしれません」

「ま、俺たちはあんたの心に泥を付けずに聞く手段がないからな。
話したくなったら話してくれ」

遣り取りをぼんやり眺めていた一護は片目だけで、その向いた口
ングビルの目を見た。

そして、四時間後、馬車は突然動きを止めた。先には鬱蒼と茂る
広葉樹の森が広がっていた。当然の事だが、馬車の通れるような道
は整備されていない。

ロングビルは丁寧な口調で口を開いた。

「ここから先は、徒歩で行きましょう」

ミス・ロングビルがそう促す。どうやら、目的地近くまで来たよ
うだ。

全員が馬車を降りて、鬱蒼とした森の小道を歩き始めた。

「ダーリン、暗くて怖いわ。ねえねえ。聞いている？」

キュルケが熱っぽい表情で一護の腕に手を回す。その健康的な褐色の腕をはねのけ、一護はうざったそうに言う。

「離れてくれ…」

そんな一護の訴えなど耳に入っていないのか、キュルケは再び彼の腕に自分の腕を絡ませ、さらには自慢のメロンのような胸を押しつけた。

「だって、オバケが出そうだから。怖いよーダーリン」

ある意味でその触っている存在は、オバケ以上の存在なのだが。そういった細かい説明は一切していないので、適当に聞き流していた。

「つか、何？ダーリンって呼ばれたくないんだけど」

「ダーリン冷たいよー」

「夏梨。なんとかしてくれ」

そう言って妹に助けを求めるが、夏梨は面白い物を見つけたような調子で言う。

「モテる男はいいよな」

助ける気はないらしい。寧ろ、この状況を楽しんですらいる。

ニタニタともケラケラとも笑っていない。冷静な目で実兄に好意らしきモノを寄せるキュルケをみていた。

「悪い」

誰の助けも借りられない。そう思った一護だった。勿論、彼女の猫撫で声は森中に響き渡る位に大きいので、一同耳には入っている。面白がっている者、興味の無い者、怒り心頭の者、様々だった。そんな夫々の思惑が交差する中歩いていると、一行は開けた場所に出た。

「やっと森を抜けましたね…」

ふうつと一息つくアレソ。才人も自分の服に付いた葉っぱを払う。ほんの少しだけしか歩いていないのに、体中に葉っぱが付着していた。

「怖かったよーダーリン」

「だから離れろって…」

何となく頭が痛い。

こういった一護の興味の無さを見るたびに、才人はその立場を変わってくれと思うのだった。

「くそ、羨ましい…」

「シッ！静かにして！」

その開けた場所にはポツンと小屋があった。遠目から見ただけでも、周囲の草は手入れがされておらず、嵌め込まれていたはずの窓ガラスも、そこにはない。見まがうこと無い廃屋だった。

廃屋が見える場所で、みんなは森の茂みに身を隠して、目的の廃屋を見つめた。

情報が間違いでないのなら、アレは間違いなくフーケの隠れ家である。

「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという話です」
「あんなボ口屋に、人の気配なんかしねえぞ」

確かに、人が住んでいる気配がない。というか人が住めるような小屋ではない。

本当にフィーケはあの中にいるのだろうか。最も盗賊が一箇所に留まっている可能性は低い。既に廃棄した物なのか、それとも逃走用の荷物を隠しているだけなのか。

ココからでは流石に中の様子は掴めない。
ルイズたちは、相談を始めた。

「じゃ、奇襲ですね」

あの中にフィーケがいると仮定した上で、この提案したのはネギだった。

彼の提案を聞いたタバサは、ちよこんと地面に座り、無表情でみんなに自分の立てた作戦を説明するために杖を使って地面に絵を描き始めた。

「作戦はこう」

まずは、偵察（囿でもある）が小屋のそばに近づき、中の様子を確認する。

そして、中にフィーケがいれば、挑発して、外に誘き出す。

フィーケは小屋の中にいる限りはゴーレムは作れない。なぜなら、小屋の中にはゴーレムを作り出すほどの土はないからだ。

つまり外に出ない限りは得意のゴーレムが使えない。

そこで、フィーケが外に出たところを、魔法で一気に攻撃するということにした。

タバサ曰わく、ゴーレムを作り出す暇を与えずに一気に倒してし

まうとのことだ。

中々に利に叶った作戦である。最小限の時間で、最高の効果を生み出す作戦を構築する。小隊行動に於いて、実に軍師に相応しい才覚を持っていると、ネギの服の中でカモは一言も喋らずに考えていた。

(兄貴と仮契約バックティオーして欲しいな…)

ボソリとそんな事を思う。

だが、タバサの作戦には問題があった。

「で、偵察兼囷は誰がやるの？」

才人がそう言うのと、みんなは才人を見つめた。

「俺？」

「あんたがやりなさい！」

ルイズが強い口調で才人を指差して言った。みんなの目が才人を見つめている。

結局、その目に押し切られて才人が偵察兼囷に抜擢された。

「はあ、面倒くさい…」

才人が茂みから出ようとすると、今まで黙って作戦を聞いていた一護が襟首を掴んで押し込めた。ちよつと乱暴すぎる扱いに、抗議しようとするが、目線で黙らされた。

(怖え！)

視線で人が殺せるという人が居るらしいが、まさに一護の視線はそれだった。

「え、えっと、何か問題がありました…?」

オロオロと言った様子でネギが聴いてくる。ここでネギは思い出した。そういえばエドは盗賊退治と説明しただけで、「盗品の奪還」と説明しなかった事を。

一護は背負った柄も唾も無い武骨な大刀を大上段に構える。

「月牙…」

ギリツと奥歯を噛み締める。持つ手に、大地を捕らえる足にも力を入れて踏ん張る。

「天衝！」

空気すら切り裂く勢いで大刀「斬月」が振り下ろされる。その斬撃が巨大な青白い閃光となって廃屋へと向かう。ガリガリと大地を抉りながら、突き進む。

「ちよ！」

誰かが声を上げたがもう遅い。小屋の上半分を塵と化して斬撃は消えた。

「…誰もいねえな」

「そうみたいね」

「じゃ、帰りましょうか」

先制攻撃の結果を見て、「盗賊退治」としか説明を受けていなかった4人は帰り支度を始める。と言っても一護が納刀するだけである。斬月には鞘がないので布を巻くだけだが。

「あわわ・・・」

ネギは盗品が壊れていないか、不安だった。塵と化した小屋の屋根の中に紛れ込んでなければいいのだが。

「何してんのよ!」

ルイズが顔を真っ赤にして怒ってくるが、4人は何処吹く風。

「何って、奇襲?」

「ですよね。もっと言ったら、ちゃんと狙った方がいいですよ、一護さん」

奇襲の是非は兎も角として、小屋全部を潰した方が良かったのは事実である。

「一兄はコントロールが下手」

夏梨の厳しい一言。

「だって、盗賊を倒すんですよ。何でお前が怒っているのか解らない」

最後にシャナの一言。確かに、彼らは「盗賊退治」としか報告を受けていない。これは間違いなくエドの連絡ミスだった。

「盗品があるのよ！壊れたら、どうすんの！」

「…え、マジで？」

とりあえず、この攻撃で中に誰も居ない事は決定的になった。誰もいないのを確認できたのは収穫だったので、そのまま小屋へと揃って近づく。

ロングビルは「周囲を見えます」と言い残してに森の中に消えた。序でにと言わんばかりに、アレンとエドも緑の中へと消えて言った。

半分だけ言えとしての様相を残した小屋に入った一護たちは、中を探索し始めた。どこかにフーケが残した手がかりがないかを見んなで探す。幸いな事に吹き飛んだのは屋根だけであって、中の家具類は埃を被っただけで無事だった。

「どこかにマントとか、フードとか、その『破壊の杖』だけ、が見つかれば…」

ガサゴソと床を這うように探していたタバサは、箱のような物をベッドの下に見つけた。

無表情でベッド下から、その無機質な箱を引きずり出す。そして、みんなが見つめる中、タバサは箱を開けた。

「破壊の杖」

そうやって彼女が取り出したのは真正正銘、学院に伝わっている『破壊の杖』だった。タバサは無造作にそれを持ち上げ、みんなに見せた。ひょいと鞆ごとルイズに渡して、マントに付いた埃を払う。

「何、もう終わりなのかい。見せ場が無くて残念だよ」

「あっけないわね！」

「これで終わりなのね…」

ギーシュとキュルケが拍子抜けした様子でそう言う。唯一、ルイズだけは緊張の糸が切れたのか、ため息を付いた。

そんな空気の中、才人は、その『破壊の杖』を見た途端、目を丸くした。

「お、おい。それ、本当に『破壊の杖』なのか？」

才人は驚いて言う。心なしか声色が震えている。

それに続けて、一護も、ネギも、シャナも、夏梨も、破壊の杖を目を細めて見つめて、皆揃って首をかしげた。

「これって…」

「多分、間違いない」

「でも何でこんな所にあるんでしょうか・・・？」

「本物じゃないなら、尚ある理由がわかんねえよ」

「そうですよね…」

うーんと考え込む4人。

「何言ってるのよダーリン、それに皆も？」

キュルケが意味が解らないといった様子で目を細める。

その時、ふと空を見上げたルイズは、青空が見えるようになった大穴から、それを塞ぐようにぬっとゴーレムが現れたのを見つけた。

「キヤアアア　　-!!-」

世界を劈くような絶叫がルイズから昇った。

「何だ!？」

「どうした、ルイズ!？」

「あ、あ、あれ…!」

ルイズが震える指で指す。その先には鉄の拳を振り上げる見上げるほどに巨大なゴーレムが居た。

小屋の中にいた全員があわてて外に出る。飛び出た瞬間に、先ほど自分たちがいた小屋はゴーレムによって押し潰され、完全に木の破片となった。

「ゴーレム!!!？」

「冗談じゃない!」

キュルケとがギーシュが驚く中、タバサが真つ先に反応した。自分の身長より高い杖を振り、高速で呪文を唱える。瞬間、巨大な竜巻が出来上がり、ゴーレムにぶつかる。だが、山のようなゴーレムを怯ませるには力不足に過ぎた。

一瞬だけ開いた隙を見て、次にキュルケがその豊満な胸から杖を引き抜く。一気呵成に呪文を唱えて、杖をゴーレムに向ける。すると、杖から炎が伸びて、ゴーレムを火炎に包み込んだ。

だが、やはりゴーレムにはまったく効いていなかった。

「怯むな、行くぞ!」

勿論、女の子だけに任せているギーシュではない。彼もまた、勇ましい声を上げ、近くの土をワルキューレへと替え、突撃させる。だが、如何せん体格が違いすぎる。

羽虫を潰されるかのように、青銅の戦乙女は土へと帰っていった。

「無理よ！こんなの相手に！」

キュルケが叫ぶ。相手は30メートル近い巨人だ。魔法を使える人間が何人いても「大きさ」というアドバンテージはそう易々と覆す事は難しい。

「とりあえず逃げましょう！」

ネギが叫ぶ。それが合図となつてキュルケとタバサは一目散に逃げ出した。その後ろを追う形でギーシュも走る。

一護の肩に夏梨とシャナも飛び乗る。才人もそれに続く。逃げる中、才人はルイズの姿を探した。

「どこに行ったんだ！」

何故か、ルイズはゴーレムの背後に立っていた。

彼女は必死に呪文を唱えて、ゴーレムに杖を振りかざすが、失敗して爆発が続けざまに起きる。しかし、爆竹程度の破裂では、ゴーレムには表面が削れる程度にしか効いていない。

「何だよ、何でこんな時にまで！」

いくら傷が浅く、蚊の刺す程度しか聞いていなくとも、数あれば流石にうっとおしい。その爆発でルイズに気づいたゴーレムが振り向き、大きく窪んだだけの目で、ルイズを睨む。

（まずい！）

標的をルイズに定めた。それを見た才人はルイズに叫んだ。

「逃げる！ルイズ！」

才人の言葉にルイズは唇を噛み締めて言った。

「いやよ！あいつを捕まえれば、誰ももう、わたしをゼロのルイズと呼んで馬鹿にしないわ！」

「バカか、あいつは！」

一護は思わず舌打ちをする。ルイズの目は怖ろしいまでに真剣だ。

「あのな！ゴーレムの大きさを見る！あんな奴に勝てるワケねえだろ！」

「やってみなくちゃ、わかんないじゃない！」

確かに同じ体格、同じ人ならその理屈も通る。だが、相手が悪すぎる。単純に体格が大きいと言うのは、それだけで有利に働くのだ。ましてや今回の相手は30メートルの巨人。

爆竹を幾ら投げつけても無駄でしかない。これは最早、精神論ではない、単純な兵法として、軍略として覆す事も否定する事も出来ない、漫然たる事実なのだ。

だが、決して彼女はそれを認めようとしない。

「無理だっつの！」

ルイズはぐつと真剣な目で才人を睨みつけた。

「あんだ、言ったじゃない」

「え？」

才人は思い出す。

「ギーシュにボコボコにされたとき、何度も立ち上がったって私に言ったじゃない！下げたくない頭は下げないって！」

「そりゃあ、言ったけどよ！」

確かに、そんなカツコいい事を言った。

だが、才人だって、死にたがりとプライドを守る事は違う事くらい理解している。

「わたしにだって、ささやかだけど、プライドがあるの！」

半ば、泣きそうな声でルイズが叫ぶ。

「ここで逃げたら、ゼロのルイズだから逃げたって絶対言われるわ！」

「いいじゃねえか！言わせとけよ！」

「わたしは貴族よ！魔法を使える者を、貴族と呼ぶんじゃないわ！」

ルイズは杖を握りしめる。そして叫んだ。

「敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよ！」

ルイズは呪文を唱える。

そして、杖を振る。だが、やはり失敗してゴーレムの胸に小さく爆発した。しかし、その爆発も小さいもの。ゴーレムは全くびくともしない。

ゴーレムが巨大な足を持ち上げ、ルイズを踏み潰そうとした。

ルイズの視界に、ゴーレムの足が広がる。迫り来るその時を思っ
て、ルイズは思わず目をつぶった。

「行け、夏梨!!」

「はい!」

一護が力いっぱい妹の名を呼ぶ。

その叫びに素早く反応した夏梨は疾風の如く駆け、間一髪で、迫り来るルイズの体を抱きかかえて、鈍重なゴーレムの攻撃の届かない場所まで走った。

「ふう…」

夏梨が安堵のため息を漏らした瞬間、ゴーレムの足がルイズの元いた場所を踏み潰す。緑の草原だった地面がいと容易く砕け、クレーターができる。

その間に夏梨はルイズを抱きかかえて、すぐさまに一護の元へと取って返した。

「死ぬ気か!お前!」

才人は思わず、ルイズの頬を叩いた。パーンツ!と乾いた音が響く。

ルイズは呆気に取られて才人を見つめた。

「貴族のプライドがどうした!そんなもん死んだら終わりだろうが!」

その強い言葉にルイズの目から、涙がこぼれ落ちる。

「だって、悔しくて……。わたしはいつつもバカにされて」

目の前で泣かれて、才人は困ってしまった。

いつも周囲からは「ゼロ」「ゼロ」とバカにされて、凄い悔しかったに違いない。

思えば、ギーシュと決闘したときも、ルイズが泣いていた。

この瞬間になって、ようやく才人は気が付いた。ルイズは気が強くて、生意気だけど、本当は戦いなんか嫌いな、ただの女の子なのだ。

ルイズは端正な顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。まるで子供みたいだ。

「お前がどんだけ悔しかったか、良く解る。魔法が使えないとバカにされたこともわかったよ」

「サイト…」

ルイズは黙って才人を見つめる。

みんなが寝静まった後、必死に書物を読み漁り、勉学に励んでいたことを。

魔法が使えない分、誰よりも勉強したのだルイズは、勉学に関しては誰よりもずば抜けていた。

みんなに魔法が使えないと、馬鹿にされていたルイズ。

「ひつく…、えぐ…」

魔法が支配するこの社会において、「魔法が使えない」と言うのは大きなハンデだ。ありとあらゆる目から白く見られる。それは、教師や侍従、あげくには家族にさえも例外ではなかった。

それに耐えて耐えてルイズは必死に勉学に励んでいたのである。

「大丈夫、ちゃんと俺だけはお前を認めてやるから」

ちゃんと才人も努力した。それが何処と無く自分と被ったのだ。

ルイズの家族の事についてはあまり知っていない。しかし、少なくとも学院の皆には良い感じに見られていないことは知っていた。それでも、努力を惜しまないその姿が、才人にとっては輝いて見えたのだ。

「……」

ルイズの泣き顔を見ながら、才人は自分の過去の生活を恥じた。才人は元の世界・地球にいた時は、なんの自慢もすることもない平凡な暮らしをしていた。

テストがあれば、まあ普通にただ勉強をする。テストの点数も普通だった。

才人の暮らしは努力とは無縁だったのだ。なにより立ちはだからものが無かった。

高校も普通に入れたし、入学してからも特に問題は起きなかった。

「だから、」

少し抜けているところはあるかもしれないけど、少なくとも才人が生きていた 普通の生活で努力するほどの事は無かったのだ。

だから、才人はルイズを馬鹿になどこれっぽっちもしていないかった。

「俺は絶対に、ルイズを馬鹿にしないし笑わない！」

これは才人の心からの気持ちだった。

「いろんな奴に馬鹿にされても泣き言一つも言わないで歯を食いしばって頑張ってきたんだ！」

そして、ルイズは体が物凄く軽くなったように感じた。
今まででそんな言葉をかけてきた者は誰一人としていなかった。
家族でさえも、そんな優しく力強い言葉はかけてくれなかった。
だから、ルイズは辛かったのだ。頑張る自分に誰一人として味方
になってくれなかったのだから。
出会いは最悪だった。

「サイト、ありがとう…!」

どう見ても、みんながただの平民だった。

この時は頭がどうにかなりそうだった。感じたのはただ一つ、落
胆と絶望だけだった。

でも、この抜けた才人を始め、皆が使い魔になってから、少なく
ともつまらなかつた学院生活が楽しいと思う自分がいた。

自分の『ゼロ』の由来を知ってもなお、才人たちは今まで通り、
自分の事など馬鹿にせず、普通に接してくれた。

「なあ、皆、努力したルイズを笑わないよな!」

そして、才人の思う事は一護たちも同じはず。そう思って同意を
求める。

「いや、知らねえ」

くるりと振り向いた才人が見たのは、胸の辺りであり得ない位に
手を振る一護だった。

その態度に同意するように頷いているのは、シヤナと夏梨。苦笑
しているのはネギだ。

「え、ちょっとどういふことですか!」

「間違えるな、才人」

思わず一護に掴みかかったが、やはり怖ろしい視線にすくみ上がる。

だが、ここで負けるわけには行かない。対抗するように自分を睨む才人に一護は諭すように話す。

「『努力した』でじゃ、終われないんだよ。『努力する』が目的なのか…？」

「え…？」

才人は何が言いたいのか、解らなかった。ただ只管に掴みかかる。

「何かの為に力を磨くのは『当然』なんだよ！」

その言葉が胸に痛く突き刺さる。振りあげた拳は行き先を失い、一護が軽く才人を仰向けに転がした。上から見下ろしている一護の顔は、ルイズよりも更に厳しい輝きを持っていた。

「その結果が…！」

再び、斬月を抜き放ち、半ば居合い染みた要領で月牙天衝を放った。その衝撃は小屋の屋根を吹き飛ばした時よりも凄まじく、一撃でゴーレムの体を両断してしまった。

支える足を失った土の巨人は、文字通りの土へと化する。

「何なの！？まるで人間じゃ、ない……………」

「すごい……………」

タバサとキュルケは、巨大なゴーレムを一刀両断した事に驚いて

いた。

傍に居たギーシュは声も発することも出来てない。

「……………」

タバサは、オレンジの髪少年をただ見つめている。一瞬だがゾクリとするような殺気を感じた。月牙天衝を放った時に感じた怖ろしいほどのプレッシャー。

「あれが…」

他の人とは違う生き方をしているタバサにだけ、わかった。死神と言う存在がどんな存在なのかを。そして、その彼と轡を並べて戦う、傍の少年少女達もまた、同じような力を持っているのだと、推理するのにさほど時間は掛からなかった。

「これが、その結果だ…」

刀をそのまま下げ、その結果を才人に見せ付ける。
努力は目的ではない。その先の結果を求めなければ、意味が無いのだという事を、才人はこの時思い知った。

「うっし、勝オー　　利!!」

一護の声は右手を高く突き上げ、勝鬨の声を上げる。
その声を聞いて、離れていた一同は安心してやってくる。ゴールを両断した事で、当面の危機は去った。安全を確認した一護には、キュルケが思いつきり跳んで抱きついてきた。

「イチゴ!すごいわ!やっぱりダーリンね!」

「だからダーリンじゃねエ！」

タバサが崩れ落ちた土の塊を見つめながら、呟いた。

「フーケはどこ？」

みんなは、盛り上がった土の小山の中を探し始めた。才人はその様子を、突き刺さった言葉と共に放心したように見つめていた。それから何気なしに『破壊の杖』を見る。

(なんでこんなものがこの世界に……)

と、才人はぼんやりと思った。

「一体、何なんだい。アイツは……」

森の中から喜びに沸く一堂を見ていたのはフーケだった。彼女は「破壊の杖」を手に入れたのはいいが、結局持て余してしまったのだ。要は使い方が解らないと言う事である。

そこで誰でもいいから学院の人間を引っ張ってきて、使い方を知らるつもりだった。

「これじゃ……解らないじゃない……」

確かにもう一度盗み出すという方法が無くはない。だが、そんなリスクを犯すのは避けたかった。今回は上手く運べたが、次回はど

うなるか解らない。今の一刀両断されたゴーレムはフーケが渾身の魔力を込めた最強のゴーレムだった。

それを容易く破られた今、切れるカードは一枚も残されていない。今から飛び出して回収するのも、分の悪すぎる賭けだった。

「仕方ないね…、ここはそのまま…」

ぐつと歩を進めた瞬間に、足が何かに絡め取られた。瞬きをする暇もなく、木の上に逆さ吊にされてしまった。

「しまつ…」

吊り上げられた序でに杖も落としてしまった。パサツと乾いた音を立てて、落ち葉の上に自分の杖が転がる。その様子を心底、面白そうな顔で金髪と銀髪の少年が見ていた。

「いやー、魔法使いつてのはこういう古典的な罠に弱いんだな」

「まさか、ここまで無警戒だったのは驚きでしたけど」

木の陰からぬつと現れたのはエドとアレンだった。この罠を仕掛けた犯人である。

「なあ、いい加減、正体をばらしてくれよ。フーケとやら」

「いえ、ここはミス・ロングビルと呼んだ方が宜しいですか？」

二人のシリアスな空気の中でもニヤリと笑う、憎たらしい笑顔にフーケ、ロングビルは負けを悟った。杖がないメイジは体を鍛えていない分、異常なまでに無力な存在となり果てる。

いや、たとえ杖が合ったとしても、彼らにはココから逃がさない方法があるのだろう。

「くそ……」

美しい顔に似合わない汚い言葉を吐いて、トリスティンを騒がした盗賊は大人しくお縄となった。

「判ったわよ、大人しく捕まるわ……」

PHANTASIA (前書き)

10万PVを突破いたしました。お気に入り登録数も実に100件以上。

真にこのような拙作をご愛顧頂きありがとうございます。

今後とも頑張りますので、よろしくお願いいたします。

PHANTASIA

「ふむ……。ミス・ロングビルが土くれのフーケじゃったとはな
……………」

盗賊『土くれ』のフーケを捕まえて戻ってきた一行は、すぐさま
学院長室に通された。棒から、まるで狩られた熊のような格好で連
行されたフーケは、最後まで弱音を吐かなかった。

連絡を受けてやってきた王国の衛士隊に引き渡す、その時まで悪
態をつけていた。あの様子では、そのうち脱獄でも考えているだろ
う。盗賊と言うのは執念深いのだ。

「美人だったもので、なんの疑いもせず秘書に採用してしまった。
ホッホッホッホ!!!」

無事に帰ってきたルイズ達からの報告を聞いたオスマンは、何と
も本能的で、実に男らしい考え方だった。彼の女好き加減が、危機
を招いたと言ってもいい。

「……………」

今、能天気な声を上げて、笑っているのは、学院長のオールド・
オスマンである。

そのさまを、疲れて帰ってきた一護たちはあきれた様子で見つめ
ていた。

「いったい、どこで採用されたんですか？」

隣に控えていたコルベールが、心底付いていけないといった呆れ

た様子で尋ねる。

「街の居酒屋じゃ。私は客で、彼女は給仕をしておったのじゃが…」

オスマンは遠くを見つめながら、回想する。

「………で？」

コルベールが呆れ半分、怒り半分の半目になって促す。
するとオスマンは照れた様子で告白した。

「おほん。それでも怒らないので、秘書にならないかと、言っ
てしまったのじゃ」

「………なんで？」

呆れて、コルベールが再び尋ねる。今日も一段と頭が光っている。

「カーーツ！」

オスマンは目をむいて怒鳴った。

ルイズたちは、ビクツと驚いた様子で縮こまる。白髪だらけで、
髭も伸びたい放題の年寄りとは思えない迫力だったので、シャナや
夏梨もびっくりした。

それから、オスマンは、こほんと咳をして、真顔になった。取り
繕っているつもりだろうが、実に女々しい態度だった。一度、下げ
た株がそう簡単に回復するほど、人間は単純ではないのだ。

「おまけに魔法も使えるというもんでな」

「ったくよ。いい年こいたジジイが」

黙って聞いていた一護が何とも身も蓋も無い事を言う。

「興奮などしてないわ！秘書としては最高じゃったから採用したんじゃない！」

「言い訳は見苦しいだけよ」

目の前の助平な老人に辟易した様子でシャナが、ぐさりと刺さる事を突き立てる。

シャナの怒りを受け止め切れなかったオスマンは、軽く咳払いをして、重々しい口調で言った。

「今思えば、あれも魔法学院に潜り込むためのフーケの手じゃったに違いない」

「普通、気が付くんじゃね」

遠くを見るオスマンの瞳に映らないように、一護の影に隠れて、ひそひそとエドと夏梨が話し合う。

「居酒屋でくつろぐ私の前に何度もやってきて、愛想よく酒を勧めるんじゃない」

「そりゃ、そうじゃん。目的が目的だし…」

何とも危機感の薄い、学院長を呆れた目で見ながら、夏梨は呟く。

「魔法学院学院長は男前で痺れます、などと何度も媚びを売り売り言いおって……………」

「校長はおべっかとか、建前っていつのを知らないんでしょうか……？」

その二人の対談にアレンも加わる。

小さい声で話し合っているが、ネギにはしつかり聞こえていた。せめて自分の心にだけ仕舞っておこうと、堅く口を鎖した。

「終いには尻を撫でて怒らない。惚れてる？とか思っじやる？なあ？ねえ？」

最早、言い訳にすらなっていないのだが、この話を聞いていたコルベールは、先日、ついうっかりフーケにその手でやられ、宝物庫の壁の弱点について詳しく語ってしまったことを思い出した。

あの一件は自分の胸に秘めておこうと思いつつ、オスマンに合わせた。

「そ、そうですね！美人はただそれだけで、いけない魔法使いですな！」

「そのとおりじゃ！君はうまいことを言うな！コルベール君！」

同じ手口で丸め込まれてしまった、オスマンとコルベールが何か通じ合ったらしい。

こちら辺の大人の部分は理解しているつもりだったが、いざ目の前にしてみると、実に汚いモノだと、才人は呆れながら思った。勿論、それは一護も同じ。ネギやシャナ達に見せないようにと、必死に気遣っている。

「この人、殴っていいですか？」

「やめとけ、才人……」

才人とルイズ、そしてキュルケとタバサ、四人は呆れて、そんな大人の教師の二人を見つめている。ギーシュだけは何とも言えない、

キラキラとした瞳で二人を見ていたが、また確実にモンモランシーに殴られるだろうと、後ろから見ているアレンは辺りを付けた。

そして、咳払いをすると、オスマンはさっきのとは打って変わって敵しい顔つきを言った。

「さてと、君たちはよくぞフーケを捕まえ、『破壊の杖』を取り返してきた」

ルイズ、キュルケ、タバサ、そしてギーシュの4人は誇らしげに礼をする。

その様子を微笑みながら見つめるコルベール。

「フーケは、あの後、城の衛士隊に引き渡した。そして『破壊の杖』は、無事に宝物庫に戻した」

犯人も捕まり、盗品も元に戻ってきた。

「これにて一件落着じゃ」

オスマンは、微笑みながら一人ずつ頭を撫でた。

「君たちの、『シユヴァリエ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじやろう」

今回の件で四人には爵位が与えられる。

これで、何らかの報奨があれば、王宮が4人の実力を認めたと言う事だ。

「ミス・タバサはすでに爵位を持っているから、精霊勲章の授与を申請しておいた」

3人の顔が、ぱあつと輝いた。だが、こんな時でもタバサは無表情である。

嬉しいのか、嬉しくないのか。勲章などと言うものに縁遠い生活を送っていた7人には与り知らぬところだろう。

「ほんとうですか!?!」

「本当じゃ。いいのじゃ、君たちは、そのぐらいのことをしたんじゃないからな」

ルイズとキュルケが喜ぶ。

「ありがとうございます!」

ギーシュは学院長とコルベールに向けて、大きく頭を下げた。

「よかったですね」

ネギも心の底から微笑みながらそう口にする。

そんな様子の使い魔にルイズは、ネギたちを見つめた。

「…オールド・オスマン。彼らには何もありませんか?」

するとオスマンは、顔を苦くして言った。

「…残念ながら、彼らは貴族ではない」

確かに、彼らにも報奨があつてしかるべきだろう。

だが、この国は、この世界は、魔法使いだけが、もっと言えば貴族だけが得をするようにできている。それをオスマンは判っていた。

「そんな！」

ルイズは思いっきり叫ぶ。

「とことん、腐った国だな」

ルイズの叫びを無視して、エドが何のオブラートにも包まない、心の底から打ち出した悪態を吐く。

その言葉にルイズもギーシュも、トリステイン貴族の端くれとして反論の一つもしたくなかったが、それに足る材料を持っていないことに気が付いた。

「…エドワード君の言う通りじゃ。この国は既に終焉を迎えつつある」

オスマンは重苦しい声で、エドの悪態を受け止めた。

「功績を挙げたものが、評価されておらん。そんな体制が国家として許されるとは思えん」

今、王宮に蔓延る賄賂や汚職。

全部を駆逐できるとは思っていない。人が欲望を持っている限り、それは絶対だ。政治家や王族だって、清廉潔白の聖人君子ばかりではない。それを重々承知して、オスマンは言葉を紡ぐ。

「だが、いずれワシの様な老いぼれが去った後、新しい世代がしてくれと信じておる」

そう思って、彼はこの座に就いているのだ。王宮からの様々な圧

力に耐えながら。

オスマンは頭を下げた。

「この老いぼれの頭一つで感謝が足りるとは思わん。じゃから、ちやんと約束は果たすぞ」

「その言葉、嘘じゃねえな」

「無論じゃ」

オスマンの噛み切るような言葉には、少しばかりの決意が込められていた。

「・・・その言葉、聴けて良かったよ」

エドが交渉は済んだとばかりに、学院長室に設えられたソファーに座った。一護たちもそのソファーに並んで腰を落ち着けた。その様子を見届けるとオスマンは、ポンポンと手を打った。

「さて、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ」

その言葉にルイズ達の顔がぱあっと華やぐ。

「『破壊の杖』も戻ってきたことだし、予定通り執り行っ」

「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりましたわ！」

「今日の舞踏会の主役は君たちじゃ。用意をしてきたまえ。せいぜい、着飾るのじゃぞ」

4人は、礼をするとドアに向かった。

だが、一護たちは座ったまま、動かない。

「どうしたの？」

「先に行つててください」

ネギがニツコリと笑つて言った。

ルイズは心配そうに残つた面々を見つめていたが、頷いて部屋を出て行つた。

重く、軋んだ音がしてドアが閉まる。

「なにか、私に聞きたいことがおありのようじゃな」

一緒に残つた才人が無言のまま頷く。

「言つてごらん下さい。できるだけ力になろう」

先ほどの言葉をなぞるようにオスマンが言った。

「君たちに爵位を授けることはできんが、せめてものお礼じゃ」

それからオスマンは、コルベールに退室を促した。

『ガンダールブ』の話が聞けなくなつたことに、がっくりとしたコルベールが、肩を落として部屋を出て行く。コルベールが出て行つた後、才人は口を開いた。

「あの『破壊の杖』は、俺が元いた世界の武器です」

その言葉に、オスマンの目が光る。

「ふむ。元いた世界とは？」

「俺は、こつちの世界の人間じゃない」

「本当かね？」

確かに、オスマンが疑問に思うのも無理は無い。

いきなり、「異世界から来ました」と言って信じられるほど、柔軟な思考をしている人は少ない。

「本当です。俺たちはルイズの『召喚』で、こっちの世界に呼ばれたんです」

「なるほど。そうじゃったのか……」

だが、オスマンは違ったようだ。彼らがココに来てからの事、それを思い出しながら目を細め、思案する。

「あの『破壊の杖』は、俺たちの世界の武器だ。あれをここに持ってきたのは、誰なんです？」

オスマンは、ため息をついた。

「あれを私にくれたのは、私の命の恩人じゃ」

「その人は、どうしたんですか？」

ネギが割って入って尋ねる。

「死んでしまったのじゃ。今から、三十年も前の話じゃ」

「三十年!？」

その長い年数に才人は驚いた。

「そうじゃ。その時、私は森を散歩していた」

その『杖』の主と会ったときの事を思い返す。

「じゃが、ワイバーンに襲われたのじゃ。そこを救ってくれたのが、あの『破壊の杖』の持ち主じゃ。彼は、もう一本の『破壊の杖』で、ワイバーンを吹き飛ばすと、力なくぼったりと倒れてしまった」

言う内に段々とオスマンの声が低くなっていく。

「私は彼を学院に運び込み、手厚く看護したのじゃが、看護の甲斐なく……」

「亡くなってしまったんですか？」

言葉の最後をアレンが引き継いだ。オスマンは重々しく頷いた。

「彼はベッドの上で、死ぬまでうわごとのように繰り返していった。『ここはどこだ。元の世界に帰りたい』とな。きっと、彼は君と同じ世界から来たんじゃないだろうな」

取り出した水キセルを銜え、ふうつとため息と共に煙を吐いた。

「でも、彼がどんな方法でこっちの世界にやってきたのか、最後までわからなかった」

「くそ！せっかく手がかりを見つけたと思ったのに！」

才人は机を叩いて、思いつきり嘆いた。

オスマンは黙って聞いていた一護達を見て言った。

「じゃあ、君たちも同じ世界から来たんのかの？」

今まで黙っていた一護が口を開いた。

「いや……」

「ふむ。そうなのかな？」

「そうだ。俺たちのいた世界と才人がいた世界は別なんだよ。いや、正確に言つとそうでもないか」

一護は重苦しそうな声で語り始める。

「もつと言つと、来た世界が違うのはエドとアレンの方だ」

その言葉にオスマンは目を細めて言った。

「なぜ、そう言い切れるのかな？」

「その説明は、少し避けさせてもらつ。余計な負担を与えたくないし…」

「まだ、ワシを信じきれておらんと…?」

少し首を傾げたオスマンだが、一護の態度と対応は尤もだった。まだ自分を信じてくれていない。そんな信頼の置けない相手に、自らの秘密を暴露する者はいない。だが、それは逆に言えば、自分を信頼できるようになれば、自ら話すといっているのだ。

「なるほど、よくわかった」

オスマンは大きく頷いた。

「じゃが、君たちが別々の世界から来たというのなら、どこが違うのかな？」

そう言つと今度は才人が答える。

「単純に言えば、俺たちの世界で存在するものが、他の世界では存

在していないって具合でしょうか」

オスマンが感慨深く考える。

「ふむ。君たちが別々の世界からやってきたというのは大体はわかった」

こちらからの説明は大体これで終わった。

今度は此方から質問する番だ。その質問は代表して、ネギが聞く事になった。

「この左手の様子は何ですか？」

「俺もこいつのこと聞きたかった」

その質問に才人が割って入る。

「この文字が光ると、何故か武器を自在に使えるようになるんです」

オスマンは、話そうかどうかしばし悩んだあと、口を開いた。

「これなら知っておるよ。ガンダールヴの印じゃ。伝説の使い魔の印なんじゃよ」

「伝説の使い魔？」

ネギが好奇心いっぱい歳の相応の笑顔で、聞く。

その姿を夏梨は、子供っぽいと見ていた。

「そうじゃ。その伝説の使い魔はありとあらゆる『武器』を使いこなしたそうじゃ」

「なるほど」「そういう事ね」

感心しているのはネギとシャナだけだ。他の面子はどうでもよさそうな声。

それとは違って才人は首を傾げる。

「どうして、俺たちがその伝説の使い魔なんか？」

「わからん」

オスマンはきっぱりと言った。

「流石に、何故君達が『ガンダールブ』に成ったのか、それは判らんのじゃ……」

「何でよ？」

夏梨が疑問を挟む。

「何せ、資料が少なすぎる。どんな姿だったのか、どんな武器を扱ったのか、遠く歴史の彼方じゃ」

「そんなの聞いてどうすんだ？別にいいだろ」

エドが耳をほじりながらそう言った。

「資料がねえなら、探す。それが俺の、いや、俺たちのスタンスだ」

「はあ……」

才人は思わずため息をつく。どうにも道のりは遠そうだ。

取り敢えず、このルーンとやらが毒でない事が解っただけでも、どんな物なのかも解っただけでも、十分な収穫だろう。これから謎を紐解いていけばいい。

「力になれんですまんの」

オスマンは再び、頭を下げた。

「ただ、これだけは言っておく。私はお主たちの味方じゃ。ガンダ
ールヴたちよ」

オスマンはそういうと、みんなに握手をした。みんなは黙ってオ
スマンの手を握り返す。

「いろいろあつたが、よくぞ、恩人の杖を取り返してくれた。改め
て礼を言うぞ」
「いえ……」

才人が疲れた声で返事をする。

「お主らがどういう理屈で、こつちの世界にやってきたのか、私な
りに調べるつもりじゃ。でも……」

そこでオスマンが言葉を区切る。

「でも、なんです？」

「何もわからなくても、恨まんでくれよ」

あつけらかんとした様子で言う。

だが、その言葉は親切で言った事であっても受け入れるわけには
いかない。

「なあに、こつちの世界も住めば都じゃ。嫁さんや、婿だつて探し
てやる」

「いや、そういう訳にはいかねえ。俺たちは絶対に帰らねえと」

一護がオレンジの髪を無茶苦茶に掻き毟りながら言った。

「俺たちの世界には待つてる奴らがいる。そいつらに借りだつて返してねえ」

「そう。遊子やヒゲ親父も心配して…、待つてる」

固い決意を決めた一護と夏梨。彼らには待つている仲間と家族が居る。

「そうですね。決着を付けて戻るって言ってしまったし」

歩くべき道を決めたアレン。彼には誓い合つた仲間と意がある。

「私はまだ、ちゃんと決着が付いてない」

伝えるべき言葉を紡いだシャナ。彼女には戦うべきライバルと意見を伝えたい人が居る。

「僕も見届けないといけませんし」

考え抜いた未来を見据えたネギ。彼には果たさなければならぬ目的がある。

「そうそう、諦められないことがあるんでな」

共に決めた誓いを思い出すエドとアル。彼らには戻るべき家がある。

6人が凄く真剣な表情をしたので才人やオスマンはこれには驚い

た。

（余程の大切な人たちがおるのじゃな…。余計な気回しだったかもしれん）

そう、オスマンは思った。

「そうか。できるだけ君たちの力になれるよう、私も頑張るとしよう。指し当たっては…」

「あの制約書ギアスベーパーに書かれた事を履行してくれ」

「良かるう、エドワード君の言う所の等価交換という奴じゃな…」

そう言って、オスマンは紙とインク瓶を取り出し、羽根ペンを少しだけ浸し、サラサラと何事か掻き始めた。

その夜、二つの月が幻想的に輝く中でのお話。

アルヴィーズの食堂の上の階は、大きなホールになっている。この学院は貴族の子弟が通う。時々、このような調子で舞踏会が開かれるのだ。年に何度もある行事ではないので、皆一様に気合が入る。フリッグの舞踏会はそこで行われていた。

本塔の玄関から、ここに到るまでの道筋は綺麗に磨かれ、ホールの中も綺麗に飾り付けられていた。

「はあ」

才人はバルコニーの枠にもたれかかり、華やかな会場をぼんやり

と見つめている。

中では着飾った生徒や教師たちが、豪華な料理が盛られたテーブルの周りで歓談している。

才人は外からバルコニーに続く階段からここまで上ってきて、料理のおぼれにありついて、中をぼんやりと眺めているのだった。

どうしても場違いな気分がして自分は中に入ろうとは思わなかった。

「うーん、はむ、てが、あむ、かり、もぐ、無しでふか…」

才人は入っていきこうと思わなかったが、アレン達は平気な顔をして、輪の中に入っている。特にアレンは大量の食事を前にして、遂に理性が崩壊したのか、テーブルの上にある、豪華な料理をガツガツと目にも止まらぬ早さで食べている。その速さは手品のようにだ。

それを見て、貴族たちは、顔をしかめている。だがお構いなしに食べている。

「アレンさん。周りが厳しいです…」

そういう風にネギが窘めるが、流石に1日分の食事を抜いたアレンには意味が無かった。

黒いパーティードレスを着たタバサもそれに加わり、一生懸命にテーブルの上の料理と格闘している。二人とも細い体だが、どういった圧縮率で胃に入っているのだろうか。

才人のそばの枠には、シエスタが持ってきてくれた肉料理の皿と、ワインの瓶がのっている。

才人は手酌で一杯グラスに注ぐと、それを飲み干した。

「相棒、大丈夫か？さっきから飲みすぎじゃねエのか？」

バルコニーの枠に立てかけてあるデルフが心配そうに言う。
相変わらず口の減らない剣だが、根は陽気で楽しい奴なので、今
みたいな気分ときには、愚痴を聞いてくれて都合がいい。

「うるせえ。家に帰れるかもと思ったのに思い過ごしだったんだよ」
思いつきり愚痴をこぼす。少し酔っているようだ。

「これが飲まずにいられるかってんだ!!」

「こら、お前、未成年だろ。酒なんか飲んで良いと思ってんのか？」

やれやれと言った様子で才人の下へやって来たのは一護だった。
後ろから、思いつきり呼びかけられたので驚いてしまった。

「あ、一護さん・・・」

「ったく、こんなに開けて…。お前、未成年じゃなかったけ？」

半分ほど開いたワインの瓶を見ながら、一護は誰に尋ねるでもな
く訊いていた。

「確かに未成年ですけど、こんな時、酒飲みの気持ち解るんです
よ」

「で、剣相手に管巻いてた訳か…」

やれやれと言った様子で首を振る。一護は案外、堅い性格なのだ。
酒もタバコも20歳になってからと決めている。20になってもし
ないかもしれないが。

一護もバルコニーの手すりに寄りかかって、ホールの方を見る。
ホールの中では、キュルケがたくさんの男に囲まれ、笑っていた。
キュルケが何かに気が付いたらしくこっちを見た。そして、笑顔に

なつてこつちに向かつて来る。大方、一護を踊りに誘おうとしているのだろう。

「ダーリン！あたしと踊りましょ！！」

一護の腕に手を回してキュルケが熱っぽく言う。やっぱりそうだった。

先ほどの男子陣は悔しさからなのか嘆いている。

キュルケの色気に、普通の男ならこれでイチコロだが、一護には効いていなかったようだ。

「ちよつと考えたい事があつてな。後にしてくれ」
「解つたわ、それじゃ後で」

憂いを帯びた一護の表情を見て、仕方なくキュルケはホールの中に戻って行った。

ホールの食事スペースでは相変わらず、アレンはガツガツと食べている。いつの間にかアレンとタバサの食べ比べは、大食い競争へと発展していた。これには、人だかりができていて、応援している人もいる。

シャナと夏梨は、二人で何か考えたい事があるらしく、さっきからホールの壁に寄りかかつて何か話し合っている。よほど聞かれたくないらしく、ネギが来た時も丁寧に断わっていた。

エドはというと、壇上で何か大音声で喚いている。対面にはギースと、太っちょの少年、マリコンヌが青ざめた表情で座っているのが見えた。

だが、みんなそれぞれに、パーティーを満喫しているようだった。

「なあ、才人よ」

「何です、一護さん」

一護が口を開いた、その時にホールのかなな扉が開き、ルイズが姿を現した。

門に控えた呼び出しの衛士が、ルイズの到着を告げる。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなありい！！」

相変わらず、長い名前だと思ふ。

だが、扉を開けて出てきたルイズを見て才人は息を飲んだ。

ルイズは長い桃色の髪を、バレッタにまとめ、ホワイトパーティードレスに身を包んでいた。

その姿を見たら、どんな男でも、たぶん同じ感想を言うだろう。

『とても似合っていて、きれいだと』

主役が全員揃ったことを確認した楽士たちが、小さく、流れるように音楽を奏で始めた。

曲のセンスにあまり詳しくない才人もいい曲だと思った。

遅れてやってきた、ルイズの周りには、その姿と美貌に驚いた男たちがアリのように群がり、さかんにダンスを申し込んでいた。

「ああいうのは、どこの世界でも変わねえんだな」

ボソリと一護が呟いた。

今まで、ゼロのルイズと呼んでからかっていたノーマークの女の子の美貌に気づき、いち早く唾をつけておこうというのだろう。やっぱり貴族のやることは汚い。

「そうですね…」

ホールでは、貴族たちが優雅にダンスを踊り始めた。

しかし、ルイズはダンスの誘いをすべて断ると、バルコニーに佇む才人と一護に気づき、近寄ってきた。光と闇の境界線は、実に幻想的にルイズを煌かせていた。

ルイズは二人の前に立つと、腰に手を当てて、首をかしげた。

「楽しんでるみたいね」

「別に…」

才人は眩しすぎるルイズから、目を逸らす。一護はそれを見て、ニツと少しだけ笑った。

「意外と似合ってるな」

「馬子にも衣装ってやつさね」

一護とデルフリンガーが褒めているのか、褒めていないのか。両方に取りれる事を言う。

「うるさいわね」

ルイズは一護と剣を睨むと、腕を組んで首をかしげた。

「お前は、踊らないのか？」

才人はルイズから目を逸らして言う。

可愛らしくて直視できない。余りにも初心な反応である。

「相手がいないのよ」

ルイズは手を広げた。勿論、これは嘘だ。それが直感で才人には解った。

「いっばい、誘われてたじゃねえかよ」

ルイズは、何も答えずに、ずっと才人に手を差し伸べた。

「え？」

「踊ってあげても、よろしくってよ」

目を逸らして、ルイズはちょっと照れた様子で言った。
いきなり申し込まれたルイズの誘いに、才人は戸惑う。

(何をいきなり言うのだ…！こいつは…！)

と思った才人は、顔が真っ赤に照れて仕方がなかった。
嘗てドラマか、何かで見た見たヨーロッパの洋画の世界に入った気分になる。

「踊ってやれよ」

一護が促す。

「そうだが、女の誘いは受けるもんさ！」

デルフリンガーも乗っかる。

「踊ってください、じゃねえのか」

だが、どうにもこの誘い方で受けるのは嫌だったので、意地を張

る。

「うわ、意地っ張り！」

「なんて、贅沢な奴だ！相棒はよ！」

と一護もデルフも茶化してくるが、才人は無視した。

しばらくの沈黙が流れる。するとルイズはため息をついて、先に折れた。

「今日だけだからね」

ルイズはドレスの裾を恭しく両手で持ち上げると、膝を曲げて才人に一礼した。

「わたくしと一曲踊ってくださいませんこと。ジェントルマン」

そう言つて顔を赤らめるルイズは激しく可愛くて、綺麗で、清楚であつた。

才人は丁寧にルイズの手を取る。そして、そのままホールの中ほどへと歩いていく。

「ダンスなんかしたことねえよ」

「わたしに合わせて」

ルイズは才人の手を軽く握る。

才人は見よう見まねで、ルイズに合わせてステップを踏んで踊り出した。

ルイズは、才人のぎこちない踊りに文句一つも言わず、澄ました顔でステップを踏んでいる。

「ねえ、サイト。信じてあげるわ」
「なにを？」

ぎこちないダンスの最中、突然にルイズが口を開いた。

「…その、あんなたちが別の世界から来たってこと」

ルイズは軽やかに、ステップを踏んでそう呟いた。
揺れるブロンドの向こうに見える、その顔は実に可愛らしかった。

「なんだよ。信じてなかったのか？」

憤慨半分、当然半分といった調子で才人が聞く。

「今まで、半信半疑だったけど……」

言いにくそうに、ルイズは言葉を続ける。それから少しだけ俯いた。

「ねえ、帰りたい？」

心を決めて、聞く。

「ああ。帰りたい。でも、どうしたら帰れるか見当もつかねえから、ま、しばらくは我慢するよ」
「そうよね」

ルイズは無言で踊り始めた。

それからルイズはちよつと頬を赤らめると、サイトの顔から目を逸らした。

そして、再び口を開いた。

「ありがとう」

突然、飛び出た5文字の言葉。ルイズが礼など言ったので、才人は驚く。

ダンスに才人を誘ったことといい、今日のルイズはどうかしている。

(明日は大雪でも降るのか?)

可愛さに打たれた才人は、随分と失礼な事を考えていた。

「その…、私のために怒ってくれたし…、サイトの言った言葉に私…
…すつきりできたのよ」

突っかかりながらではあるが、確実にルイズは進んでいる。

「こんなに晴れ晴れとした気持ちになれたのは、皆のおかげなの…
…」

ルイズは何かを誤魔化すように、そう呟いた。

「気にすんな。当然だろ」

「どうして?」

素直な疑問を浮かべたルイズが聞いてくる。

「俺はお前の使い魔だろ」

才人はそう言って、ルイズに笑いかけた。
そんな様子を一護は才人が残していった料理を摘みながら、バル
コニーから眺めていた。

「ああ、いい感じだな…」

デルフリンガーも呟く。

「その通りだな一護よお！相棒は！てーしたもんだ！」

二つの月がホールに月明かりを送り、ロウソクと絡んで、幻想的
な雰囲気をつくりあげている。

そんな中、一護はワインをすつと横へと押しやった。

「一護は酒飲まねえのか？」

「ああ、飲めなくてな」

踊る使い魔とその主人を見つめながら、一護は笑いながら言った。

「そついやよ、何、言おうとしてたんだ？」

「ん？」

デルフリンガーの疑問は尽きない。

「いや、昔な。俺の友達と約束した事があつてな…」

「へえ、すげえ奴なのか？」

その巨人と悪魔の両腕を持つ男を思い出しながら、一護は語る。

正直、昔語りなど趣味ではないのだが、何となく才人の愛剣である
デルフには聞いて欲しいと思ったのだ。

「ああ。そいつとの約束。『お前が命賭けて守りたいものなら、俺も命賭けて守ってやる』って」

「随分とカッコいいな！」

「その代わり、『俺の命賭けて守りたいものを、お前も命賭けて守ってくれ』ってよ」

一護と巨人の約束。

それは後で竜の姫と、星の姫と、弓引きも加わった。皆、お互いに守りたいものを出して、お互いが守りあう、そんな信頼に満ちた、命がけの関係。

「あいつの命、賭けて守りたいモノが何なのか。聞いておきたかったんだけど…」

聞くまでも無かったと一護は思う。出来れば、何で守りたいのかも聞いておきたかったが、何れまた、その機会もあるだろう。

ホールでは段々と軽くなってきたステップを踏む二人が居る。

その傍ではネギとタバサのペアが、実に常道なステップを踏んでいた。

「あの二人、お上手ですね」

そう言っつて、アレンがやって来た。手には山盛りの料理を抱えている。取り皿というか、そのまま大皿を持ってきたようだ。随分と無礼なというか、不躰な行動である。

「だな」

「あ、一護さんも食べます？」

皿に乗っているのは、ハムだろう。一護は持ってきた箸で何枚か摘んで口へと運ぶ。二人は無言でホールを眺めながら、食べていた。傍では喋る剣が盛り上げるように、

「おでれーた！使い魔がメイジと踊るなんざ、見たことねえや！」

そう大きな声で喚いていた。

月はまだ、高く、夜は長い。

PHANTASIA (後書き)

ようやく1巻完結です。

長かったとは思いません。大体1巻分が24話の計算で進める計算にしています。

それで大体1章が12話の計算で行きます。足りない時はフリアグネやラカン達に登場してもらおう事にします。

エドの学院長への悪態は半ば、自嘲染みた言葉です。

彼の国も軍政で、軍での賄賂や汚職が横行しています。軍で手柄を上げる事が、政治家的な出世になるというのは、正確な政治体制のあり方ではないでしょう。

彼らの決意は夫々方向が違います。

それが衝突の原因になったり、共闘の理由になったりする事もあります。

やっぱり女性陣は実に可愛らしい子たちばかりです。

性格に難のある子が多いですが、その尖り具合を上手く削れる事が出来ればいい感じになると思います。

いよいよ3章、2巻へと進みます。

2巻のメインイベントとなると姫様の来訪とアルビオン行きです。

2章のEDテーマはシドの「ドラマ」でお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3148x/>

LEGEND OF THE SEVEN

2011年11月10日05時37分発行